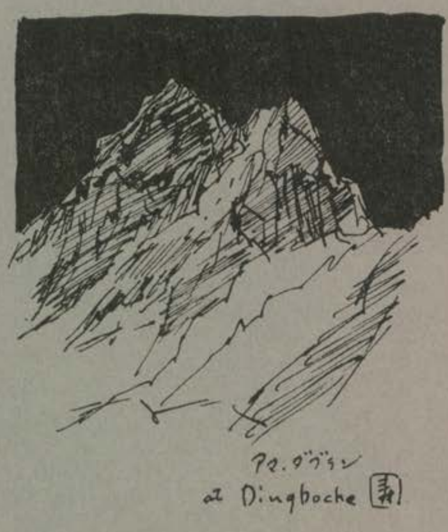
山岳



LXVI

山岳

第六十六年

山岳　第六十六年　目次　（一九七一年度）

写真

成田安輝氏に関するもの　二枚
エベレストに関するもの　八枚
マカルーに関するもの　八枚
ダウラギリI峰に関するもの　四枚
P29に関するもの　九枚
チューレン・ヒマールに関するもの　四枚（うち折込み一枚）
ダウラギリIV峰に関するもの　一枚
アンナプルナIII峰に関するもの　二枚
コー・イ・バンダコーに関するもの　二枚
コー・イ・パガールに関するもの　四枚
ピナウイ谷の登山に関するもの　四枚
カンジロバ・ヒマールに関するもの　二枚（いずれも折込み）
「ヒマラヤのみえる散歩道」に関するもの　二枚
名誉会員藤木九三氏、深田久弥氏、目黒四郎氏、相内武千雄氏、上田哲農氏、品川大海氏、広田憲治氏、高波吾策氏

地図・図版

成田安輝氏チベット入りルート図
エベレスト南壁登攀ルート図
マカルーキャラバンルート概念図、東南稜登攀ルート図
ダウラギリ山群概念図、ダウラギリI峰登攀ルート図、同スケッチ図
チューレン・ヒマール附近概念図
ダウラギリVI峰附近概念図
アンナプルナ山群概念図、アンナプルナIII峰登攀ルートスケッチ図
コー・イ・バンダコー西面概念図、コー・イ・バンダコー東面スケッチ図
中央ヒンズー・クシュ概念図、パガール谷、ルイスウィク谷附近概念図
ピナウイ谷附近概念図
カンジロバ・ヒマール主峰登頂行動図、カンジロバ・ヒマール概念図
カンジロバ・ヒマール中央部概念図
サラグラール周辺の山座同定関係、写真図版、第一図〜第二十一図

表紙カット　山里　寿男　氏

進蔵日誌（下）

成田安輝

五、江孜より朗噶孜に至る

十一月二十九日。快晴、朝来乞食来たり食を乞う者七八名。西蔵の風習多少に拘らず必らずこれに食物を与うるを例とす。また客来たらば必らず茶あるいは酒を出す。もしその人空腹なるかまたは食事時間に来訪せる時は、糌粑を出すの風習なりとす。椀は人々他出の際大抵各自これを懐にす。この朝大根を求む。長さ五、六寸乃至一尺にして、その色赤紫にして他所において未だかつて見ざる所、味佳なり。蓋し西蔵特種のものなり。この日駅馬券を出して烏拉を求むれども、例により蔵官言を左右に托し急にこれを与えず。

十一月三十日。快晴、宿舎の老人遠く去りて佐馬達に向かう。これ該地方に在る彼が羊群、前日来の大雪のため、いかなる状況なるやを一見せんがためなりと。蔵官烏拉を与えざる理由を聞くに、「この人加児噶達より来たれり、審査を要す。かつ果して前蔵糧台の公用を帯びて進蔵するものなるや否や、一応該糧台に問い合わせ返信を待ちて後駅馬を与うべし」と聞き、奇怪の感に勝〈た〉えず。即ち支那通訳に請い蔵官に交渉せしめ、支那官吏の発給せる駅馬券の信用を落さざらんことを依頼せり。

十二月一日。快晴、通訳来たりて云う。昨日来百方弁ずるも蔵官前言を固持して駅馬を出さず、前日検閲使に対してまた然ることあり、近来駅官の驕傲ますます甚し。如かず馬を賃して前進するの速かならんにはと。すなわち蔵官に就て急に馬を雇わしめしに、普通の価格より三、四倍の高価を払うの已むを得ざるに至れり。これ新来者の通行税と思いて潔くこれを投与し、翌早朝出発し得ることとなれり。

江孜には大喇嘛寺一坐の外に二、三の喇嘛寺あり。西蔵兵営一ケ所、遊府一員、同じく千総五品頂戴二名、六品頂戴把総四名の外、外委三十六名、均しく八品頂戴蔵兵五百名、練兵場一ケ所、支那外委一員、汎兵二名、塘兵二名、附属蔵兵四名、武聖廟、観音閣、竜王廟、文武財弁、各神廟あり。これ支那人のもっとも崇拝せざるを得ざる弁なるべし。その他王皇、禎武楼、工帝廟等あれども、いずれも半ば破損し、ただその名目のみに過ぎず。

江孜附近に二、三の喇嘛寺あり。江孜大喇嘛寺門前の通路上には午前九時よりおよそ十二時に至るの間、市あり。街路の両側およそ我二丁許りの処に露店を設け、毛織物その他用需用の諸雑品を販売す。頭上に白布を纏える喀爾噶（ゴルカ）商人数人また来りて小商売に従事するを見る。此処以前騎馬共四名、戦守兵三十六名守備せしも、財政上より光緒十九年〈一八九三年〉に廃止して靖西本営に引揚ぐることとなれり。江孜また牛糞の燃料を用ゆ。怕克里より前蔵一帯の地ことごとく然りとす。

江孜の戸数は一千二、三百戸にして拉薩と靖西の中央に位し、両地に至る、共に六、七日を要す。後蔵西噶孜（シイガ）〈シガツェ〉に至る僅かに二、三日を要す。旅人もし重き荷駄を有する時には、なお長時間を要す。この日江孜大喇嘛寺内に仏法演劇あり、宿主等行きてこれを一覧せん事を勧む。即ちその請に従う。黄金、紅、青の諸色をもって彩色せる仏画を用いて装飾したる一大門を入れば、塗金をもって人目を眩し形状奇異なる六、七層の大輪塔を右にして進めば、小丘の中腹眺望頗る佳絶なる処に在る三層楼の喇嘛寺庭に出ず。この大輪塔は西蔵において特に有名なるものとす。時に参観人既に寺の周囲に群集し、いわゆる黒山をなし立錐の余地なく、仏法演劇は既に酣〈たけなわ〉なる頃なりき。

今その形状を記さんに、正面の中央に高座を設け、最高僧はその頂き光りたる三角形の黄帽を戴き、海老茶色の法衣に北京金襴をもって縁縫せるものの上より同色の袈裟を纏いて前に坐し、右方に五、六名の太鼓手喇嘛僧坐す。太鼓は直径およそ二尺、厚さ五、六寸なるものに、長さおよそ二尺の柄をつけ、上方少しく弯曲せる長鞭をもってこれを他の楽器と合わせて打撃す。左方にはおよそ十二人の喇嘛僧座を占め、長さおよそ一間余の大喇叭〈ラッパ〉および人骨をもって製したる哀声を発する笛その他二、三の楽器を奏せり。これら各僧は前額より後方に向け弦月形をなしてやや長き黄毛の直立せる総黄色の帽を穿てり。高僧の前面にあたり塔状にして正面鬼顔を現わせる高帽を頂き比較的黒色の法衣を着くる者は、この演劇の主管者にして巧みに諸悪鬼を使用し得る一高僧に擬するなり。この高僧一喇嘛をして人骨笛をもって鬼類を呼ばしむれば、声に応じ楼上より牛面を被りたる二人降下し来たり、各々手に頭蓋骨様のものを所持し、調子を合わせ二人一様に手を振り足を躍らせ、あるいは走り、あるいは跳び、あるいは舞い、すこぶる奇観を呈せり。舞い終れば即ち退く。ここにおいて観客中走りて各僧の所に至り噶達〈お祝い用の白絹の布〉を呈するあり。その一端に通貨を結着し、己が姓名を記して贈るあり。この人々は休憩十四、五分間のうちにたちまち来たりたちまち退き去る。続いて笛声に応じ象面、鬼面、あるいは骸骨の衣裳を着し来たり、骸骨踊をなすも、跳舞の様は毎回大同小異にして一段落毎に客人中より物を献ずる前記の如し。また演劇中観客が次第に中央に接近し来たるを制するため、赤鬼、青鬼等あり。鉄棒を携え劇言の裏に巧みに群集を抑制するの技倆慥かに巡査の上に在り。該青鬼は絹片をもって造れる青角ある頭布を蒙り、総青色の衣袴をつけ、手足またこれに相当するものを穿ち青鬼面を蒙り、宛然青鬼に似たるはまた一奇観なり。赤鬼の装束また青鬼に同じ。演戯者はことごとく喇嘛にして着用するところの衣服は皆絹物を用い、一見その高価なるものたる事を知り得べし。今ここに演ぜしところは、高僧は巧みに各鬼を使用するを得るの力ある事および各鬼は唯命これに従い、呼べば来たり、去れと命ずれば去り、畏るべき玄瞑奇怪なる力を有する事を演劇的に解し易くまた面白く示せるものなり。なおこの他生前善悪の因果、死後に至りて相当の

応報ある状況を演出する各種の劇ありと聞く。かくのごとくにしてもって勧善懲悪の仏理を容易に公衆に解得せしめ、西蔵の如き文字を知る者少なくかつ説教等も容易に耳に入らざる衆人に対し信仰を増し布教を拡むる為には、難解の教義を講演するよりは容易にして速やかに入り易く、真に巧妙なる思い付きにして愚民蛮民を速やかに仏化に浴せしむるに効験多し。この一事は本邦の仏教界より一段の進捗を示せりと云うも可ならんか。最初これを行ないし西蔵僧侶の智力感服に堪えず。これこの一事すらその仏教の盛んなる偶然にあらざるを知る。なお本邦において「忠臣蔵」その他の敵討等を演じ、武士道および道徳を支那より一層進歩せしめたる所以に同じ。演劇、俗歌等が世道人心に及ぼす力、また喋々を要せず。支那にては多く淫劇、悲劇を演じ、欧米の進歩国にてはそれ相当の演劇あり。米国にては趣味面白くかつ道義を教ゆる著名のシェクスペア演劇の他に、大胆なる勇士が未開国に進入し未開人を対手として艱難辛苦種々の活劇を演ぜし後、最後にはその地に繁盛なる殖民地を創設し、昔日の勇士はその地方創立の先祖(ファウンダー・オブ・コロニー)あるいは先住者(パイオニア)として永世尊敬せらるるに至る事を演ずるあり。その他この種類の演劇少なからず。なお「オンクル・トムス・キャビン」等ありて米人に温厚君子風を教ゆるの劇あり。幼少よりこの感覚を心に銘せる米人は既に世界の各方面に拡まるべき種子心中に播かれたり。

恋郷病患者たる国民たらんよりは、健全にして大抱負あり、地の東亜たると西洋たると、欧米たるとを問わず、奮進前往事業を経営し、世界の文化に稗益する愛国心ある新国民たるべき目的をもって新演劇を創始せば、その国民教育上に及ぼすところまた尠なからざるなり。この故に聡明なるわが国民、特に脚本家ならびに演劇家が多少ここに注意せられん事を希望してやまざるなり。

この日西蔵絨緞を買わんと欲し、宿主に案内されて毛織商売にては当地第一等と称せられたる一家に至れば、肥大の一老婦出で来たりて曰く。「君もし買わば即ち物品を示さん、買わずんば示さず。速やかに去らん事を乞う」と。その言語人を叱するに似たるは可笑の至りにして、覚えず唯大笑して附近にある織物の価格を問うに、彼女はその価

を告げかつ云う「この価より一文たりとも安価に売らず」と。いずれが主客なるや無分別にして大笑して売りくれんことを依頼せしが、この状況は本那人に実見せしめ共に笑いの福分けをなすを得ざりしを遺憾とせり。毛布、鞍敷、座布団、絨緞等を一見し、絨緞の最良なるものを一枚見本として購求せり。西蔵毛布は概して毛のある部分一面に過ぎざれども、毛の長さ二、三寸にして極めて温暖なるものあるも、普通幅四尺、長さ五尺位にして過小なる故、幅五、六尺、長さ七、八尺、即ち本邦普通毛布大のものを註文せしに、家屋の屋根を覆うにやとて笑って顧みず。今しいてこれを要するにあらざれば、共に笑って止めり。商人としては未だ無慾暢気にて文明の競争風に吹かれざるはかくの如しと知るべし。薄僕の請に応じ彼に一ケ月の給料を前貸ししその他二ケ月分の給料を賞給せり。この夜彼は宿舎の男女および当地に在る彼の知友を招き、総計十三、四名にて、かつ飲みかつ歌い、または男女起ちて舞踏し勢当るべからず。彼は昨独吉嶺〈ダージリン〉の一輿夫たりしを忘却してその行為一独立自活人の如し。明日の行程遠隔せるにも拘らず、夜半未だ寝ねず騒擾に堪えず。既にして厨房中に酔臥するを知り、宿主をして室内に帰臥すべきを伝えしむ。後聞くところによれば所持の金銭を悉く消費せりと。彼独吉嶺において浮浪の生活をなせしは、この悪癖あるがためなりと知れり。酒の人を禍するや何処も皆同じ。

十二月二日。快晴、騾夫既に来るも家内の者未だ起来せず。薄僕をして準備を急がしめたり。彼酒を飲まざれば一好人なれども、飲めば己れが責任を顧慮せず。聞く、蔵人中にはかくの如き弊風に感染する者尠なからず。好僕を得るは困難なりと。特に独吉嶺辺に浮遊する者を然りとす。時に至り登程、小渓を右にしその上流に向かいて進む。行くことおよそ二時間にして峡隘に入る時に前日来の降雪未だ融けずして一面に銀世界たり。これより次第に東北に向かって進み、午後二時沙羅(サラ)に達す。此処清兵二名、蔵兵四名、蓄民八戸あり。支那站兵の家を訪い、茶を請い糌粑を食す。この兵を游某と云う。四川成都の人にして蔵内に住する事既に二十余年、歳既に六旬〈六〇歳〉をこえすこぶる酒を嗜めり。妻は四川裡塘の西蔵人にして両人の間に三子あり。聞く、彼らは明年をもって清国に帰還すべしと。手

製の青葉および大根の漬物を出して食に供せり。この物喉を下らざる事久し。その美味云うべからず。また麦粉をもって一種の麦餅を製しこれを贈れり。彼云う、他の一名の兵は姓を李と呼び大いに鴉片〈阿片・アヘン〉に耽り、未だ二十四、五歳の青年なるも一見病者の如く、官給の手当常に不足を生じ、ヤアトオ（配偶者と云う義なり）往々饑に泣くもなお鴉片を停むる事能わず、耻辱を知らざるものと云うべし。支那兵中彼の如き者尠なからざるは如何ともすべからずと。これ各駅站に配置し公文書の発送および旅客の往来、地方の状況に注意すべき責任ある支那兵とす。これら支那兵はいかなるものなるやの一実例を読者に紹介せんがため所見と彼等の実話とを記せり。その他の駅站は推して知るべし。游某に厚く謝礼を遣わして前進せり。この辺石堤を築成せる一岩石の断面に硫化鉄あるを見る。また対岸黒赤土の山中、黒色粘板土の出顕する状、石炭脈の露頭に似たり。この日行進の路傍にかくの如き個所尠なからず。この辺の家屋は塗るに太き赤黒二色の縦線をもってし、一見他地方と小異するを知る。一小石橋を越え左折し更にまた一石橋を過ぎれば、左方に喇嘛寺あり。幅広き白赤二色線を一つおきに縦に壁上に塗れるはすこぶる奇観とす。これより二、三の小村落を過ぎ、午後六時半には日落ちて既に暗黒なれども山高からざる処、路右に当り太白蒼穹高く懸る。太白は人影を雪上に映し下底地方に比し西蔵高原においては更にその光輝を増放せるを見る。午後八時半熱隆（ゼロン）に至りて宿す。この日の行程およそ我二十三里〈約九〇キロ〉とす。この夕薄僕を先発せしめて宿舎を捜索せしめ、安輝は駄馬と共に進行せんとせしも、その進行甚だ遅々たるをもって闇中を独り先発せしが、峡隘渓流に沿い星光の照らさざる所咫尺を弁ぜず。馬岩石に跌し氷上に滑り倒れんとする事屡々なりき。時に一、二人家あれば西蔵大番犬出で来たりて吼号獅子に似、馬ために驚けり。熱隆着の際薄僕酒を買い与えん事を請求せしも、昨夕過度の飲酒によりこの夕遅着夜行するの已むを得ざりしをもってこれを戒しむるため、強いてその請に応ぜず。糌粑および羊肉少量を食して寝に就けり。この時十一時なりき。この日途上見るところの羊二、三千頭、鶉数十羽なりき。この地寒気特に甚しきを覚えたり。熱隆より右走すれば瑭馬に通ずる捷径あり。然れども人多くは江孜経過を便とす。熱隆には

支那兵一名、蔵兵三名、蔵人八、九戸、公館一ヶ所あり。これ官吏来往のために設けたるものなり。雇い来たるところの騾馬四頭すこぶる疲労せりと覚えられ、隣室に在りて終夜枯草を食う響きと胡馬の鈴の音とは凛然たる寒風と相和して何となく凄然たり。蘇武の勇を追想の間知らず知らず熟睡せり。

十二月三日。晴、午前五時起きて外に出ずれば、二十三日の残月高く銀世界の上に懸り、傍を観るに馬はかなり枯草に饜き、前進に堪ゆべし。この地は既に分水嶺に近くして我富士より遥かに高く海抜ほとんど一万三千呎〈約四〇〇〇メートル〉の高原なり。古来邦人の足跡至らず。未だ昇登せしことなきこの高地に在りて遥かに東方日出ずる所に向かい、未曽有の仁徳ある聖天子の万寿節より正に一月なる今日にして、志す所ありてその一臣民がこの地方を旅行するの照代を心祝し、薄僕を呼びて進発の準備をなさしめ、茶を熱くし糌粑を食し終り午前六時半発程。一小渓流を左にし北に向かって進み、特に一大広原に出でんとする処野兎二、三朝食を求めつつあるを見たり。進行約三時間にして略その半を過ぎ、曲折して路左の峡隘に入る。ここ牛房二戸あり。寒気凛然なるに拘らず数十頭の毛牛雪野に食を求む。毛牛はいかなる酷寒もこれを恐れずかえってこれを歓ぶものの如し。路上氷河あり、滑らかにして渡り難し。即ち少しく右方に迂回してこれを過ぎ、渓の右岸に沿いて進行す。渓水面は氷雪をもって閉ざされ、所々破烈せる罅隙より流水を認め得るのみ。既にして道いよいよ高まるに従い渓流ますます細り遂にマニ旗の所在に達せり。ここのマニ旗は峠の最高所、即ち分水嶺の頂上において道路の左右に略方形に石を積立て、その上に樹枝を植立し、これに赤、白、青、黄、紫等五色の布片を結着し、別に通行者の頭上高く樹枝より樹枝へ通路を横断して縄を張り、この上にもまた同様の布片を一面に附着せり。旅行者前に到れば必らず〝ラッスルラッスル〟と唱えて仏の祐護を感謝するの意を表わし、かつ賽銭のかわりに小石をもって既に積み上げたる石塔上に供うるを例とす。マニ旗の所在は峠または両地境界を表する所の水辺等にありて人の初めてこれを見る者奇異の感に勝えざるなり。道左に氷山あり。萬古の凍氷山辺に固着し、烈風陽光等のため深白色重積し、ある一面は怒涛岩石に激するの波状をなして全体に少しく碧色を帯べ

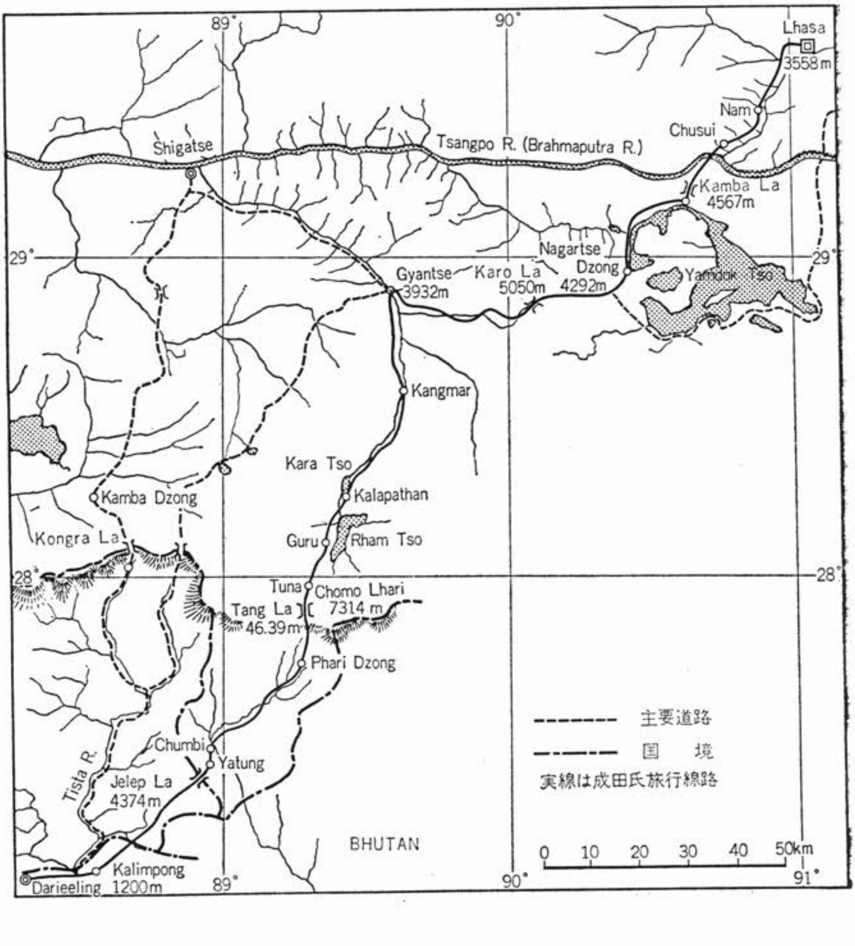
り。昨日以来この山頂を巍峩たる禿峯中に遥望し、あたかも黒奴群中雪肌の一美人を望むの懐ありしも、今近接してこれを熟視するに、大凹凸ありて痘痕のある美人の如くなりしこそ可笑しけり。この雪山をカルラ〈カロ・ラ〉と称え男神山なりと云えり。海抜約一万六千六百呎〈五〇六〇メートル。現在の地図では五〇五〇メートルとなっている〉とす。聞く、ここ寒気凛烈常に烈風吹き砂礫雪塊を飛ばして面を撲ち、旅客のもっとも苦しむところにして、物を煎じあるいは炒る事能わず。旅行者は官商を問わず山神に敬意を表するため必らず下馬して通行する例なりと聞けども、この日は幸いにして烈風なく乗馬のまま通過せり。想うにこの道路は拉薩通行中の最高所にして海抜約一万六千呎ならんか。この分水点を踰〈こ〉え、これより下降し午後一時半坐羅（ツオラ）に着し、茶、糌粑、鶏卵等を喫し、休憩一時半余にして新渓流を右にしつつこれに沿って渓隘を下行すれば、十余頭の小駒拉薩に向かい木材を運搬しつつあるを見る。聞く、この材木は後蔵附近より運搬し来たれるものなりと。その長さ約一間、厚さ約二寸、幅約一尺五、六寸なる白松樹の類なりき。路左西蔵羚羊十三、四頭一群となり、例の如く時々停立して通行者を眺めり。余の如きは特に珍客として望見せられしも未だ知るべからず。この辺の野獣は仏護により砲声に驚かされざる事こそ大幸と云うべし。須由にして陝隘を出ずれば路右人家二、三戸ありて牧畜を業とす。現に寂として人影を見ざるも雪上に印せる牛羊の足跡無数なるをもってこれを知れり。これより前方は開展せる昿野となり、その左方の一端において湖水あるを見る。これ即ち著名なる揚穆魯克（ヤンムロケ）大湖〈現在ではヤムドク・ツォとよばれる〉にして山角に山寨の如く石屋の高く聳ゆるもの即ち朗噶孜（ランカツエ）となす。薄僕先駆して宿舎を求めんとすれども、余の馬先駆するにあらずんば薄僕の馬は決して単独に先走せず。よって馬に鞭うち疾行せしが、暫時にして薄僕の馬遂に進まず。母指大の烏木をもって製したる烟管をもってその臀部を鞭うちしに烟管折れて馬なお走る能わず。徐々として進行す。常に他馬に随従して行進し未だかつて先導する事を教えざる馬は単騎先導する能わざるなり。路左を見るに一千余頭の羊群一列となりて横隊をなし牧夫二人その背後に在りてこれを指揮するの状、千軍の敵に向かうが如し。蓋し道路を横貫して遥かにその前面の雪野中にある一小村落に帰臥せ

んと欲するなり。また路右に赤狐あり。雪野を走り一小地物の背後に隠れたり。左方山腹に一喇嘛寺あり、黒赤両色をもってこれを塗る。既に朗噶孜に入らんとするところに高さ四十余呎なる円形の石塔あり。かつて望楼的に使用せしものなるが如きも今既に所々破損して実用に供せず。山上にある石屋の城寨の如きものもまた半ば頽廃すれども修理を加えず。朗噶孜には民家十余戸あり。幾多の旅行者は既に旅舎に就いて牛馬を憩わしむるを目撃せり。この処官吏来往の際宿舎に宛つる大公館あり。二大石門を通じてこれに入れば正面に客室あり。これに接して居室あり、周囲に随行者の宿舎および厩等の設備あり。薄僕駅長に告げ公館を開かしめ、一行は正面の大家屋に投宿す。時に薄暮六時頃なりしが、男女かわるがわる来たりて燃料あるいは飲用水等を周旋しすこぶる勤労せり。江孜より雇い来たるところの騾馬四頭ここにおいてことごとくこれを解雇し、厚く謝儀を与え、かつ駅馬券を西蔵人なる駅長に示し告げしめて曰く「この人公用を帯びて拉薩に急行せざるを得ざるも、途中既に降雪のため幾多の時日を遅延せり、明早朝速やかに良馬四頭および道案内者のため一頭を撰出し来たらんことを」と。道案内とは江孜より同行せし一旅行者にして、この者重荷を負い一行に尾行し来たりしが、余が携うるところの駅馬券中必要に応じ案内者のために一頭の馬を出さしめ得る事を記載せるをもって、この者を案内者となせしに駅長容易にこれを諾せり。薄僕曰く、「彼文字を識らず、故に審査の二字を注意せず」と、特に弁白せり。同行者に酒資を与えて本日の労を慰し、薄僕には別に鞋、足袋を買い与えたり。ここには清兵一名、蔵兵三名駐在せり。この日の行程、我二十里八丁余〈約八〇キロメートル〉。この夜降雪。

六、朗噶孜(ランガツェ)より拉薩(ラサ)に至る

十二月四日。晴、午前五時半起床、七時十五分発程に臨み駅長その他男女五、六名に厚く賞与す。彼等皆帽を脱し舌頭を長く垂れて〝トッチェ、チェ〟と唱えつつ感謝の意を表せり。既にして揚穆魯克(ヤンムロケ)大湖の西畔に沿いて馬に鞭うち東

成田安輝氏ラッサ入りルート概念図
Travelling Route to Lhasa taken by Y. Narita in 1901



(『山岳』第 65 年から)

北に向かい、仁亜草撻魯（ニャアツァウクロ）を経由し白地（ペイチ）において休憩、茶および糌粑を食し殺馬隴〈サマダ〉に至り一蔵家に投宿す。揚穆魯克大湖の小名朗噶孜湖は東より西に長く横たわり、一小流をもって他の小名白地湖と相通ず。白地湖の西端より北方殺馬隴に至るおよそ我十三里〈約五一キロ〉欧米および最近印度印刷の地図中にこの湖水一小渓流となりて西端より流出して雅魯蔵布河に注入するが如く画けるも、これ大誤謬にして西端に一小渓流あるも附近の分水陝隘より流れ来たりしこの湖水中に落つをもってす。往年印度政府派遣のベンガル学者サラ・チャンドラ・ダスの測量によりこの湖の実形は大清一統輿図の◉形の中央に一孤島あるものにあらず。その形蝎に似て周囲は一百二十哩〈約一九三キロ〉四十八站ある事は分明となりしも、印度政府最近刊行の地図にしてなおこの湖水流出して雅魯蔵布江に注入するが如く記する誤謬もまた甚し。この湖の周囲数条の小渓流来たりて湖中に注入するも湖水他に流水することなし。春夏融雪の際は水量嵩み秋冬に至れば減却す。この水面章木湖の如く凍冰甚しからざるをもってやや下低地に在るを推知すべし。しかも海抜一万三千八百呎〈約四二〇〇メートル〉の所にあり。而して両側の中間にある半島は高さ一万六千呎にして、ほとんどその山頂に至るまで小草を生ず。この内に包囲せられつつある一湖は周囲二十四哩〈約三九キロ〉にして他の湖面より更に五百呎の高処にあり（『エンサイクロペデヤ・ブリタニカ』西蔵の部参照）。支那歴史家の説によるに、この湖の広さは四百五、六十清里にしてその中に三大山あり、一を密納巴（ミナベ）と云い、他を鵶波士（ヤボス）と云い、他の一を桑里（ツァンリ）と云う。その水時に白色となり、また黒色と変じ、あるいは五彩色となることあり。湖内魚多く附近の居民獲しもって生活すと記載せる支那書あるにも拘らず、附近において一尾の魚をも食せず。またこれを見たることなく一の漁舟だに浮べるなし。ただ稀に鴎、鴨の浮游するを見れば、水中魚族あるを察知すべし。あるいは云い伝う、湖水海馬ありて出没すと。西蔵においてもっとも著名なる多爾吉抜姆宮（タルチファム）（サムデン尼寺）は朗噶孜の東南に在る高さおよそ三百呎の禿巌上に在り。湖に面しその建築極めて宏麗にして長壁をもって援護せられたる幾多の長石階を攀じ、始めてその門に達すべし。世に云い伝う、北斗の精、化して而して生まると。およそ二世紀前に当り〈一九〇五年〉、第巴桑結〈サンギェ〉、

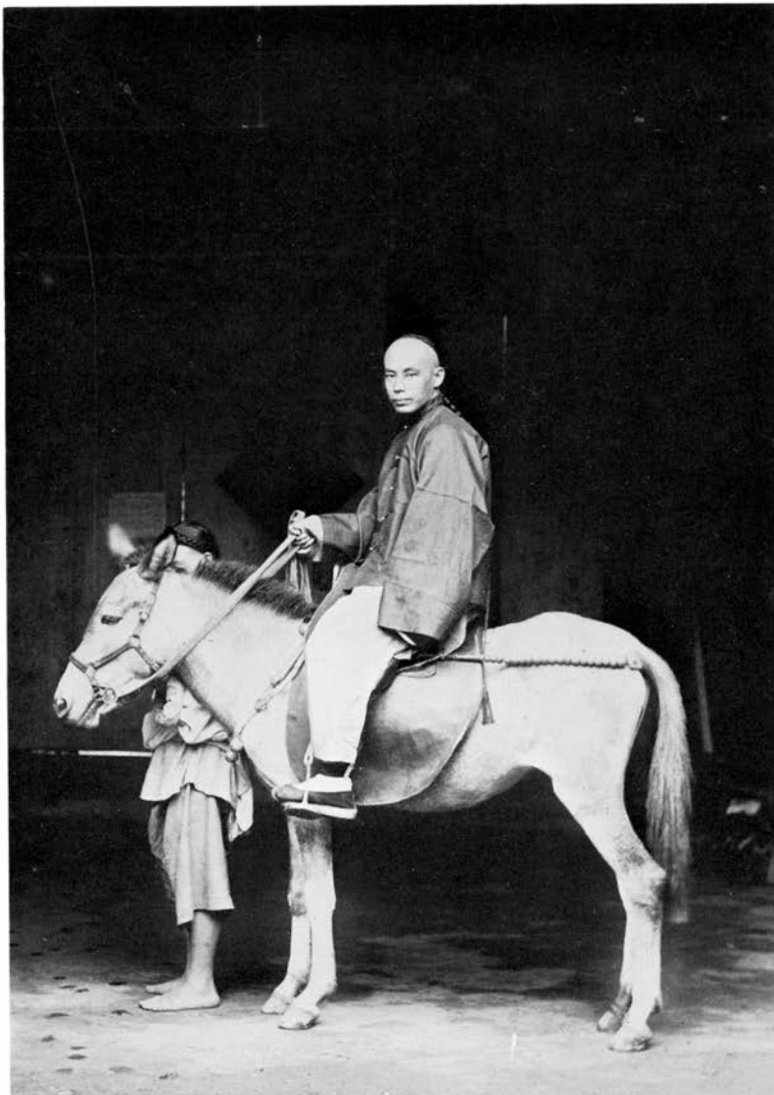
蔵を乱りこの宮を襲うや、宮人猪と化し、敵人警愕の裡に忽然有徳なる僧尼と再変せしかば、敵ために畏敬せりと。西蔵猪を呼んで抜（ファ）と云うが故にこの名あり。宮内に一室あり、歴代主尼の屍体を秘蔵す。およそこれらの主尼たる者は生前必らず一回この室に入り適当の修理を加え、死せしとき先例に従いまた木乃伊（ミイラ）となりてこの室に葬らるるの覚悟せざるべからず。現在の主尼は年僅か四歳にして別に尼僧ありてこれを擁護すと云う。前主尼の頃この寺を見舞いし人の説によれば、主尼は年四十余歳にして毎夜偃臥せざるも毫も苦痛を感ぜず。昼間は椅子に凭れ終日睡眠し、夜来たれば坐禅を組み暁に達す。主尼時に拉薩に至るや大に歓迎尊崇せらる。蔵中人の猥りに乗轎を許さず。達頼喇嘛および駐蔵大臣の外は唯この女仏に限り乗轎を許すと云う。

　この湖に沿い朗噶孜より殺馬隴に至るの間、天水一碧潔白の雪山その間に起伏し、白雲その上に凝結してその影更に水中に倒懸し、風光宛然西蔵画図の如し。書上この図画と熟知する幾年なりしか。この身現にその画図中に在るはまた奇縁なり。想うに馬来半島および印度の如き炎熱酷烈の地に接し寒帯の如きこの西蔵あるは、豈に知らん、天意この地をして該地方人の避暑地となさしむるにあるを。将来鉄路開通の日は亜細亜の瑞西〈スイス〉をもって目せらるの日なしとせざらんや。

　この辺路傍岩石に彫刻せる仏像は七色の外、金粉をもって彩色し他地方に比して特に美麗なり。特に白地に至らんとすれば路左湖辺に沿いて百五、六十頭の綿羊遊牧するを見る。白地には湖水に臨み二層楼および高塔あり。石をもってこれを築けども破壊せし侭にして修理を加えず。傍に人家十七、八戸あり。休憩およそ一時間、茶を啜り糌粑を喫するの際一支那兵来たり、談話数次の後薄僕に対して曰く「該老爺前蔵糧台何氏の公用を帯びて進蔵するか、なんぞその容貌の何糧台に似たるや。想うに該糧台の親戚ならんか」と。兵去りし後両人相顧みて笑う。審査のため来訪したる兵推何せず却ってかくの如し。この行何ぞ天佑の大なる。畢竟天意蔵人をして世界的の交通をなさしめ文明に導かんとするの意ありとなし竊かに欣喜に勝えざりき。

重慶時代の成田安輝氏（前列左）
（明治32年8月、英人ダビッドソン氏撮影）

Yasuteru Narita (left in the front row) in his Chungking period.
(photo by Davidson in August. 1899.)



四川ルートからの入蔵を目指して出発する直前の成田安輝氏
（明治33年７月・成都にて）

Yasuteru Narita (1864～1915) who is going to penetrate into Tibet via Szechuan route.
(photographed in Chengtu in July. 1900.)

蜿蜒湖畔に沿いて進行せば前途より一富裕蔵人の一行来るに邂逅す。一行は夫婦および子供五、六人と男女の従者三、四名なりしが、紅、紫、黄、緑等の諸色の華麗なる絹衣を着し、獺帽を戴き、跨がるところの馬具および馬、これに準じて美を尽せり。かくの如く綺羅の旅装を着け風塵の裡を旅行する輩は、生来未だかつて見ざる所なり。かつて聞く「蔵人の富者は支那人より驕奢を極む」と。ここにおいてかその言の空しからざるを知る。この日旅行者に遭遇する尠なからず。一老喇嘛あり、白髪美髯、黄衣黄帽、肥馬に跨がり従者徒歩銃を肩にしてこれに随う。駄馬五、六頭行李を肩にしてこれに嗣げり。その他十頭以上の馬騾相交えたる一行十余組および十頭以下のもの五、六組と、小騾二十余頭の一群ならびに四十余頭より組織せる一隊商の前方より来るに会せり。その運搬するところの商品は西蔵雑貨、茶、毛牛尾、羊毛等にして、西金の噶綸綳に至り貿易せんとするものに係わる。本日のように多数の旅行者に遭遇せし事は未だかつてあらず。鳥獣に至りては二野鹿、一狐と湖上に浮べる数十羽の鴨、雁の類のみ。午後二時半と覚しき頃、道左に分路あるを認む。土人云う「夏日湖水漲るの時、この分路より殺馬隴に至る」と。午後四時半殺馬隴に着す。この日の行程およそ我十八里〈約七〇キロメートル〉にして白地はほとんどその中央に在り。道路平坦、加うるに乗馬疾駆せしをもって比較的速やかに到着せり。

この駅は西蔵人家十余戸あり、寄舎は例により矮小暗黒、糞烟のため苦痛に堪えず。即ち屋外に出ずれば蔵人十数輩弓を把って射撃をなす。その弓は本邦の半弓の如く短かくして支那弓に類し、弦の長さ約四呎、矢の長さ二呎七、八吋にして先端に堅木製にして中空虚、周囲二、三の穴のある茄子形のものを附着するをもって鏑矢の如く毎射必らず費々声を発して飛鳴す。標的は二株の木を立てこれに一線を張りてその中央に懸け中心の黒圏に命中する時は黒圏脱して地に下落するが如く装作せり。後方に幕を張りて外方に飛行するを予防せり。射程距離およそ百三、四十呎なりしが中に二、三の巧射手あるを見受けたり。松筠（嘉慶の初年駐蔵大臣たり）白地塘の詩に曰く、「白地海辺秋、汪浄沿往復、竜淵雖二広大一、造物包荒独、学レ量宜知レ天、養レ心可レ獲レ福、徘徊忘二路釺一、即景堪レ娯レ自」〈顧復初編『西

蔵図考』巻之三（光緒乙犬＝一八八六年秋）から採録したもの〉

十二月五日。昨来早暁降雪、この日また然り。十一時頃に至り始めて晴る。白地より来たるところの烏拉は昨夕厚く謝して帰還せしめたり。今朝黎明この地の烏拉来たる。一行を送りて曲水塘に至るものにして騾五頭、騾夫二名これを伴えり。

数日来米飯を食せざるこの身は何となく疲労を覚えかつ本日超踰すべき寒把拉峠〈カンバ・ラ四五六七メートル〉即ち西崑崙は雪既に深きと聞きければ、昨夕薄僕に命じて今朝出発前米飯および羊肉を食せしむべきをもってせしも、彼怠惰にして毫もこれを意に介せざるのみならず、虚嚇して曰く「普通の支那人に比すれば詳細に事物に注意する点、外国人に似たり。疑うべきなり。訴うべき人の面前においてこれを訴えん」と。言未だ終らざるに叱して曰く、「汝、余を何人なりと思いてかかる無礼の言辞を吐露するものぞ。これ天に向かいて吐唾の類のみ、我またかくの如き者を要せず」と。彼急に命に従い平身低頭地に匍伏して謝し随行を乞う。即ち爾後を戒めてこれを許す。支那人云う「西蔵人に対しては、時々強硬に出でずんば往々彼の乗ずる処になる」と。これあるいは然らん。発するに臨み宿舎の男女皆来たりて併列し多少の謝儀に与からんとするものの如し。即ち普通人の幾倍を給し辞して征途に就き、風雪を侵し堅氷を踏み岡把拉山に登る。氷面滑らかにして馬躓きて倒れんとすること数次、うち一回は馬と共に倒れたるも馬夫の扶援によりまた起立せり。既に山頂に達すれば例により嘛呢塔、嘛呢旗あり。一行神仏に謝して行く。道左路あり、殺馬隴を経由せずして直ちに白地に通ずべし。山頂より北方を下瞰せば、対山とこの山との間に一大狭隘あり、東より西に横たわる。内一大河ありてその中を流る。これを望めば碧帯の如し。問わずして知る、これ即ち雅魯蔵布河〈ブラマプトラ河上流、別の名をツァンポー河という〉なるを。山の北面一帯に積雪ありて、白日融解せし所は暁来氷結し人馬滑跌し易く、騾の進行甚だ遅々たり。一行皆騾を下り徒歩して進めども余は独り依然乗騾のまま進行せり。雪中紅赤の血痕を見る。騾夫云う「これ行客もしくは乗騾の氷上において負傷せしものなり。注意せざるべからず」と。山

を降り巴孜に至らんとする所、およそ七、八十頭の毛牛および六、七十頭の騾、羊毛を運び来たり昨夜天幕を張りてここに露宿し動物は今なお附近に放牧中なれども、羊毛を固結して毎塊約六十斤〈約三六キロ〉となし、毎牛およそ一六二斤〈六七キロ〉を負行する如くに荷造りせしもの整然として拉列するを見る。岡把拉山は南方より登り二十清里〈一清里はわが国の六町、一三キロ〉にして降り三十清里〈約二十キロ〉とす。

巴孜は人家十余戸、清兵一名、蔵兵二名あり。土人白堊をもって屋壁を塗るを見るに、白堊粉を水中に融解し、三、四尺の棒先に布片を結着せしものを浸し、これを壁に接して屋頂より軽打するときは白汁をもって壁を塗るを得べし。巴孜の下方に支那官吏の往復の便に供するため二層楼の公館あり。ここより右折して進めば雅魯蔵布河沿岸の田野にして、農家所々に散在し柳樹各所に生育し、馬、牛、羊、園圃の間に草根を求むるを見る。地味は豊饒にして年一回青稞の耕作に従事するの外、豌豆、大根等の副産地にもまた適し、この河および拉薩河の左右は西蔵において気候、地味ともに優等にして人口多しと評せらるる処とす。河辺を行くこと二十清里にして鉄索橋に至る。営官一名、喇嘛寺一坐ありて、外観美麗なり。民家十余戸、鉄索橋は二個の鉄条を対岸にある一小岩上に架し、別に木板をその上に並列し縄をもってこれを縛し、また鉄縄製欄杆を設け、公務をもって通行するものの便に供すれども、人々は通常渡船に乗じてこの河を横断す。渡船は長さ約四間、幅一間半、深さ三尺余にして厚板をもって製したる長方形箱船にして船首に馬頭を刻めり。普通この図形の船二隻をもって人馬の来往に供しもし不足を感ずるときは他に二隻の牛皮船を補助す。牛皮船は牛皮を縫い、長さ約六呎、深さ三尺五、六寸にして方形の一方やや長きものとなし、柳枝をもって骨子となし、杓子に似たる櫂をもってこれを漕ぐ。下界において二千年以前に使用せられたる器具今日なお依然としてこの高原に存在せり。評して太古の民となすも過言にあらざるべきか。

この河はこれより上流は分れて二流となるも、ここに至り合して一流となり水深く流れまた緩なり。冬天河幅は一町に足らざるも、砂礫多き河原は更にこれに五、六倍す。晩春初夏気候温和にして霖雨降り来たり、四山雪融くれ

ば、所謂春水氾濫し水勢怒号すこぶる激烈にして往々横断することあたわざる事ありと云う。この渡津を横切り河の左岸に沿いて行くことおよそ二十清里にして曲水（チュイスイ）に達す。途上四、五羽の黒頂鶴、田野に遊ぶを見たり。これより拉薩に至る一帯の地には、鶴および鴨、雁の一種特別の種類あり。本日の行程約九十五清里〈約六二キロ〉なりとす。

先発せし薄僕未だ宿舎を求むるあたわずして街頭に彷徨す。途上五、六個の供仏燈明を手にせる老媼ありてその家に来たり宿すべきを告ぐ。共に行きてその家に宿す。客室は新造に係わりやや清潔なり。厨房は隔離して別室にあるをもって初めて烟苦を免れたり。

この地清兵一名、蔵兵三名、蔵官二名、蔵人三十余戸、皮船二十余隻あり。駅の西方一岩丘を負いその上に石塞の古蹟あり。今過半は破損せり。北方は豊饒なる一谷地に通じ、南は雅魯蔵布河に面し景勝の地なり。ここより拉薩に至る一帯の低地は沃野平原連綿数十里、処々に村落あり。傍らに柳樹林あり、夏天緑陰愛すべし。この地方の柳樹は地上約六尺の処より切断してこれより更に多数の樹枝を発せしめ、これをもって篭、その他の小器を製し、また緑陰を人獣に供するに便にす。この地の糌粑は色白く粉末細小にして拉薩に比すればまた廉なり。殺馬隴の烏拉は酒資を与えて帰らしめたり。蔵官来たりて云う「明日烏拉なし。請う両三日待たれん」と。相伝う「曲水に蝎子洞あり、もし死罪を犯すものあらば、縛して洞中に投じ、これを蝎に食わしむ」と。古人詩あり、掲げてもって参考に供さん。

松筠曲水塘詩

曲水即褚滑　漢音非蛮語　関隘依巌道　江岸環幽閭
形似陣長蛇　是謂百夫禦　豈独地勢佳　随在多糧糌
且喜近前拓　程僅両日許　欲久楽昇平　治以同胞与
惟期善時保　萬載堪甯処

楊揆鉄索橋詩

山川阻洪流　深広詎可越　両崖兀相望　怪石起茜崋
飛空架索橋　鎖紐危欲絶　曳踵窘不前　森然堅毛髪
宛宛虹舒腰　落落蛇脱骨　廻疑匹練鋪　窄杋長絙拽
誰遣高梯横　真挽巨筏脱　翻風乍飛騫　緑雲更絶卼
手怯朽索捫　足苦縮板裂　前行不得縦　後武甯許突
俯視逆流迸　疾較飛電掣　夭矯竜尾垂　凌乱雁歯欠
駆鼉既難憑　駕鵲苦乏術　柱杖心魂魂　褰裳趾兀兀
杠非冬月成　縄豈太古結　艱危信多端　絶陰誰所設
行矣匆回顧　中道未容輟　側聴歩虚声　長吟踏揺閬
柱敢馬郷題　馭比王尊叱　一墜無百年　登陸股猶慄

十二月六日。早朝曇天なりしも後晴れたり。この日烏拉なくなお滞在す。

西蔵人にして支那官吏のため官銀を拉薩より靖西に送る者来たり告げて曰く「この行極めて急行を要すれども烏拉なきがため、昨日来逗留せり。聞く、今日午後烏拉あり前進するを得べし」と。よって赴きて敬意を表しかつ問うに前途の良否をもってせり。彼曰く「拉薩を発してより僅かに二日、蔵中况に異事なし。唯嚮日達頼喇嘛蔵王を幽閉して死に至らしめ、その財産は五昼夜をもって尽くこれを達頼喇嘛宮殿中に没収し終れり。商業は多少景気づきたるもなお不振の域にあり。今年は例年に比し降雪速やかにして既に二、三回白雪を地上に敷きしも、市街は比較的暖気なるをもって速やかに融解し、四山なお白衣を纏うあるのみ」と。この種の人、昼夜兼行せば僅か六日をもって拉薩より靖西に至ると云う。彼は純金製および貴重なる松緑石入りの耳環および指環を穿てり。価値低廉の擬物と異れり。

男女を問わず西蔵人の驕奢一般にかくの如きものあり。故に乞食輩に至る迄擬物を穿用す。

午後街上を散策し蔵人が一種の白粉をもって氆氌を洗うを見る。その法、直径およそ一尺五、六寸、長さ四、五尺の樹木に本邦田舎地方馬飼器の如く長方形の穴を穿ち新織の氆氌をこの内に容れ、温湯を注ぎ白粉を散らし傍に欄杆を設け隻手をもってこれを把持しつつ両足をもって氆氌を踏洗し、後陽光によりこれを乾燥す。この白粉は山上より生ずる一種の泥土なりと云う。あるいは疑う、これ硼砂ならんかと。石鹸を使用する事未だ普及せず。蔵人は概して垢を洗い落すことを惜しむ事錦衣を剝奪せらるるが如し。然れども他地方と同じく石鹸を愛する日来るべし。逗留する日、なお幾日に亘るや不分明なるをもって江孜より尾行し来たれる一蔵人即ち前日教導として乗馬せしめし者および他の尾行者なる喇嘛僧に諭し先発して拉薩に至らしむ。該喇嘛は三大寺の一、色拉寺〈セラ寺〉に至りて修業せんとするものなりと声言せり。彼輩は実際何人たるかを知るに苦しみ同行を欲せざればなり。

この夕、薄僕に命じ蔵官に迫らしめて曰く「公事急なり、速やかに進行するを要す。明日烏拉を得れば相当の報謝をなさん」と。ここにおいて遂に明朝発程の事に決せり。蓋し此言蔵官の欲する所に適合せしなり。

曲水の少しく東南において拉薩河と雅魯蔵布江と会合し、遂に他の狭隘を東に流過し南折して比馬拉亜山脈の東端を経て、更に緬甸（ビルマ）の西南に貫流して印度に出で孟加拉湾〈ベンガル湾〉に注入す。曲水経過後は蔵中最大のこの河と相分るるをもってこの河道探検につき識者の苦心を記しその労を空しうせざらんとす。

往年印度測量部に工兵大尉ハアマンなる人あり。雅魯蔵布江とブラマプートラ河とは想像の如く果して同河なりや否や、この河南流せし後何処に至るべきや、西蔵人すら一見すれば直ちに殺戮するが如き蕃地に流入するをもって未だこれを探検せし者なく確知すること能わざるを慨し、これを確かめんと欲せしが、西金人にして印度政府の測量部が西蔵、布丹等白人の容易に進入し難き地方を探検せしめんがため使用せしキントウプなる者あり。剛邁にして能く事に耐え、しばしば良成績を挙げしをもってこの河道探検を彼に委任せしが、彼決然征途に登り、餓寒のために幾度

か死に瀕し捕縛せられて奴隷となりしが、隙をみて逃亡しその潜伏中所約に従い、一定の符合を彫刻せる尺余の小丸太五百本を河中に投入せしも、これより先はハアマン大尉はカンチンジャンカ〈カンチェンジュンガ〉大雪嶺探検中氷傷を受け遂に不帰の客となりしため、誰一人アッサム地方においてこの符合の木片に注視する者なかりしは遺憾なりき。キントウプ帰還報告するところによれば「以前この地方を探検せし者よりおよそ百英哩遥か下流の地方にその足蹟を印し来たり、地理上に幾多の明白を添えるに至れり」という[注]。

十二月七日。快晴、午前六時発程の準備整う。午前九時に至り烏拉来たり、出発し東方に向かう。道左十余羽の黒頂鶴、園圃の内に食を求むるをみる。一小橋を越え未だ幾何ならずして人家十余戸の地に達せんとする処において人有り、肩輿に乗じて来る。輿は楕円形にして後方に凭り掛る処あり、藍色母衣をもって三方を包囲し所独吉嶺(ダージリン)辺に似たり。主人深くその中に安臥するをもってその何人たるやを弁明する能わざれども、蔵人四人これを担い一人正帽を被りてこれに随行し、十七、八頭の馬騾行李を負いこれに続く。薄僕云う「これ疾病せる蔵官の旅行するならん」と。これを過ぐれば拉薩河流域の原野に出で、これより拉薩に至るの間常にこの河の右岸を進行す。曲水より約四時間程にて前面に横たわる大原野は東西に長く、南北に短かく荒蕪地、耕地と相半す。この内二、三の村落あり、薩婆奈を経過せる河流、委折北々東に向かい、千、百の間を進み僵里(チャンリ)、南無(ナム)等を経、拉薩河辺懸崖絶壁のところ三ケ所を踰え業薫に達す。この懸崖は花崗岩より構成せらる。

この日途上において数百の牛、羊および黒頂鶴数十羽、雁にして少しく鷺に似たるところありてやや痩形なる一種異様の雁数百羽、ならびに深黄色にして少しく黒色を帯びたる鴨数十羽を目撃せり。この雁、鴨はあるいは文明世界の斯学界に紹介せられざる新種たるやを疑うも、土人の嫌疑を慮り、これを携帰する事能わざるを遺憾とす。就中鶴はよく人を十余歩の処に近づく。これらの禽鳥は人これを殺害せず、土人仏使なりと迷信するがためなり。また砂礫原中二、三の禿鷲静止し、ただ時に頭を回らし四方を瞰視するを見たり。河岸の断崖処々にオンマニパメハムあるい

は仏像の彫刻せらるるを見て、身仏都に接近しつつあるを覚えり。午後四時半業薫に至れり。この日の行程約九十清里とす。業薫は民家約三十戸、清兵一名、蔵兵三名、蔵官一員あり。この夕、薄僕および馬夫等に地酒を給して慰労す。蓋し明午後は拉薩に達せんとするをもってなり。時に一喇嘛僧あり。来たりて彼等とともに歓楽放歌す。この喇嘛喫烟を嗜み酒量また強し。蔵中これほどの俗僧尠なからずと知るべし。宿主余が日記を一覧し薄僕に問いて曰く、「この客はこれ清国喇嘛なりや」と。蔵内喇嘛以外文字ある者尠なく、故に問う事然り。

十二月八日。快晴、午前三時薄僕を喚起し、先発して拉薩に入り宿舎を捜索せしむ。これ土地の習慣に従うなり。六時起き九時発、一里ばかりにして一喇嘛寺あり、遠くこれを望めば洋館に似て美なり。傍に人家十数戸あり。この辺小溝を通じて潅漑の便を計る。本流は広さ一丈、深さ三、四尺、水清冽にして水底の砂礫数うべし。これより更に二、三の小流と分ちて園圃の間を迂廻せしむ。この辺より拉薩に至るの間、河流の氾濫を防止せば耕地を得る尠なからざるも、人のこれを顧みるものなく、僅かに不浸水地のみをもって耕するに過ぎず。一狭隘を出ずれば路左大仏を石に彫刻せるあり、丈約二丈。これより一小水流を渉り砂礫原を経過し更に二水を渡る。水馬膝に達す。この辺において馬夫忽然告げて曰く「今朝托せらるるところの包物を紛失せり」と。よって馬を降りまず彼の身辺を捜索せしも得る所なし。彼自ら後戻りしてこれを探索せんと云いしも、彼をして駄馬を監視せしめ自ら馬を鞭撻して来路を探索せしも、通行人未だ二、三人なりしに拘らず遂に見出すこと能わず。この包物は今日まで未だかつて他人の手に托せしことなく常に自ら携帯せしが、今朝馬夫顧みて曰く「馬上かくの如き包物を所持せらるる不便ならん、自らこれを懐にし行かん」と請いければ、もしこれを否めばあるいはかえって彼に疑心を生ぜしめん事を想い、幸に固結せしをもって緊要品なれば注意して携帯すべきを命じ、直ちにこれを託せしが事のここに到らんとは予想外なりき。この包物とは支那布呂敷に包める米国イーストマン社製のポケット用コダック写真器にして、今日まで無事に撮影し来たり今朝も一回の撮影を終え後この不幸を生ずるに至れり。今日午後は著名なる達頼喇嘛の黄金宮殿および拉薩禁鎖都府の

光景は、ともにこの文明の利器に照し我至尊を初め同胞ならびに文明世界に紹介し、その奇異の観を頒ち蔵人誘導を促がす一助とせんと人知れず独り自ら楽しみし甲斐もチベットにおいて減少し無限の遺憾を催せり。蓋し、天再来を黙示し、更に他に大いに教うる処あらんとするものと諦めたり。ここにおいて馬を馳せて疾行し、路左より来たれる渓流に架せる長さおよそ三十間の一橋を通過せり。この橋は石および雑木、土砂をもって架橋せられ、広き処は人道、馬道の区別あり。渓流の両辺は氷結し、流水中には無数の細氷混入浮沈して流るる状、一見油水の如し。橋を過ぎ行く事未だ幾何ならずして路左に一大蔵人の家あり。門また大なり。聞く「これ現宰相チチョカンプが郷里の住宅なり」とす。この辺より東方遥遠の一丘上にあたり白壁の大家屋あり、その屋頂日光に反射して数流の黄金光を耀輝し、大金星の地に落下せるが如きもの、問わずして達頼喇嘛の宮殿たるを知る。喇嘛教巡礼遼遠の地より来たり、数ケ月の長旅行をなしてここに到りこの光景を許せば、随喜の涙を流す事ならん。不肖もここまで安着の喜なきにしもあらざるも、いよいよ拉薩に安全に進入し得るや、当局者に胸襟を吐露するの好時機を得べきや、もし時機これを許さざるも帰りて現状を報じ、さらに再挙して時機を伺い、我好意を彼に通ずることを計画すべき生命の存するや否や、普通巡礼とは大いに所感を異にせり。

須由にして道左へ字形に引込みたるところの底において山に拠り、白皚々たる幾層の白壁屋宇竝に黄金屋頂の殿堂聳え旅客の眼目を驚かすもの、これを白蚌（ペイポン）寺となす。これ前蔵四大寺の一にして前は大道に臨み後は巌山に拠る。楼閣、仏像、経堂皆備わる。首坐堪布、大喇嘛一名ありて黄教を闡講す。掌事の僧官二名ありて約七千七百の喇嘛を管理す。この僧等は西蔵およびその附近の各地より来たりこの寺内に在りて苦業す。往々にして三十余年の久しきに亘る者あり。該寺より五、六町大道に接近せし地に垂仲殿あり。この垂仲妻室なく、また降神、附体、禍福を判断すと云う。傍らの屠牛場より牛の血淋滴たり、未だ日に屠る処幾多なるを知らずといえども、この辺の人家牛角を用いて墻壁となし、また屋壁となすはすこぶる奇観たり。よって知るその屠る処尠少ならざるを。この附近二、三の大禿鷲

あり、蓋し屠牛場を睥睨するものならん。この辺往来の人馬絡繹絶えず、道路は幅約二間にして平坦なり。附近未墾の湿野狭からず、これ特に牧場として予備したるものの如し。既にして磨盤山下に至れば鶏数百羽群遊するあり、山上武聖廟一坐あり、毎月初一日焼香す。清、西蔵文武諸官班を整えこれに列すという。

進みて布達山下に達すれば、赤衣の喇嘛三三五五、三、四冊の西蔵経本を背負いて達頼喇嘛居城の布達山に向かう者、相接続してその幾十人なるを知らず。該蔵経は毎冊長さ約二尺五寸、幅六、七寸、厚さ七、八寸にして表装は六、七分の厚板を使用せる折本にして、年少なる一喇嘛の如きはその重量に苦しむものの如し。時に遥かに前方にあたり黄衣を穿着せる高等喇嘛五、六騎相駢て登山するを観る。須臾にして布達山西麓端の門に達す。門の形状一大仏鈴を蓋したるが如くにして、その柄に当る所は塗金にして蓮花台の如きものより組成せられ、その頂に蕾状の円形なるものを安置し、左右に毛縄を張り出し数十の風鈴を懸く。支那人この門を揺鈴接滅門と称う。その起因を尋ねるに乾隆年間西蔵を征服する際、定西将軍噶爾弼ここに至り大喝消滅せよと呼びしに、門塔の左右毛縄上に懸掲せる数十の銅鈴、風吹き来たりて悉く地に落ち、賊また遂に亡ぶ。これより人呼びて揺鈴接滅門となす。門は穹窿状に穴を穿つ。ここより進入せば布達山上に南面せる広壮なる達頼喇嘛宮殿の左側に出ず。旅客ここに到れば忽然その正面全景に面し、仰ぎて金瓦白壁の人目を眩惑するを見る。建築の基礎は山腹より起り、巍然として高く山上に聳ゆ。かくの如く偉大なる建築物がこの禁鎖都府内にあらんとは誰かこれを想わんや。薄僕および二、三の蔵人既にここにありて余を接迎し、荷物を紛失せしを知らずして延着を訝れり。これより両側に並木ある広き街道を通り、緑瓦をもって屋根を蓋える瑠璃橋を過ぎ、更に一門内に進入せば、左方に金瓦の屋頂高く普通の家屋の上に秀で夕陽に映し、更に耀々として光輝を放つものこれを大招寺となす。今日最後の一時間の如く、金光燦爛たる光景は北米および支那大陸、南米および印度旅行中生来未だかつて目撃をせざりき。糧台衛門附近にある一民屋の二階を賃し、ここに宿す。これ薄僕の予定する処なり。時に午後四時半、本日の行程は十清里〈六・五キロ〉とす。

宿舎は乾土塊および木材をもって建築せしも、既に所々破壊し、寝台は室の一隅にあるも土塊を左右に積立て、その上に三、四枚の板を並べ、天井は低くして頭触れんとし、全室の広さ六畳に足らず。梯子を昇降する毎にその破損を恐る。小窓二個あれども開放のままにて玻璃、紙または板戸等をもってこれを蔽うことなく、かつ陰処に在りて終日太陽の光線を見るだになし。燃料は至って少なく、隣室に竈あれども、これに例の牛糞をたけば即ち糞烟皆弊室を通過して外方に出で、身はあたかも烟筒中に住居するが如し。もしこの両窓を塞げば更に苦痛を増加し臭気堪え難し。これを開放せば寒気甚しきも二者その一を選び、この寒国にありて冬天窓を閉さずして臥せしが、寒気凛々たる夜には前夜盞ある茶碗に注ぎ置きたる茶も一氷茶と化し、墨壷中の墨また氷墨と化せしを目撃せしことあり。後知る、ここはほとんど貧民窟とや云うべき地たるを。不肖の命ずるところに反し、薄僕の撰定かくの如し。他に宿舎を求むれども急にこれを得べからず。客の来訪する各皆云う「次回進蔵の際請う、予め通知せよ。必らず良家屋を撰定し置かん」と。薄僕この室の寒冷に勝えず毎夜去りて隣室に賃する支那兵の所に宿せり。

この夜携帯せる紹介状および贈物を前蔵糧台何君光燮に送る。君は雅逸と号し蔵地にあること久しく、清、蔵人間に声望あり。また候補知県李君傑臣を訪う。この人とはかつて滬上にも相知る。湖南長沙の人、今や一富商と合資して商業に従事し、しばしば上海に来往す。何糧台と師弟の間柄たり。傑臣上海において既に不肖の日本人なるを知る者なれば、不肖が何人たるやを他言せざることを請えり。彼また聊か鄙意を知れば賛助すべきを誓諾せり。この夜就寝前東向して天佑により蔵都に安着せしを感謝せり。

十二月九日。昨八日到着より廿五日に至るまで十八日の間拉薩滞在。この間約二時間の小降雪一回、小強風一回のほかは大抵温和にして、冬天のことなれば寒は即ち寒なりといえども想像より温和にして、欧米人の評するが如く熱帯附近にある寒帯との評は途中高嶺地方に適するもこの平原は海抜ほとんど一万二千呎〈約三七〇〇メートル〉なるにせよ拉薩には少しく不適当なるが如し。ただ我東京の猛冬より寒気少しく甚しきを覚えしのみ。しかも土人は云う「四

山なお雪を頂く今年の如き寒冬は十年以来経験せざりしところなり」と。然れども街上店頭には、大根、葱、蕃薯、玉菜の類あるを見受けたり。葱は遠隔地より来たり氷結すれどもその他の野菜は新鮮にして青菜周年絶ゆることなしと云う。また晩菊既に散落し眺むべき花なきの候、我餅草類に紅花の如き小花をつけたるもの冬年なおその艶妍をもって寵玩を受くるを見る。陰暦三、四、五月の候は、陽春至ると共に柳林の緑陰愛すべく、男女相携え、酒を置きて放吟跳舞もって天恵の優美なるを娯楽す。晩春、初夏の候時々降雪有り、雷鳴これに伴うあり。その他は概して晴天多く、地震の如きはほとんど皆無なり。猛夏には時にあるいは単衣を着し、団扇を所持し雪嶺を払って吹き来たれる涼風の愛すべきを知り、炎熱地方におけるが如く安眠を害する臭虫の厭うべきをも知れり。不肖は嫌疑を憚り寒暖計を印度に置きて携え来たらず支那官衙その他にその有無および度数を尋問せしも要領を得ず、特に前数語を掲げて気候の判断に供するのみ。

曲水より随行し来たれる馬夫は厚くこれを謝して帰還せしめ、薄僕もまた彼と同行し業薫附近に至り昨朝紛失せし写真器を馬夫と共に捜索すべきを命じ「もし捜索し来たるものあらば相当の賞金を与うべき旨を沿途の主なる人民に告知せよ。但し失うところのものは支那風呂敷に包みたる一種の小箱なることを告げ、その何物たるを明白にすべからず」と伝えしが、第二日の夜半近き頃彼帰り来たりて曰く「百方捜索せしも遂に探求する能わず。然れども貴命はこれを伝え置けり。一人あり、その箱は何のために使用するものなるやを問いければ、該箱の一方に円形硝子を附着せり。これをもって天を窺わばその美観名状すべからざるものなりと答えたり」と。使命に背き未開の民に対しこの贅言を放つ、その結果如何を慮れり。彼云う「売卜者の説によればこの器の所在を知るに至る遠きを出でず」と。ある支那兵の告げ来たるところによれば、彼猥りに人に対して謂いて曰く「己が随行し来たりたる支那人は賢にして能く事物を知り外国語をも解せりと伝聞す。かつ事大小となく審問す。嫌疑すべし」と。故にその不可を誡めて曰く「もし嫌疑すべき人を拉薩に誘導せばその誘導者の罪軽からず。かくの如き事を軽口に人に告ぐべからず」と戒めた

り、云々。不肖市街を散策し紀念品あるいは標本を購求する毎にもし仏具等に係わるときはその面貌大いに不肖を疑うものの如く、かつ従来の優遇をも信ぜず。拉薩に着せしより殊に不頓着なりしをもって遂に彼を使用する事を謝絶せり。彼の親戚には相当の物品を齎らせしめたり。爾後隣家の支那兵およびその親戚等交々来りて万来に周旋し不便を感ずること少なきに至れり。

着後一日、鏡に照して己の面貌を見るに漆黒黒奴に似たり。これ風雨雪霜、日光垢塵、糞烟に暴露せしめたる結果たるを知る。かくの如くんば土人の注意を惹く尠なきを喜べり。街上を散策するに拉薩の男女はその風俗言語他地方に比しやや優柔にして都びたる処あるを見る。大招寺周囲なる重要市街は、朝より暮に至るまで来往の人、絡繹群をなして絶えず。普通店舗のほか更に露店を設け、西蔵および支那の雑貨、印度より輸入する欧米製作の廉価なる小雑貨、廓爾格（一名泥絶耳また仁保爾、西蔵人称して畢棒子、西蔵の南方にあり）、克什米爾（古の罽賓国、唐書に迦湿弥羅と作り、元史に乞石米耳と作る、皆一音の転化なり。蔵人纏頭回子と称す。白布をもって頭を纏うの故なり。西蔵の西隣にあり）の商品を販売す。商品中北京品もっとも嗜好に適し、支那の通称に従い京貨と称う。四川品これに継ぐ。広東品は印度を経由して輸入せらる。欧米の雑貨は印度、独逸品もっとも多し。本邦品は未だ噶爾加達（カルカタ）に航路の開通せざるためにもあらんか、僅かに燐寸、蝙蝠傘、木綿縮等の二、三品に過ぎず。燐寸は瑞典〈スウェーデン〉燐寸と将に競争中にて印度およびこの方面にては未だ全く本邦燐寸の凱歌を唱うる能わざるも、本邦製白象印燐寸の如きは評判宜し。大抵の燐寸は空気大いに乾燥せるこの高原に来たれば摩擦して発火すると共に直ちに消滅し、木片に火の移らざるもの多し。然るに右白象印燐寸はこの害少なきをもって重用せらる。

商人は西蔵人、西金人、廓爾喀人、克什米爾人、支那人等にして西蔵内地遥遠の各方面より出で来たれる異様な西蔵人および蒙古人等街上に散見す。およそ西蔵に在る外国官商は皆西蔵婦人を娶る。近来一、二の主なる支那官吏中支那より婦人を携え来たるものあり。これ前例なきところなれども、欧米の例によりその可なるを少しく覚知せしも

のか、もし欧米植民政略を参酌しこの地を支配せば支那の勢力を移植し得ることその今日に幾倍するや必せり。婦人としての西蔵女子は支那女子の如く陰嶮なる点なく、豁達にして愛すべきところあり。またある点においてよく夫を助けて家事を整理す。特に商人の妻としてその夫を補助すること、他邦婦人の右に出ずるものの如し。婦女小商業に従事するは西蔵の風習なればなり。婦徳に至りては賞すべきものあり、否なるものある事を耳にするは何処も同じ。街上婦女の小商業に従事するもの多きと喇嘛僧の商業に従事するものありて時にあるいは非常なる懸引〈かけひき〉をなし仏具その他を売り捌くは奇観なりとす。大商人は街上に店舗を開設せず、官吏風の門構えの家に居住し客室の一において商品の見本若干を棚に陳列し余は倉庫に収め時機を示して売買をなす。拉薩に楊鬍子と通称する屈指の商人あり。この者元来雲南人にて十余年前は一支那兵に過ぎざりしが、後感ずるところありて商人となりしが商運強くして常に利潤を得、今や東は四川、雲南、西は印度方面に向かい己所有の駄馬をもって定時商品を運搬し、商人を広東、上海地方に派遣して麝香〈じゃこう〉その他の商売に従事し、時にまた北京、天津地方において貿易することあり。李傑臣と共にこの家に来遊すること三、四回、楊老人はその名に違わず鬚髯ありて怜悧の相を備え、毛裏のつきたる絹衣を纏い、時に自ら帳簿を記載し多忙なり。その妻平素身辺に装飾する珊瑚、真珠、金、銀等少なくとも二千円以上にして、正装せばこれに倍すべし。その衣は表絹裏毛、平常自分用に使用する茶碗は高価の白雲玉製なり。彼女は四十歳前後にして客来たれば自ら茶の周旋をなし、時に西蔵銀貨を数うるに繁忙なるを見る。その数え方極めて迅速巧妙にして熟練せるに一驚せり。棚の一隅に蓋ある白玉飯碗の蓋および碗の一方に緑翠垂れんとする雲模様ありてその形状また本邦人の嗜好にもっとも適するもの一対あり。試みにその価を問うに実価一個三百留比なりと。数寄者をしてこれを観せしめば狂喜するならん。ある時は達頼喇嘛の会計を掌る青年喇嘛坐にあり、北京錦をもって縁取りせる絹製法衣をつけ、五、六個の銀貨袋を交付するを見受けたり。袋中の銀貨ことごとく新鋳造に係わり銀光輝々たり。またある時は麝香多量を懐にせる附近田舎漢来たりてこれを売り払わん事を請うを見たり。楊老人の一子云う「麝香は

西蔵商品中もっとも有利なるも、擬物多くして未熟練者には真擬を弁ずること難く、噶児加多、香港、上海は売捌上もっとも有利なる地方にして、支那人のほか、外客は独、仏人もっとも多し。麝香は二日行程の地において多量に購求するを得べし、云々。然れどもまだこの道に通ぜざる者この商業に従事せば損失を招く者尠なからず、これ既に産地において擬物多きがためなり」と云う。麝香の大小軽重により一個の値、大抵六両より九両位とす。李傑臣は彼と合資して商務に従事す。自家に一品の商品だも置かず、しかもかなりの商売をなせり。安輝が携え来たるところの商品を友人の忠告に従い靖西に止めりと聞き謂て曰く「当市商業未だ発達せず、大商人少なしといえども、しかも一人にて年十七、八万弗の商売をなすものあり。一、二千円の商品を売捌くは容易の事なり」と。普通の商業は多く廓爾喀人および克什米爾人等によって営まる。彼等は自国品は素より西蔵、支那、西洋の物品にして苟くも在当地人の嗜好に適するものはこれを商わざるなし。特に北京品および四川品の商売に至ってはほとんど彼等の掌中にあり。その理由を尋ねるに、彼等朝貢の際における往来の経費は国賓なるがためか、その各地方においてこれを負担するをもって支那人よりも廉価に商品を蔵内に輸入するを得、故にこれを比較的廉価に売捌き得べし。西蔵人朝貢の節もまた素より同様の取扱いを受くれども、商人としての技倆は前者に及ばず。各大寺等において年々使用する莫大の茶は、達頼喇嘛特に人を派遣して四川よりこれを輸入せしむと云う。四川省より西蔵に輸出する茶は年に百二、三十万両にして産地は主に雅州府管下の各地方とす。茶は小枝葉を混ぜる極めて粗葉より紅茶風に製し、これを長さ六、七寸、幅四、五寸、厚さ五、六分にして中凹なる磚茶となし、相連ねて長さ三、四尺とし、紙および油紙をもって包み更にその外部を包むに編み竹をもってし、これを七、八個積み重ね人背負いて打箭炉に至る。この地は西蔵貿易市にして西蔵商人の来往するものまた尠なからず。ここよりこれを生牛皮に包み毎個の重量約六十斤とし、二個をもって一駄とす。但し生牛皮の荷造は有毛部をもって裏面とし、毛縄をもって縫い合わせ要所に鉄印と西蔵封蝋をもって封印をなす。かくの如く荷造りせしものは八、九十日を経過して拉薩に達するに適当せるものなりとす。茶は西蔵飲食物中も

っとも重要なる部分を占む。蔵人喫茶量の多きこと恐らく他邦人の五、六倍以上なるべし。植物性分に不足せる西蔵高原は生活の必要上多量にこれを飲用するは自然に適合するならん。四川において三、四銭の一小茶塊、拉薩においては十二、三銭に相当す。距離遼遠なりといえどもその価また高貴にして相償うに足るべし。茶は拉薩においてもっとも売り捌き易き商品とす。かつ気候乾燥にして多量にこれを貯蓄するも腐敗等の憂少なし。故に大商人は大抵茶の商業を営めり。明朝の頃には茶馬の制とて川茶蔵馬と交換し、官大いに利を得たりしものなりき。二、三の重要商人より聞くところによれば現今四川、打箭炉間の主なる輸出入は大約左の如し。

西蔵より打箭炉へ輸出

麝香	六〇〇、〇〇〇両(テール)
羊毛	三〇〇、〇〇〇〃
黄金	一八〇、〇〇〇〃
狐皮	二五、〇〇〇〃
毛皮類	三〇、〇〇〇〃
大黄その他葯材	三〇、〇〇〇〃
合計	一、一六五、〇〇〇〃

四川打箭炉より西蔵へ輸入

茶	一、二〇〇、〇〇〇両
棉花	二〇、〇〇〇〃
絹織物その他雑品	五〇、〇〇〇〃
合　計	一、二七〇、〇〇〇〃

総　計　二、四三五、〇〇〇両

西蔵人着用の絹織物、帽子、靴等特別に成都において製造せられ、礼意を表するために贈るところの哈達と称うる羅の如き白布あるいは白絹織の長さ三、四尺、幅五、六寸なるものもまた然り。単にこの哈達製造のみをもって職業とするもの成都に十余家ありと云えり。女子弁髪の尾端に用ゆる赤絹絲組紐の総、また特に西蔵輸出向として織製せらる。亜東開関は支那西蔵貿易に妨害ありとして支那人はこれを開くことを好まざりしも、十余年前英蔵戦争の結果遂に開関の已むを得ざるに至れりと。支那人の説によれば「開関以前は拉薩一般の商況今日に比し大いに繁昌なりしが、開関以後は年々不振の状況を呈し、支那品の価格の如きは以前より大いに減少せり」と。開関以来既に八、九年の印蔵貿易の成績を案ずるに、ほとんど輸入超過ならざるはなく、また四川方面の貿易もこれと同じく輸入超過のみの成績を呈しつつあるが如し。故に拉薩の商業不振と流通貨幣たる印度留比存在額減少せるは勢の然るべき所なり。然れども拉薩において馬蹄銀もしくは蔵貨と四、五千留比を交換せんと欲せば未だ難事にあらずと云う。打箭炉には支那馬蹄銀および一文銅銭のほか、印度留比通貨として使用せらる。四、五年前までは時節により大抵一万留比より一万三、四千留比の流通ありしも、現今はその流通額減少し、留比を得るに大いに困難なり。これ留比の価額高騰せしをもって蔵人等好んでこれを持ち帰るによるならんも、英政府印度留比鋳造を廃止せしにも起因するなるべし。打剪炉以東の雅州においては一留比につき銅銭十文宛安価なり。雅州以東は留比流通せず。故に印度留比は西蔵を貫通して四川雅州まで遼遠の地に流通し、北方は甘粛、西寧辺に至る。然れども魯国留布留貨は未だ通用せず。毎個およそ二十二銭なる西蔵通貨蔵貨は亜東より拉薩を通じ僅かに察木多辺に至るのみ、打剪炉においては通行し難し。蔵貨は元来西蔵国定通貨なれども、拉薩以外においてはその声価宜しからず。人々は皆留比を得んことを欲せり。蔵貨は元来銅一、銀二の比をもって鋳造せる趣なるも、これが色沢および音響をもって推察せば、恐らくは反対の比重なるが如し。蔵貨の鋳造粗造なるがため拉薩には往々紅銅色の斑点をそのまま銅貨中に顕するものありて、通行し難きも

のあり。品物により一蔵貨を二分の一、三分の一、四分の一に截断して使用し、カマンガ、カアカン等の名称あり。通貨の輸入は年々減少し明治二十八年には印度留比銀貨の輸入三十二万八千四百八十留比なりしもの三十三年度においては九万三千七十留比に減額せり。これと反比例に輸入品は年々増加しつつあるをもって通貨の欠乏偶然にあらざるなり。これが救済の策を講ぜざるべからず。

度量衡は存在すれども人民各自に製造し区々にして多少の相違を免れず。秤は支那風にして、枡は地方により同じからず。直径約三寸、高さ五寸位なる竹もしくは銅製の筒または我一升枡大にして深さ約二寸の物を用い、拉薩市中においてこれを用いて糌粑を量るに枡底に人為的に糌粑粉を固着して幾分の容量を減ぜしめ、糌粑を盛るときなるべくこれを高くして更にその分量を減少せんことに勉めり。拉薩糌粑量りの吝なること蔵中著明の一話柄なり。牛肉売捌店は大紹の後方に当り、略々一定の場所に集合せり。この辺無主の野犬多く、野中通行に不便なりとす。然れども誰一人としてこれを朴殺する者なく、宗教上の風習としてかえって残肴をこの辺に持ち来たりて投与するものあり。あるいは特に犬のため食物を製し人をして餓犬の腹を肥えさしむる者あり。

金銀工ありて金銀の仏具、腕環、耳環、指環等を製作し、また銅工ありて仏像、守り入れ箱、水入、墨壷その他の器具を鋳造す。すべて金物細工は後蔵もっとも著明なりとす。本邦往昔の火縄筒なる西蔵唯一の小銃は察木多（チャムトオ）、後蔵において製作せらるるも、前者はもっとも声名あり。刀剣は拉薩、後蔵において製作せられ、稀れに金、銀、宝石等を鏤めたるものあり。蔵人の多くは良刀剣を嗜好すれども、優物ほとんど皆無なり。本邦の刀剣を一見せばその歓喜想うべし。然れども印度方面より武器類の輸入は一切これを厳禁せり。西蔵の製作に係わる金仏および土仏は現今の支那製作の物より遥かに優等なるが如し。絵画、彫刻は仏像、仏画に伴いて大いに発達し、花鳥、山水の如き幼稚の域にあるを免れず。これ仏画のほか、他画の需要なきによるなるべし。西蔵線香は高尚なる清き香気せりとて支那において大いに珍重せられ、官、雨乞いをなすときは多く蔵香を使用するを例とす。三大寺の一、色拉（セラ）寺において製造

せるものを最良品とす。市中にもまた製造所二、三ケ所あり。朝貢用の線香は太さ普通鉛筆よりやや大にして長さ約三尺五寸、普通線香は長さ二尺五、六寸にして黄色および深紅の二色あり。皮包と称え牛皮にて製し長方形にして鞄代用のもの、馬上に使用する革製大巾着、黒皮製男長鞋、薄黄皮製喇嘛長鞋、婦女用氆氌製長鞋等は特に拉薩のもの珍重せらる。氆氌、羊毛等の色染は拉薩もっとも巧みにして地方より特に拉薩に送り来たりて色染をなすに至る。牛油製紅白臘燭、長さ約五寸なるもの一蔵貨に十二本とす。牛舌を塩漬として乾燥せしもの美味にして旅行用にもっとも適当す。拉薩製は特に珍重せらる。各種形状の素焼水入、茶瓶、鍋等の器具あり、附近において製造せらる。紙は支那紙よりもむしろ日本紙に似て樹皮より製せらる。これまた附近の地より来たる。毛織物は氆氌、ランプツ、毛布等の当地製に係わるものあれども、江孜は品優、価廉をもって著名なりとす。黄銅製茶碗台および蓋、仏式用振鈴、ドグマ、供水碗、燈明、封印等の銅製もしくは鉄製のものおよび馬具は後蔵製作を良とす。上流の者に至っては北京製上等馬具を愛用す。

拉薩には大小十余軒の毛皮商店ありて狐皮、猞猁皮、獱獺皮、豹皮、虎皮、狼皮、羊皮等あり。狐皮のうち、火狐、砂狐、小狐等の別あり。狐皮はその大小、良否により一枚一円三十銭より一円九十銭とす。猞猁皮は支那チョッキ一枚分十三、四円にして、支那よりは安価なりとす。虎皮は二十五、六円より六、七十円とす。羊皮は毛縮みたる腹子の良羊皮、一蔵貨に約四枚を購求し得べし。これまた大いに安価なりとす。後蔵西噶孜(シガツェ)また毛皮を産す。他皮には制限あれども羊皮は多額の輸出するを得べし。牛皮は黄牛および毛牛の皮少なからざるもただ貨物運搬の際僅かに梱包用に使用し、または限りある製造用に供するに過ぎず。輸出獲利の見込みあるが如し。

茶館あり。茶および餛飩等を売る。大街上における一大茶館主人は蔵内における財産家の一人なりとす。支那料理屋あり。料理不良にして高価をもって有名なり。これ以外他に料理店なし。西蔵料理店、湯屋、洗濯屋の如き一軒もなし。その開進の度知るべし。酢、醤油皆支那より輸入するも価甚だ高し。豆腐あり、本土産豆より製す。堅きこと

石の如し。理髪店あり、支那人開設す。一回二十二銭即ち一蔵貨を要す。楊喇嘛と称うる一喇嘛商あり。小形なる北京仕入玉製茶碗一個を所持せり。彼云う「六ケ月前約四十個仕入れしが、今僅かにこれを余せり。一個の価四十留比なり」と。朝顔形雙竜玉を争う模様附きにして支那にて一個四、五十銭の物、当地にては一円七、八十銭乃至二円にて小売せり。茶碗にしてもし破損せざるよう運搬するを得んが有利なる商業なりとするも、馬背により峥嶸たる高嶺、崎嶇たる岩路を上下するをもって多少の破損を免れず。蔵人が良茶碗を愛するや、茶碗を愛するの歌小児等までにうたわるるを見て知るべし。廓爾喀（カルガ）および克什美爾（カシミル）商人につき金絲緞（チンストアン）（即ち北京錦襴）の票本を購求せしに、方約五寸なるもの一円三十銭より三円の昂価なりき。錦襴は北京のみならず西方波斯（ペルシャ）〈ペルシャ〉よりも克什美爾を経て輸入するものの如し。錦襴の精美に至っては恐らくは我西陣に優るものあらん。彼等は西蔵黄金、廓爾喀産佐布蘭、種なし乾橄欖、砂糖漬棗および葡萄、西蔵氆氌、支那、西蔵、西洋雑貨等を販売す。彼等は商人としては成功しつつあるなり。西蔵商人は支那、印度と同じく物毎に掛値を云うの風習ありて不便を感ずること尠なからず。価を決するに他人に秘せんがため、売手もしくは買手の袖中に手を挿入れ指頭をもって価値の懸引をなす。主客の男女たるを問わざるなり。近年流行する悪弊は在蔵の支那人物品を購入しこれを携え帰ってその価を払わず。久しきは三、四年に亘るものあり。店によりその全額は二、三千円乃至一万余円に上れども、回集し得るの目算立たず、空しく破産せしものあるがため心ある商人は蔵地の商業を断念して他に移転するあり、あるいは支那人の商品を目的とせずもっぱら蔵人の需用品を販売するあり、顧客少なきを覚悟して現金のほかは支那人と取引せざる者あるに至れり。

　十二月十一日。何君錕を裕駐蔵正大臣衙門に訪れ、紹介状および物品を贈り談話数刻にして帰る。君は柳生と号し北京の人、蔵内に在ること十有余年、昨年帰京し拳匪の乱に遭遇して失う所少なからず。君は好人物をもって蔵内に名あり、前大臣文氏より大いに親任せられたり。現大臣とは知るの日未だ浅しと云う。何君居室の傍に秘書官の客庁あり。その入口の表面に題するに「忠臣篤敬」の四字をもってせり。達頼喇嘛宮殿の宏壮なるに似ず駐蔵大臣衙門のほ

とんど頽廃せる状況には驚かざるを得ず。宜なり、支那人の威厳地に墜ちんとして振わざるや。不肖訪問の翌朝何君来訪し爾後ほとんど日々来りて周旋し、達頼喇嘛の通訳官羅蔵呼への紹介、達頼喇嘛宮殿の客室の許観、達頼喇嘛の宰相総堪布への紹介、大紹案内、帰程へ登るの準備等は何君すこぶる鞅掌せり。

羅蔵呼は西蔵喇嘛にして本年四十余歳、幼少にして北京に遊び、後五台山の重要僧となり、またかつて蜀の成都喇嘛寺に主たりしことあり。四百余州足蹟遍く北京官話を能くし漢文を解す。駐蔵大臣達頼喇嘛と会見の際は羅君これが通訳に当ると云う。何君、羅君と相識る。一日相携えて羅通訳を訪れしに門前に漆黒の西蔵大番犬あり、小牛に似たり。鉄鎖をもってこれを固繋す。不慣れの人至れば跳躍、吼号、声深く下腹より来る、勇猛の状愛すべし。不肖等刺を投ず、家人犬を把持し後纔に客室に通ずるを得たり。少焉にして主人出で来り、僕茶を供す。茶碗皆白玉、室の広さは約六畳にして一隅に仏壇あり、金仏に自家製法衣を着せるもの三尊あり。流石は活仏ありと称うる仏教国のことゝて、仏壇と云い、仏と云い、皆上等製にして壁上掲ぐる処二、三の支那仏画また逸物たり。主人は部屋の一方において厚さ六、七寸の蒲団上に西蔵絨毾を敷けるものの上に蹲跪し、前面に経机の如き小机を安置し机上に茶を供す。茶碗は黄銅製の台および蓋あり。茶は例の塩および牛酪を混じたる西蔵茶なれども、普通のものより良味なり。主人と相対し別に同様の机を前にせる敷物上に蹲跪して対談す。彼問うに「郷関および遥遠の旅程海陸共に無事なりしや否や」をもってせり。彼来故を問えば何君直ちに答えて曰く「弊友は商人なれども当地の商景を視察し、かつ著名なる活仏達頼喇嘛に敬意を表し齎す所の微物を献ぜんとす。その物現に携え来たれり、敢えて教示を乞う」と。即ち本邦製水晶良数珠二箱、支那織黄絹(宝模様織り出したるもの)二巻を差し出したるに、彼熟視の後曰く「近日期を得て当局者に伺い置かん。物品は暫時携帰せられたし。初八日(清暦十一月八日即ち新暦十二月十八日)は普達羅(達頼喇嘛宮殿の山)に登山す。あるいは該所にて相謁するを得ん」と。

当日朝食後何柳生一僕と共に来り迎えて曰く「本日は幸に開門巡覧を許せるも、達頼喇嘛は目下静坐奉仏中にて仮

令駐蔵大臣といえどもこの期間中は面語するを得ず、故にこれに次いで蔵中最大勢力ある宰相総堪布に紹介すべし。この人と相見ることかえって達頼喇嘛より難事なるも、幸に彼未だ今日の要職に在らざる頃より相知るをもって会談するを得べし」と。宿所の二老婦人未だかつて宮殿内を巡覧せしことなきをもって同行を請う。即ち先ず酥油多量を購求して先発せしめ、不肖等は途上において二十余条の哈達を購入し、うち二条は達頼喇嘛および総堪布に贈るため特別優等品を用意せり。酥油とは牛酪の意にして燈明油に代用するなり。哈達は敬意を表する時必ず送るべきもの皆土風に習うなり。

不肖等三人拉薩市の西門を出で行くこと未だ幾何ならずして路左、小池の氷結せる上に在りて四書三字経を手にせる支那児童数人相戯るるを目撃せり。流澔橋を過ぎ両側に並木ある大道を経て普陀羅の東門より入る。門は石をもって築き、その厳格本邦封建時代の城門に彷彿たり。門を入り西に向かって直進せば毎段長さ約二間、幅三尺の石段あり。その外方には毎段高さ約五尺の石壁を設く、故にこの壁また階段あり。これ有事の日銃弾防禦の目的をもって設けられたるものの如し。その他建築物のある部分に銃眼を穿てると建築物堅固の度と地勢および各室に仏を配置せる形状と達頼喇嘛の法坐より批評せば此処は城塞たり、寺院たり、宮殿たるなり。石段を登り右折し、また左折して始めて中央に在る一大建築の入口に達す。宿所の二婦既に此所に在りて不肖等の来るを待ち告げて曰く「喇嘛寺婦人の参詣を許さず、やむをえずここに佇立せり」と。柳生これを守衛の喇嘛に計る。彼等曰く「これ旧来の規則にして枉くべからず」と。即ち二老婦にここに在りて一行の帰来を俟たしめ、かつ守衛喇嘛をして欽差裕大人幕下の人、何来訪すと予告せしめ、一喇嘛に誘われて幅およそ三尺なる梯子を登りて薄暗き一室に入る。梯子は急にして手摺は下方梯側と同高度なるをもって中央以上にあらずんば用をなさず、下降の際はもっとも危険なりとす。これ此大建築に不適当なるも、西蔵風を卜守するものなり。この薄暗き大広間には七、八十人の喇嘛念経のために坐を設けたり。正面には塗金如来仏、その他三、四の塗金仏あり。更にその背後の点燈せる一闇黒室に猛烈なる面相の牛母神あり、牛に

似て角あり。顔色紫黒、眼光炯々、儒者の胆を寒くせしむ。この主要仏に酥油を捧げ、哈達を仏像の肩上あるいは手腕に掛け、跪坐して叩頭するを例とす。既にして幾多の梯子を登り幾多の金仏、先代の達頼喇嘛等の塗金像を巡覧し、遂に第八層に至り更に登梯して平坦なる屋頂に出ず。この上を蓋える金瓦の屋根を見る。この屋頂の一隅に当り一小室あり。内に一喇嘛ありて直径三尺なる一大経筒を回転しつつあるを見る。再び第八層に下り案内者に誘われて正面の一大室に至れば、四壁棚を設け、これに高さ五、六寸なる数百の黄金仏を陳列す。支那仏あり、西蔵仏あり、その他各種の仏あり、鋳工精巧なるあり、古雅なるあり、いずれも金光燦爛、人目を眩す。蓋し古来支那皇帝およびその他より贈与または奉献せしものならんか。部屋の中央に檀あり、この上に南面して高さ約一尺五寸の位牌を安置し、この上に「今上皇帝聖寿万歳」と漢字をもって記せり。附記す、拳匪蜂起し支那列強と開戦すと聞くや、達頼喇嘛始め日夜興清滅洋を唱え清軍の百戦百勝を祈祷せしが彼等が意外にも活仏の祈祷もその効なく蛮輿遂に西安に遷幸するのやむをえざるに至れりと聞くや、祈祷を廃せりとは当地の支那軍人の伝うる所なり。この室を出で梯子を下り導かれて薄暗き一隅に至れば、一大仏像の眉以上を認む。その額上に光輝を放つは金剛石ならんか。これが頭上、耳辺、衣服等に使用せる金銀、真珠、珊瑚、緑宝石の類一見してその巨額なるを知る。これ安坐せる釈迦無二仏の像にして全長三十五、六尺とす。これ疑いもなく世界無二の釈迦仏なるべし。ここ更に他の一大仏あり。高さ、装飾等釈尊に及ばず。転じて一大室を見る。四壁美麗に彩色せる支那および西蔵の有名寺院の図絵を画く。而して達頼喇嘛宮殿および大紹をもってもっとも宏壮美麗なるものとして代表せり。その大柱の如きは各々八弦形の集合せるものよりなり、総朱塗に五色の雲の浮べる状を現わし、あるいは花卉を画けるあり。廊下およびこの室の床は雲母粉を混和して塗りたる総タタキにして、油布にてその上を拭い、掃除行き届けるをもって清潔にして光沢あり。(完)

註 キントゥプ(秘密番号K・P)は、シッキムの山地住民で、インド測量局が養成してヒマラヤ奥地の地理学的調査に従事したいわゆるパンディ

ットの一人。成田安輝氏がツアンポー河を渡るに際し、キントゥプの事に注目しているのは興味深い。

本文中の探検旅行は一八八〇年から一八八四年にかけてなされたもので、ナイン・シン、キシェン・シン等の業績とともに高く評価されている。

キントゥプは蒙古人のラマ僧とともにその従者としてチベットに赴いたが、彼らの任務は、チベット高原を西から東に貫いて流れるツアンポー河がはたしてブラマプトラ河の源流かどうかを確認することであり、インド測量局のH・J・ハーマン大尉から、ツアンポー河をできるだけ下流まで下り、印をつけた丸太を河に流すように命令された。

彼らは一八八〇年、インドを出発してラサを訪れた後、ツアンポー河をギャラまで下ったが、その後、キントゥプはラマ僧によって奴隷として売られ、ラマ僧は蒙古にかえってしまった。

キントゥプは読み書きもできず、必らずしもよく訓練されたパンディットではなかったが、使命に忠実で、奴隷として売られた後もひそかに巡礼に変装しては幾つもの探検旅行を試み、ペマコイ・チェンに達し、そこからツアンポー河をディハン河沿岸のマルプン僧院まで下って未知の部分の解明に貢献した。

彼の流した丸太はそのような事情のために発見されなかったが、一八八四年インドに戻ったキントゥプの詳細な報告と体験談はタナー大佐の手によって編集され、"Exploratations in Sikkim. Bhutan and Tibet" (by H,C,B, Tanner 1889) として発表されたが、その当時はインド測量局内でもかなり疑問視されていた（メイスンはインド測量局内では信用されたが、それ以外では信用されなかったと述べている）。

しかし、約三十年後の一九一三年H・M・ベイリー、H・T・モーズヘッドの二人がツアンポー・ゴルジェを探り、最終的にツアンポー河がブラマプトラ河の源流であることを確認したことにより、キントゥプの報告の正確さが証明され、彼の業績が新たに評価されるようになった。

インドに戻ったベイリーらの懇請により、当時の測量局長、サー・シドニー・バッラード大佐はキントゥプの行方をつきとめ、彼をシムラによびよせ、インド政府からボーナスが贈られたが、キントゥプはその後数ケ月して死亡したという（一九一三年）。

参考文献は次のとおり。

・Mason, Kenneth "Abode of Snow"（田辺主計、望月達夫訳『ヒマラヤ』白水社　一九六〇年）
・――「ヒマラヤ探検史の一齣」（望月達夫訳『山岳』第三十四年第一号）
・Bailey. F.M. "No Possport to Tibet"（諏訪多栄蔵、松月久左訳「ヒマラヤの謎の河」あかね書房　一九七〇年）
・Mac Gregor, John "Tibet, A chronicle of Exploration" (London, 1970)

（編者）

〔付記〕

「進蔵日誌（上）」（『山岳』第六十五年号掲載）所収のポタラ宮殿の絵について、先号では成田安輝氏筆と説明したが、その後成田氏自身がその由来について記した文書が発見され、成田氏がラサ滞在中にゴルカ人に描かせたものを持ち帰ったことが判明したので、訂正旁々、成田氏の説明

(全文)を付記しておきたい(編者)。

題達頼喇嘛宮殿絵図

表面の画図は支那画にあらず、また西洋画に似ず。西蔵拉薩において喀児喀人〈ゴルカ人〉に画かせしめたる達頼喇嘛〈ダライ・ラマ〉宮殿即ち布達拉〈ポタラ〉の図なり。英、印度征服後未だ幾何ならず、鎖国したる西蔵首都拉薩には、晩近欧米の識者しきりに達せんとしてその生命を擲ちつも未だ達すること能わざりしに、今回本邦人率先して進入するを得たる記念として、苦心携還せしに係わる。宮殿の位置は拉薩市の西方約一里にあり。高さおよそ六、七十間の石盤岩丘上に白壁の大家屋を建設し、その中央朱壁のところ、高聳九層に達し、蔽うに金瓦をもってし、陽光の反射を受け別に光輝を放ち、厳乎たるその形状、巍乎たるその高度、遥遠の地より来たれる巡礼をして、まずその心神を驚ろかし畏敬せしむるもの即ちこの宮殿にして、未だ世界に公示せられざるも、世界宏壮建築物の一たるや必せり。

従来、欧米人が西蔵に係わる著書中、いわゆる達頼喇嘛宮殿なるものの想像画は、皆その真を失い、かくの如く壮且つ美観なりとは夢にも思わざりしものの如し。客冬臘月十八日午前、この宮殿に至り、各室参観の栄を得たりしに、毎室安置するに各種の仏像をもってし、その彫刻の精巧なる、その金銀珠玉を使用する少なからざると、特に貴重なる黄金器の多きには燦然人目を眩せしめんとする。

外観の壮厳なるのみならず、内部重宝を秘蔵するかくの如く夥多なるのみならず、当日親しく面唔を辱しゅうせし総堪布則ち宰相の温雅朴実なると、その上に位して活仏と称えらるる達頼喇嘛と相まって、遠くは数千里外の東北蒙古、近くは西南喀爾喀に至るまで信仰をつなぎ、その号令に奔走せしむること霊奇を磅礴中に駆御するが如き観ある偶然にあらず。真に西方仏教盛区の中心なり矣。

天然同種同教の両地意志未だ通ぜずといえども、我至尊仁徳無彊、夙に親近撫遠の慈志篤く、卓識者また本邦昔日の鎖国に鑑み、同病相憫れむの感にたえざるものあり。この画の本邦に入る豈知らん。異日両地人相交通するの起因となるを。即ち一言を題して、もって他日の記念に供す。

明治三十五年五月念二日

在東京

成田安輝題す

エベレスト（一九七〇年）

大塚博美

実現に至るまで

今回のエベレスト登山は、日本山岳会の計画としては、着手されてから八年間の歳月を経て、ようやく実現をみたものであった。

一九六五年三月十九日、ネパール政府は突如、ネパール・ヒマラヤの全面登山禁止を行ない、一切の登山活動を禁止した。このため、日本山岳会が一九六三年に登山申請し、一九六六年プレモンスーン期に実施することになっていたエベレスト登山計画は、無期延期されることになってしまった（『会報』二四一号参照）。

禁止寸前の一九六五年プレモンスーン期に、インドエベレスト登山隊（隊長コリー）は念願を果たして登頂に成功し、イギリス、スイス、中国、アメリカに続き第五番目の登頂の栄をになう登山隊となった。

それから足かけ四年が経過した。そして、一九六八年八月十九日、ネパール政府は全面登山禁止を部分解除し、エベレストを含む三十八座を解禁した。そして新登山規則の施行を待って三十八座の登山を許可することになった。こ

れによれば一九六九年のプレモンスーン期から登山可能になったわけであるが、エベレストについては、この四年の間にアメリカ、西ドイツ、イタリーなど十数隊にのぼる登山計画の申請がなされており、解除後第一番に許可を取得できるかどうかは、最大関心事であった。

日本山岳会では、禁止解除の報を受け早速組織の建て直しにかかったが、なかなか盛りあがりがみられなかった。一方、登山許可の折衝のため、一九六九年二月、ネパールに赴いた松方隊長は、一九六六年プレに与えられた登山許可は現在でも有効で、解禁後の許可にあたって日本山岳会の申請を優先的に考慮する意向のあること、および支払い済みの半額分の登山料も生きていることを確認し、解禁後初のエベレスト登山について明るい見通しを得て帰国した。かくして同年四月四日付で登山許可を入手した。

(この時の文書は最終的な許可ではなく、時期について、①一九七〇年のプレ、②同ポスト、③一九七一年プレ、のいずれかをこちらで選べという条項がついており、種々検討の結果、一九七〇年プレの申請を行なった。この結果、スキー隊との同時期、同場所入山という事態になり、両隊の調整は難行したが、最終的には八月五日付でネパール政府の登山許可を取得した。)

南壁をとり上げる

エベレスト委員会(委員長三田幸夫)は、一九六九年四月、本計画の新目標に、未踏の南壁ルートをとり上げ、東南稜からの登頂と南壁隊のサポートを行なうという計画を根幹にし、偵察のために一九六九年のプレ、ポストにそれぞれ第一次、第二次偵察隊を派遣する計画を作成し、理事会の承認を得た。

エベレストの頂上はすでに東南稜から五ヶ国、西稜はアメリカ隊によって登頂されているので、未踏の南壁ルートを新たに計画に盛り込んだところに、日本山岳会の意欲があらわれていた。

ネパール・ヒマラヤが閉ざされた四年の間、ヒンズー・クシュ、北米、南米、ヨーロッパ・アルプスなどで日本の

気鋭の登山家達は活発に登山活動を展開し、より困難な登山を求めての挑戦が行なわれていた。そして世界の登山界の趨勢もディレッティシマやヒマラヤのバリエーション・ルートからの登頂に、次第にその焦点が集まりつつあり、人間の可能性を押しひろげる意欲的な試みが限りなく続けられていた。

このような背景のもとで、エベレストの南側の岩壁も各国の登山家達の目を引きつけ、今まで考えられなかったような大胆な計画がとりあげられようとしていたが、この困難で危険の要素の多い八〇〇〇メートル以上での岩壁に、誰がいつ、手をつけるかは時間の問題でもあった。

解禁後のエベレスト登山第一番手として日本山岳会は八年に亘る計画を実施に移せる運びとなり、南壁をわれわれの計画の中にとりあげることができたのは、幸運なめぐり合わせというべきであろう。

なお、第一次偵察隊（藤田佳宏隊長以下四名）は一九六九年四月二十三日〜六月二十一日にかけてウェスタン・クームに入り取付点を確認、南壁を観察し「登れそうだ」という報告をもたらした。

また第二次偵察隊（宮下秀樹隊長以下十二名）は同年八月二十日〜十一月二十五日にかけて南壁八〇〇〇メートルまでルートを開拓し、本隊の計画に対し、明るい見通しと数々の貴重なデータを持ちかえった。（編者注・第一次・第二次偵察隊の記録については『山岳』第六十五年参照）

エベレスト登山準備委員会

第一次偵察隊帰国後、具体的な準備を進めるため準備委員会を組織したが、そのメンバーを会員中より公募したところ、一一六名の希望者があり、エベレスト委員会からの依嘱者も含め準備委員は合計一二七名に達した。

七月一日、向井ビル四階に事務所を設け、七月十一、十二日第一回の準備委員会を開き具体的な準備のスタートをきった。

組織とスタッフは次の通りであった。

〔総務〕加藤（泰）、辰沼、大塚、松田、〔企画〕加藤（泰）、辰沼、村木、大塚、松田、藤田、中島（寛）〔事務局〕中島（寛）他十四名、〔医療〕辰沼他十名、〔装備〕川上他三十八名、〔食糧〕宮下他二十四名、〔包装〕大森他七名、〔酸素〕住吉他七名、〔気象・通信・地球物理〕芳野他十一名。（メンバー全員の氏名は省略、『山』二九一号参照）

この日、第二次偵察隊の準備の具体的な問題が検討されて以降、第二次偵察隊準備、本隊準備、年末の約二十五トンの船荷の出荷、そして翌年二月七日の打上げにいたるまで、この準備委員会が半年余に亘る準備の中心となった。遠征準備にはつきものといいながら、深更に亘ることもしばしばであり、年末の梱包作業は徹夜の追い込みが続いたが、熱心な準備委員と協力者の努力によって無事乗りきることができた。誰でも隊に参加したいと熱望していたことであろうが、準備に奉仕してくれた人達の陰の力は忘れることができない。

なお、十月二日、理事会は本隊の準備を煮つめ、本隊編成を具体化するために、エベレスト委員会の答申に基づき、同委員会を発展的に解消し、加藤泰安氏を本部長とする登山本部を設置するとした。以降本隊組織に関するあらゆるものは登山本部を中心として進められることになった（『山』二九三号参照）。

南壁の特徴と諸問題

第二次偵察隊の活躍によって四名が南壁の八〇〇〇メートルラインに達し、核心部へのアプローチの概念をつかむことができ、貴重なデータを本隊にもたらした。

本隊の計画は二次偵の経験と意見をベースに、それを生かして調整され、特に南壁の八〇〇〇メートルからの残り八四八メートルの突破には、次の点を作戦上の目途とした。

① 四月下旬には八〇〇〇メートルまで達し、必要物資の荷上げを完了する。

② 二人一組のパーティ三組とほぼ同数のシェルパで最終キャンプ（C6 八五〇〇メートル）までのルートを約二週間で開拓する。

③ このため、C5（八〇〇〇メートル）はルート開拓の前進キャンプとして、安全かつ強力なものを設営する。特に酸素の補給は十分に行なえるよう配慮する。

④ 八〇〇〇メートル以上の中央岩壁ルートは、V字状の左雪田に入り、高差の少ない左岩壁を登ってイエロー・バンドに出る。そこから南峰に向って登り、八五〇〇メートルの付近に最終キャンプを設ける。

⑤ 南壁からの登頂日は五月二十日頃を目標とし、サポート隊はこれに呼応し東南稜を登り、できれば両隊が頂上で落ち合う。

⑥ 南壁用の酸素補吸器、発攀具、テント台、特殊テントなどの用具を開発する。

以上のプランに基づいて、とくに南壁攻撃用に開発された主な器具は次のとおりである。

① ヘルメット型エコノマイザー内蔵酸素補給器

南壁の八〇〇〇メートル以上のルート工作では、トップは酸素ボンベを背負っていたのでは仕事にならないと考え、セカンドから特殊の合成ゴムパイプによって酸素を補給する方式を研究し、ヘルメットの内部にエコノマイザーを内蔵する方式を開発した。われわれの新兵器の中でもっとも画期的でかつ重要なものであった。

これは、南壁八〇〇〇メートル以上で実際に使用するに至らなかったので、その性能とメリットは未知であるが、開発スタッフの一人である平林は、五月十二日第二次登頂の際、頂上においてこれを使用し、有用性をある程度実証した。更に研究の余地は残っているが、今後ヒマラヤの大高所における岩壁登攀に新機軸をもたらすものであろう。

② テント台

南壁ルート上のC4（七五〇〇メートル）やC3（七〇〇〇メートル）の軍艦岩付近は、テントを張るスペースを

求めることが困難なので、人工テラスとしてのジュラフレームによる組立式テント台を用意した。これは大いに活用され効果を上げた。撤収時残置されたテント台やテントは、翌年(一九七一年プレ)の国際登山隊(隊長ディーレンファース)において再度活用された、とこれに参加した植村、伊藤両隊員は述べている。

③ その他。

アイス・フォールのクレバス用ジュラ梯子、岩登り用スチール製ワイヤー梯子、カマボコ型を縦半分にした岩壁に密着して設営する特殊テント、高所用特殊靴、羽毛服など装備に関連するもの、また医療用として実用に至らなかったが、シルバー・ヒュッテと称したジュラルミンの酸素室(これはBCで医療研究用に使用)や酸素テント(ABCでテストに使用)などがあった。

今回の計画の著しい特徴は、未知のルートである南壁と東南稜をあわせてとりあげたことである。つまり、登山内容の性格、チーム運営の全然異った二つのものをあわせて一つの隊に統合しようとしたことであった。これをどのようにコントロールし、目的を達成するかというのが第一の課題であったが、一方、実質的には一九七〇年一度だけのチャンスしか与えられていない事実を考えると、何れのルートによっても登頂だけは果たさねばならないと考えていた。そして、報道を含めるとはいえ隊員三九名という大部隊の編成。リーダーシップとチームワーク、正直のところ、それは南壁と同様に、未経験の分野で、どうなることか、ぶつかって見なければ分らないことであった。

隊員編成は最終的に次のとおり決定された。

隊　長　松方三郎(70歳)
登攀隊長　大塚博美(45歳)
隊　員　住吉仙也(43歳 企画・総務)、松田雄一(39歳 企画・総務)、藤田佳宏(37歳 企画・総務)、松浦輝夫(35歳 設

営)、平林克敏(35歳 酸素・輸送)、田村宏明(32歳 装備)、中島 寛(31歳 渉外)、平野真市(31歳 装備)、土肥正毅(31歳 食糧)、小西政継(31歳 装備)、渡部節子(31歳 会計)、河野 長(30歳 通信・科学)、加納巌(29歳 酸素・通信)、神崎忠男(29歳 設営)、錦織英夫(29歳 輸送・設営)、長田正行(29歳 気象・通信)、植村直己(28歳 設営)、成田潔思(28歳 輸送・設営)、鹿野勝彦(26歳 食糧)、神山義明(27歳 輸送・装備)、吉川 昭(27歳 装備)、安藤千年(26歳 食糧)、嵯峨野宏(25歳 装備)、井上治郎(24歳 気象・通信)、伊藤礼造(23歳 装備)、中島道郎(29歳 医療)、広谷光一郎(37歳 医療)、大森薫雄(36歳 医療)

報道隊員　木村勝久(39歳 毎日新聞社カメラマン)、相沢裕文(37歳 同記者)、佐藤 茂(32歳 同記者)、原田益夫(27歳 同カメラマン)、平 顕二(34歳 同カメラマン)、内藤敏男(37歳 NHKプロデューサー)、野口篤太郎(37歳 同カメラマン)、堅野正三(32歳 同カメラマン)、中川 寛(28歳 同記者)

サーダー　チョタレ

アシスタントサーダー　イラ・ツェリン、ペンバ・テンジン

(なお、ペンバ・テンジンは四月二十八日解雇した)

高所シェルパ　ナワン・ピンジュー以下二十四名。

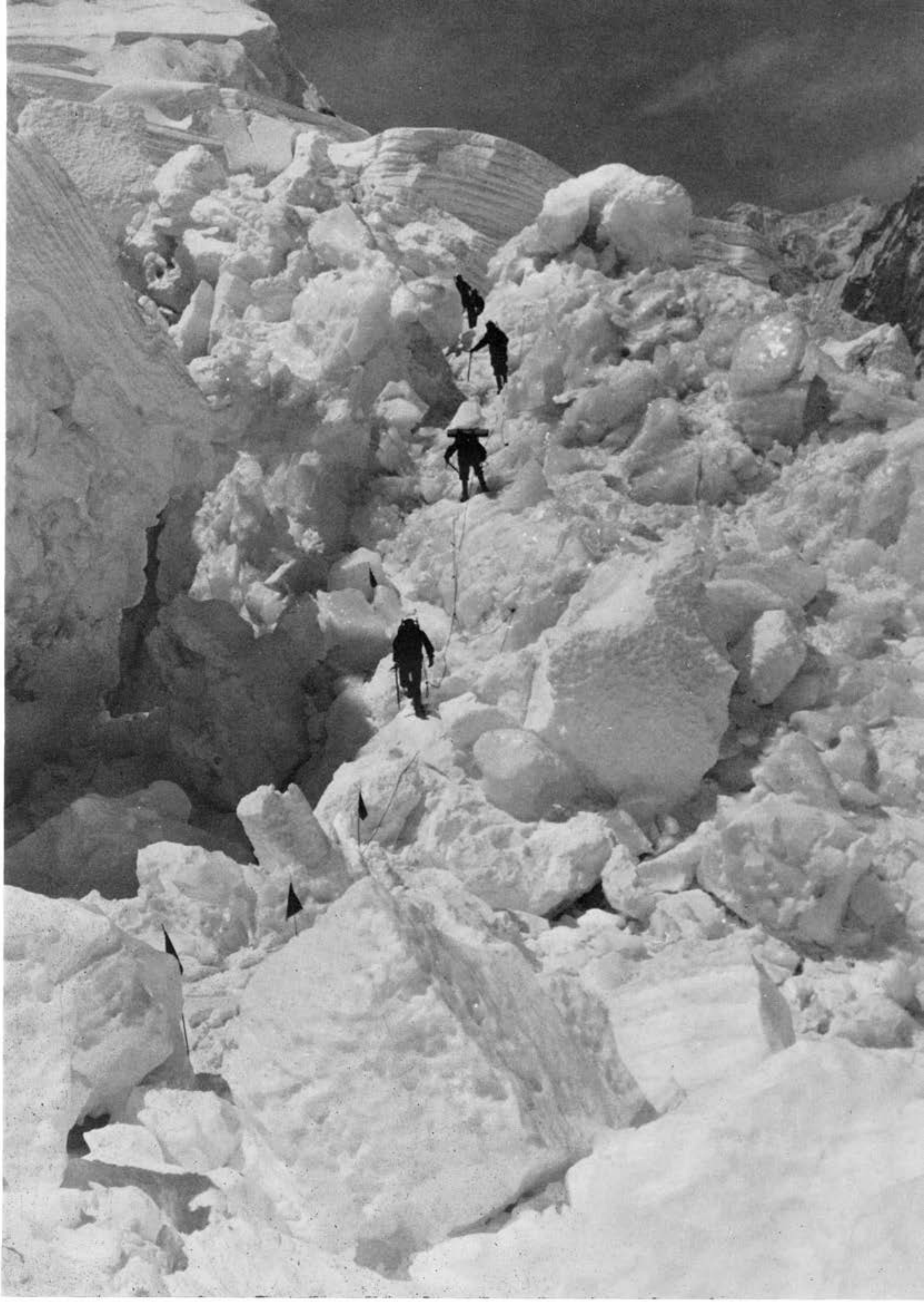
(他にローカル・ポーターとして二十一名を雇傭した)

*　　　*

リエゾン・オフィサー　ゴビンドラ・クリシュナ・シュレスタ

C. 2からのエベレスト南壁　The South-west Face of Mt. Everest seen from C. 2（A. B. C. 6500m）
（by K. Kimura）

アイス・フォールのなかのルート工作(1)　Route-making in the Ice-fall (1)
(by K. Kimura)



アイス・フォールのなかのルート工作(2)　Route-making in the Ice-Fall (2)
(by K. Kimura)

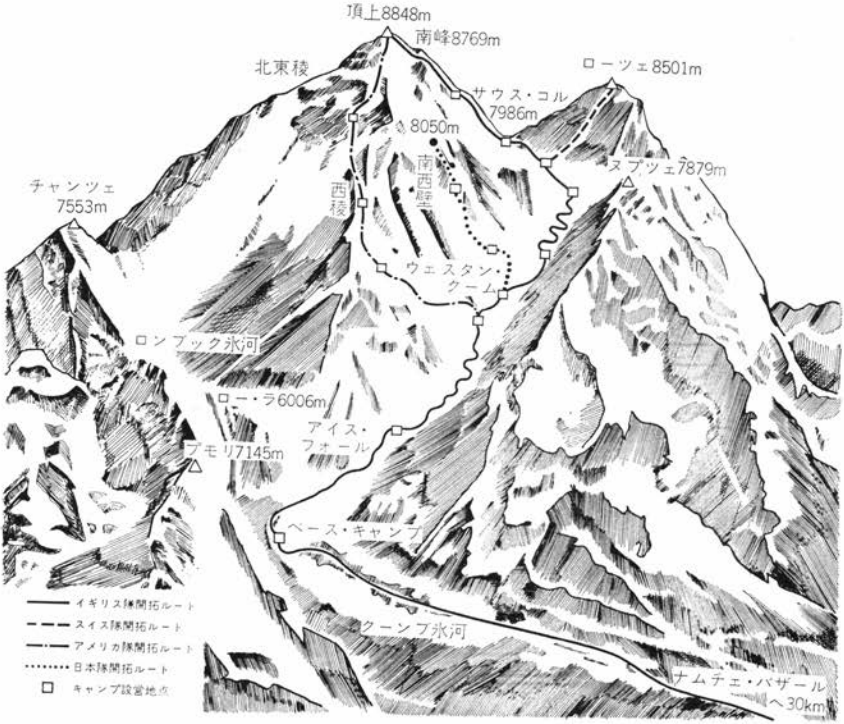
ローツェ・フェースのルート工作　Route-making in the Lhotse-Face about 7200m
(by K. Kimura)

南壁8050m附近を登る嵯峨野隊員　A member climbing up the South-west Face at 8050m
(by T. Kano)

南壁C·3のテント・サイト　The Duralumin flamed platform setting at F. C. 3 (7000m) (by K. Kimura)

東南稜最終キャンプから頂上を目指す松浦、植村隊員　The first attacking members climbing up the Southeast Ridge at about 8600m (by N. Uemura)

エベレスト登頂　T. Matsuura on the top of Mt. Everest with a wireless set
(by N. Uemura)



エベレスト南面登攀ルート
Climbing routes of southern side of Mt. Everest

キャラバン

コンディション調整とチームワーク作りのため、隊員は揃ってキャラバンを実施した（但し、空輸荷物のキャッチャーとしてルクラに滞在した小西、田村、後発隊として三月九日に羽田を出発した松方、中島を除く）。

二月十八日、カトマンズを出発、三月四日ナムチェ・バザールに到着するまでの十三日間、ナムチェ街道を順調に進んだ。

キャラバンは暑いものだ、という先入観を持っていたが、二月では朝晩かなり寒く、三五〇〇メートルのジュンベシ峠やタキシンド峠では積雪が残っており、ポーターが難渋した程であった。

一月二十五日カルカッタに入港した約二十五トンの荷物は、先発隊の田村、錦織、成田、鹿野、神山によって陸路トラックでカトマンズに運ばれた。またフランスから直送された酸素ボンベ百五十本も無事カトマンズに着いた。これらの荷物はふたつに分けられ、最初の十二トンは、三月二十一日、ペンバ・テンジンとピンジューが指揮する四百名のポーターからなるキャラバンで出発。残りは、二月七日から十六日までの間、カトマンズ〜ルクラ間を空輸（三十便・十五トン）した。なお、隊員キャラバンには、ポーター一七〇名を同行させた。

登山隊の荷物は合計で約三十二トン余、ひとまずタンボチェに集結し、ここで仕訳けをし、高所装備の配給を行なった上で、三月二十三日、ベース・キャンプに集結し、輸送計画は無事終了した。千個を越える荷物のなかで行方不明になったものは一個であった。

高度順化のトレーニング・ツアー

二月八日から二十日まで、タンボチェを基地にして、予定通り第一次の高度順化トレーニングと荷物整理を行なっ

た。三月十日、全員でパンボチェの裏山を四五〇〇〜四八〇〇メートルまで登り、全員の調子を見た上で、次のとおり三班を編成した。

A班 三月十二日〜十七日、クンブー氷河を遡りベース・キャンプ地点偵察。藤田、松浦、大森、植村、安藤、伊藤、神崎。

B班 三月十三日〜十六日、イムジャ・コーラ。大塚、中島(道)、平林、渡部、長田、平野、錦織、成田、鹿野、吉川、井上。

C班 三月十三日〜十六日、ミンボー・コーラ。住吉、松田、田村、土肥、小西、河野、加納、神山、嵯峨野。広谷は病気休養。

各班は五〇〇〇メートルに一泊、四五〇〇メートルに二泊し、それぞれ最低五五〇〇メートルまで登った。

登山計画

東京で作られた荷上げ基本計画第四案を持ってわれわれはBCに入ったのであるが、私はこの運行計画通りうまく行くとは考えてはいなかった。それでも、プレ・モンスーン期のエベレスト登山には幾つかの重要な〝節〟があることは、以前の登山隊の記録からもうかがい知ることができたので、スケジュールの上で、そのポイントだけはおさえて、あとは状況に応じて手直しして行くつもりであった。

ポイントとして考慮したものは次のとおりである。

① アイス・フォールの安全通過。四月上旬のできるだけ早い時期にC1以上に必要な約十二トンの荷物を上げ、前進基地を六五〇〇メートルに作り、併せて隊員の第二次高度順化も行なう。

② 四月下旬までに南壁八〇〇〇メートル、サウス・コルへのルート工作、荷上げを完了し、いったんBCへ下る。

③　五月上旬、状況がよければ、東南稜から第一回の試登を行なう。

④　登山期間は約六十日とし、登頂は五月二十日頃、南壁隊とこれをサポートする東南稜隊の二隊が同時に登頂を行なう。

①と②は特にこの計画達成のため、重要なステップであったので、運用上重点を置いた。

未知の危険をはらんだ困難なルートである南壁の攻撃においては、八〇〇〇メートルから上の頂上岩壁が最大の問題であった。したがって、八〇〇〇メートル地点に強力なキャンプを作り、ここに調子のいい隊員と、酸素を初めとする十分な物資を確保することが、絶対条件であることはわかっていた。

限られた登山期間で、南壁、東南稜の二つのルートからの登頂を成功させるには、多くの障害と困難が予想されたが、自然の好条件と、スケジュールの正確な運行が必要であり、そして多分に幸運が左右するであろうと思われた。

第一期（三月二十五日～四月十二日）

――アイス・フォールの突破と事故――

三月二十三日、松方隊長、中島（道）、中島（寛）を除く隊員三十六名、シェルパ二十七名、ローカル・ポーター二十一名、アイス・フォール・ポーター三十名、合計一一四名はクンブー氷河五三五〇メートルのモレーン上にベース・キャンプ（BC）を建設し、勢揃いした。四十人用のメステントを中心に、隊員テント、炊事テント、シェルパテントなど合計二十四のテントが設営され、一大キャンプ村が誕生した。

第一の関門であるアイス・フォールは、藤田を中心に、第一次、第二次偵察隊員であった小西、大森、植村、井上の五名の他、松浦、平林、神山、錦織、鹿野、安藤らによって五日間かけて西稜寄りにルートが開かれ、三月二十八日、植村、井上の両名は、アイス・フォールをこえた六一五〇メートルのC1予定地に達した。

しかし、これだけでは荷上げはできない。二十キロの荷を背負ったポーターが安全に登降できるようにするため、連日固定ロープをはり、クレバスには材木やジュラルミンの梯子をかけ、セラックスの氷壁にはジュラルミンの梯子や縄梯子を設置してルートを整備した。特に五八〇〇メートル地点に中継用に設けたデポキャンプの手前、さらにそこからC1までの間で梯子をかけた三ヶ所の状態が悪く、毎日のように状況の変わるクレバスや今にも崩れんばかりのアイス・ビルディングが迷路のように立ちはだかり、二次偵のとき使った赤いロープやジュラ梯子が、とんでもないところに押し流されているのを目撃した。

三月三十日、この迷路にも一応のルートができ、いよいよ本格的な荷上げ行動がはじまり、四日までに約六・四トンの荷がデポとC1に上った。そして、四月五日から五日間を一大荷上作戦とし、C1以上の登山に必要な十二トン余の荷物をC1に集積するために、集中的な荷上げを行なうことにした。

ところがその第一日目の四月五日、アイス・フォール六七〇〇メートル付近で氷河のかん没が起った(一〇時四五分)。四、五階建てのビルディングほどのセラックスが、将棋倒しのように崩れてくる様はまるで津波のようだった。そして、われわれのパーティと前後して登って行ったスキー隊のシェルパ六名が、これに巻き込まれて死亡してしまった。一休みしていた松田らのパーティを追い越した直後の出来事であり、正に紙一重の差で幽明境を異にしたわけである。

遭難の第一報は現場近くにいた松田のトランシーバーによってBCに報告された。遭難現場の少し上部に藤田パーティがいたが、足もとを走る亀裂に跳上って逃げやっと危機を脱したとの報告が入った。他のパーティはデポ・キャンプにおり無事だった。現場では両隊合同で救出作業が行なわれ、十六時三〇分にはスキー隊の手で遺体はBCに下された。

遭難者の中に、われわれのサーダー、チョタレの兄ミンマ・ノルブもおり、彼の落胆ぶりにはなぐさめようもなか

った。

荷上げ作戦は一日中断されたが、ひきつづき行なわれ、一日約一・二トンのペースで連日C1に上げられた。しかし、その最後の日である五月九日、今度はわれわれのポーターの一人が落ちてきたブロックに打たれて死亡する事故が発生した。

事故は、七時二〇分頃、アイス・フォールの下部五五五〇メートル付近で起こった。高さ一〇メートルほどの氷塔の上部の氷塊が崩れ落ち、荷上げ中のアイス・フォール・ポーター、キャク・ツェリンにあたった。倒れたところへ再度ブロックが落ちて埋没したという。急報で、住吉、藤田ら八名が、BCから現場にかけつけたが、時すでにおそく、圧死していた。

キャク・ツェリン（36歳　ナムチェバザール出身）は臨時に雇った三十名のアイス・フォール・ポーターのなかでも優秀で、いつも先頭グループを歩き、着実に荷上げを行なっていたが、今日に限って最後部を歩いており、ほんの数歩の違いでブロックに打たれてしまった。まことに運命のいたずらを感ずる悲しい事故であった。ナムチェに残された妻と幼い三人の子供の事を知らされて、心は痛むばかりであった。

五月十日、キャク・ツェリンの遺体はBCから二日下ったトゥクラで荼毘に付され、遺族に引き渡された。荼毘には大塚ら五名の隊員が参列した。

一方、上部では小西、神崎、吉川、神山の四名によってこの日（五月九日）ABC予定地六四五〇メートルにC1が建設され、小西、神崎が入った。しかし、そこまででひとまずBCに下山させることにした。かくして全員BCに集合し、十二日まで休養とした。

五月十二日は、キャク・ツェリンの荼毘を終えた大塚ら五名もBCに戻り、松方隊長、中島（道）、ロブジェで一週間の休養の後回復した成田もBC入りし、三十九名の全隊員が初めて一同に会し、夕食を共にした。松方隊長を迎

え久し振りにメステントは賑わった。

立上りの第一ラウンドでカウンターパンチを喰い、尊い人命を失い、かつスケジュールは三日遅れ、C１へあげるつもりだった十二トンの荷物も、デポに二トンほど残ってしまった。ゴラクシェップで松方隊長に事故の報告をした際「まだ日にちは十分ある。あせらずに安全を期してやるように」と励まされて気をとりなおしたものの、ダメージは大きかった。

第二期（四月十三日〜四月二十八日）
――サウス・コル、南壁七六〇〇メートル到達、成田隊員死亡――

第二期の目標は南壁八〇〇〇メートルとサウス・コルへの到達とその荷上げであり、ＪＭＥＥの計画の成否をかけた重要なステップである。

幸い天候も安定している。五月十三、十四、十五日と三班にわかれてアイス・フォールをこえ、Ｃ１に集結した。十五日、松方隊長は、予定通り中島（道）と共にクムジュンに下った。ＢＣには報道隊員の内藤、中川、佐藤、原田、平の五名が残り、アイス・フォール・ポーターは解雇して、新たにそのうちの十三名を新規ローカル・ポーターという形で再雇傭して荷上げの戦力とした。

Ｃ１に上ったのは隊員三十二、シェルパ十九、ローカル・ポーター十五、新規ローカル・ポーター十三、計七十九名である。この間の荷上げで、デポの荷も半分上り、一トンを残すのみとなった。

第一キャンプは荷物の集積所であったが、著しく混乱していた。Ｃ１へ上げてから整理を行なうことにしていたが、一度起った混乱はなかなか収拾がつかず、後まで尾をひいた。大量の荷物を有する大部隊では、各係の荷上げ責任者の他に、全体の管理者を設け厳格なチェックを行なわなければならないことを痛感した。

四月十六日、六四五〇メートルに前進基地（ABC）としてのC2を建設、南壁登攀の基地は第二次偵察隊のときと同様に六六〇〇メートルに設営、ここをF・ABCとした。

十七日、ABCにおいて、南壁、東南稜両隊の編成を発表した。

南壁隊　小西（リーダー）、藤田、田村、中島（寛）、錦織、加納、吉川、嵯峨野、伊藤、大森の十名。

東南稜隊　松浦（リーダー）、平林、広谷、平野、土肥、長田、河野、渡部、神崎、植村、神山、鹿野、安藤、井上の十四名。

そして、大塚、松田、住吉、中島（道）の四名が本部を構成し、ABCで両隊を統括することとした。

JMEEの計画の特徴は、前述の通り南壁、東南稜という二つの異った登山内容をもつルートを目標としたことであり、これを全体としてどのように運用するかがむずかしい点であり、ウイークポイントでもあった。この目標を達成するためには、両隊員の編成は隊員決定時に、それを考慮して行なわねばならぬという本来的な考え方もあったが、私は当初から、両ルートの隊員編成は、隊員のコンディションや山の状況を見た上で、ABCに入ってから行なうつもりでいた。

南壁には第二次偵察隊員であった小西をリーダーに指名し、大森、中島とともに吉川、嵯峨野、伊藤ら若手の気鋭を配し、第一次偵察隊隊長であった藤田を小西の相談役としてつけた。

東南稜隊は、五月上旬にチャンスがあれば試登を行なう予定であったので、当面はローツェ・フェースの開拓と荷上げに全力を投入したいと思ったので十四名とし、松浦をリーダーに第二次偵察隊員の植村、井上を加え、三十歳前後の揃ったメンバーを中心として三班を組めるように強化した。

シェルパは不調の者多く、両隊に七名ずつしか配置出来ない状況であった。

四月十八日、ローツェ・フェース下六九八〇メートルにC3、南壁軍艦岩直下にFC3を設けた。

南壁隊員錦織は不調のため十七日C1に下ったが、疲労大の様子、二十四日未明頃から意識不正となり、酸素吸入を行なうなど住吉らの看護を受け、BCに下山後回復に向かったが、以降、南壁隊には復帰出来なかった。(「成田のカルテ」の住吉レポートに詳細記述あり。)

四月二十日、平林、神崎、長田、平野の四名は、C3を出てC4へルート工作に向かったが、途中で平野の調子悪く、長田が付添って下り、午後二時、C2についたが、歩行不能の状態で、直ちに酸素吸入を行なうなど慌ただしかったが、そんな時トランシーバーに神崎のスリップ事故を告げるけたたましい声が飛び込み、一層緊張した。

七三〇〇メートル付近を下山中、平林がスリップして神崎も共に滑落、幸い岩角にザイルがかかって両者とも無事であったが、この救援のため、C2から松浦ら六名、さらに大事をとって外科医の大森を南壁から派遣し、中島、嵯峨野ら南壁隊員もつぎこんだため、ローテーションが大きく崩れた。現場付近に臨時テントを設営して平林を収容したが、翌日無事にC2に下ることができた。

ところがその翌日の四月二十一日、午後八時五〇分、C1の住吉から無線連絡があり、成田潔思隊員(28歳)が急性心臓麻痺のため死亡したとの報告を受け、がく然とする。当日の午後、C1から空身でC2を往復した成田は、C2で久し振りに隊員と会い、私とも元気に別れの挨拶を交して下ったばかりだったのに、これは一体どういうことであろうか。隊員中で、もっとも頑健で若かった彼に、このような悲しい運命があるとは誰しも夢想だにし得なかった。成田はC1で終始住吉の看護と監視のもとで、慎重に高度順化をはかっていたはずだったのに、成田の急死は全員を打ちのめし、深い悲しみの渕へ追い込んだ(C1で看護した住吉のレポート参照)。

四月二十一日、C1に集まった全員で成田に別れを告げた。仲間を失う辛さは言葉で言い表わせない。山登りを通じて得ることが出来る第一の収穫は、よい友よい仲間であることを思うと、彼を失った損失や大きさが今更のように現実の重みとなって心を揺さぶり、涙した。

スケジュールを変更し、約半数の隊員を残し、遺体をＢＣに下す作業にかかった。危険なアイス・フォールを安全に下すのに、南壁隊のリーダー小西ら三名のメンバーもさかなければならない実情であった。

二十四日ＢＣに安置し、留守本部を通じて遺族の意向を確認してもらった上で、三十日トゥクラで大塚ら十一名の隊員が立ちあって荼毘に付し、遺骨は井上、堅野が松方隊長のいるクムジュンまで運び、そこからヘリコプターで隊長、井上の手によってカトマンズへ。そして彼の大学の先輩であり、第二次偵察隊長であった宮下と共に東京から飛んで来たご尊父の許にお渡しすることが出来た。ヘリコプターの手配、遺骨の安置などについてカトマンズの吉良大使はじめ、日本大使館館員の皆様には大変にお世話になった。

一方、この間も登山活動は続けられた。東南稜隊の松浦ら八名は、四月二十六日、ローツェ・フエース七五〇〇メートルにＣ４を設け、松浦、植村、イラ・ツェリン、ピンジューが入り、二十八日にサウス・コル（七九八六メートル）に到達した。荷上げは出来なかったので目標は達成されなかったが、どうやら第二期中に八〇〇〇メートルラインに達した。

この間、ローツェ・フエースのＣ４へのルート工作を河野とともに行なった井上は、二十七日、Ｃ３からＣ２に下る間一時視力を失った。第二次隊員で貴重な戦力であった彼ではあったが、大事をとって低所に下し、さらに成田の遺骨を運ぶためカトマンズに派遣した。

また、メンバーが半減した南壁隊の田村ら五名は、四月二十六、七日、中島、吉川がＣ３から七三〇〇メートルまでルート工作し、二十八日には加納、嵯峨野がＣ３から七六〇〇メートルまで更にルートを伸した。冬の間まったく降雪のなかった南壁は、第二次偵察隊のときとは様子がすっかり変り、Ｃ３からは岩登りが主となり、吉川はアイゼンを外して登ったほどであり、ルート工作に非常に時間を要する状況であった。

こうして、両隊とも四月下旬、八〇〇〇メートルに到達し、荷上げも完了するという目標は、半ばしか達成出来な

かった。私が成田の荼毘で不在の間（松田は病気でBC）、上のことは、ABC本部の住吉にまかせていたが、二十八日、ABCでは住吉らが中心となって協議の結果、このままでは双方の計画が共倒れになってしまうおそれがあるし、現状では南壁の望みは暗いので、期限切れにならぬうちに東南稜から登ってしまうべきであるとし、小西もこれを了承し、南壁の登攀を一時中断して東南稜隊に合流された。

相次いだ事故、そして今回の成田の急死によって、隊は文字通り手痛いダメージを受けた。その結果、第二期の計画は中断され、隊員は上と下にばらばらに分散され、志気を沈滞させた。そして、私の不在間のリーダーシップの不明確さが、南壁計画を一時的にでも中断させるという事態にまで及んでしまった。住吉らが直面した問題は、隊員の不調（錦織、井上、神山、平野らは特に悪く、今後も回復の見込みがない）と疲労、各キャンプの管理態勢がとれていないこと、食糧が五月二十日分までしかないこと、そして南壁の八〇〇〇メートルから上部の技術的な困難性など、すべて暗い材料ばかりで、一時南壁を中断するという措置もうなずけないわけではなかったが、もっと重大なのは、リーダーシップの欠如から引き起された混乱であり、リーダーシップの移譲について、もっと明確にすべきであったと反省している。

第三期（五月四日〜五月十二日）

——東南稜からの登頂・南壁の断念——

二名の尊い人命を失ない、かつ計画は大幅な遅れをきたしており、われわれの隊は重大な局面に立たされた。

私は成田の荼毘を終え、BCへ戻る道すがら、今までの登山を振りかえり、もうクヨクヨすまい、残された日数に全力を挙げて成田のためにも頑張ろう、登頂の報をはなむけとしなければ成田にもすまない、と心に決した。

五月一日、BCに戻って早速第三期の計画を建て直した。

食糧係りの鹿野はあと二十日分の食糧が残っていると報告、気象係の長田は五月の月間予報を立て、五月十日〜十二日を登頂にもっともよい日であるといってきた。〝気象庁長官〟の異名をとった長田の予報はBCに入って以来素晴らしい確率を示し、信頼度を高めていたので、少しの不安も抱かず計画にとり入れた。

五月三日夜発表した第三期の計画の骨子は次の通り。

(1)南壁計画は続行、五月二十日頃を登頂目標とする。

(2)東南稜からの登頂は五月十一日、十二日とひきつづき二回行なう。

(3)第一次登頂メンバーは松浦、植村、サポートはサウス・コルから河野他シェルパ五名で行なう。

(4)第二次登頂は隊員一名とシェルパ。但し、メンバーはABCで決定。

(5)サウス・コルへの三〇〇キログラムの荷上げは、土肥、神山、平野、神崎が指揮して、シェルパ二十名にて二回で行なう。

(6)この期の荷上げ管理責任者を平林とする。特にC5・C6にあげる荷のチェックを厳重に行なうよう指示する。

この日、南壁隊の小西、伊藤は、一時中断していた南壁攻撃を再開すべく。ABCからF・ABCに入った。

五月五日、皆より一足さきにABCに入った大塚、松田は、住吉と状況を話しあったが、住吉は、現場の意見を信用してもらえないといって憤がいしていた。隊員の高度順化が不十分であり、このまま登頂態勢に入るのは危険で責任が持てない。松浦、植村が強いのはわかるが、サウス・コルへもう一度登ってから登頂を行なうべきで、酸素の使用も順化の出来た状態で考えるべきであるとし、高所医学的な立場からの意見を強調した。しかし、私の考えでは、順化はこれ以上の高度で日数をかけても期待出来ず、むしろ、酸素を積極的に使用して、短期間のうちに登頂のチャンスをねらう態勢を作り上げるべきであり、隊員の健康管理などについて協力するように話したが、順化の点については合意に達しなかった。しかし、真の問題はこれほどまでに強くなった不信感であり、それをもたらしたリーダー

シップの混乱であったといえる。この日、BCから第一次登頂隊の松浦、植村と平林、渡部、大森、河野、加納、鹿野、吉川、安藤、嵯峨野、報道野口ら十二名はC1へあがり、またC3以上で行動していた平野、土肥、神崎、神山をABCに集合させた。南壁隊小西、伊藤はC4まで荷上げ、ルート補修を行なった。

五月六日、ABCからサウス・コルへの荷上作戦の先陣として土肥、神山はシェルパ十六名を率いてC3へ出発。松浦ら十二名はABCへ、このうち南壁隊の加納、吉川、嵯峨野はF・ABCへ入った。小西は単独でC4（七五〇〇メートル）を建設し、入った。またBCから田村、中島（寛）がC1へあがった。

この日、スキー隊の三浦雄一郎氏はサウス・コル下からの滑降を行ない、途中で転倒したが奇蹟的に止まり、無事生還、ABCに下って来た彼が「生きていることが不思議だ」と語っていたのが印象的であった。

五月七日、ABCから、第一次登頂隊の松浦、植村、サポートの河野、平野、神崎、シェルパのイラ・ツェリンほか四名はABCからC3へ出発。いよいよ待望の登頂態勢への第一歩を踏み出した。天候も安定し、すべてが順調に運んでいる。

サウス・コルへの第一次荷上隊はC4へ、F・ABCには田村、中島(寛)が入り、南壁隊も全員攻撃態勢に入り、再び情勢は大きく動きはじめようとしていた。

五月八日、第二次登頂隊として、平林とサーダーのチョタレを指名する。南壁では、吉川が不調の伊藤に代りC4に上って小西と合流した。

土肥、神山の率いるシェルパ十六名のサウス・コル荷上隊は、この日十名がサウス・コルへ到達、酸素、食糧、テントなど一五〇キログラムを荷上げした。

南壁では、小西、吉川がC5からルート工作に出発、七八〇〇メートルまでザイルを伸ばした。逆層がところどころあり、昨秋の氷壁と違ってなかなかピッチがあがらず、二人とも手こずったらしい。

五月九日、第一次登頂隊、サポート隊は予定通り順調にサウス・コルにC5を建設して入った。第二次登頂隊一行

はC４に上る。一方サウス・コル第二次荷上隊は、平野、神崎に率いられたシェルパ十五名がC４からサウス・コルに到着、約二二〇キログラムを荷上げした。これで、サウス・コルへの大荷上作戦は完了した。

南壁は、加納、嵯峨野がC４に、田村、中島（寛）がC３にそれぞれ入り、小西、吉川はABCに下った。南壁のC４は落石の危険が大きいために、第二次偵察隊のとき以来そのキャンプサイトが問題となっていたが、他にはどうしても適当なところがなく、二次偵のときと同位置にテント台を設置して設営した。

五月十日、東南稜上では登頂の態勢が完了した。第一次登頂隊は河野とシェルパ五名のサポートを受け、インド隊と同位置（八五一三メートル）に最終キャンプC６（四人用テント一張）を建設、河野らはサウス・コルへ下った。第二次登頂隊一行はサウス・コルへ入った。

南壁の加納、嵯峨野はシェルパ二名をつれてルート工作に向かった。小西は「逆層でグレード四級ぐらい、極めて悪く落ちそうな気がした」と語っていたが、加納らは「順層で、快適なクライミングあった」と報告しており、この高さでの岩壁登攀の複雑さを物語っていた。以下加納の報告から引用しよう。

「七八〇〇メートルで小西らが残したザイルを加え九本（四五〇メートル）を背負い、酸素を使用しながらルートの開拓に進む。乱雑に岩を積み重ねたような難場に変り、傾斜は四十五度以上となった。二人はアイゼンを脱ぎ、素手で登った。右手に色あせた一〇メートル位の固定ロープが見える。昨年の第二次偵察隊がフイックスしたものであろう。七八五〇メートル、岩相は変って砂粒の固まったような脆い、ハーケンの効かない嫌な岩となる。行く手に高さ一〇メートル、長さ一〇〇メートルぐらいの魚の背びれに似た岩峰がそそり立っている。去年の第二次偵察隊はこれの右端から、V字状の右俣、いわゆる右雪田に入ったのであるが、今回は左雪田に入る。トップは嵯峨野に代る。それほど難しくない階段状の岩場を左へトラバース気味に登って三ピッチ伸ばすと、ザイルがなくなってしまった。八〇五〇メートルであった。

この地点から上部の岩壁を観察してみると、たどって来た左俣のクーロアールはこれから先でさらに二本に分れている。右は一〇〇メートル前後の垂直の岩で頂上に近いが登攀はほとんど不可能である。左は約五五度の傾斜で西稜に抜けているように思える。これにはチムニーがあり、傾斜も五十度前後で登れそうであるが、登り切った上部は見えないので分らない。あと二〜三日好天に恵まれれば、ここからの頂上へのルートは必ず見つけられると思う。」

一方、C3からC4に上って来た田村、中島(寛)パーティーは、加納、嵯峨野パーティーを迎え、打合わせをしながら明日の登攀準備をしている時、中島がこぶし大の落石を右膝に受け打撲傷を負って千載一遇のチャンスを逸した。また、加納は、下山中、C3の下でソフトボール大の落石を腰に受け負傷した。

南壁で今日二人が相次いで落石により負傷したとの報告を聞き、期日の遅れ、戦力の欠如などを考慮し、これ以上落石の危険にさらすことは出来ないと思い、南壁の断念を決意した。

五月十一日、第一次登頂隊の松浦、植村が東南稜から登頂。

以下、第一次登頂隊の手記により報告しよう。

「快晴無風。長田の予報通りである。昨夜は毎分一リットルずつ睡眠用の酸素を使用し快適に眠った。四時四十分起床、マシュマロ五個に紅茶の簡単な朝食。完全装備をつけ、テルモスにレモンティーを入れ、マシュマロ一袋、フランス製酸素ボンベ二本の他一六ミリTV用カメラ、スティールカメラなど、十五キロの荷を背負い、六時十分出発。二人はアンザイレンをして毎分三リットルずつ酸素を吸いながら一歩一歩確実に登る。南峰へ続く傾斜約四十度の氷のナイフリッヂ、右はチベット、左はネパールに鋭く切れ落ちている。毎分四リットルと酸素を増し、ところどころ四つんばいになるところもあったが慎重に登り、八時三十分南峰(八七六三メートル)に到着、ここで新しいボンベに替え、使用中のものを下山用に置いた。のこぎりの歯のような雪稜が頂上へ続いている。ヒラリーが苦労したという一〇メートルぐらいのチムニーには雪がつまっており、簡単に登れた。ニセの頂上に幾度かだまされたが、九時十

分頂上に着く。最終キャンプから三時間、一度も休まず、快調に登った。頂上は二人がやっと立てるぐらいの狭い、雪の深い展望台であった。そこには世界最高地点の雲一つない素晴らしい、三六〇度の大パノラマが拡がっていた。マカルーやカンチェンジュンガが、そして北のチベット側の 赤茶けた高原の遠くに ピラミッド型 の高峰が三つ四つ、ノース・コルも手にとるように見える。二人はムービーや写真をとりまくった。

成田の写真と遺品、そして登頂するまではといって禁煙を誓っていた彼にピース一箱、マッチを添えて頂上の雪の中に埋め、その上に日の丸とネパールの国旗を広げた。こらえようもなく涙があふれた。

一時間はあっという間に過ぎた。頂上直下で手当たり次第に石を拾い集め、下山にうつった。」

無事登頂の大任を果した松浦、植村は、十一時四〇分C6に帰着、第二次登頂隊の平林、チョタレに迎えられ、登頂の模様、上部ルートのあらましを伝え、熱いレモンティーを飲んで更に下り、C5午後一時着、ここからはサポート隊の河野、シェルパと共に一気にABCまで下った（午後五時三十分着）。好天に恵まれ、酸素を十分に使って安全確実でスピーディーな文句のない登頂であった。

五月十二日、第二次登頂も、若干の風はあったが、前日同様の好天に恵まれた。C6五時五五分出発、ボンベ二本他を背負い、毎分三・五リットルずつ酸素を吸いながら、松浦らのラッセルに導かれて、南峰へ八時五分着、頂上には九時四五分到着、第一次隊と同じ快調のペースである。一〇時一五分頂上を後に下降をはじめる。下山中、ボンベのトラブルで八二〇〇メートル付近で酸素がゼロになり、トランシーバーでサウス・コルに連絡、安藤らのサポートに迎えられ、十五時四五分無事C5に帰着、その日はC4に下る。ABCでは、終始登頂の模様がトランシーバーで受信され、手にとるように分ったので少しの不安もなかった。

第一次、第二次登頂の完璧な登頂のニュースに接し、この日南壁の計画断念を発表し、残された七日間で最後の力を結集して、東南稜から再度、第三次、第四次の登頂を試みることにした。

第四期（五月十三日～二十一日）

――東南稜からの第三次、第四次登頂の失敗、登山終了――

一応二度の登頂は果たしたとはいえ、最後の力を振りしぼってトライをすべきだ、と私は考えていた。特に南壁をいろいろな角度からもう一度しっかり見ておく必要があると思い、われわれが登った南西壁でなく、南壁や南稜などの状態を偵察する目的をもって、サウス・コルへ直登するルートをとることにした。また、登頂は最終キャンプからと、サウス・コルからラッシュ・アタックするものと同時に二隊が行動するようにした。

この期の運行計画は松田がまとめ、荷上げ管理には松田、鹿野があたった。

計画内容は次の通りであった。

⑴南面偵察、大クーロアール試登隊、吉川、嵯峨野、伊藤、シェルパ三名、五月十三日ＡＢＣ出発。

⑵第三次登頂は五月十九日Ｃ６から田村、イラ・ツェリンの二名。

⑶第四次登頂、五月十九日Ｃ５から頂上往復、小西、ピンジューの二名。

⑷サウス・コルへの荷上隊は、鹿野が指揮してシェルパ二十名にて行なう。五月十四日ＡＢＣ出発。

⑸サウスコルでの指揮は藤田がとり、大森、吉川、伊藤をスタンバイさせ、Ｃ３には松田、鹿野が入る。またこの間渡部と報道カメラマン二名（野口、原田）をサウス・コルに登らせる。

今年の南壁隊は散々であった。計画が中断されたり、盛りあがりかけ、いい型になって来た矢先に落石の事故。せめて、このステージで、予定通り東南稜パーティーのサポートを受けて頑張れば、南壁の核心部である八五〇〇メートルまで手が届いたかも知れないことを思うと、不運といわざるを得ない。

五月十三日、吉川、嵯峨野、伊藤の三名、シェルパ三名は、Ｃ３へ向かった。撤収にそなえ、アイス・フォールの

ルート補修に、平野、土肥、神崎、神山の四名が下る。

五月十四日、サウスコル荷上隊鹿野他シェルパ二十名が出発、いよいよ最終ラウンド開始である。BCへ向け松浦、中島（寛）、植村、安藤、報道三名が下って行った。

五月十五日、吉川隊は、C3からローツェ・フェース下部をトラバースしてジェネバ・スパーの左側の氷の斜面を登り、前日（十四日）七三〇〇メートルまでフイックスしたザイルを更に七六五〇メートルまで伸ばした。鹿野ら荷上隊はC4へ進む。

五月十六日、荷上隊は無事サウス・コルへ荷上げ完了。

天候は、このところ亜熱帯性高気圧の影響で、午後になるときまって曇り、降雪、雷の発生というパターンになって来た。

五月十七日、藤田、田村、大森、渡部、野口、原田、イラ・ツェリン他シェルパ六名はサウス・コルへ午後二時到着。吉川隊は、七時三〇分C3を出発、大クーロアールを直登して一三時サウス・コルに到着。約一〇〇〇メートルの標高差を五時間三十分で登る快調なペースであった。

サウス・コルは風が逆のチベット側から吹き、雪まじりの天候となった。夕方から夜半にかけて、ABC十五センチ、C3二十センチ、C4二十五センチの積雪、C5では膝までも積り、ローツェ・フエースの雪崩の危険も生じ、C4、C3は警戒態勢に入る。

五月十八日、BCの長田は、ファクシミリの天気図による気象の解析に苦しめられた。「今日よりは明日の方がよいであろう。天候は上向き」との予報で、各キャンプは登頂態勢に入った。

この朝、サウス・コルでは、イラ・ツェリンが不調を訴え、嵯峨野がこれに代る。視界が悪く風雪。出発をしばらく見合わせ待機していたが、九時一〇分シェルパ五名のサポートを受けてC5出発、C6に入った。小西、ピンジュ

ー隊もC4からC5に入る。最終ラウンドの最後のツメとなった。明日の好天を祈るのみである。

五日十九日、風雪。

ABCはBCから受けた特別気象通報を各キャンプに五時、六時、七時に通報。「気圧の谷通過直後の型で頂上付近は風速十三メートル位で強まる見込み。雲におおわれるであろう。午後は雷雲が発生する模様」各キャンプは待機のまま時が流れた。

C6では朝四時から起きて準備をしたが、嵯峨野のレギュレーターが故障のため酸素がどんどん洩れてしまう。サウス・コルでは風強く、視界も効かず待機。

八時、天候好天の見込みなしと判断、行動中止を決定した。撤収を指示し、ローツェ・フェースの雪崩に気をつけるよう注意した。

酸素、食糧など余裕のない現状では、これ以上ねばり、強行するには状況が悪すぎる。サウス・コルで張切っていた小西、ピンジューらの様子を見ると藤田は判断に苦しんだことであろうが、これでよかったと思った。

C6から下山した田村、嵯峨野と合流し、下山にかかったが、ジェネバ・スパーからローツェ・フェースのトラバースにかかるとき、先頭のピンジューの足もとからスパッと雪が割れ大きな表層雪崩が出て一瞬驚いた。

午後四時、藤田ら十八名は全員無事にABCに帰着し、二十一日BCに下り、全登山活動を終了した。

〔資料〕 成田潔思隊員のカルテ(住吉の記録から)

三月二十三日、BC着。特に異状なし。

三月二十四日、発熱(三十八度)を訴える。咳嗽喀痰あり。問いただすと、昨日から、セキ、タンあり、体がだるいとの由。〔投薬〕気管支炎気管支肺炎剤。

三月二十五日、熱(三七・七八度)セキ、タン。〔投薬〕注射、抗生剤。

三月二十六日、熱（三七度台）セキ軽減、タンなし。〔投薬〕点滴注射補液。

三月二十七日〜四月二日、熱、ほとんど平熱。セキ、タンなし。食欲漸次増加、脱力感も軽減。このままでBC生活するも普段の健康をとり戻せると思ったが、松方隊長のロブジェ到着が四月二日なので、大森と共に一〜二週間低所に降りる。（勿論単独にて歩行）

四月三日〜九日、〔大森談〕日に日に元気になり、普通以上の食欲もある。普段の健康をとりもどした。

四月九日〜十三日、BCにて生活、アイス・フォール極めて危険、ポーターの事故もあり、計画的な高度順化のための行動出来ず、十三日、ローラ・ピークの支稜に高度順化のため登る。特に身体上の訴えなく快調。

四月十四日、BC→C1。成田の言によれば、C1に着く頃、前胸部に軽い痛みがあったが、久し振りに喘ぐような呼吸をしたので筋肉痛と思った。翌日（四月十五日）は軽くなった、とのこと。呼吸数多く、前胸部に痛みがあった様子で、これが筋肉痛かあるいは心臓の（狭心症のようなもの）痛みか分らなかったが、大したことはなかった模様。

四月十五日、元気、特に訴えなし。私（住吉）はBCからC1へ上る。私自身、成田の高度順化には、BCの病気があるので特に配慮していたので体調を聞いたところ、とても元気で、何も訴えることはなかった。

四月十六日、ABCにどんどん隊員が登るので私（成田）もABCに入りたい、といっていたが、順化不良として大森ドクターとアンザイレンして行けるところまで行って引返す。無理をしないこと、を条件として行動。結局半分の行程でC1に引返すが、疲れましたの言。今後私（住吉）の言う通り行動のことと笑いながら約束。

四月十七日。私（住吉）と、神山と共にC1にて荷物の発送、整理。この日錦織ABCよりC1に夕刻下る。疲労大なるも元気にわれわれ三人と歓談の上就寝。

四月十八日、錦織、嗜眠状態なるも応答正確なるため、疲労大なるのみと考える。脈膊九十、緊張その他良好。水分摂取に留意。成田、住吉、神山と共に荷物の発送、整理。トランシーバーによるBCとABCとの連絡に当る。極めて元気で三人で愉快に仕事をする。

四月十九日、前夜、錦織、応答正確なるも不穏な感じするため、住吉二時間毎に脈膊を調べる。午前三時、脈不正、弱、数頻脈。直ちに酸素吸入。暖かくなった、今までのことをどうもはっきり記憶していないという。この間、成田は、住吉、神山と共に酸素吸入の準備、その他で朝まで不眠。しかし三人とも元気。住吉、成田は十八、十九日、徹夜のため頭痛ありしも、十九日午後になおる。午後、錦織点滴注射、酸素続行中。食欲出る。やはり嗜眠傾向あるも、起坐活発自由となる。

四月二十日。錦織午前二時真夜中—C1にて就寝中不在。おどろき住吉、成田、神山の三人で叫び探すと、シェルパのテントにいる。ホッとし、テントにつれ戻し、再度酸素吸入開始。錦織の意識不正を再確認。すぐに就眠す。われわれ三人も就眠。午前、神山、中島（寛）はC1からABCへ上る。午前午後、成田、住吉と共にC1にて荷物の発送整理、トランシーバーの応答。午後、錦織、点滴一、〇〇〇ｃｃ。勿論酸素吸入は続行中。点滴後は、自分で昨夜のこと、即ちシェルパテントに行ったことを思い出す。正常識かなり取り戻す。同時に食欲増進。BCに降ろしたいが、

アイス・フォールの危険を考え、C1にて酸素吸入続行と点滴注射施行の方針にする。

四月二十一日、錦織、昨夜熟睡の由。六時一五分、ABCからの指示で酸素器具をC1よりABCに送る。そのあとテントにて成田、住吉、錦織、植村、井上でゆっくり朝食をとる。十時三十分、植村、井上アンザイレンしてABCへ、成田、ダワ・ノルブ、アンザイレンしてABC往復のため出発。成田順化程度不明のため荷物なし空身。ダワ・ノルブにも成田の状態を説明して、空身で同行させる。決して無理せず、どこからでも引返すこと。

夕方四時、成田、田村、ダワ・ノブルC1着。続いてABCから長田、平野、伊藤らC1着。

成田前胸部の痛み訴えるも、極めて元気で、C1に初めて登って来たときも同じ痛みがあった、明日ABCに登ってはどうか、と尋ねる。私（住吉）ABCに登るのは、もう二度往復したあとでなければだめだ。私と一緒に行動すること、監視つきだ。胸の痛みは筋肉痛と思うが、痛ければ、錦織の使っている酸素を吸ってみたらよい。一分間二リットルで十分位やって見よ。成田二度酸素吸入するも酸素を吸っても少しも痛みは楽になりません。住吉、順化していれば楽に感じないだろう、とこのような会話をしながら夕食を待つ。

その間、錦織に点滴注射。住吉施行、成田助手。夕方六時頃夕食（住吉のテントに六人、成田、住吉、錦織、田村、長田、平野）。

成田、胸部痛で食欲ないとて、オジヤ半分のみ。続いて両腕のシビレ、だるい感じを訴える。しかしニコニコして六人で楽しく食べ、デザートに果物の缶詰を開ける。

このとき、突然、成田の正面にいた平野の不穏な表情で私が成田、成田と呼ぶも答えなし。返事せんか、と重ねて呼びかけるも返事なく、すぐ成田のそばに行って診るにすでに（六時二十五分）脈はふれず、呼吸停止、瞳孔中等度散大。直ちに酸素吸入、人工呼吸、注射（カルニゲン、ネオフィリン、テラブチク、ビタカンファー等）施行するも全然反応なし。午後八時五十分瞳孔白濁を初め、治療中止し死亡確認す。

付記　本稿のエベレスト登山については別に『一九七〇年エベレスト登山隊報告書』が公式報告書として刊行されている（編者）。

マカルー登頂（一九七〇年）

＝東南稜初登攀＝

原　真
浅見　正夫

出発まで

日本山岳会東海支部で、マカルー計画が最初に企画されたのは一九六五年であった。しかし、その計画はネパール政府の登山禁止令とぶつかって、実現の機を得ないままに中断されることになった。
当時、その計画の中心にあった人たちは、アンデスのアコンカグアに転進して、同峰の南壁を登ることに成功した（一九六六年）。
その後、東海支部内では、有志がヒマラヤ解禁を待ちつづけて三年が過ぎた。
一九六八年一月、近くヒマラヤ登山が解禁されるという知らせが、ネパール政府から日本外務省に入った。マカルー計画は、翌六九年を目標にして準備が再開されることになった。四月の支部総会では委員会がつくられた。そして八月には、マカルーを含む三十八峰の登山解禁が発表された。
しかし、ネパール政府は新しい登山規則をなかなか発表しなかった。そのために、六九年の計画実行は不可能にな

り、同年には登山許可の入手を目的とする偵察隊を派遣することになった。

偵察隊は、松浦正司を隊長とする五人からなり、六九年二月二十三日に日本を出発し、二十四日にカトマンズに着いた。松浦は、約二〇日間を費してネパール政府と交渉した結果、三月十三日に待望の登山許可証を入手した。ネパール政府は、マカルー隊に許可を与えるとともに新しい登山規則を発表した。この許可は、日本隊に与えられた最初のものであると同時に、新しい登山規則によっておろされた世界最初の許可でもあった。

偵察隊は、三月十九日にダラン・バザールを出発してマーカルへ向かった。シプトン峠越えの事情を調べたあと、四月六日にバルンポカリのほとりにベース・キャンプを作った。そこに五月九日まで滞在し、東南稜サウス・コルまでの偵察をすませた。その後カトマンズにもどり、ヒマラヤン・ソサエティを通じてシェルパ三十六名と雇用契約を結んで帰国した（『山岳』第六五年参照）。

翌七〇年に組織された本隊は、東海支部の力を結集し、全国からも人材を集めた強力な隊であった。名古屋財界から強い資金援助を受けた。

隊の公式の名称は“The Japanese Makalu Expedition 1970”といい、登山のほかに高所医学、地球科学、血清疫学などの学術上の目的も持っていた。隊は二つにわかれ、登山隊は春に、地球科学隊は秋に派遣された。この学術遠征隊の総指揮は熊沢正夫（東海支部長）、隊長は伊藤洋平（同副支部長）であった。この二人は登山隊のキャラバンに途中まで参加した。

登山隊の登攀隊長は原真（隊長代理）、頂上攻撃隊長は市川章弘であった。登攀隊員十六名、写真家一名、朝日新聞記者一名（四月二十六日、おくれて参加した）の総勢十八名で、シェルパは二十五名であった。

総経費三八四〇万円、隊荷総重量十一・五トン、ポーター数往き四四〇名（ダラン出発時）、帰り七〇名（ベースキャンプ出発時）であった。

隊員は次のとおりである。

総指揮　熊沢　正夫（65歳）
隊長　伊藤　洋平（46歳）
隊員　原　真（33歳）登攀隊長
市川　章弘（33歳）頂上攻撃隊長
田中　元（32歳）、尾崎　祐一（30歳）、松浦　正司（29歳）、尾上　昇（26歳）、
川口洋之介（26歳）、後藤　敏宏（26歳）、吉原　正勝（26歳）、長谷川　勝（26歳）、
橋本　篤孝（25歳）、越山　将男（24歳）、生田　浩（24歳）、浅見　正夫（21歳）、
中世古直子（32歳）、芦谷　洋子（25歳）、白簱　史朗（36歳・写真家）
谷　久光（36歳・朝日新聞記者）

シェルパは次のとおり（＊印は上部で活躍した特に優秀なシェルパである）。

サーダー　＊ミンマ・ツエリン（ターメ）
チーフ・コック　アン・ツエリン
アシスタント・コック　パサン・ニマ
高所ポーター　＊カルマ（タクトード）、＊ドルジェ（ワルンチュン）、＊ラクパ・テンジン（ナムチェ）、＊アン・ニマ（ターメ）
＊ダワ・テンジン（ナムチェ）、＊ラクパ・ツエリン（ナムチェ）、＊アン・ノルブ（ナムチェ）、ペンバ・ノルブ（ロムゾン）、ダワ・トンデュップ（ナムチェ）、ラクパ・ゲルブ（ナムチェ）、ダ・ヌー（チャウンリカルカ）、ピンゾー（ターメ）、パサン・ドルジェ（ナムチェ）、ピンゾー（ナムチェ）、ギャルツエン（ターメ）、プルバ・テンジン（ターメ）、ダワ・ノルブ（ポルテ）、ラクパ・ドルジェ（ターメ）、ペンバ・ギャルツエン（チャウン

リカルカ)、ウガティ(タクトード)、パサン・ダワ(パンボチェ)、ナワン・テンジン(ナムチェ)、
リエゾン・オフィサー　G・C・タクール

行動記録

本隊十五名は、二月十四日に東京をたち、翌日カトマンズに着いた。ネパール内で三名の先発隊と合流した。二月二十日、カトマンズから空路ビラトナガールに至り、その日のうちに車でダラン・バザールに着いた。二月二十二日にキャラバンが開始されたが、ポーターが予定通り集まらず、隊は二分されることになった。主力は八〇名のポーターとともに先行し、六〇名のポーターによる後発隊が三日あとにダラン・バザールをたってこれを追った。

途中で少しずつポーターを入れかえながら、アルン川にそって暑く長いキャラバンが続いた。三月四日、最奥の部落ブンキン(セドア)に着いた。後発隊も翌日到着し、全員がそろった。ここからながめられるシプトン峠方面の山々には、まだ雪がたくさん残っていた。アメリカ隊(一九五四年)もフランス隊(一九五五年)も、この峠を三月の下旬に越えているが、それでも大変な苦労をしている。東海支部隊はここを三月上旬に越えようとしている。大きな困難が予想された。

峠越えの準備の第一は、セドア地域でポーターを募ることであった。隊員とシェルパの説得で、ポーターは少しずつ集まってきた。第二に、雪の中を歩かせるので、ポーターに靴を用意する必要が生じた。これは、キャラバンの沿道の大きな部落カンドバリで、ゴム底のズック靴を三〇〇足手に入れることができた。

三月九日、まず一六〇名のポーターでブンキンを出発した。あとには四名の隊員と五名のシェルパが残って、ひきつづきポーター集めをやることになった。

先発隊は三月十日に三四〇〇メートルの稜線に着いたが、夜半から猛吹雪になった。吹雪は翌十一日いっぱいつづ

き、前進も退却もできなくなり、薄着のポーターの身に危険が感じられた。十二日になって晴間が少し現われた。ポーターはすべて村へ下ってしまった。嵐の山中に、隊員とシェルパが荷物とともに残された。風雪は四日間吹き荒れた。

天気の回復した三月十四日、峠越えが再開された。雪の稜線のところどころに、ポーターたちのためのロープが固定された。荷物はいったん峠の近くにデポされ、ポーターは空身で峠のむこう側の森林地帯へ移動した。そこからデポ地へ荷物を取りにひきかえした。隊員たちも荷物を運んだ。

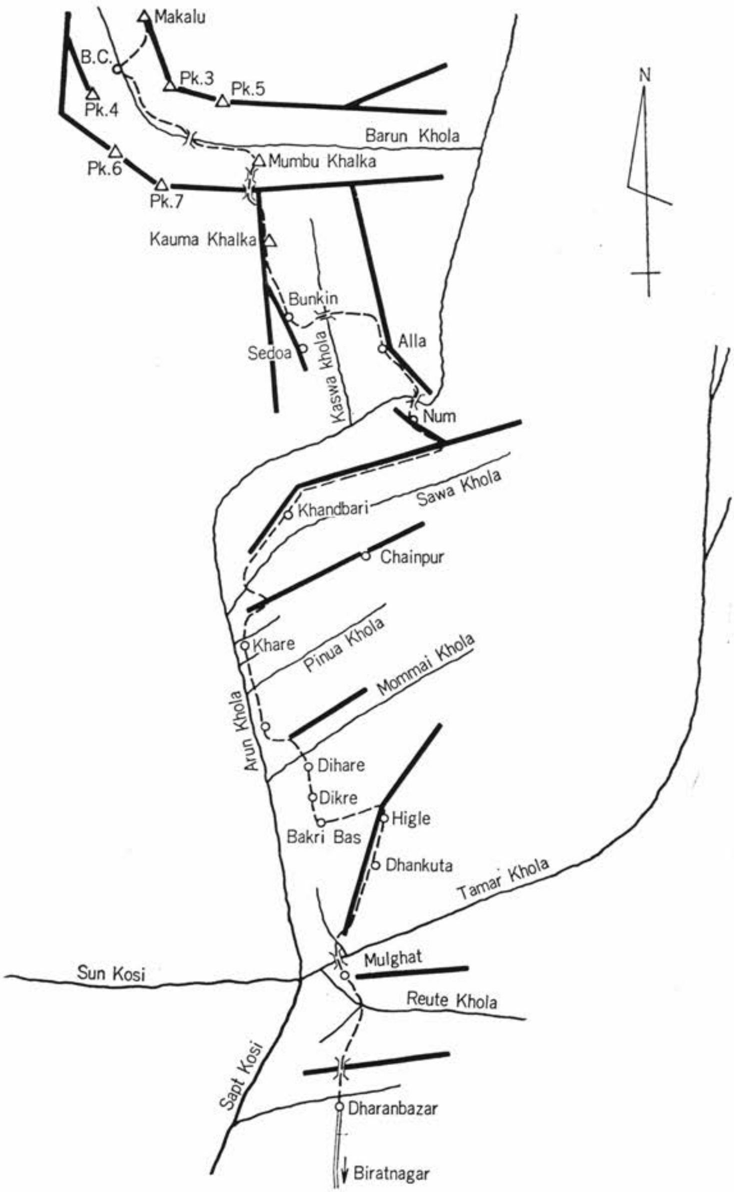
キャラバンの主力が峠を越えたのは三月十七日であった。約三分の一の荷物が途中に残されて後発隊にまかされることになった。主力は一刻も早くベースキャンプに着いて、登山活動を始める必要があった。しんがりは松浦と浅見にまかされた。

三月二十日、尾上以下三名の隊員が、シェルパ一名、ポーター四名をつれて先行することになった。彼らは、三月二十二日にバルン氷河に入り、四七〇〇メートル地点にベースキャンプを設営した。二十四日に主力が到着し、しんがりの二隊員をのぞく全員がベースキャンプに集まった。キャラバンは三〇日間の長きにわたった。ベースキャンプ地は、マカルーの南面がすべて見える明るい谷間であった。

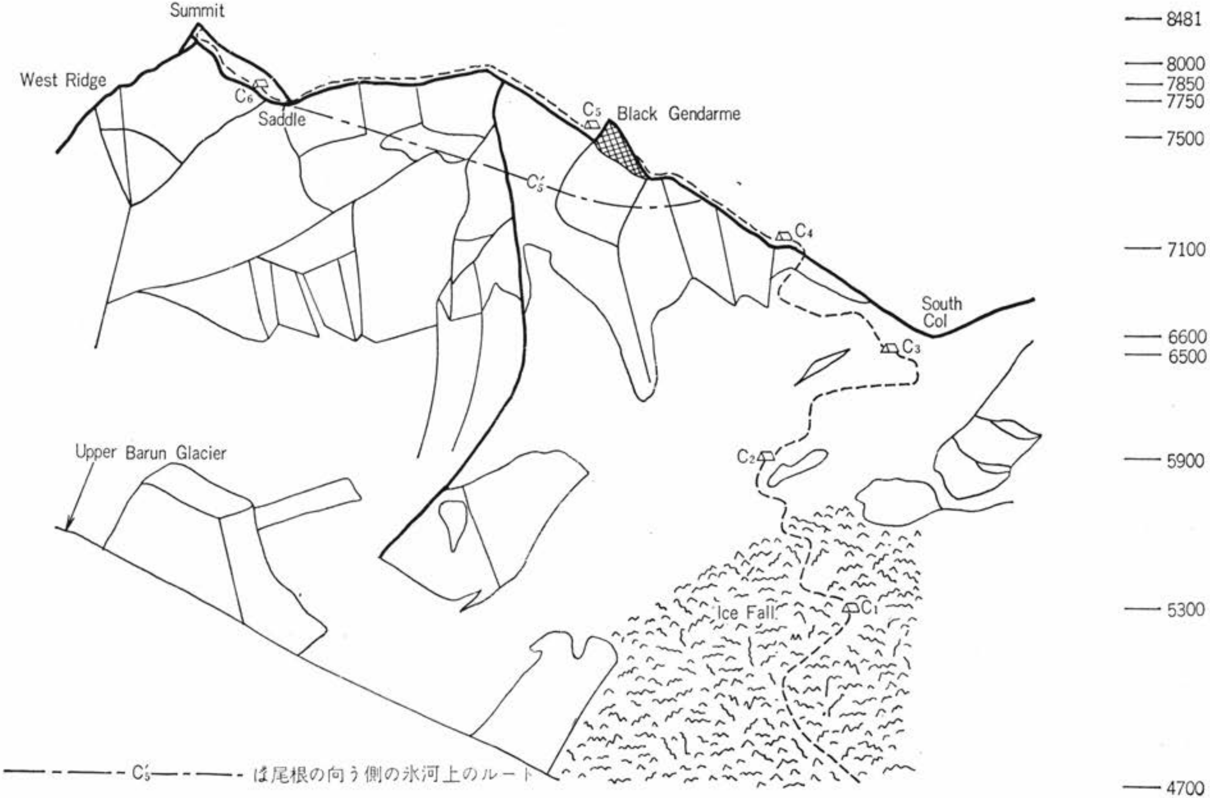
三月二十五日から、アイス・フォールの偵察がはじまった。中央部に雪崩に対して最も安全なルートがひらかれた。三月二十七日、アイス・フォールの中の五三〇〇メートルの地点にC1が建設された。三十日にはアイス・フォールを抜けた五九〇〇メートル地点にC2が建てられ、四月一日にはサウス・コル直下の六五〇〇メートル地点にC3(ABC)が建設された。

C3の建設までは、非常に早く事が進んだので、四月のうちに頂上がおとせるかもしれないという楽観論もうまれた。ところが、C3の上でルートは急に困難になった。この稜線上へ出るための急な斜面は、高さからみてちょうど

Apporch March Route to Makalu



Climbing Route of Makalu by The South-east Ridge



強い高度障害にかかる範囲にあった。多くの隊員がこの斜面で高山病にやられて退却した。サウス・コルから直接鋭い岩稜に取りつくことはできず、左へトラバースしてから稜線へ出るルートが取られた。斜面にはすべてロープが固定された。ここからユマールが使用された。

十八日、C3を出た六名の隊員によって稜線の上に出るルートが試登された。岩壁と雪壁の二カ所で登攀が試みられたが、雪壁に取りついた越山、浅見が稜線に出ることに成功した。翌日、田中、尾崎が昨日のルートから稜線上を偵察し、ドームの上にかなり広いキャンプ地を発見した。ここはテントが一〇くらい張れそうな、東南稜上唯一の平らな場所だったが、北(チベット)側は大きな雪庇になっていた。

四月二十四日、ドームの上にC4が建設された。標高七二〇〇メートル。C3の建設から二十三日目であった。C4建設にこんなに多くの日数を要した理由は、第一に隊員の多くが高山病にかかって進めなくなったこと、第二に、ルートが困難であったこと、第三に、強い西風のためにシェルパが動きたがらなかったこと、第四に、補給能力が不十分だったことがあげられる。C3(ABC)までは短期間に大量の荷あげをする必要があるが、そのためにはこの隊のシェルパの人数は不足気味であった。このころから、日本でたてられた補給計画には荷あげ量があまりに少なすぎるという、致命的な欠陥のあることが認識された。ベースキャンプでは原と松浦によって荷あげ計画が根本的に再検討され、精密な管理体制が新たに作られた。

C4から上の稜線は、まずたいして問題のない雪稜が続き、その先に難しいナイフリッジが現われ、つづいて最大の難所であるブラック・ジャンダルムの岩壁がたちはだかっている。

C4から見たブラック・ジャンダルムについては、最初、やさしいという報告が入った。しかし、実際には、十七日間の悪戦苦闘のすえにやっと突破された。この間強風がつづいた。

五月八日、今まで毎日つづいていた強い西風がぴたりとやんだ。この無風快晴の中で最初にブラック・ジャンダル

ムを越えた田中、尾崎は、稜線上に小さな岩穴を発見し、そこにC5をつくった。ロープは岩穴の中にまで張られた。翌日、二人は八〇〇〇メートルピークを越えてサドルまで行った。C6はここに作られる予定になった。

C4からサドルまでのルートは、困難な上に非常に長く、多くのシェルパがナイフリッジやブラック・ジャンダルムで動けなくなった。サドルに着いた二隊員は、北側の氷河からサドルにらくに到達できることを発見した。原隊長はC4の川口、後藤に北側の氷河を偵察するように命じた。二人は、C4の上部の雪稜がナイフリッジに移行する部分から、懸垂で北側の氷河へ下るルートを作り、氷河へおりた。偵察の結果、二つのことがわかった。第一に、氷河を通ってサドルへ行くほうが、ブラック・ジャンダルムを越えて同じ場所へ行くより、はるかにやさしいこと。第二に、氷河から東南稜とは反対側の東稜にかなりらくに登れそうで、もし東稜にルートを変えれば、最後の登攀は東南稜よりずっとやさしくなるのではないかということ。しかし、第二点はあくまで推測であった。

偵察の結果、戦術を変更すべきかどうかという問題が発生した。五月十三日、BC、C4、C5の間で無線機を使ってこの問題が検討された。上部の隊員の意見は、変更すべしというものと、すべきでないというものの二つにわかれて対立した。すでに五月八日から無風快晴が続いており、モンスーンがはじまりかけていた。東南稜に固執すれば失敗の可能性が大きくなるかもしれなかった。ルートを東稜に変更することにも賭けがあった。BCの原隊長は、ルートを変更せず最後まで東南稜を登るという決断を下した。そして、この先荷あげルートとしてはブラック・ジャンダルムを越すことはやめて、氷河上のルートを使うことになった。この間一部の隊員の間では感情の対立も発生した。

五月十五日、この氷河上の七三〇〇メートル地点にC5′がつくられた。

五月十八日、C5′を経由した川口、後藤は二名のシェルパとともに氷河からサドルにあがり、そこから一〇〇〇メートルくらい稜線上を頂上側に登ったところにC6を建設した。標高は七八九〇メートルであった。

ところが、ここで、二人の持っていた無線機が故障するという思わぬ事故が発生した。五月十九日と二十日の二日

間、二人はC6から頂上へ向かう岩壁のルートを試登し、標高約八一〇〇メートルまでロープを固定した。下のキャンプでは二人の行動について、まったくわからなかった。十九日にC6に入るためにC5′を出発した二人の隊員は不調のためひきかえした。このことがC6の川口隊を迷わせた。川口隊は、下から交替要員が来ないので二日間続けてC6から上の試登とロープの固定をおこなったのであった。補給がまにあわず、二十日になっても下からはだれもC6にあがってこなかった。すでに一・二日前からモンスーンがはじまっており、しばらくつづいた無風快晴はくずれて毎日雪が降っていた。BCと連絡のとれない川口は、自分だけの判断で、あす頂上を攻撃する決心をした。

五月二十一日、午前四時三〇分に二人は酸素ボンベを一本ずつ背負ってC6を出発し、頂上へ向かった。出発の時刻には快晴で星が輝いていた。八三〇〇メートル付近で二人の酸素はきれ、そこから先は酸素なしで登りつづけた。午後から天気は悪化し、頂上稜線では強い風が吹き、雪が舞っていた。午後六時四五分まで登りつづけた彼らは、頂上の直前までせまっていたが、疲労の極限に達していた。先頭の川口は、三〇〇メートルぐらい先に頂上らしいピークを見た。しかし、彼は、いくつかのピークにだまされてきたので、それが頂上であるという確信が持てなかった。あとからついて来る後藤もかなりまいっていた。進むべきか退くべきか、川口は迷った。もし直前のピークが頂上だったら、彼は大魚を逸することになる。命が大切だ。彼は前進を断念してひきかえす決心をした。二人のひきかえした地点は八四〇〇メートルを越えており、眼前にあったピークは頂上であった。下山を始めると川口は急に恐ろしくなった。生きてC6まで帰らなければならない。二人は八三〇〇メートルまでくだったところで、ガスのために道をあやまるおそれがあったので、稜線上に雪穴を発見してビバークした。川口は幻覚の中で仲間たちを見た。風雪がようしゃなく二人を打ちのめした。

一方、田中、尾崎の二人は、同じ日にC5′を出発し、ひどい風の中を夕方C6に着いた。そして川口と後藤の行方不明がBCに伝えられた。その夜、川口と後藤はC6へ帰らなかった。BCでは、二人はほぼまちがいなく遭難した

ものと判断し事後処理の方法が検討されていた。敗北の色が強まり、その夜は全キャンプが沈みきった気持になった。

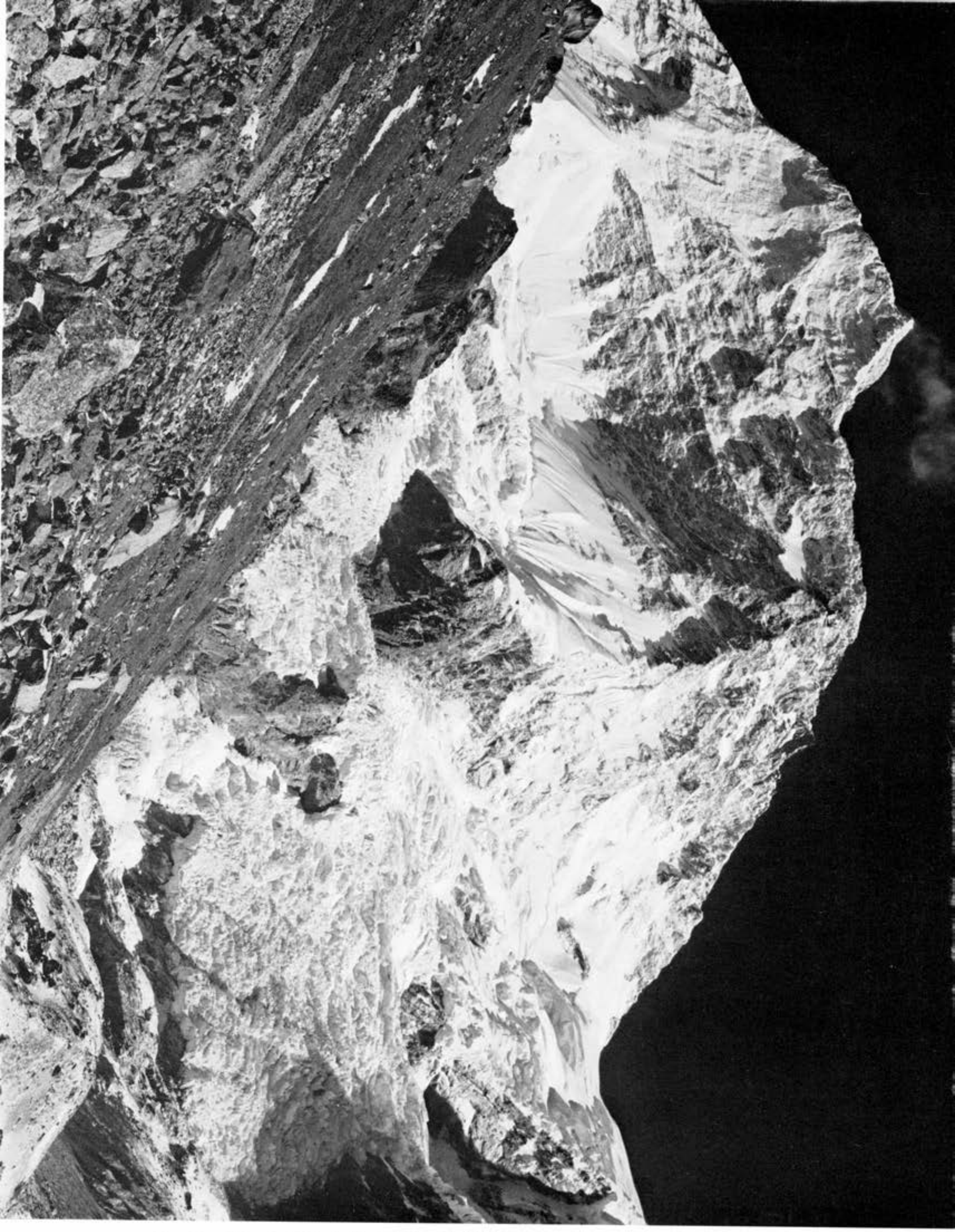
五月二十二日、田中と尾崎は、C６から上のロープの固定情況を調べるのと、帰ってこぬ二人の捜索のために上に向かった。そして、固定ロープの終点近くでのろのろとくだってくる二人に行きあった。二人は田中、尾崎に助けられて午後六時三〇分、三十時間振りにC６に収容された。

おなじ日、市川と浅見はブラック・ジャンダルムを越え、C５からC６に向かいつつあった。このチームは、東南稜を完全にたどって頂上へ行くことを目的としていたために、氷河上のC５′を通らずにC６に向かっていた。二人は深い雪に苦しみ、夜の十一時にC６に着いた。こうしてその夜、C６には六人の隊員があつまった。

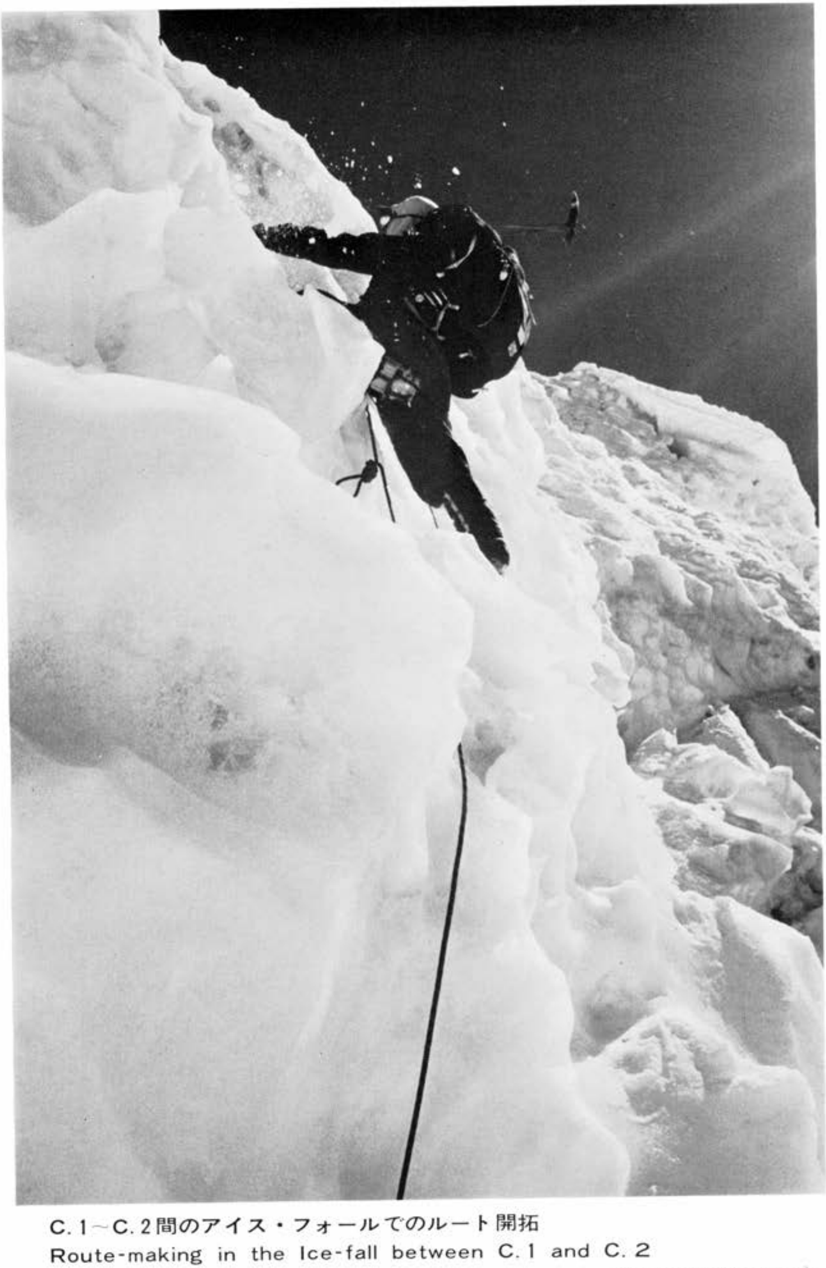
C６の酸素ボンベはAMP製三本しかなく、疲労こんぱいの川口、後藤の睡眠用に一本使ったので二本しか残っていなかった。C３にくだったシェルパたちは力を出しきって、これ以上補給する能力はなかった。C５′とC４には食糧も燃料もほとんど残っていなかった。C４の判断では、登頂のチャンスは明日を逃してはなかった。全隊員があすの晴天を祈った。

五月二十三日、田中、尾崎は約一時間の仮眠のあと、午前二時三〇分、酸素ボンベ一本ずつを持ってC６を出発した。市川と浅見が彼らの出発の世話をした。まさに幸運な快晴がおとずれ、マカルーは満天の星空につつまれた。二人が頂上へのぼって行くこの日、下では雪盲になった川口と後藤の救助作業が開始された。BCの原は各キャンプに強力な指令を与え、隊員とシェルパの最後の動員を試みた。C５′から生田とミンマ・ツェリン、ラクパ・ツェリンがのぼり、目の見えない二人をC５′につれてくだった。不運にもC６に入れなかった越山は、C４のアン・ニマをつれて、一日で酸素二本と少しの食糧をC６に補給した。C５′からは、吉原、カルマ、ドルジェが救援のためにC４に入った。全隊員が無私の精神でC６を支えた。

頂上に向かった二人は、午後五時、八三〇〇メートル付近の岩場の最後の部分に近づいていた。ここで酸素がなく



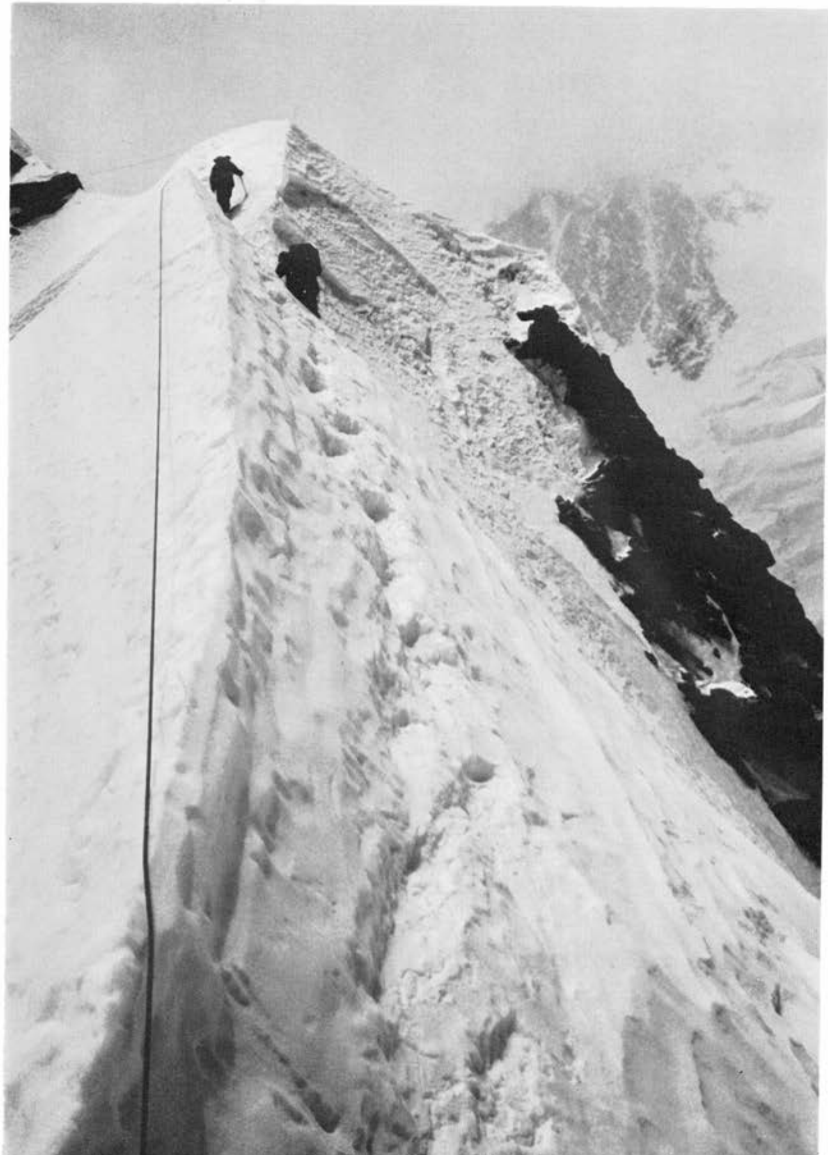
ベース・キャンプからのマカルー東南稜
The South-east Ridge of Makalu seen from B. C
(by S. Sirahata)



C. 1～C. 2間のアイス・フォールでのルート開拓
Route-making in the Ice-fall between C. 1 and C. 2
(by S. Shirahata)

アイス・フォール上部の氷壁
Iced face just above the Ice-fall (by S. Shirahata)

7000ｍ附近の垂直の登攀
Climbing up the steep face, ice and rock mixed (about 7000m)
(by S. Shirahata)



7400 m附近の雪稜の登攀

Climbing up the knife-edged ridge of 7400m, the summit is vaguely seen on the right. (by S. Shirahata)

C. 4直下7100m附近の登攀(1)
Climbing up at about 7100m (by S. Shirahata)

C. 4直下7100m附近の登攀(2)
Climbing up at about 7100m (by S. Shirahata)

ブラック・ジャンダルムの取付き（7500m附近）
The beginning of the Black Gendarme at about 7500m
(by S. Shirahata)

なった。毎分一・五リットルずつ吸っていたが、そのあとは酸素なしで登りつづけ、午後七時一〇分、頂上に立った。二人は月あかりの中をくだり、翌二十四日午前三時三〇分、二五時間振りにC6に帰った。晴天は最後までもちこたえた。市川と越山は二度目の登頂の準備をしていたが、下のキャンプラインにはもう物資はなくなっていた。天気はくずれはじめていた。BCは全員に撤収を命じた。

おわりに

練りに練ったつもりの計画ではあったが、振り返って見ると、やはりいくつかの反省点がある。

登山期間は、BC建設から撤収まで六十九日の長きにわたった。登頂は、予定より二十三日おくれた。計画では六人から八人の登頂者を予定していたが、実際には二人にとどまった。種々の悪条件や計画の欠陥などが重なって大きく崩れ、たえざる計画の修正によって事態は打開された。

困難なルートに加えて、東南稜が一〇キロメートル以上の長さであったことが、補給を難しくした。BCでは荷あげの管理に大変な労力がついやされ、松浦が上にのぼらずにこれにかかりきった。カードの使用や無線機の連絡が絶大な偉力を発揮した。

五月八日から六日間の無風快晴があったが、この間には登頂することができなかった。このことを考えると、事前の補給計画には失敗があったと反省しなければならない。登頂は、モンスーンがはじまってから幸運な晴天をつかんで果たされた。

固定ロープは五〇〇〇メートル使われ、荷あげにはユマール登高器が威力を発揮した。

靴は西ドイツ製の三重靴を使用し、良好な結果を得た。

酸素の使用本数は一〇〇本で、おもに睡眠中に使われた。登頂者の頂上攻撃時における吸入量は、毎分一・五リッ

トルであったが、八〇〇〇メートルの高所では毎分四リットル以上吸わないと、酸素使用の効果は現われないと考えられる。登頂は無酸素によって達成された。二十五名というシェルパ数は不足ぎみで、最低三十五名は必要であった。

隊員数十六名はやや多すぎた。十名から十二名くらいが適正であったといえよう。

このような大規模な遠征は協力のみが成功への唯一の足がかりである。二人の登頂は全員の登頂を意味する。

この成功は、隊員たちの超人的な努力と、団結と、そして幸運とのたまものであった。

付記 本稿のマカルー登山については、別に『遥かなる未登の尾根―マカルー―一九七〇年』（茗渓堂）が公式報告書として刊行されている（編者）

ダウラギリ登頂（一九七〇年秋）

川田哲二

細い雪の稜線の一番奥に、岩を混じえた小さな頂きが見えた。これまで何度もだまされつづけてきた偽りの頂きに較べれば、それはまさに本物の姿をしていた。そして、その本物への最後の努力が稀薄な空気の中ではらわれた時、もう十メートルにまで接近していたのである。

われわれの遠い、遥かなるダウラギリの頂きがほんの目の前に存在することを別段大した感激もなく見上げたのち、さらに前進していった。南面側にひと廻りし、数歩足を運びあげるだけが残された仕事であった。まもなく、四年間の長い苦しい時の流れの終着駅として、誠に申し分ない場所が足下にあったのである。

時に十一時四十五分。このでき事を各キャンプに連絡する。第二キャンプ（C２）から河野隊員の元気な声が返ってくる。「われわれの四年間の悲願はついに成った」と。同時にBCから隊長のハリのある声が、がむしゃらに飛込んできた。「オメデトウ、オメデトウ、よくやったぞ」。この時初めてダウラギリの頂きに立っていることを身に感じた。

ゆるい傾斜となって西稜の方に流れおちてゆくこの小さな頂上に立って、「これ以上高く登らなくてもよい」とい

うことのみを本当にかみしめながら、二人は青空の下に浮かぶ白き神々の玉座にしばしみとれていたのである。

ヒマラヤの巨人へ

一九六五年六月、アンデスの巨人・サルカンタイ峰の登頂を無事果たしたBCでの祝賀会の夜、誰もが酒に酔っていた。そうしたはずみか、星の降る夜空に向かって「次は八〇〇〇メートルや」と誰かが叫んでいる。そして全員がその言葉を口にし、次々にぶっ倒れていった。

テントに入ってからも、声こそ小さくなったが、ひびきは真実性をおびてきていた。

帰国後、われわれは早速若手OBを召集して「八〇〇〇メートル会」なるものを結成した。

当時、ヒマラヤ山系への登山は隣国との緊張などのため禁止されており、カラコルムにしろネパール・ヒマラヤにしろ、その解禁を待たねばならなかった。その時機の訪れを待ちながら、われわれは八〇〇〇メートル峰の研究を進め、会をもつごとに計画は具体性をもってきた。そして、比較的早く解禁されるであろうと予想されるダウラギリへの接近が始められていった。

ダウラギリ!! それは難攻不落の山と呼ばれ、一九五〇年のアンナプルナ登頂から始まる八〇〇〇メートル開拓時代にも、最後まで人を寄せつけなかった巨大な山である。われわれは、こうしたダウラギリの魅力にひかれると同時に、一九六七年にこの山の偉容を目のあたりに見てきた偵察隊の報告に基づいて、さらに強くダウラギリに取り組んでいったのである。

むせるような夏の暑さの中で眼のまわるような毎日が続いた。しかし、全隊荷の船積みを目前に控えて一つの事件が起こった。「カルカッタ港湾スト」の報せを受けたのである。

それまでに精力を使い果たしたわれわれには、これは強烈なショックであった。

苦心の結果、パキスタンのチッタゴンまで船便、そこからダッカ経由でカトマンズまで空輸するということに落ち着いた。だがこのルートは、過去の登山隊には使われていなかっただけに多くの不安を残した。チッタゴンでの陸揚げと通関、プロパン、酸素ボンベ等の危険物の空輸など。だが、航空会社や現地在留邦人の協力と先発隊の苦労によって、予想外に順調にゆき、本隊が羽田を発つ前にすべての隊荷がカトマンズ入りしていたのだから、結果としてこれ程安心な出発も珍しいことであった。

前途に大いなる希望を抱いて八月七日、本隊は日本を離れた。

カトマンズでの煩雑な諸手続きと挨拶を終え、ポカラ入りしたのは十五日であったが、カトマンズ〜ポカラ間の空輸には、ずいぶん手を焼いたことを付け加えておかねばならない。

八月のポカラはまだモンスーンの厚い雲の中にヒマラヤの峰々を包み、容易にその姿を見せてはくれない。十八日、ポカラのにぎやかな「牛祭り」を見物し、昼から空港を借り切って子供たちとサッカーの試合をして、トレーニングを兼ねて楽しむ。翌早朝、久々に晴れあがった空間の中に、みごとに浮びあがったマチャプチャレやアンナプルナの連峰をみる。更に左方には遠く純白に輝やくわれわれの目標、ダラウギリの姿をみつける。あの山こそが長い旅の終着駅なのである。全隊員の顔に緊張がみられた一瞬である。

巨人へのアプローチ

翌二十日、キャラバンは小雨の中に始まった。二百人をこえる大行列がポカラを離れた。第一の幕は切っておとされたのである。

暑い日は水の流れに手足をつけ、ある時は全身をしずめて涼をとる。雨の日はただ黙々と歩き、何度も茶店に坐り込んではミルク紅茶をおかわりする。ある者は目の色を変えて蝶を追い、またある者はその日のニワトリを追っかけ

まわしている。やがてベニに入り、そしてタトパニに着く。なま温かい温泉に旅の汗を流し、身を清める。キャラバン中の難関はムリからダウラギリへのマヤンディ・コーラのルートである。一九六七年の偵察隊は上からこのマヤンディを下って来ているが、十日近くも費やして苦労している。

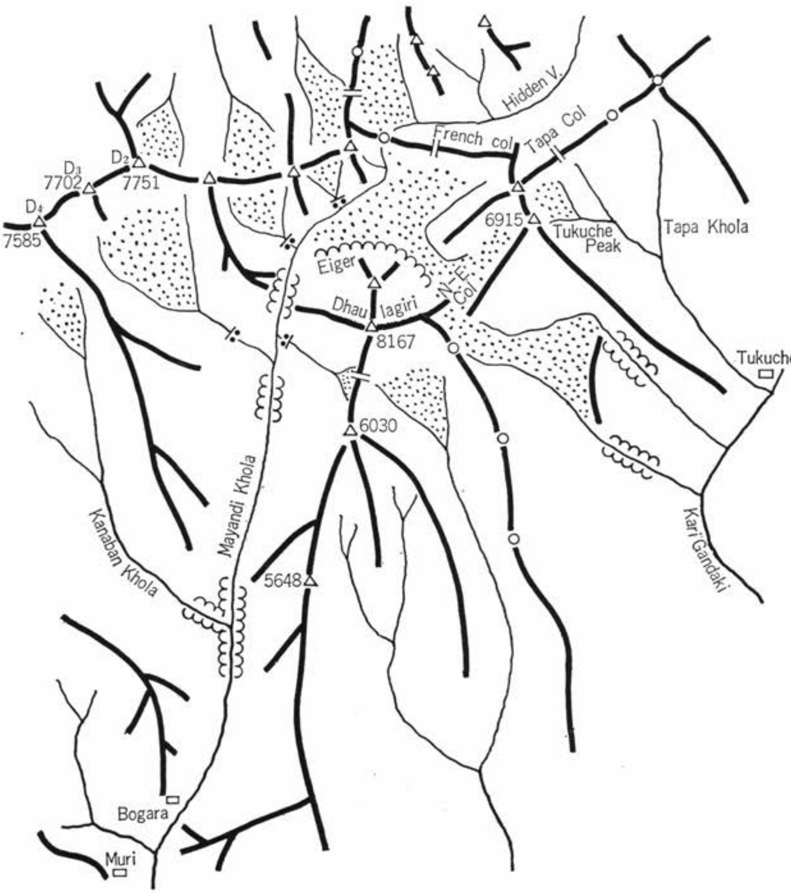
われわれはタトパニから先行隊を出し、ルートの選定にあたらせる。ジメジメしたこの谷筋は蛭の洗礼なくしては通過できない。ヌシシナという植物の毒葉にしばしば身を当てて悲鳴をあげることも、キャラバン中に受ける試練である。

コーナバン・コーラの通過は、幸運にも橋があり難なく渡るが、一日おくれの本隊の通過時は、この橋が流され、架橋に思わぬ時間をとる。ポーターの橋工作技術には目を見張るものがあった。慣れた手付きで竹の皮をむきとり、次から次へと丸木を固定してゆくのである。

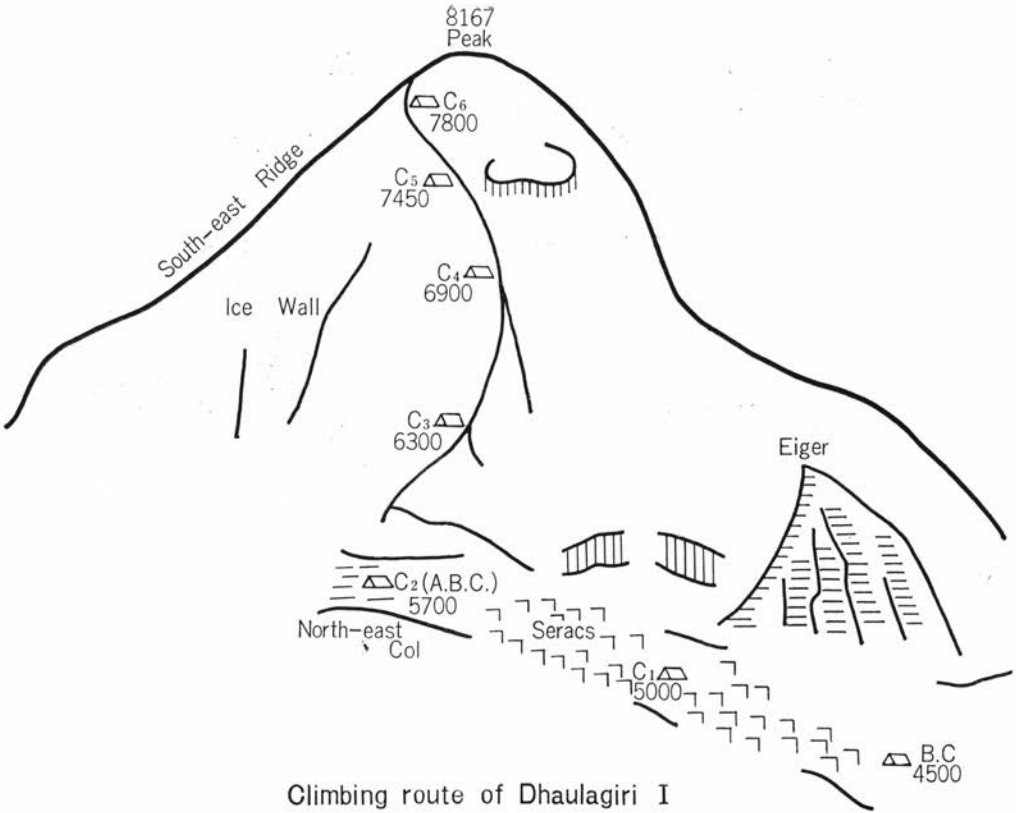
九月一日、ついにマヤンディ・コーラのゴルジュにつき当る。そこから上部は氷河とモレーンの世界になり、不毛の地となる。その日、半日を費やしてゴルジュ通過のルート工作にあたる。そしてすぐ上にある最後の草地（三九〇〇メートル）をわれわれの休養キャンプ地と定める。

本隊と合流するまでに先行隊はベースキャンプ地を確定すべく、モレーンと氷河の谷を登るが、連日のガスのため周囲の状況を見極めることが難しい。四〇〇〇メートルを越えると多少頭痛を感じるが、大したことはない。

三日、本隊と合流、そして翌日はキャラバン最終日である。ポーターの大部隊が氷河の中に入ってゆく。氷河上を吹きぬける冷たい風の中を質素な服装と素足で登行してゆくポーターの姿は、勇ましいというよりわびしいものに見える。賃金を手にして思い思いに谷を下ってゆく彼らのうしろ姿も、また、一種のあわれを感じさせる。とにかく、十六日間のキャラバンは何のトラブルもなく終了した。そして、われわれは全身でダウラギリの巨人にぶつかる時を得たのである。



Sketch Map of Dhaulagiri Region



Climbing route of Dhaulagiri I

登攀・その一

九月六日、快晴の休養キャンプで登攀開始を宣言し、四五〇〇メートルの高所順応を終えた者からBC入りしてゆく。

その日初めてダウラギリの全容を目のあたりにする。しばし呆然として氷河の上に立ちすくんだ。首の痛くなることも忘れて、この急峻な白い巨人を見あげたが、ただすごい威圧感のみを感じる。足元には黒々とそびえたつアイガー岩峰がわれわれをにらみつけ、上半は純白の鎧をまとい、一分のスキも与えてはくれない。ただ一つの入口はズタズタに裂けた氷をぶらさげたアイス・フォールとなって、戸閉まりしているようである。われわれの背後には、未登の高峰ダウラギリⅡ峰が美しい三角錐となって、これもまた、天空にそびえ立っている。

翌七日から、アイス・フォールの中にアイゼンとピッケルの音が響きわたる。高さ四〇〇〇メートルのこの迷路は、至るところでわれわれの志気を挫折させ、消沈させて追い返えす。そのたびに地底深い所で不気味な笑い声をたてている。

われわの行動は続く。アイス・フォールの対岸に司令塔を設け、ルート工作隊に上部の状況を連絡する。この場所からはダウラギリの全容がよく見え、特に北東稜が青空の中にくっきりと曲線をえがいている。一九五八年、マックス・アイゼリンがダウラギリ登攀の可能性を初めて北東稜にみつけたのも、おそらくこの辺りに立ってのことだろうと思うだけで、なつかしい気分になる。時折、アイガー岩峰からおこる落石はすさまじく、そのまきあげる煙りはアイス・フォール全体を何時間も包んでしまう程である。

十二日、苦闘の末ついに上部へのルート開通、そしてC1地点（五〇〇〇メートル）に到達。十五日、全隊員と全シェルパの貨物列車が迷路の中につづく。翌十六日、A隊（隊員四名、シェルパ二名）がC1に入る。

残りは荷上げだ。しかし、アイスフォールの状態は連日はげしく変わり、そしてくずれる。そのたびに修理工が出掛けねばならない。まだモンスーンも明け切らず、アイス・フォールは安定期に入っていないようだ。

Ａ隊の任務はマヤンディ氷河の真只中から第二のアイス・フォールを越えて北東コルにＣ２（ＡＢＣ）を建設することである。第一のアイス・フォールに較べればいく分安定はしているが、至る所にヒドン・クレバスがあり、この工作隊をずいぶん悩ませた。

二十日、Ｂ隊（隊員四名、シェルパ二名）がＡ隊のサポートを受けてＣ２に入る（五七〇〇メートル）。北東コルは一九六〇年のスイス隊がピラタスポータ機を着陸させた場所であり、広々とした雪原の鞍部である。このコルからはじまる稜ともいえない北東稜は、一気にダウラギリの肩までつきあげ、左に曲り頂上から続く稜につき当っている。

Ｂ隊は、この突起とも云うべき北東稜上にＣ３を設営すべく、最初の雪面を右側から入ってゆく。六人が一列になり一つの壁を乗越そうとした瞬間、トップの足元から雪面が大きく動いた。身を確保するヒマもなく全員が重なるようにその波にのまれ、下方のクレバスに向かって流されていった。幸運にもその洪水は百メートル程移動してクレバスのすぐ上で止った。アイスバイル、メガネ、時計などを身代りにして、全員が無傷でその場を脱出した。その日はショックのためＣ２に舞い戻ったが、翌日同隊は再び上に向かった。そして二十七日、立派にその役目を果たして、Ｃ隊（隊員四名、シェルパ二名）をＣ３（六三〇〇メートル）に送り込んだのである。その間、高所の影響により体調をくずし、下部キャンプに下らざるをえない隊員もいた。六〇〇〇メートルの線がやはり高所順応の第二の壁のようである。

連日、天候は意外に安定しており、荷上げする者の中には腕をまくりあげてムギワラ帽子といういで立ちもいる。高所の影響より熱射病の方がこわいという者もいる。

Ｃ隊は北東稜の核心部に向かって登攀を始めるが、Ｃ１から見あげた感じとは全く違い、雪面は傾斜を増し、足を

入れると今にも崩れ落ちる感じがする。

出発地点からフィックスト・ロープをのばしてゆかねばならない。結果として、C3〜C6（A・C）間は、約四〇〇〇メートルのフィックスト・ロープが一部のスキもなく張りめぐらされた。

この北東稜上にはほとんど休憩の場所がなく、ただ尾根上にできたキノコ雪のような断層の下に多少の平地があるのみで、その間は急な雪面がのびているだけである。

ロープは思うように上にのびず、ただ時の流れだけがむしょうに速い。連日の努力もむなしく、C隊は十月二日C4地点を確認できないままに、六八〇〇メートルから引きさがってしまった。

再びA隊の登場となる。彼らの前進力はすばらしく、五日、ついにC4（六九〇〇メートル）に二人の人間を送り込むことに成功。

しかし翌日から天候は急変し、余儀なくC4を閉鎖し、下部キャンプに下らざるをえなかった。

ツクチェの村に祭りがある頃、必ず天候がくずれるとシェルパはいう。ダウラギリは、三日間、われわれに雪のプレゼントをドッサリと贈ってきた。

ポスト・モンスーンの登攀といえば、思いうかべるのはまず風と寒さということだが、ここでは連日の降雪に苦しめられた。

九日、天候はやっと回復するが、そのままきびしい寒さを残していった。われわれはこの間のおくれを取り戻すべく、大ラッセル部隊を組んでC3入りし、C4再建に全力を集中する。しかしこの巨人は新雪の鎧をまとい、容易にルートの復旧を許さない。C4に向かう途中、いつもの休憩場所にたどりつくほんの数メートル前で、われわれのトレースを境にして雪面が二つにわれた。やっと掘り出したフィックスト・ロープにしがみついた時、足元の左側の雪がスーッと動き、次の瞬間もうはるか下の東氷河に消えていった。すごい雪崩であったが、われわれはまたしても幸

運の女神に救われた。
急雪面をけずって、埋め込むようにつくられたタカの巣状Ｃ４に再び到達したのは、十三日のことであった。
当初の計画では、登頂予定日を十日〜十五日と定めていたが、計画変更を余儀なくされた。二十日を過ぎると登頂は難しくなるだろう。それにもかかわらず、われわれはまだＣ４から一歩も上に向かってはいない現状である。八〇〇〇メートル峰の難しさ、偉大さ、奥深さを感じるとともに、胸中には焦燥感が広がりはじめた。晴れた日、この北東稜からツクチェやレテの村がカリガンダキの流れに沿って小さく見える。一日も早くあの村にくだりたいと思う。果たしてその時、われわれは喜びに溢れているか、それとも悲惨な敗北者か——。
いずれにしても、残された数日間を精一杯頑張る以外にないことを誰もが知っている。そして今何が一番大切であるかということも。乱れやすい精神、狂いやすい情緒、これをしっかりと保つには、相互の信頼と頑強な意志しかないのである。
長い年月の最後の一瞬が近づいてきた。

登攀・その二

翌十四日から再び一つのかたまりが上に向かって進みはじめた。北東稜もやがて肩につきあげて終ろうとしているが、その最後の部分は胸をつくような雪壁となり、容易にルートを与えてはくれない。途中の小さな岩のテラスにテントの布地らしきものがへばりついている。まぎれもなく人間の残したものである。十年前のスイス隊のものか、十一年前のオーストリア隊のものか。なつかしい想いで触れてみる。近くにあったＢ型カラビナを一つ収集する。彼らはどんな想いでこの地に滞在したことだろうか。しかし、われわれはそんな感傷にふける余裕もなく、そこを離れる。その日は状態の極めて悪い急雪面に行き詰り、退却する。

明日もう一度出直しだ。こんどはスイス隊のルート（右の岩稜）に入ってみよう。

十五日、再び北東稜最後の壁にへばりつく。スイス隊のルートにはやはり入れない。思案したが残されたルートはただ一つ、昨日のルートをのばすしかない。今にも崩れ落ちそうな雪壁に一つ一つ穴をあけ、はい上ってゆく。緊張の連続であった。だがついに小さな雪庇をくずして肩に立つことができた。思わず下に向かって手を振った。しかし見上げると巨大なアゴが右手にせまり、上部は黒々とした岩壁が幅広くそそり立っている。とても楽観視できない。この肩から一〇〇メートルのフィックスをのばして引きあげる。C5はこの付近の雪面をけずらねばなるまい。

翌日川井、安井の二隊員がAC建設へのルート開拓のためC5（七四五〇メートル）に入る。この頃、C2の河野からは、日本への登頂報告の手順を上部の隊員にしらせてくる。しかし、前線はそんな余裕の一片もない。これからのルートは今までと同じか、それ以上の困難性を有しているのに、下の方では何と気楽なことを考えていることか――。しかし、こうしたなかで期待の声は日ましに強くなってきていた。

十七日、二隊員は稀薄な空気と黒い岩壁のジャングルの中につき進んでいった。その報告は悲観的だった。十八日のAC建設予定を変え、再び別天地への開発を進めた。酸素ボンベを背負っての行動は初めてのことであるが、やはり効果はあるようだ。最年少の安井（二十一歳）はすごい張切りようで、一人でフィックスト・ロープをのばしている。彼の健闘振りはまさにすばらしいが、この日も岩の混じる急ルンゼの突破だけに終った。

翌十九日はAC入りの日というより、二十日をリミットにして最後に残された一日である。われわれの計画も来る所まできた。本日川田、ラクパ・テンジンの二人の登頂隊は、力強いサポートを受けて、昨日の最終地点を更に進んで雪壁に入り、岩の部分に入って高度を徐々にあげていった。フィックスト・ロープはついになくなり、急雪面にわれわれの最後の宿場を作りはじめた。だがピッケルを二、三度振ると息切れがし、手足の指も急激に冷え、痛くなってくる。この天上の作業が一時間以上も続き、やっと小さいテントが建った（七八〇〇メートル）。C4がタカの巣

ならばACはワシの巣と呼ぼう。スイス隊のACはわれわれの左方尾根上のほぼ同高度に張られたようである。
その夜、ACと各キャンプ間では興奮の交信がつづいた。二人は酸素マスクを口に付けて横になる。明日一日がわれわれにとってどう開かれるか、好天を祈るより他ない。

頂上へ

真夜中、何度も目が覚める。空腹のせいもあったが、やはり不安と期待のためであろう。三時、サーダーのラクパ・テンジンが動き始める。私も動かないとテント内に空間がつくれない。雪をとかし、昨夜と同じ米の粉を湯でねって口にする。私は後悔していた。C5を出る時どうしてラーメンをポケットに入れなかったのか。肉も欲しい。われわれの準備はノロノロしたものだった。風は昨夜以来相当強く吹きつづけているが、陽の光りとともに消えてゆくことだろう。サーダーは声に出して今日の祈りをしている。彼にとってもわれわれと同じくらい重要な日なのであろう。
出発だ。すでに陽がさし、ぬけるような青空がひろがっている。酸素ボンベはサーダーが一本、私が一本背負う(すべて私の分である)。
最初にして最後の、このチャンスをいかに利用すべきか、数日前から悩んだところだ。八〇〇〇メートルの経験をもつサーダーを参加させることによって、持ちあげるボンベの数を減らし、ただ一回のサポートと荷上げで登頂を可能にする方法をとったのである。
七時、カチカチの体が二つ、上に向かって動き始める。やがて快調に右上方の雪面に向かって進む。この調子なら最高だと思いながら三十分程行くと、どうも足が重くなり、呼吸も乱れてきた。八〇〇〇メートルラインに近づくと苦しいのは当り前だ、ここでがんばらなくては、と思いながらしばらくゆく。一度サーダーが近づいた時、ボンベのゲージを見てもらうとゼロだという。おかしいことだが、起きてはいけないことが起きたのだ。しかしここではとて

もボンベの交換は無理だ。そのまま苦しい登攀を続けることにする。ルートは行き詰り、目の前の岩まじりの壁を登るか、大きく右にトラバースして稜線に向かうか、いずれにしろ稜線に出ないといけない。意を決して目の前の壁を直登する。アイゼンのツァッケを岩にひっかけながら三ピッチ程攀じると、やっとやせた稜線に出た。南面側が気味悪い程一気に落ち込んでいる。サーダーから酸素ボンベをもらい、新しい活力を得る。目の前に大きなピークが見える。「あれが頂上だ」とサーダーはいう。私は偵察隊の望遠レンズでとった写真を見ていたので、「にせピークだ」といいかえす。しかし本当にあれが頂上であればどんなに嬉しいことか、と祈るように登ってゆく。やがて白い頂上に立った。だがガックリだ。細い稜線がさらに細くとがったようになって奥深く続いている。でも失望することはない。天気はすばらしく、風も全くない。このにせピークからC2、C1、BCが豆つぶのように見える。頂上はまだ現われない。

休むことも忘れて前進をつづけた。だがとてもこのやせ尾根はいやらしい。左斜面の雪はある程度かたく、足をおくとバーンと五〇センチメートル四方位が割れる。不気味だ。右側はやわらかくズボッと入ってしまう。前進は遅々として進まない。しかし、いくつかの小さいピークを越えると、突然本当の頂上をみつけた。「あれだ、まちがいない」とサーダーに合図する。二人は休むことも忘れ、いや何もかも忘れ、ただとりつかれたように歩を進めた。帰りのキャラバンが、あの明るいツクチェやレテの村々からやがて始まるだろうことを頭のすみで感じながら。

おわりに

とにかく幸運なわれわれのダウラギリ登頂は果たされた。二日後、白い雪煙を長くなびかせている頂上を見上げながら、われわれはBCに下り立ち、白髪のふえた隊長とかたい握手をかわした。この時初めて本当の登頂の喜びを感じた。

全員無事というより、全隊員と全シェルパの力がみごとに調和した今回の登山であった。やがてツクチェに下り、レテに別れを告げて、キャラバンは悠々ポカラに向かった。

なお、同志社大学ヒマラヤ・ダウラギリ登山隊のメンバーは次のとおり。

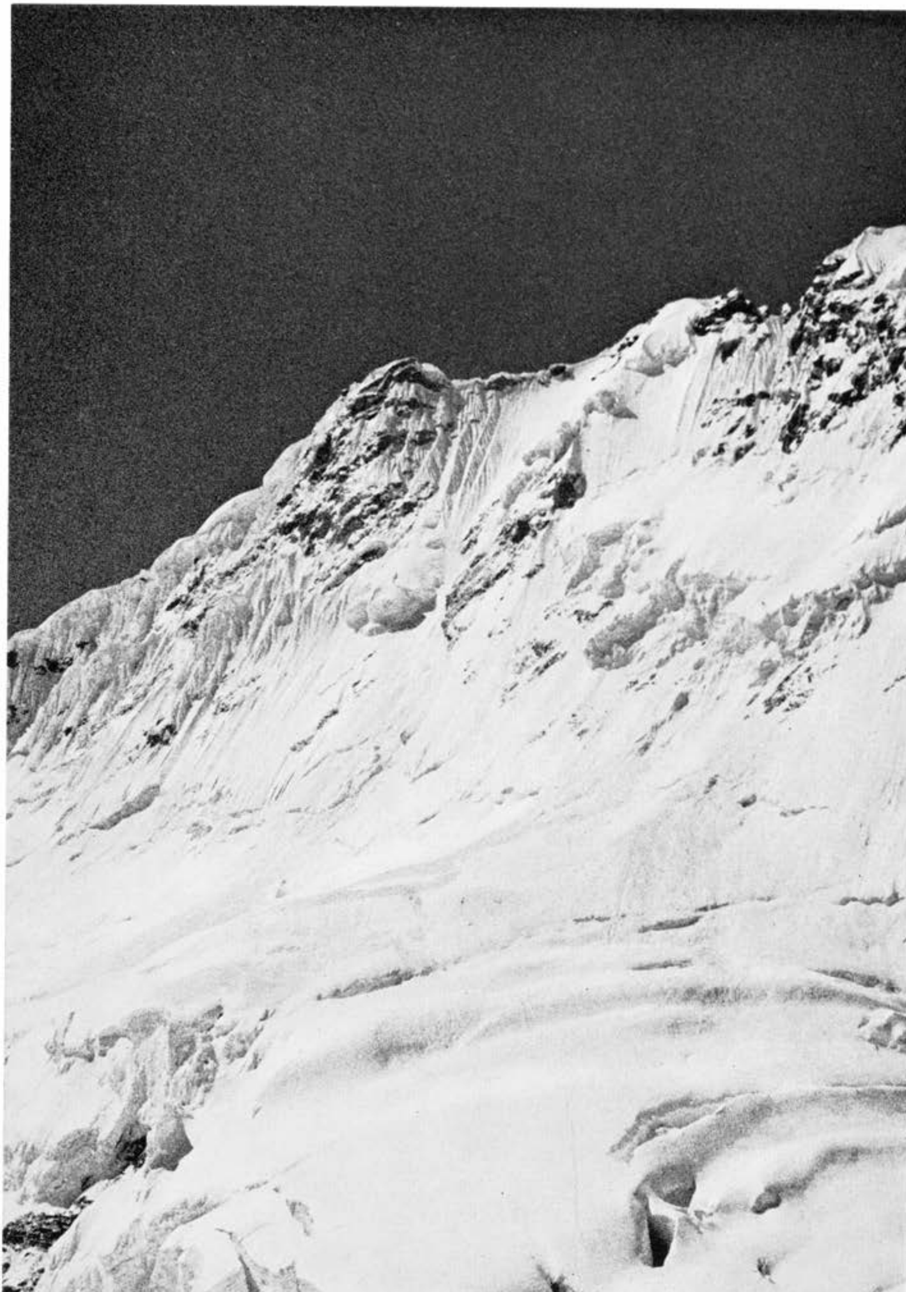
隊長　太田徳風（58歳）
副隊長　今成征二（30歳）
登攀隊長　川田哲二（30歳）
隊員　河野吏（30歳）、小川允巳（28歳）、川井康男（30歳）、堀江礼二（27歳）、
椎塚直人（29歳）、西村誠夫（28歳）、宮川清彦（27歳）、和田豊司（24歳）、
石川博（23歳）安井忠（21歳）、山辻英也（33歳 医師）

タパ・コーラからみたダウラギリ I 峰と北東稜
Dhaulagiri I and its North-east Ridge seen from Tapha Khola.

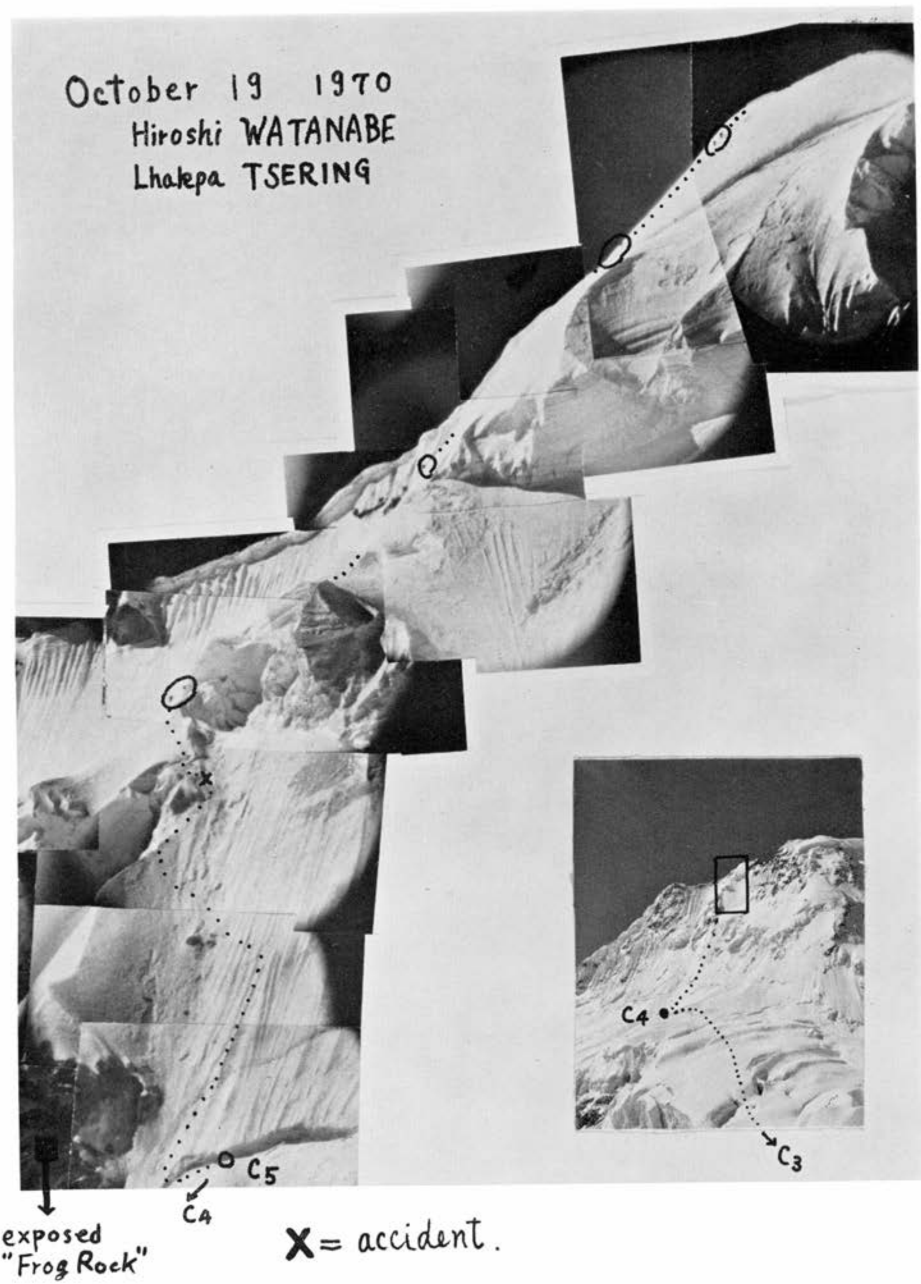
C 3 (6300m) から見た北東稜上部
The Upper part of the North-east Ridge of Dhaulagiri I seen from C 3 (6300m).

北東稜上6500m附近を行動中の隊員たち、後方はアンナプルナ連峰
Climbing up the North-east Ridge of Dhaulagiri I, Annapurna Range mountains are seen behind.

Dhaula Himal mountains seen from the summit of Dhaulagiri I. Left to right; Gurja Himal, Dhaula VI, Churen Himal, Dhaula IV and Dhaula V.



東尾根P 1 から見るP-29の東面
P-29 seen from the Peak 1 of the East Ridge. (by H. Watanabe)

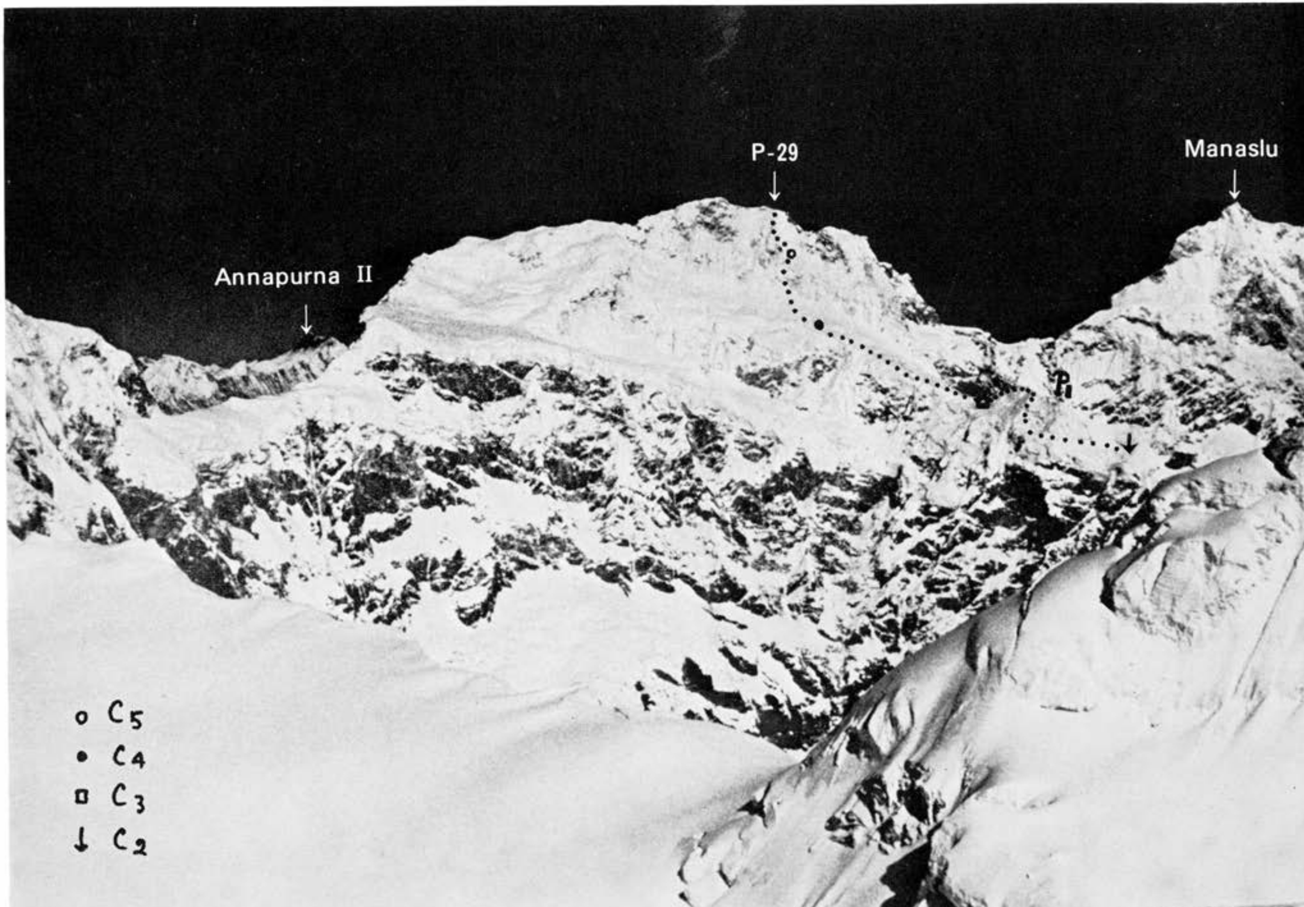


P-29登頂、C 3 (6300m) から望遠鏡を通して見る。
The Ascent of P-29 seen from C3 (6300m), through Telesclope on Oct. 19, 1970.
(by S. Sumiyoshi)

午後1時、頂上へ向かう渡部隊員とハクパ・ツェリン
H. Watanabe and Lhakpa Tsering on way to the summit at 1:00p.m.
(by S. Sumiyohi)

午後3時、頂上から下る両隊員
Climbing down from the summit at 3:00 p.m.
(by S. Sumiyoshi)

遺品：折れた渡部のピッケルと小石
Watanabe's broken ice axe and a piece of stone.
(by S. Sumiyoshi)

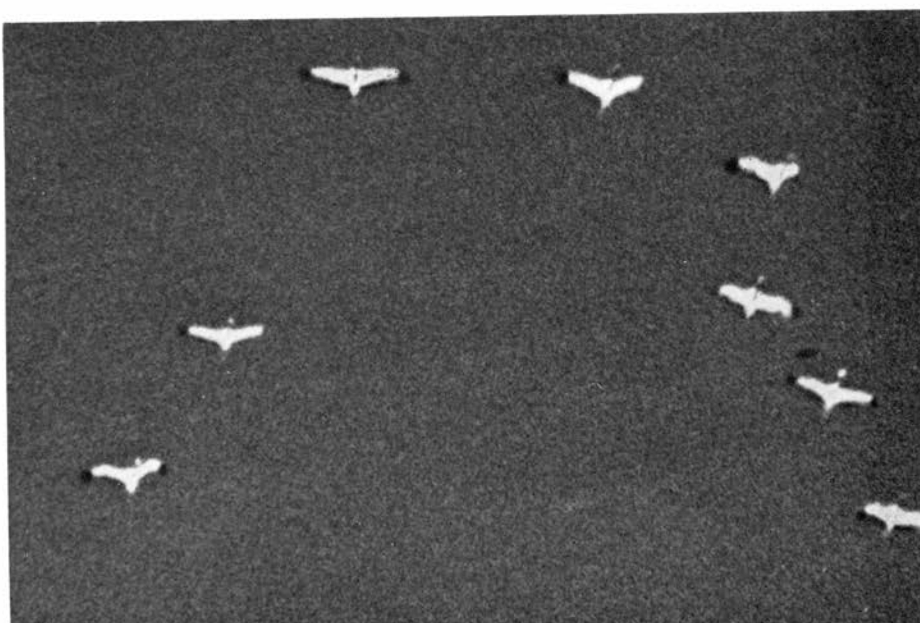


P-29 東面と登路（1959年、ヒマルチュリ東尾根から撮影）
P-29 from the east side. Climbing route is marked
(by S. Sumiyoshi)

P-29西面（ナムンバンジャンより見たマナスル三山）

P-29 and its surroundings from the west side. Left to right: Manaslu (8156m) P-29 (7835m) and Himalchuli (7893m).

(by Toshio Imanishi)



モンスーン明けを告げる渡り鳥（6000m～7000mを南行、C 2 5800mにて10月11日写す）
Migrant birds flying over Himalayas around 6000～7000m from north to south, taken at C2 on Oct 11. (by S. Sumiyoshi)

P二九登頂（一九七〇年秋）

住吉仙也

登頂の一日（写真参照）

一九七〇年十月十九日。朝、無風快晴。ここ第三キャンプ（六二五〇メートル）の気温は氷点下十五度。モンスーン明けの雲一つない空は、青よりも紫に澄んでいる。正面のP二九、その右、左にマナスル、ヒマルチュリと並ぶ豪華な舞台は、朝焼けのバラ色に輝いている。

六時、「今から出発します。」無線機から張り切った渡部の声が凍った空気を振るわすと、第五最終キャンプ（七五〇〇メートル）を作ったシュルンドから二つの黒点が躍り出る。ここ第三キャンプでは肉眼と望遠鏡での観戦が始まった。

渡部とハクパ・ツェリンの二人はキャンプ下にデポした固定ロープを背負う。シュルンドは難なく通過、ホッとする。

次が氷壁中の難場、傾斜六十度、高度差約一〇〇メートル。われわれが〝蛙岩〟とよんでいる露岩の右上。白扇を

立てたような浅いヒマラヤ襞の氷壁。スピードは遅いが、確実に、リズミカルな動きで一歩一歩登っていく。渡部がトップ。蹴爪だけでは駄目なのか、ステップを切るのが多い。初め直登、それから左寄りに一ピッチ、一ピッチと高度を上げていく。アイゼンの氷をかむ、かれた音が聞えてくるようだ。しかし望遠鏡から離れて目を転ずると、白と紺の無音の世界。そして二人は静止した二つの黒点。

朝から渡部がトップ、ハクパ・ツェリンがセカンド。パートナーの選択は渡部に百パーセントまかせたが、この二人はよほど気が合うのだろう。昨年の遠征以来の馴染みで、今回は特によくザイルを組んでルートをひらいていた。ことに渡部は昨秋遠征の帰路から、唯一の中心となって準備に当たり、その熱意と執着はものすごかった。またハクパ・ツェリンにとっては、実兄のイラ・ツェリンがサーダーとしての初遠征で張り切るのも当然である（一九七〇年プレの日本エベレスト隊では、チョタレと二人がサーダーだった）。ともに闘志満々、登頂の気構えがベースキャンプ以来ありありと見えていた。

それにしても固定ロープが見えないのはどうしたことだろう。無線機の調子が悪く連絡は難しい。この氷壁を越えるまでは確実にロープをフイックスする約束である。予定でもまだ三日の余裕がある。上部での難場を予想して、降りに固定するつもりだろうか。あるいは氷の条件がよいのか、しかしステップを切っている。それにしても午後の日蔭と寒さ、氷の硬さは充分わかっているはずだが。

十時。時計を見直すほど時間の経つのが早い。小さい氷稜にとりつく。これに続く上部の懸垂氷河断端こそ、数日前にも知らせた一番手こずりそうな所。ここを左に抜ければあとは傾斜も四十五度ぐらいにゆるくなる。今までのリズムが止まり、動きはのろい。この高さは渡部にとって初めてだ。渡部がジリ、ジリと動く。ハクパがダブルロープを這うようにして確保している。渡部が止まる。アイスバイルかピッケルを振るう。左右の足場を変える。少し戻る。酸素ボンベは背負っているが、マスクを着けて吸っているのかどうかはわからない。スクリューピンをねじ込ん

だのか、止まっていた姿が少しずつ動き出す。また止まる。足場を刻む。一歩、さらに一歩。見ている私もくちびるをかみ、息をこらえ、苦しくなっては激しく深呼吸し、彼の動きにつれて上体をひねっている。

ギラギラ光る氷のフットライトを浴びながら渡部の動きは変らない。

ハクパとの間隔がかなり広くなった。この一ピッチで通れそうだ。渡部の動きが止まる。坐り込んだ姿勢。確保に入った。ああ、やっと越えた。ハクパがゆっくり動き出す。

十一時。やっと頂上に続く氷稜の左に抜け出る。鏡のような氷を背にして二人は休んでいる。何を見、何を思っているのか。

十一時十分。再び動き出す。今度はコンティニュアスで。しかし残念ながら、ここからは氷稜のかげに隠れて見えない。

十一時三〇分。望遠鏡でチラリと見えたがまた隠れる。照りつける日ざしは暑い。朝ここを出発した田中、黒岩、サーダー、パサン・ノルブは、雪崩跡を第四キャンプへ登っている。代って第四キャンプからすでに降りてきた大笹、大野は、休養のシェルパと観戦に忙がしく、かわるがわる望遠鏡にしがみついている。雲一つなく晴れ渡った紫の秋空は、氷の輝きを一層まぶしくさせる。一次、三次の遠征が念頭をよぎる。

十二時四〇分。再び現われる。やはり渡部トップ、スカイラインを快調にとばしている。セカンド、ハクパ・ツェリンとの間隔が広いようだ。渡部の調子はよほどよいのだろう。ここまで登れば、あとは問題ない。この辺については、昨年以来ヒマルチュリ隊やマナスル隊が撮ったもののほか、いろいろの写真を見ながら何度も話し合った所だ。

一時十五分。頂上の小台地が作る雪庇の横で、二人の動きは一つになって止まる。握手し抱き合っている。しかし休みもせず、さらに雪庇の向うへ雄姿は消える。頂上は手中のもの。アンナプルナが見えるだろう。たんまり写真と

石をとってこい。

姿の見えぬ時間がやけに長い。相変らずの無風快晴。

三時。待ちに待った二人が同じ雪庇の横に現われた。一時間四十五分の何と長かったことか。すでに陽は傾き、二つの影が長い。背負子をはずし、荷を作り直しているらしい。しかしすぐに降り始める。軽快な動きは変らず、登りには見えなかった一歩ごとに吹き上げる雪煙が、あかね色の逆光に輝いて美しい。

四時二十分。やっと下の方に現われた。例の難場の上だ。夕日は主稜線に沈み、逆光の陰でもう望遠鏡でも見にくい。第三キャンプも寒くてたまらぬ。そこも寒いだろうが急ぐな。注意しろ。

四時五〇分。わたしは五時の定時交信のためテントに入り、ベースキャンプに「登頂」を伝える。

夕食はうまかった。わたしにとって、一年半も続いた遠征食（一九六九年のP二九、一九七〇年のエベレストと今回のP二九）は、食欲があっても喉を通りにくい。しかし今晩の食事は実に豊かに思われた。

七時過ぎ、第四キャンプから三つのライトが降りてくる。誰だろう。不調の無線機に業をにやしたやつに違いない。意外なほど早いスピードで近づいてくる。月明りに黒く長く浮かび上がったトレースを音もなく近づいてくる。シェルパ達のなにか呼びかう声が凍った静かな夜気をふるわせる。

近づいた。もうすぐ……。と突然シェルパの号泣。「どうしたんです」と大笹や大野が問う。「シェルパも登頂すりゃうれし泣きするよ」私は何気なく答えたがどうも異様な感がする。成功の感激にしてはおかしい。シェルパが「ハクパ・ツェリン」といっているのも変だ。アン・ナムギャルが私の側に来る。老練沈着そのもののシェルパ。「どうしたんだ」と尋ねると、同時に答えが返ってきた。「渡部サーブ、ハクパ・ツェリン、フォールダウン、ダイ。」

わたしの顔から血の気が引いていくのがわかる。「ダイ?」ともう一度聞きなおすのもうわの空、しゃがみこんでしまった。一体どうしたんだ。意外にも今日第四キャンプへ登ったばかりの田中、サーダーのイラ・ツェリン、パサン・

ノルブがかけ込むように到着する。シェルパの号泣が激しい。うるさい。「黙れ」といいたい。

田中から詳細を聞く。第四キャンプも登頂の喜びに湧いていた。五時前、突然サーダーの叫び声でテントを飛び出した。するとすぐ近くに二つの動かない体が転がっていた。サーダーは「スーッと黒い物が滑って止まるのを見た」という。第四キャンプから一〇〇メートルほどの距離、酸素を持ち全員がかけよったが、そこには手の施しようもない二人が、しっかりとロープで結ばれ横たわっていた。

サーダーがわたしに抱きついて狂ったように泣き出す。パサン・ノルブは静かに泣きじゃくりながら、わたしを抱く。いったいわたしはだれに抱きつき、だれに向かって泣けばいいんだ。

シェルパをテントに入れる。一人で見上げる氷壁は、昼の舞台、今起こった不幸とはかかわりなく、まったく静かである。夜目にもクッキリと浮かぶ稜線が、次第にゆがみ、悲しさがこみ上げて来た。(十九日の「日誌」より)

第一次隊よりの経過

七八三五メートルの未踏峰。望見したかぎりよい登路はなく、試登もされていない。山麓の地形も判然としない空白。これが一九六一年のP二九であった。この年、第一次遠征、西面の地形解明。第二次(一九六三)、東面の登路確認。第三次(一九六九)、七四〇〇メートルまで登攀。そして今回第四次(一九七〇)、悲しい事故と共に待望の登頂をなしたのである。

今までの第一、第二および第三次隊は、すでにそれぞれ『山岳』第五十七年、第五十九年および第六十五年に報告されているので、ここにはそれを補足要約する。

第一次隊 一九六一年春(隊長篠田軍治、登攀隊長住吉仙也、他隊員六名)

P二九東面は徳永(マナスル三次隊)、住吉(ヒマルチュリ・村木隊)により観察されたが、頂上直下に困難な氷壁があることにより、地形不明

の西面に登頂の鍵を求めた。

マルシャンディからムシ・コーラを経て入り、この谷の奥からP二九西尾根とも呼ぶべき低い西に延びる尾根を越え、P二九とマナスルから出る氷河（ツラギ氷河）のサイド・モレーン上にBCを設営した。P二九の西面をなす大岩壁は、すでにナムン・バンジャンからの写真（今西寿雄氏撮影）により、登路としては絶望的であったため、このツラギ氷河をつめてP二九とマナスル間のコルに出るルートに望みを託した。しかしこの氷河の奥のアイス・フォールは廊下状をなして狭まり、両岩壁からの雪崩とアイス・フォールそのものの烈しい動きで極めて危険であり、登頂を断念した。

しかし六七〇〇メートル峰の試登など、これまで空白か不正確な間違った地図しかなかったこの地域の盲点を解き、ツラギ氷河、氷河湖およびこれより流れるドナ・コーラを下ってマルシャンディに帰路をとった。

第二次隊　一九六三年秋（隊長篠田軍治、偵察隊長木村裕一、他隊員三名）

第一次隊の結果から、一応西面登路をあきらめたわれわれは、第二次隊として東面のブリ・ガンダキから偵察隊を入れた。サマからプンゲン氷河に入ったが、その奥はアイス・フォールの状況が悪く、東尾根に転じて比較的安全なルートを見つけ、この東尾根の基部約六一〇〇メートルまで達し登頂の可能性を見付けた。さらに同隊は帰路ラルキヤ・ラを越えてP二九西面も偵察し、第一次隊同様この面からの登攀ルートは極めて危険かつ困難であり、登路としては東尾根が可能性ありと報告した。

登山禁止　二次隊の報告に基づき、登頂を目的とする一九六五年遠征隊の準備にかかったが、相前後してネパール政府のヒマラヤ登山禁止令が出され、計画は中断の已むなきに至った。

第三次隊　一九六九年秋（隊長住吉仙也、他隊員一〇名）

一九六九年春、登山禁止令を解除する新登山規則が施行され、同時に許可を得たわれわれは登頂を狙える初めての隊として第三次隊を送った。同隊は登路として東尾根かあるいはプンゲン氷河を登るべきか、改めて偵察検討した結果、やはり安全性の上から第二次隊踏査の東尾根ルートをたどり、キャンプを進めた。

十月二十四日、頂上直下、高距約八〇〇メートルの氷壁基部、六九〇〇メートルにC5を建設。

しばらくのヒマラヤ登山禁止のためか、高所ポーターたるべきシェルパの高所での活躍は期待に反し、加えて堅氷では何ら頼るべきものはなかった。幸い隊員の高所順化は完璧に近く、C5に隊員のみ八名が一週間以上滞在して氷壁のルートを拓いていった。しかし十一月に入ると気温の低下と共にジェット・ストリームの影響は次第に強く、雪庇や氷塊のルートへの落下ははげしくなり、十一月二日、七四〇〇メートルまでのロープ・フィックスをもって登頂を断念した。

第四次隊・一九七〇年秋

隊長　水野祥太郎（63歳）大阪大学名誉教授
登攀隊長　住吉仙也（43歳）阪大医学部所属、第一次、第三次参加
隊員　田井英夫（32歳）阪大工学部助手
三枝礼子（37歳）阪大薬学部卆、東京芸大学生、第三次参加
豊坂昭弘（29歳）大阪警察病院勤務
大笹秀一（27歳）住友重工（株）勤務
渡部　洋（26歳）理学部研究生、第三次参加
大野義照（26歳）工学部助手
田中喜樹（23歳）工学部学生、第三次参加
石原敏雄（24歳）理学部研究生
黒岩芳夫（22歳）経済学部学生

シェルパはサーダー＝イラ・ツェリン（39、ナムチェ）、ラクパ・ノルブ（33、ターメ）、ハクパ・ツェリン（34、ナムチェ）、アン・ツェリン（コック、46、ナムチェ）、アン・ナムギャル（35、ターメ）、カルサン（36、ナムチェ）、テンジン（32、ナムチェ）、パサン・ノルブ（29、ナムチェ）、カミ・ノルブ（27、ナムチェ）、ナチ（22、ジュンベシ）、の十名。ローカル・ポーター・シェルパ六名。キッチンボーイ二名。

第三次遠征を反省検討し、今回は以下の点に特に留意した。(一)時期を早めること。(二)氷壁におけるスピード・アップ。(三)氷壁途中に建設可能なハンギング・テントの考案。(四)隊員のみならずシェルパに対しても高所順化の

P二九登頂（1970年秋）

ための行動に配慮する。(五)その他はほぼ第三次隊に準ずる。

(一)時期は第三次より十日は早く九月十日から十月一杯の五十日間を登攀期間とし、十月二十日前後を登頂予定日とするよう計画した。ジェット・ストリームの来襲は年により異なるであろうが、昨年の経験では十月末から十一月に入ると同時にこの洗礼を受け、気温の低下と相まって、氷壁登路に流落する雪崩や氷塊が急増した(殊に主稜線からの雪庇の崩壊)。事実いままでのポスト・モンスーン期における七五〇〇メートル以上のヒマラヤ登攀では、西辺の峰を除くとほとんど十月二十日前後に登頂を成功させている。一方、早ければ早いほどよいわけではない。モンスーン明けが平均十月初旬であること、高所生理的に四〇〇〇メートルのベース・キャンプ以上は五〇日を妥当とし、それを超えた場合、著しい体力の衰退に加えて最後が氷壁登攀では大した成果も期待できないと考えた。たとえ気象や生理条件が幸運に恵まれても、更に長期の登山は食糧、燃料の増量を来たし、ポーターや資金にまで影響を及ぼすであろう。

(二)スピード・アップについては氷壁における気象、殊に風と気温およびこれらに左右される氷の硬度に関係する。局地的な風は致しかたないが、幸いにP二九東面はジェット・ストリームに対し主稜線の風蔭になる。気温は(一)のとおり時期を早めることにより、かなり(約一〇度)和らげられると考えた。氷の硬さに対しては、スクリューピンの刃を鋭くし、強度を大にしたものを特製し、また全員十二本出歯アイゼンを用意し積極的に蹴爪を使うこととした。同時に氷壁でもっとも肝心なことは、最終キャンプの建設とロープの固定を完了するまでは、連日ラッシュ・タクティックスの心がまえをもつことであると考えた。

(三)ハンギング・テントは高強度のスクリューピンによるプラットフォーム付きのものを考案して持参した(実際にはシュルンドをキャンプ地としたため使用しなかった)。

(四)第三次では隊員の高所順化は極めて良好であったのに反し、シェルパは全く不甲斐なく、最高キャンプに泊っ

たものは一人もなかった。これは順化のための行動管理を隊員にだけ行ない、シェルパの行動はサーダーのチョタレに任せて、トランスポートの荷の管理のみ隊員がやったためと考えられる。そこで、今回は隊員同様シェルパの行動にも注意し高度順化を図った。結果は管理したのがよかったのか、あるいは登山禁止解除後一年間に高所の経験をもったためか、昨年に比し格段に順化良好であった。

キャラバン

ルートも荷物、ポーターの数量も第三次隊とほぼ同じ。注　カトマンズ出発は第三次より九日早い八月二十五日。昨年以上の雨を覚悟したが、一九七〇年のヒマラヤは気象異変のせいかかえって少なく、昨年は刈り入れ前でテントが張れず困った所でも、今年は至る所に刈り取られたあとの畑が見られた。

しかし、アルガート・バザールまではともかく、ここから奥のブリガンダキ沿いでは、マナスル以来全く変らず、文明の恩恵にも浴していないので道路の改修など望むべくもなく、行程は一日も短縮できない。九月六日ニヤック着。連日の夕食後ミーティングも熱を帯びてくる。さらにチベット人地域に入ると現地人とのトラブルは定例行事となり、頭痛のタネであった。従順なカトマンズ・ポーターをナムルー、リダンダ、ローの部落民に交替せざるをえない。ナムルーにはチェックポストができたが、全く無力。ローからの入山に当たっては、昨年は無かったのに今回は入山料として一五〇〇ルピーを要求される。今春オランダ隊が二五〇〇ルピーでも入山できなかった事実を知っていたので、馬鹿らしいと思いつつも支払う。一九七一年春の韓国マナスル隊は入山料を払わない代りにサマのチベット人をカトマンズに呼び、ポーターとして雇うとのことだが、金銭出納はいずれが得だろうか。

とにかく第三次隊より十日早い九月十二日、従来と同じ四〇〇〇メートル地点にベース・キャンプを建てた。赤や黄色の高山植物がモンスーンの残り雨に濡れて美しい。

P 二 九 登 頂 (1970 年秋)

註　キャラバンルートは往路は第三次隊と同じ。帰路はニヤック、パンシンを通らず、その対岸すなわち左岸を通る（……→デン→チュゴル→ジャガート……→）

登攀

登路はほとんど昨年の第三次隊と同じである。部分的に地形の変化しているのは当然だが、もっとも大きな違いは今回は第三次隊のときにくらべて一〇日早いためか、雪線が高度差で約五〇〇メートル高く、降雪のたびに雪崩がルートを洗うことであった。流された隊員も何名かいたが、事故にならず幸いであった。

第3次隊と第4次隊の行動比較表

	第3次（1969年秋）		第4次（1970年秋）	
頂上（7,835 m）				10月19日
7,500 m			C5	10月18日
6,900 m	C6	10月24日	C4	10月11日
6,250 m	C5	10月18日	C3	10月9日
	C4	（※1）		（※2）
5,800 m	C3	10月5日	C2	9月23日
	C2			
5,100 m	C1	9月27日	C1	9月20日
4,000 m	BC	9月22日	BC	9月12日
キャラバン開始（カトマンズ発）		9月3日		8月25日

（※）1　C4へのルート工作のみ終えて全員BC集結
2　C3への予定荷上を完了して全員BC集結

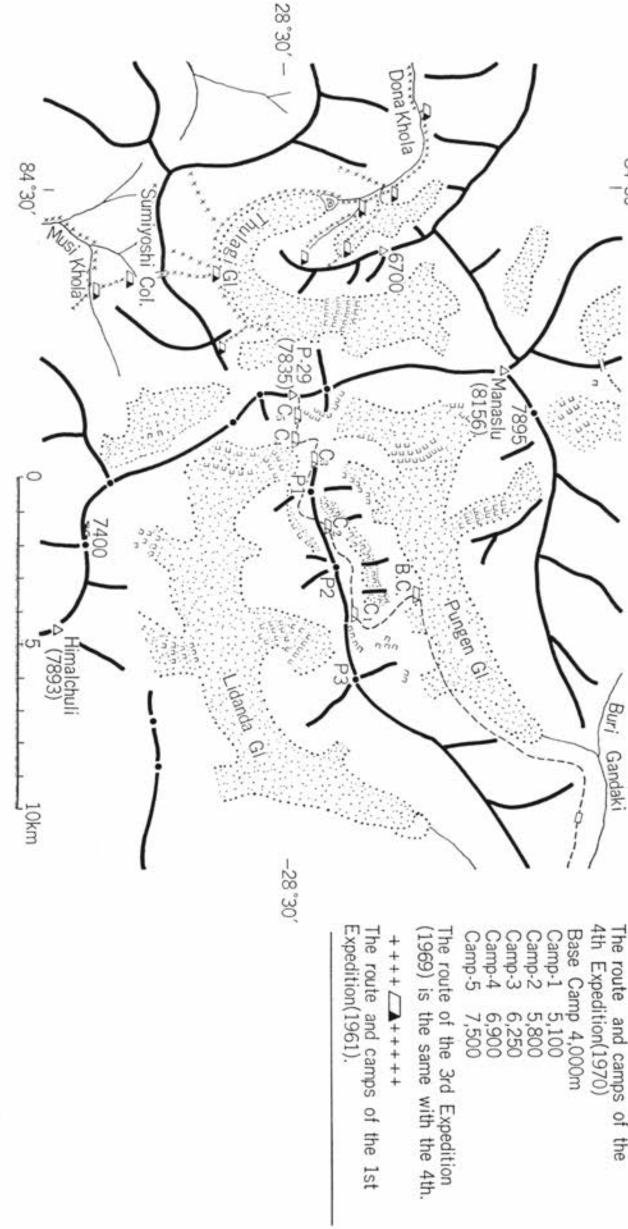
しかし各テントは順調に作られ、第三次隊のC2、C4は省略し得た。

九月二十日、五一〇〇メートル地点にC1建設（第三次のC1建設は九月二十七日）。ここへの荷上げは雪量少なく大いに渉どる。

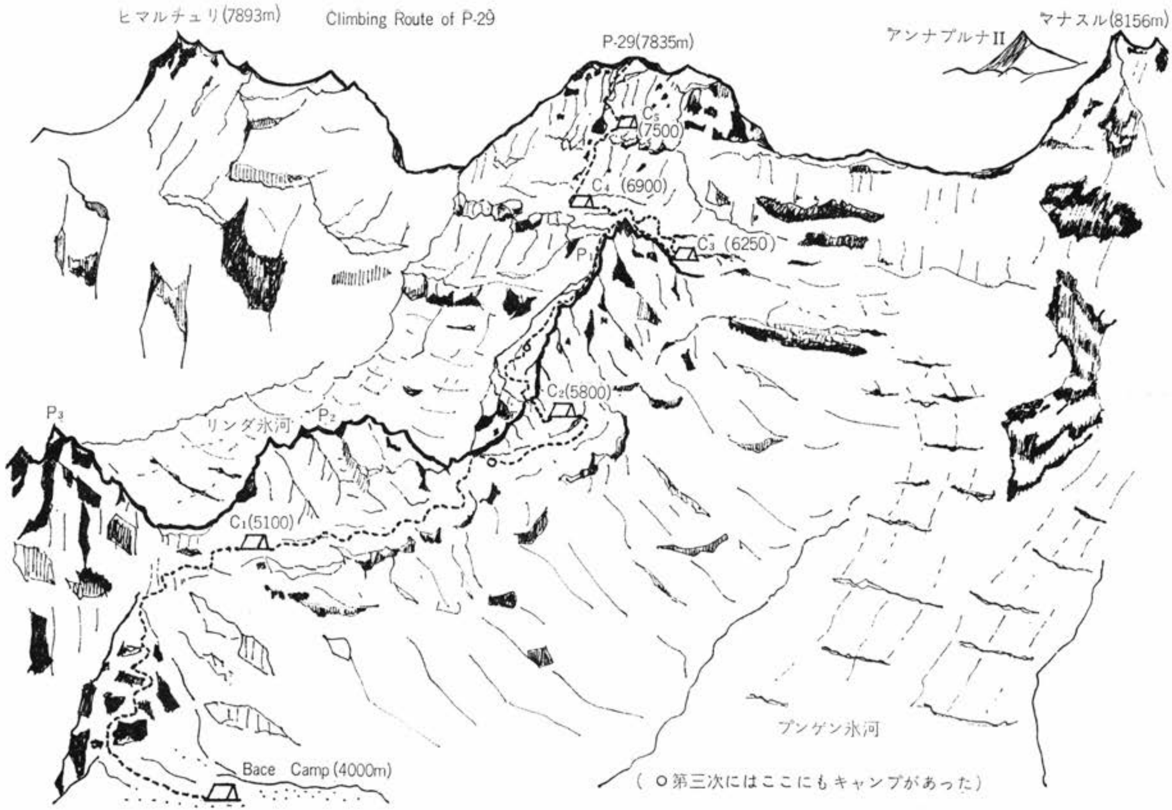
九月二十三日、C2建設、五八〇〇メートル（第三次のC3建設は十月五日）。この東尾根P1付近の地形は第二次、第三次、今回とそのたびごとに大きく変化している。局地的に風雪多く、しかも風向不定で、第三次隊はこの上と下にもう一つずつ仮のキャンプ（C2とC4）を作ってルートをひらいた。

P1を越え、東尾根の基部コルにあたるC3予定地六二五〇メートルへのトレースは九月二十六日に完了、C3への予定荷上げもスケジュールどおり十月一日に終った。

次いで第三次同様、高所順化のためいったん全員がBCに集結し、三〜五



A Sketch Map Showing the Climbing Route of P-29



Climbing Route of P-29

日休養の後、十月五日から後半期が開始された。モンスーンは未だ明けず、BCで降雨も雪と変り、毎日寒い朝夕であった。

十月九日、C3建設、六二五〇メートル（第三次のC5、建設は十月十八日）。

十月十一日、C4建設、六九〇〇メートル（第三次のC6、建設は十月二十四日）。ここが頂上直下、東面氷壁の基部である。

この頃モンスーンが去ったのであろう。朝、全天の快晴がやってきた。稜線を画する空は、ますます紺色を深めた。もっとも、地形による局地的現象であろうが、東尾根の三つのピークP1、P2、P3には正午近くになるときまったように雲と雪が現われた。面白いことに、昨年同様、渡り鳥の大群が二陣（二日）に分かれ、朝、六〇〇〇メートルから七〇〇〇メートルの高さで飛び去ったのもこの頃である。

C4からのロープフィックスは頂上に向かって小気味よく伸びて行く（C4～C5間は全部フィックス）。何よりうれしいのは、無風快晴と氷の硬さであろう。一ピッチのスピード、そしてスクリューピンをねじこむスピードが昨年に比しはるかに軽快である。十三日、早くも昨年の最高到達点七四〇〇メートルに達する。しかし数こそ少ないが、思い出したように落下する雪庇や氷塊がルートを洗ってヒヤッとさせられる。一度これに流されると、たとえわずかの距離でもシェルパにとっては意気消沈の打撃である。今C3以上には隊員六～八名、シェルパ六～七名。しかも全員快調。ここまでくれば頂上は何とかしたいものだ。

十月十八日、氷壁途中に最終攻撃キャンプC5を作るべく、田井、大笹、大野、石原、カミ・ノルブの五名がサポートし、渡部とハクパ・ツェリンがこれに入る。横に走るクレバス（シュルンド）の中に絶好の場所を見付け、持ち上げたプラットフォームは不要になる。ここなら風や雪崩の心配はなく、一夜をゆっくり過ごせる。しかもまだ行動中に酸素を使っていないにもかかわらず体調は良好。睡眠時のわずかな酸素が安眠を約束してくれる。

渡部とハクパ・ツェリン。この二人は昨秋以来の親友である。今回も初めからパーティを組んでよく先頭に立ってきた。登頂にも驚くほど意欲的な二人である。C5から頂上稜線は指呼の間である。明日はとにかく確実に固定ロープを延ばしてほしい。

そして翌十九日。この長い、起伏多い一日は、最初に記したとおり忘れられぬ日となった。

事故のあとで

悲しい、いやな一夜があけた。隊員もシェルパも、昨日の、目の前に展げられた登攀で、見えない一時間四十五分の登頂を信じているが、他に示すべき確かな証拠は何もなかった。不調の無線機からは、昨日、何の受信も得られていない。二人の遺体のそばにはもつれ切れた35ミリ・フィルム約二本分（パトローネはなく、完全露光）があり、破損したフィルム用アルミケース、小手帳一、写真引伸し印画（頂上氷壁のもの）、カメラケースや時計バンドの破片、登攀具の一部とともに空しく回収された。

しかし、渡部の右手には折れたピッケルの頭部がバンドでつながれ、そのブレード基部には、頂上で結んだとしか考えられぬ国旗の白い木綿紐が残っており、またハクパ・ツェリンのそばで、散乱した荷物のなかに、手掌大の赤褐色の石が一箇見付けられたことは、私たちをなぐさめてくれた。

第二登のため、直ちに遺体のクレバス埋葬を計ったが、シェルパは一種のパニック状態であり、一部のものがクレバス埋葬には賛成しながら登攀には反対し、殊にサーダーのイラ・ツェリンはハクパ・ツェリンの実兄でもあって、ベース・キャンプへの収容を強く懇願した。遺体を山中に残置することに対する現地人の宗教的禁忌もあり、やむなくベース・キャンプへの収容に踏み切った。七〇〇〇メートルからの収容はそれ自体危険も多く、ベース・キャンプ収容後の再登攀は時期的にも不可能であり、事実上、これによって再度の頂上攻撃を放棄したのである。

十月二十三日夕。雪煙上げるP二九の向こうに夕日が沈む頃、暮色たちこめるベース・キャンプに二人の遺体を収容し、サマのヘッドラマ僧司式のもとに荼毘に付した。

帰路、遺骨を抱いて日本に近づくにつれ、手紙や新聞切抜きで弔意やなぐさめとともに「登頂に対する疑問」の声があることを知ったが、何のあかしもない。確信しておればこそ、なお困りはてたが、客観的、常識的にみればこの疑問は当然のことであろう。

ただ、十九日C3で望遠鏡をとおして撮った写真がうまく写っておれば、強力な証拠になるぞと思いつつも、望遠鏡は普通のものでカメラ用でなく、撮影の距離や絞り、露出時間は種々の条件で撮影したもので、まったく自信なく、帰国後現像してみるまで頼りにはできなかった。伊丹空港に降り立った時も「確信してます。しかしデータを提出して判断を仰ぐほか方法はありません」と消極的な言葉しか出なかった。

幸いにも写っていた写真が、本稿に付された写真の一部である。このスノードームの稜線と頂上は近距離にあって、かつ、ギャップなどの難場もないことは、他の方角からの多くの写真と併せ見れば明らかであり、C3から見えなかった一時間四十五分の間に頂上に立てるものと思われる。

写真、ピッケルに残った国旗の木綿紐、赤褐色の石とともに内外の山岳人や山岳団体から「登頂確信」のたよりをいただいても、やはり私にとっては第二登が待たれる心境である。

おわりに

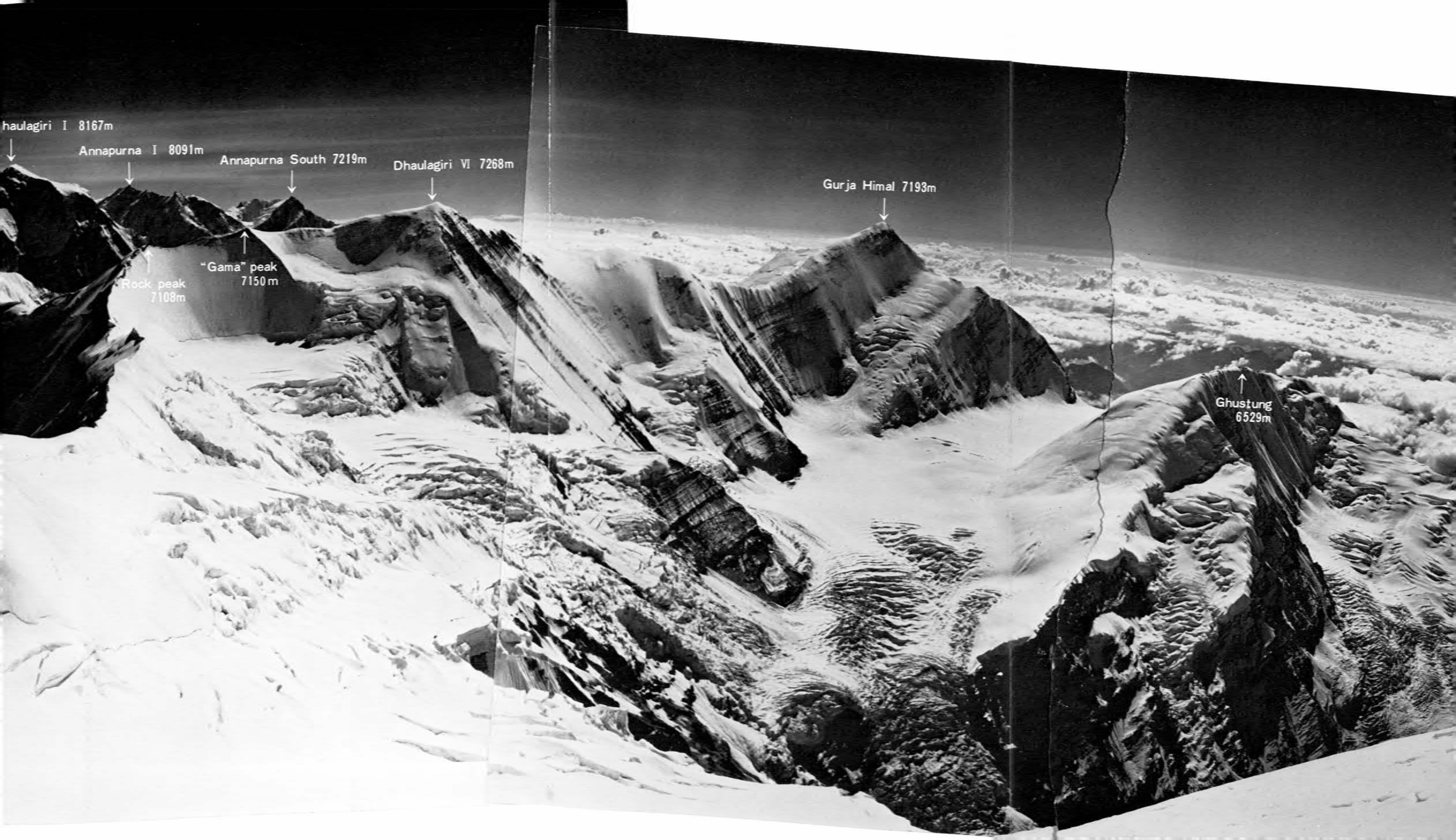
「P二九のような山が、そう簡単には登れるものでないことは初めから予想されていたことである。……」これは大阪大学山岳会がはじめてヒマラヤに送った第一次P二九遠征隊の報告冒頭に書かれている文章である。それから十年。四度の遠征が予想されただろうか。

私たち阪大隊がP二九に対して行なったことは、単に今回の登頂ということだけではない。ほとんど未知であった山塊にいろいろの方向から可能性を求め、それを一つずつ積上げて今回のゴールに到着したものであって、これはちょうど未知の地理的、科学的方面への探究とまったく同じ心持ちと態度をもって進められてきた。

計算ずくめで計画をたて準備をすすめても、予期せぬことや分らないことがつぎつぎと出てきて、思い通りうまく行かないのが自然相手の登山であり、ましてスケールの大きなヒマラヤである。ネパールの登山禁止や資金面の問題があり、また山の難かしさに比し私たちの非力の故もあろうが、ヒマラヤ登山とはこんなものであろう。

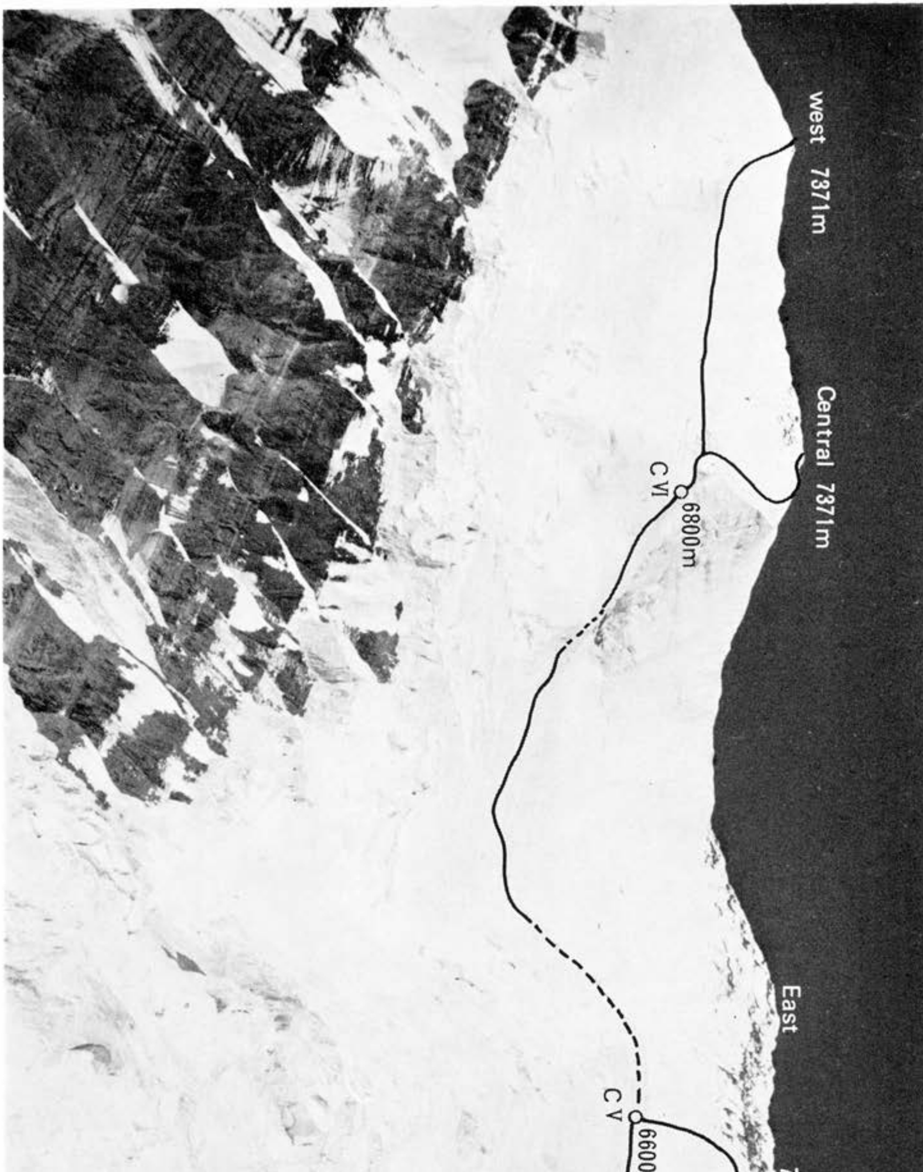
とり返しのつかぬ死亡事故こそ痛恨の一事であるが、むしろ一山岳会としてよく遂行できたと感じるとともに、この長期間、有形無形、多くの方々からいただいた御援助の大きさに驚き、改めて深く御礼を申し述べたい。

付記　今回遠征の結果によっては、さらに一九七一年秋に試みるべく、日本山岳会関西支部主催、隊長住吉仙也で一九七〇年夏（第四次隊出発前）に登山許可の申請を出した。これは一九七一年夏許可となり公表されたが、阪大隊の登頂後すでに計画は放棄され、ネパール外務省に連絡済であった。



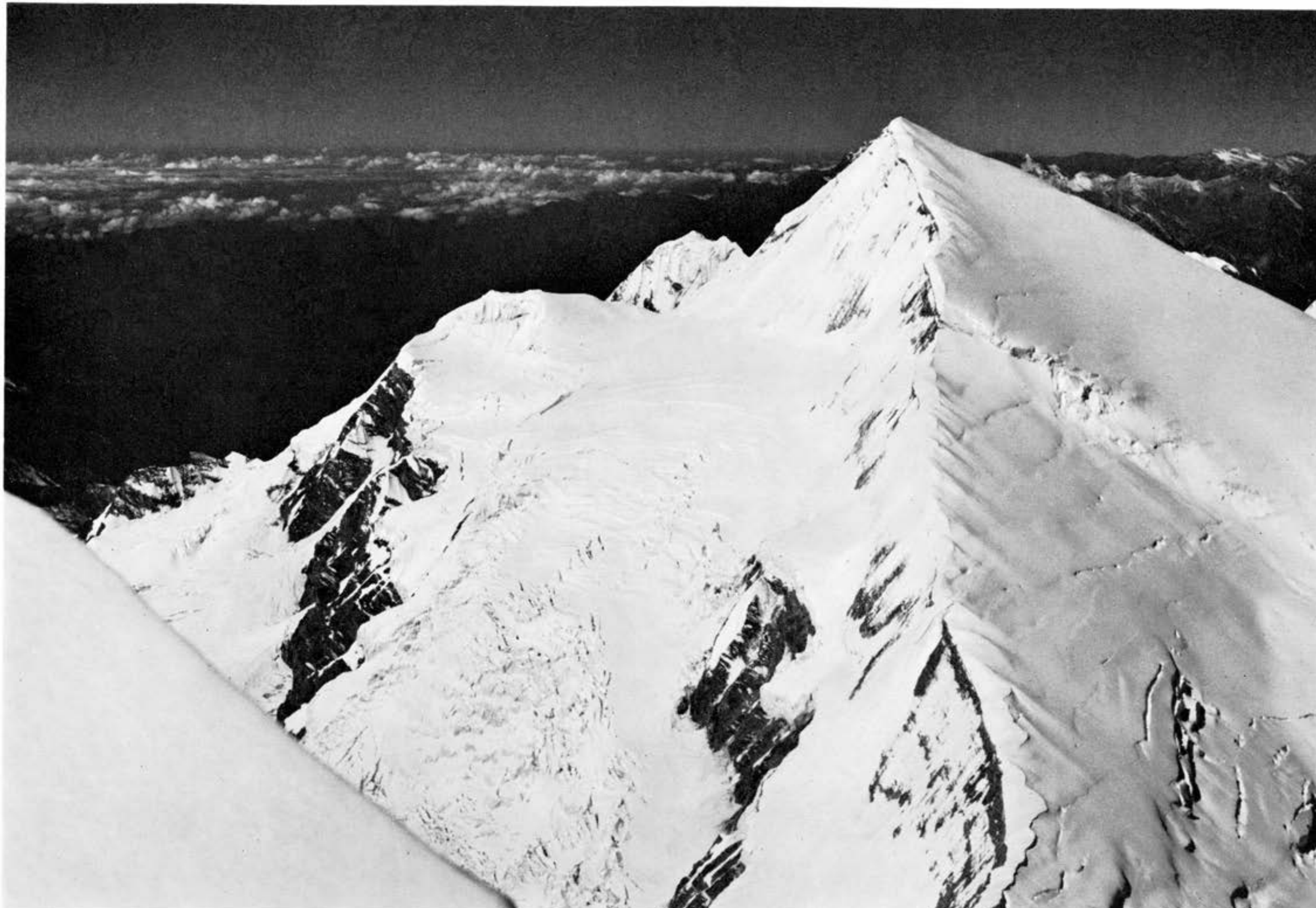
haulagiri I 8167m
Annapurna I 8091m
Annapurna South 7219m
Dhaulagiri VI 7268m
Rock peak
7108m
"Gama" peak
7150m
Gurja Himal 7193m
Ghustung
6529m

Churen Himal East peak 7371m
Dhaulagiri II 7751m
Dhaulagiri III 7715m
Dhaulagiri IV 7661m
North ridge

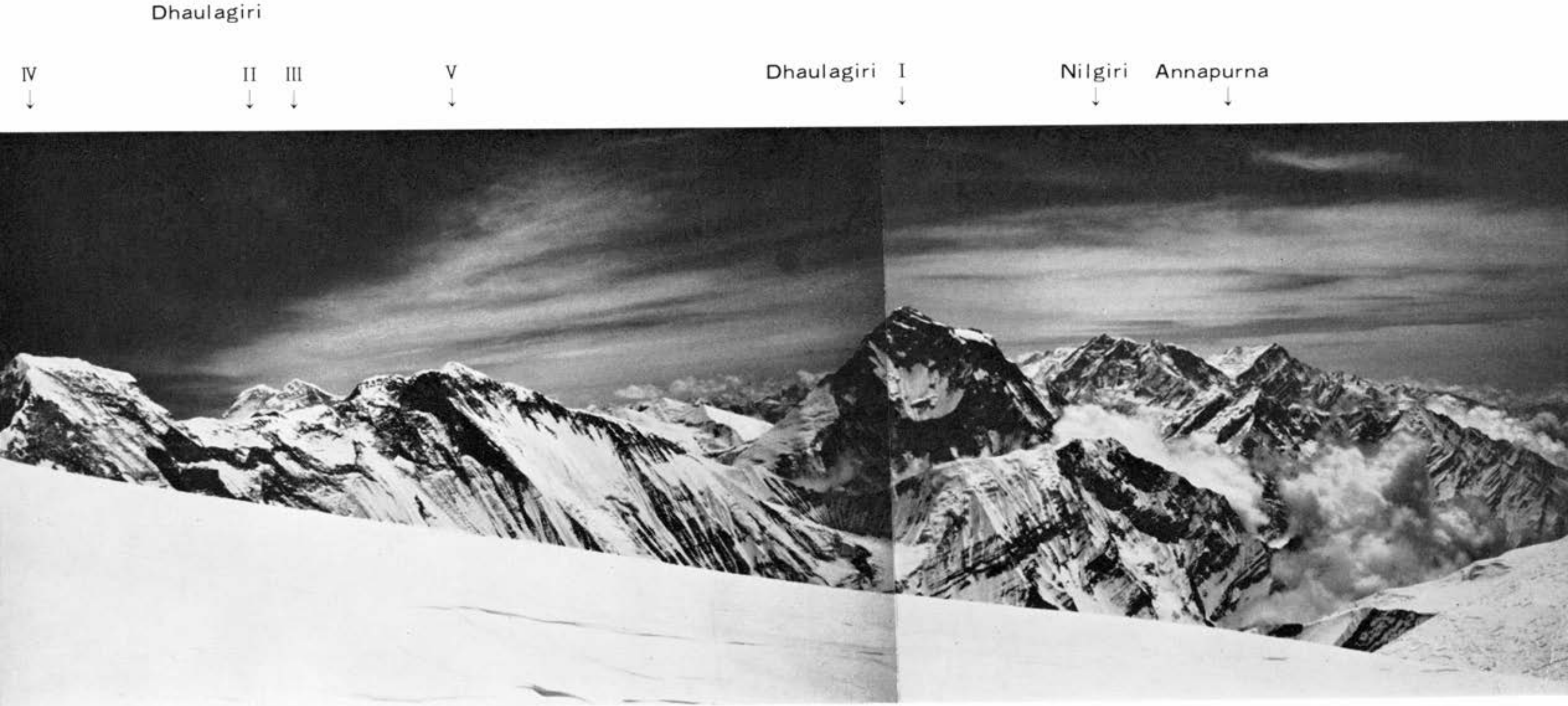


チューレン・ヒマール東南面上部（黒線はルートを示す）
The Upper part of the Southeast Face of Churen Himal.

前ページ：カペ・コーラから見たチューレン・ヒマール西壁
The West Face of Churen Himal (7371m) seen from Kapbe Khola.



チューレン・ヒマール中央峰から見たプタ・ヒウンチュリ（7246m）
Putha Hiunchuli (7246m) from the summit of Central peak of Churen Himal.



ダウラギリⅥ峰頂上からの展望（東面）
Panoramic view taken from the summit of Dhaulagiri Ⅵ
(by S. Kimura)

チューレン・ヒマール登頂（一九七〇年秋）

静岡大学山岳会

はじめに

一九七〇年秋、静岡大学山岳会は中部ネパールのチューレン・ヒマール（七三七一メートル）へ遠征隊を送り、主峰ならびに中央峰の初登頂に成功した。

チューレン・ヒマール（以下チューレンと略す）とわれわれとの出合いは、一九六二年十月に遡る。

われわれは当時ネパール・ヒマラヤで手頃な初登頂出来そうな山を探していた。そしてダウラギリ山群に目をつけていた。

そこで日本橋白木屋に加藤喜一郎氏[註1]を訪ねたところ、彼はしきりと「チューレンは可能性があるぞ」と自分にいい聞かせている風でもあり、われわれに薦めている風でもあった。

この加藤氏の薦めにより、何となく「チューレンをやろう」ということになってきた。早速、六二年にチューレンを北面から試登された石坂昭二郎氏[註2]を訪ねたところ「是非やってみなさい」とまた薦められた。

とまあこういう風な出合いであったから、われわれの自主調査によりチューレンにしようと決めたというよりも、むしろ加藤、石坂両氏の薦めにより、いつしかその気になったというのが本音である。

会のお偉方にはかったところ「チューレンならよかろう」ということになった。

しかし、当時は体協スポーツ外貨を入手しなければ出掛けられない時代であった。

六四年十一月、海外登山審議会に計画を提出したが、外貨の入手はならなかった。

それではということで、かねてから意向のあった静岡大学の生物系の学術調査計画と協同の形に切り換え、文部省の学術外

貨を入手しようと考えて計画内容の手直しを急いでいたところ一九六五年三月、突然ネパール政府は登山禁止を発表した。

この結果、われわれのチューレン・ヒマール計画は当分の間実現性のないものになってしまった。

しかし四年後の六九年の春、登山は解禁となり、ポスト・モンスーン期には、早くもイタリア隊が西面から挑戦した。われわれは別の地域での登山計画を進めていたので、すぐには動きがとれなかった。

結局、イタリア隊は失敗に終り、七〇年のプレ・モンスーン期を迎えた。

日本からも何隊かがチューレンを狙っているものと思われていたが、意外にも登山許可を取り付けたのは韓国隊であった。

彼らは、韓国からの初めてのヒマラヤ遠征隊として勇躍チューレンを目指していたらしいが、日本へ伝わった情報では「韓国隊は正式な登山許可を得ていないのではないか」といわれていた。

この頃になってやっと、われわれは推進中であったパキスタンでの登山計画に見切りをつけて、六年ぶりにチューレンへ計画の軸を戻した。

チューレンに関するこれまでの記録からは、北面、西面、南面ともにかなり難しく、写真で見る限り西壁は手のつけようもないといった感があった。そして東南面のみが不明であった。

ヒマラヤ初遠征の韓国がたとえ前年に偵察隊を出しているとはいえ、一回で初登頂に成功するとは予想していなかったが、五月になって外電は韓国隊の初登頂を報じた。

既にネパール政府への登山許可申請をすませたあとで、くやしさと同時に韓国隊の実力もたいしたものだと、内心感心もした。しかし「そうか、チューレンは登られてしまったか」と何ともやりきれない気持であった。

さっそく、当時韓国隊と同時期に近くでダウラギリⅥ峰を攻撃中であった関西登高会の野村哲也氏(当時隊長)に、韓国のことを聞いてみた。

その結果は、韓国隊は東南面から攻撃をしていたが、いろんな角度から見ても、どうも彼らの登頂成功には首をかしげざるを得ない面があり、もし超人的な活躍があって成功しているとしても、それは東峰であろうと見られた。そこでわれわれは改めてチューレンが双耳峰であることを確認し、主峰(西峰)を狙うことに目標をしぼった。

そして、ただひたすらに許可のおりるのを待った。だが七月になり荷物の船積みの時期になっても、ネパール政府からは何の音沙汰もなかった。荷物は空輸に切り換えることにして、ギリギリの時期まで待つことにした。

八月に入った。ついに計画中止を決断すべき時が眼前に迫ってきた。最後の詰めの段階と判断し、ネパールへ電報攻勢をか

けた。これで駄目なら今シーズンは、あきらめるつもりであった。だが、在カトマンズ日本大使館の松沢憲夫氏のご尽力により、八月十三日ネパール政府の登山許可内諾を知らせる電報がわれわれの手元に届いた。

隊員は次の通りである。

隊　長　芹　沢　　喬（47歳）
副隊長　山　本　良　三（31歳）渉外、登攀隊長
隊　員　大　石　　惇（32歳）装備、氷河調査
　　　　福　井　正　義（31歳）食糧
　　　　長谷川　宏　蔵（27歳）庶務、昆虫調査
　　　　堂　馬　英　二（23歳）輸送

チューレンへのルートとしては、われわれは一九六四年以来常に西面のカペ・コーラ経由を考えていた。

最近でこそ、このルートは日本人にはなじみの深いものとなったが、一九六四年当時は日本人にはほとんど知られていなかったのである。

アプローチ

六〇〇キロの荷物をカトマンズへ空輸し、八月二十八日堂馬が先発隊員として伊丹を出発した。

彼はカトマンズで松沢氏とセルチャン一族の手助けを得て、本隊が九月九日カトマンズに到着した時には、ほとんど出発準備を完了していた。このため、十一日にはポカラへ飛び、翌日キャラバンに入った。

ポーター四十三名、一人一日十五ルピー。

十六日ベニ着、ポーター三名を増員。

その三日後にムナでポーターの大半を交替させ、最奥の部落グルジャカーニに着いたのは九月二十一日であった。

更に寒々とした四一〇〇メートルのベース・キャンプ予定地に着いたのは三日後の昼頃、ポカラを出てから十三日目のことであった。

ダウラギリⅣ峰を狙う福岡山の会隊は、既に荷上げを行なっていた。

登高開始

六九年のイタリア隊のBC跡にテントを張り、旗上げを行なった後、シェルパへの支給装備が貧弱だということでトラブルが発生した。

主として羽毛服の上下と寝袋の質が良くないという苦情であった。

今年のプレ・モンスーン期にサーダーはマカルー隊に、主力シェルパ三名はエベレスト隊にそれぞれ参加した経験から「こんな装備では登れない」という。われわれにも言い分はあったが、結局、彼らに頑張ってもらうためには、彼らの主張を受け

入れることが得策だと判断し、目玉装備をカトマンズまで買い付けに行くことにし、帰国する予定であった隊長とシェルパ二人が二十六日下山した。

これらの装備がBCに届く頃には、C3を設置し、必要な物資がそこに揃う手はずを整えるべく、同日荷上げを開始した。

カペ氷河からのルートは、六九年には富山隊註3がグルジャ・ヒマールの初登頂時に、今年の春は韓国隊によって踏まれて既に知られていた。

そこで、われわれは方向は同じでも別のルートを開拓したいと考えていた。

その第一の候補は南壁であった。

即ちカペ氷河上五〇〇〇メートルの地点から、標高差約一四〇〇メートルの南壁に取り付く、チューレンへの最短距離ルートの可能性であった。

第二は、カペ氷河を源頭まで詰めて、六九二一メートル峰直下へ抜ける氷河ルートであった。

そしてこれらの候補ルートのいずれもが困難な場合には、富山隊のルートをC3までたどり、そこから上部は韓国隊とほぼ同じルートで、東峰へ接近しようという作戦であった。

BCからは福岡隊が先行していたので、ルート標識もはっきりしており、二十七日にはC1を設置、続く三日間は候補ルートの偵察に当ったが、いずれの方面も雪崩の危険がいっぱいで、とても手がつけられそうになかった。

だからといって、一も二もなく富山隊ルートを選ぶにはまた抵抗があった。というのは、一時的にせよチューレンへ背を向けて、反対側の斜面を登ることになるからである。

しかし福岡隊が既に富山隊ルートを登り、五七五〇メートルのグストゥン尾根上に達していたことが、われわれに結局富山隊ルートを選ばせる、きっかけになった。

十月一日、大石、堂馬がC2建設に向かい、同日五三〇〇メートル地点の岩尾根上にC2を設置した。

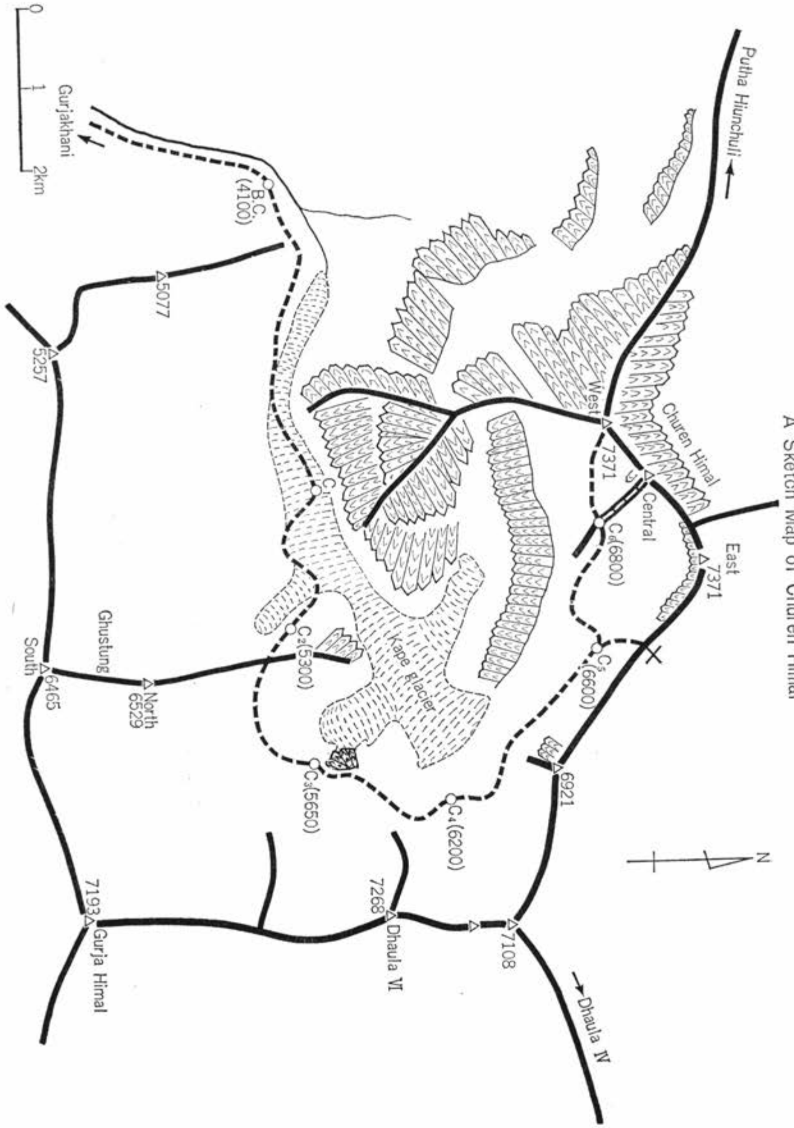
ここから見るチューレンは、中腹に二段の棚を持つ南壁からたえず雪崩をカペ氷河へ落し、全く人を寄せつけない顔をしていた。

富山隊ルートの難所には既に福岡隊により固定ロープが張られ、われわれはこれを使わせてもらって登降のスピード・アップをはかることができた。

十月五日、山本、福井、アン・ノルブ、アン・テンリの四人でC3建設に向かった。

午前十時にグストゥン尾根上に達すると、そこには福岡隊のC3があり、初めてグルジャ・ヒマール、ダウラギリⅥ峰が全貌を見せた。

われわれは上部カペ氷河の雪原を等高線状にトラバースすること小一時間、ダウラギリⅥ峰西面直下の三角岩寄りの五六五


A Sketch Map of Churen Himal
Putha Hiunchuli
Gurjakhani
0
1
2km
B.C. (4100)
5077
5257
West
7371
Churen Himal
Central
C6(6800)
East
7371
C5(6600)
C1
C2(5300)
Kape glacier
Ghustung
South
6465
North
6529
C3(5650)
C4(6200)
6921
N
7193
Gurja Himal
7268
Dhaula VI
7108
Dhaula IV

〇メートル地点にＣ３を置き、はじめて福岡隊より先行することになった。
この頃から天候が崩れ出したが、翌日は降雪にもかかわらずＣ３への荷上げを続けた。
上部カペ氷河の雪原では激しい風雪で赤旗が見えず苦労する。
雪はなおも降り続き、翌七日の夕刻になってやっと小止みとなった。このため、いつも褐色に見えていた下部カペ氷河が、いかにも氷河らしく見えるようになった。
明けて十月八日、快晴。山本、福井、シェルパ二人がＣ３へ入った。
昨日までとはうって変ったように寒気が厳しくなった。
翌日、東南面からチューレンを狙うにあたって、最大の核心部の一つと見られた三角岩上部のルート工作を、福岡隊の高山氏とミンマ・ツェリン、われわれ四人が共同して行なうことになった。
福岡隊のＣ３の位置から見ると、丁度三角形状に見えるこの岩稜は、標高差約五五〇メートル、ダウラギリⅥ隊の西稜の下部を構成している。
われわれのＣ３からは三〇分で取付点に達する。
もろい浮石の多い褐色の風化した右岩稜を、小一時間も攀じると雪稜となり、だんだん傾斜が急になってくる。ミンマ・ツェリンが先頭に立ってステップを切りながらの登高約一時間で、六〇五〇メートルの三角岩の頂稜に達した。
そして驚ろいたことに、ここから見る上部にはなだらかな雪稜と、その向こうにはダウラギリⅥ峰下にひろがる雪原が続き、難場と見られる個所はなかった。下部キャンプから眺めていた限りでは、とてもこんなに好条件の地形だとは予想もつかなかったのだが……。
登頂への第一関門はあっけなく開かれた。急な雪稜に二〇〇メートルの固定綱を張りながらゆっくり下る。
翌日は荷上げを兼ねて、更に六〇九〇メートルまでラッセルを行なう。雪原に入ると雪が深くなり、膝上までもぐる始末。
十月十一日、福井はシェルパ二人を伴い、雪原を進み、六二〇〇メートル地点にＣ４を建設した。ＢＣを出てから十六日目である。
ここからは左前方にチューレンの上部がはっきりと望まれ、右手には標高差八〇〇メートルに及ぶ急峻な氷壁が屏風状にたちはだかり、ジャンクション・ピーク、ガマ・ピーク、ダウラギリⅥ峰へと続いている。
一方、前方の六九二一メートル峰西面の氷壁はたえず崩壊しており、予定ルートを危険なものにしている。
Ｃ４建設後、急ピッチでＣ５建設に向かうべく、大石、長谷川がその任に当ったが、大石は調子が悪く、Ｃ３へ下り、福井

が交替した。

一方、十三日になって、カトマンズへ目玉装備の買付けに行っていた二人のシェルパがＢＣへ帰ってきた。いよいよ目指す二十日頃までに、登頂態勢が整うかどうかの山場を迎えようとしていた矢先のことで、よいタイミングであった。

しかし隊員をはじめシェルパの中にも疲労の色が目立ち、Ｃ５の建設は意外に時間がかかりそうな気配であった。

そこで、これまでもっぱら下部キャンプ間の荷上げに当っていた堂馬とＢＣでシェルパへの装備の配布をやっていたアン・ノルブ、更にカトマンズから帰ったばかりのペンバ・ギャルツェンの三名を、建設後のＣ５へ送ることにした。彼らは十七日にＣ４へ入った。

他方、Ｃ５建設に向かった福井、長谷川はＣ４を出て六九二一メートル峰直下の氷の崩壊地を過ぎ、チューレン東峰へ続く長さ四キロ、標高差約四〇〇メートル、幅数百メートルの雪のプラトー上を、膝までのラッセルを続けて進んでいった。

ヒドン・クレバスもなく、容易なルートとはいえ、六四〇〇メートル附近での膝までのラッセルと、二〇キロをこす荷物の重量に苦しめられ、ようやく六四八〇メートルに達して仮Ｃ５を設置した。

彼らは翌朝テントを撤収して更に前進し、プラトーの奥詰り、即ち、東峰への三角形状斜面の直下、六六〇〇メートルにＣ５を設置し、Ｃ４へ帰幕したのは十月十八日であった。

福井、長谷川と入れちがいに、Ｃ５へアン・ノルブと堂馬が向かったが、堂馬は途中で引き返し、結局、アン・ノルブとアン・テンリのシェルパ二人がＣ５へ入った。

翌日、サーダーとアン・テンリはルート偵察のために、東峰を七一五〇メートルまで試登して、そこから東峰頂上までのナイフ・リッジを見て、稜線づたいに主峰を攻撃することの困難性を確認した。

同日、堂馬もザンブーに助けられてＣ５に入り、登頂への最終段階のルート工作に当ることとなった。

これまで常に隊の最前線でルート工作に当たっていた若いアン・テンリにかえて、エベレストで活躍した馬力のあるザンブーを起用し、第一次登頂予定隊員の福井、長谷川をＣ３へ休養におろし、山本と大石が陣頭指揮のためにＣ４へ入り、ようやくにして登頂態勢は整った。しかし、トランシーバーは故障や電池不足のために、もはや使えなくなっていた。

登頂態勢

二週間前の降雪以来、連日午前中は快晴が続き、午後になると雲が出て若干の降雪を見るといった天候パターンが定着していた。

十月二十一日朝、各キャンプの配員状況はＣ５に隊員一、シ

エルパ二、C4は隊員二、シェルパ二、C3は隊員二、シェルパ二であった。この日、C5では最終キャンプへのルート工作が完了した。

C4からは四名で荷上げのためにC5へ向かったが、山本と大石は途中で荷物をデポしてC4へ帰った。一方、C3からは休養中であった第一次登頂予定隊員の福井と長谷川がC4へ入り、C5から一時堂馬もC4へ帰幕し、久しぶりに全隊員が一つのテントに集まった。連日の奮闘の疲れがまだ十分に抜け切っていない福井以外は全員元気でった。

いよいよ目前に迫った登頂のために、協議すべき事項も多かった。特に、登頂ルートに関しては決断をせまられていた。即ち、C3やC4からの観察の結果では、東峰を経由する稜線ルートを取る方が、C5から一旦五〇〇メートルばかり（実際は二五〇メートル程度であったが）急斜面を下降して、東峰のカール底から中央峰の南支稜を登り直すルートよりも、楽であろうと推察されていた。しかも、東峰経由で主峰へ縦走するルートをとれば、韓国隊の東峰登頂という報告に関して、何らかの手掛りでも、得られるかもしれないという考えもあった。

だが、C5で登頂ルートを探っていた堂馬やアン・テンリの意見では「東峰経由ルートは主峰まで距離が長い。その上東峰の頂上まではナイフ・リッジ続きでとても危険だ。主峰への登頂ルートとしては不適当である」という。それに反して、カールへ下降するルートは「下降する標高差もせいぜい二五〇メートルぐらいのもので、既にカール底まで四〇〇メートルの固定ロープを用意してきた。何といっても、このルートの方が主峰へ近い」という。結局、ルートは後者に決った。

この夜、狭いテントの中で多少堅苦しい話もしたが、登頂は第三次まで行なうことを決め、主峰、東峰双方の登頂を狙うことにした。

第一次隊は、予定通り二十四日、主峰へ福井と長谷川、続く第二次隊は同日、堂馬とアン・ノルブでC5から東峰を攻め、第三次隊は二十六日、再び堂馬、アン・ノルブ組で主峰の第二登を目指すことにした。

天候は安定してはいるものの、日増しに風も強くなっており、雲の飛来も激しく、若干の降雪をみる毎日であった。それよりも、C5とAC（C6）には食糧は四人で五日分しかなく、既にC5の食糧は一部手をつけていたので、食糧がもつかどうかがもっとも心配であった。

十月二十二日、福井、長谷川、堂馬が頂上攻撃のためにC4を出て、シェルパが待つC5へ向かったのは午前十一時頃であった。この頃、サーダーは最終キャンプを六八〇〇メートル地点に設定すべく、ザンブーとともにC5を出て、四〇〇メートルの固定ロープを使ってカールに降り、中央峰の南支稜に向かってラッセルを続けていた。

遂にサイは投げられた。ゆっくりと着実な足どりでC5を目指して雪原を登ってゆく三人に、初登頂成功の願いをこめる。

〃是非登頂に成功してくれよ〃

姿が見えなくなってから、福井に登頂ルートや主峰、中央峰の頂上のことについて、何の指示もしなかったことに気がついた。トランシーバーも作動しない。〃しまった〃福井は少し疲れ気味だったので注意力が散漫になっていなければよいが、と心配しつつも、彼なら主峰と中央峰の見極めはついているものと自分に言い聞かせて、もうこれ以上考えないことにした。しかし、この指示ミスが後日隊員達の大変な心労の原因になろうとは夢にも思わなかった。ACは中央峰南支稜線わき六八〇〇メートル地点に設置され、二度の登頂用の食糧と燃料もデポされ、登頂隊員の入幕を待つのみとなった。

二十三日、午前十一時三十分、C4から双眼鏡で見ているとC5を出て東峰のカール底のクレバス帯を通過してACを目指す福井と長谷川、二十分ほど先行するサポートのシェルパ二人がよく見えた。クレバスは約一時間で通過し、隊員達は三時頃ACに到着した。

C4での山本と大石は、何もすることなく、こういう自分達の姿をもう十年間も夢見ていたが、それが今、実現してみると、重苦しい現実の前に何の感激もなく、話すべき話題も出てこなかった。既に打つべき手は全部打ったのだが……。天候の激変や登頂隊員の突然の体の変調を心配していた。

十月二十四日、第一次登頂予定日。

九時三十分、C4では大石がもどかしそうにテントシューズをひっかけて、テントの横手の丘へ飛び出して行った。

「もう随分登っているぞ。」

恐らく朝の出発は早かったのだろう。われわれがまだ寝ている間に随分高度を稼いだことになる。

双眼鏡でじっくり見ていると、豆粒大の二人は快調なペースで登っているらしい。既に七〇〇〇メートルは越している。快晴だし風も強くない。この分だと初登頂はもらった。〃一方東峰は〃と見ると誰も登っている気配はない。そうこうしているうちにC5から一人が、東峰への三角形状斜面を登り始めた。堂馬らしい。だがこの時間ではとても登頂など出来そうにない。おまけに一人だ。

何かあったのだ。〃シェルパとケンカでもしたのかな〃そんなことを考えている間にも、主峰隊の二人は、どんどん南支稜の雪面上に高度を稼いで、稜線に達して姿を消した。中央峰の頂上の直下である。そこから主峰までは、吊尾根状のなだらかな稜線を往復しても二〜三時間あれば十分であろうと見積る。この分だと午後四時頃までにはACへ帰着するだろう。絶好のアタック日和だ。

だが中央峰の頂上部でどうももたもたしている。休憩でもし

ているのだろうとも考えたが、どうやら中央峰を主峰と見立てているのではないかと心配して見守っていると、案の定、下り始めた。思い直して引き返してくれ、主峰を往復してくれ、と心の中で叫び続けたが、トランシーバーの作動しない今となっては、どうしようもなかった。

確かに、C4から眺めるとき中央峰が最高峰のように見えるが、主峰が左端の白い雪のピークであることは、インド測量局の地図の複写をいつも肌身離さず持っている福井には、十分わかっているはずなのだが、ついに帰ってきてしまった。疲労のためか。皮肉にも食糧がほとんど底をついて来ているというのに、たった二、三時間の節約が、今後三日間をかけなければならない破目になってしまった。

福岡隊の古賀君が、シェルパ一人をつれて登頂のお祝いにC4に来てくれたが、今日の様子を話し、手放しで喜ぶわけには行かない気持を伝える。

二十五日、第一次隊の登頂失敗にガッカリした山本と大石は、C4で攻撃用の食糧と燃料不足を極度に心配していた。その上昨夜半からの強風のために、いやな夜をほとんど寝つかれずに過ごした。睡眠不足がたたり、今日はとてもC5入りして陣頭指揮する気力はなかった。

今日は第三次隊の堂馬とアン・ノルブがAC入りする予定である。第一次隊の福井に様子を聞いて、今度こそは、間違いなく主峰に立ってくれることを願う。しかし、堂馬の調子が悪く、シェルパ二人を伴った三人のパーティであったが、またも第一次隊と同じルートから中央峰へ登頂しただけで終った。

さあ、大変な事態になってしまった。そこで急遽、第四次登頂計画が組まれることになった。

以下は十月二十四日以降、第四次登頂までの主役を演じた長谷川隊員の日記による。

登頂＝中央峰＝

十月二十四日、ACの朝、物音に目をさますと、福井さんが既に起きてお茶をわかしていた。時計を見る。二時三十分。福井さんは黙っていた。どうも体がだるい。昨夜は米がのどを通らなかった。

いよいよ頂上攻撃だという緊張感のため、一層食欲がなくなったのかもしれない。

身仕度を整え、持参品を点検する。食糧、カメラ、防寒具、旗類、すべて良し。

五時、テントを後にする。東方かすかにダウラギリⅣ峰の斜面が月光をはね返していた。福井さんの激しい息づかいがロープを伝わって来る。苦しそうだ。ピッチがあがらない。時間はどんどん過ぎていく。

〝稜線はまだか〟と上を見上げるも、目の前にはまだ、だだっ

ぴろい斜面があるだけ。一歩また一歩、もう五時間もこんな単調で苦しい登高を続けている。

福井さんと先頭を交代する。

斜面が次第に急になり、ステップを切らずには進めなくなってきた。稜線はもう近い。抜けるような青空が近づいてきた。

ついに稜線に出た。視界がパッと開け、チベット側が見えた。チベット側はぞっとするような絶壁である。はるか下を氷河が北東へ流れていた。ひと休みする。

頂上はもう手のとどきそうなところにあった。ゆるやかな雪稜を五〇メートルばかり進んで、最後の急な雪稜を慎重にステップを切りながら登ること三ピッチ。

雪稜がなくなった。そこが頂上だった。七三七一メートルの処女峰の頂きに立った。

ダウラギリ山群が一望のもとに見える。なかでもⅣ峰はひときわ鋭い。チベット側には赤味がかった、ところどころに雪のある山波が幾重にも連なり、地平線のあたりはチベット高原なのだろう。南方、インド平原上には、おびただしい雲海が上昇中であるように思われた。

手当りしだいに写真をとり、正午すぎ、頂上を後にした。とにかく大任をはたしたという安堵感があった。随分下ってACも近いと思われるところで休憩をしたら、福井さんが雪の上で膝に頭を置いて眠ってしまった。無性に眠かった。

ACに帰ってから、福井さんは一言「われわれが登ったのは主峰じゃないかもしれない」と云った。頂上から西を見た時、ほぼ同じくらいの高さの鋭い雪のピークがあったのは覚えている。しかし自分の立っている頂上の方が少し高いように思われて、これが主峰だとばかり思い込んでいた。福井さんにそう云われてみると自信がなかった。でも私はたいして気にもかけなかった。

主峰の登頂

十月二十六日、C5を出て、C4に待機している登攀隊長へ一刻も早く登頂の様子を知らせようと急いだ。

ヒマラヤはいよいよ冬近しの気配になってきた。インド平原方面を覆っていた雲海が日一日と高くなってくる。もう六五〇〇メートルのグストゥン峰と同じ高さあたりまで上昇してきた。そして六五〇〇メートルを越すあたりまでくると、急に風に乗ったようにわれわれの方へと飛んでくる。夜はきまってテントをゆさぶる強風が吹く。

C5からC4への長い雪原の道は、太陽の照射と風の造作で、われわれの踏み跡だけが高くもりあがって、まるで田圃のあぜ道のようになっていた。何度かひやひやしながら通過した六九二一メートル峰からの氷の崩壊地帯も、もう二度と通ることはあるまいと思いながら足早に通過する。

そろそろテントも近くなった所で「オーイ」と思い切り呼んでみた。返事がない。ようやくテントが少し見えたが、ひっそりとしていて誰もいないようであった。一瞬心配になった。入口に近づいて声を出してみる。「オーイ」「長谷川か」という声がかえってきた。

もどかしそうに開けられたテントには、山本さんと大石さんの顔があった。テントの中に手を差し込んで握手を求めた。大石さんが仕方なさそうに私の手を握ったが、力のない、失望の手だった。一瞬悪い予感が脳裏を走った。

「君たちが登ったのは主峰じゃないんだ」という登攀隊長の言葉はこたえた。福井さんの独り言は適中した。沈うつな空気がC4に流れ、私はただぼう然としていた。

C5、ACともにほとんど食糧は使い果たしていたし、しだいに天候も不安定になり始めていた。しばらく僕の様子をうかがっていた登攀隊長は、あらゆる状況を勘案した上での判断であろうか、「もう一度頂上に行ってくれないか」と遠慮がちに云った。私は即座に「行かせて下さい」と言った。

登攀隊長はすぐさま態勢立て直しのためにC5へ向かい、翌日大石さんがC4に残ったわずかな食糧を、C5へあげることになった。

翌二十七日、夜半の強風がうそのような好天気であった。C5着十一時五十分。既に最後の一発にかける攻撃態勢は整っていた。パートナーにはサーダーのアン・ノルブが選ばれ、すぐさまACへ向かった。

われわれがACに着いたのは午後三時頃。サーダーは「頭が痛い」と言うので、鎮痛剤を与えると、そのまま寝込んでしまった。

夜半、背中が冷たくて目が醒めた。まるで氷の上に寝ているようだ。エアー・マットの空気も十分なのに、それからは何度寝返りを打っても体の芯まで冷え込んでくるようで、寝つかれなかった。

たまりかねて起き上った。午前二時であった。簡単な食物をつくり口にする。少し体が温まったので寝袋に入ってうとうとしていると、サーダーに起こされた。テントに陽が射していた。主峰へは急な南斜面をトラバースすることから始まる。ところどころ岩肌を露出している斜面は意外にきつい。斜面の下方には大きなクレバスが口を開いている。どうも本調子ではない。一ピッチごとに呼吸の乱れが激しくなるが、坐って休む場所がない。何ピッチ進んだのか、相変わらず果てしないトラバースが続く。九時頃、膝までの深雪帯に入り、サーダーと交代でラッセルを続けるうちに、私は疲れた。このラッセルも約一時間ほどで、また雪面はアイゼンのよくきく堅雪に変わった。

先頭をサーダーと交代する。私は次第に無理にロープに結ばれて、引きずられていくような感じになってきた。サーダーは

斜面を真直ぐ登り始めた。かなり登ってきた頃、頂上らしきものが見えるが、はっきり確認できない。アン・ノルブに聞いたら「あと三十分ぐらい」という。彼のペースはいっこうに落ちない。

頭上にだんだんと青空が近くなってきた。サーダーが振り返って私を見ている。まもなくサーダーの体は青空の中に入った。最後の力をふりしぼるようにして、彼の坐っている頂上稜線に達した。

思わずアン・ノルブに手を差し出すと、彼も感激している様子で激しく握り返してきた。

「やったぞ」C5でこの一瞬を双眼鏡で見守っている隊員たちの笑顔が目に浮かんでくるようだ。

雪稜を攀じて小さな雪の頂に立った。時に十月二十八日、午前十一時十三分であった。

〔山本良三、大石惇、長谷川宏蔵記〕

◇　◇　◇

政府連絡官＝マン・バハドール・スッバ（国家警察　32歳）
サーダー＝アン・ノルブ（ナムチェ　28歳）
シェルパ＝ペンバ・ギャルツェン（ナムチェ　30歳）
ダワ・スンダ（チャウンリカルカ29歳）
ザンブー（ナムチェ　26歳）
アン・テンリ（ターメ　22歳）
ニマ・ノルブ（パンボチェ　21歳）
コック＝オンギャル（クムジュン　29歳）

（註1）石島襄二「ダウラギリ山群の偵察（一九五九年）」『山岳』第五十五年
（註2）石坂昭二郎「ダウラギリ一周の旅（一九六二年）」『山岳』第五十八年
（註3）薬師義美「グルジャ・ヒマール登頂（一九六九年）」『山岳』第六十五年

ダウラギリⅥ峰登頂（一九七〇年）

野村哲也

計画から登山開始まで

ネパール・ヒマラヤの登山が禁止されていた頃、私たちが計画していた山は、実はガネッシュ・ヒマールであった。その南面はカトマンズから近く、山も立派でライト・エクスペディションにはもってこいの山であった。しかしいざ解禁となった三十八座からはガネッシュ・ヒマールはオミットされており、計画書まで印刷しながら、目標を変更せざるを得なくなった。そこで三十八座を一つ一つ検討していったのだが、そのなかで興味をそそられたのたダウラギリ山群であった。主峰こそ登られたものの、他は未踏のまま残っている。なかでもⅣ峰周辺はロバーツでさえ見誤った程であり、未知の部分が多い。もちろんそれだけに困難もあるだろうが、それは山へ入ってからのこと、当たってくだけろというつもりで、一九六九年三月末に登山申請を出した。隊員、費用等の目途はすでにガネッシュの計画の時にできていたので、この間の作業は非常にスムーズにいった。五月末にはネパール政府からの許可がおりるなど、驚くほどタイミングよく事が運んだ。

第二段階は、食糧や装備の調達であるが、もともとわれわれの隊は、日頃同じ釜の飯を食っている仲間が、できるだけ少ない費用と日数で、必要最少限の装備で、シェルパもなるべく使わず、思いきったライト・エクスペディションを行なおうというものであった。

誰だって、ベース・キャンプでは、中でスモウがとれるほど広いテントがあるに越した事はないし、体が全部うまる程のエアー・マットは半身用のものよりいいにきまっている。そしてそれが隊員の心理面でも、また、最良のコンディションを作って高所に備えるといった面でも、よいという理屈は分る。しか

し、逆にそんなことでお互いにいら立つような隊なら始めから組まない方がよいし、そうでないとコンディションが整えられないようなら山登りをやめた方がいい。従って、キャラバン用のテントは、朝起きたらテントから体がはみ出ているようなものが二張りだけだったし、冬用天幕も五張りだけにした。高度に馴れたら間引いて、順次上のキャンプで使おうという寸法である。服装にしてもそうだ。八千メートルを越えるピークやポスト・モンスーンならいざ知らず、プレの七千メートル峰なら最高所以外はヤッケにセーターで十分である。従って羽毛服は、ビバークを予想される最終アタックの二名分だけとしたし、靴も、大部分は普通はいているシングルのものにした。困ったのはハーケン類である。これは消耗品で、打ってしまえば帰るまで抜くわけにいかない。カラビナもやや似た条件にある。従ってこれだけは十分余裕を見て用意した。のみならず使いやすさや重量も考え、十分金をかけてよいものを持って行くことにした。たとえばカラビナは全部ボナッティの軽合金製を使うといった工合である。

食糧については徹底的に現地調達をすることを主眼とした。たとえば、行動食の主体となるビスケット類やジャム類は全部カトマンズで購入（インド製）したが、意外とおいしく、日本のものと変らなかった。むしろ包装などは完全なロウ引きの紙で、日本のものより水に強い位であった。一箱百五十グラム程度で値段は三ルピー、日本から持って行く必要などさらさらないと言っていいだろう。その他、たいていのものはカトマンズのバザールにある。余談になるが、ポカラ郊外で缶入りの日本製ビールがあったのは嬉しかった。

酒の話のついでに嗜好品について少しふれるが、これは食糧係にとって相当悩みの種だったらしい。食糧計画からいえば、できるだけオミットしたかったらしいが、さりとて隊の士気に影響してはと思い、寿司の材料やウドン、それにワサビからウニの類まで、食欲増進というよりも士気昂揚のために少量ずつ用意された。なお酒たばこ類は、空港および機内で買った免税品を規定の持込量だけ、つまりウィスキー八本にタバコ八十箱が持参したすべてであり、あとは若干のビールと、シェルパ用を含めた必要最少量のタバコを、現地で調達した程度である。

このように極力装備、食糧をへらしたことは、他のいろいろな面でも好都合であった。その第一は、日本からの空輸の費用がそれほど苦にならないということである。われわれが日本から送った荷物は四七五キロ。輸送費約二十四万であったが、これ位の金は船便でカルカッタ陸揚げの場合の滞在費等ですぐとんでしまうし、余計な気苦労が多い。航空便の場合、大阪で問い合わせれば、着いたかどうかは居ながらにしてわかる。事実、われわれの荷は二月九日伊丹に運んだだけで、あとは全く手をふれることもなく、二月下旬には全部カトマンズに着いて

いた。もっとも、輸送費を安くするため、全員、伊丹出発の時からニッカーズボンに登山靴をはき、トランクのかわりにボッカ袋を下げ、機内持込みの航空カバンにはハーケン類の重い物をゴッソリ入れて、フーフー言うといった気違いじみた苦労はしたが……。

荷を少なくした第二の利点は、隊の機動力が増したことである。われわれの場合、ポカラへのチャーター機は、荷物、隊員あわせて丁度一機分の積載量の範囲内であった。荷物がもう少し多ければ、隊員の一部が定期便ということになるが、おりから観光シーズンでもあり、定期便の予約は非常に難しく、余計な日数がかかったであろう。通関も簡単であった。われわれが空港の税関に荷物を受け取りに行った時、係官ははじめ、めんどうくさそうに明日来いと言ったが、われわれのリストを見ているうちに荷の少ないことがわかり、「本当にこれだけか」というので、「小さなサイズの荷が十四個だけだ」というと、「OK、それでは今日運び出してよい」ということになり、その日のうちにひき取ることができた。

なおつけ加えるならば、われわれの帰りの荷物は是非持ち帰らなければならないものだけに制限し、他は売却したり後のためにカトマンズにデポするなどして、無料手荷物の制限量二十キロに納めてしまった。従って日本に持ち帰った装備は個人のものも含めて一六〇キロ、荷物輸送費はゼロである。

装備、食糧を極力しぼったことの第三の利点は、物品の寄贈依頼をほとんどせずにすんだ事である。このため隊員は物貰いに走りまわる必要がなく、荷が少なくて梱包も楽であったため、出発前日まで全員普通の勤務をした。大げさに云へば、冬山合宿に出かけるような気持で、伊丹空港に集まったといってもいゝだろう。

このようにして、三月六日伊丹を出発、翌七日にはカトマンズ着、ひと昔前とは隔世の感がある。カトマンズでの渉外も以前よりは比較的楽になり、大体ビジネスライクに運ばれる。むしろわれわれにとっては、食糧などの買付けの方が大変であった。それでも、チャーター機待ち等を含めて十日間のカトマンズ滞在を余儀なくされたし、ポカラでは、ポーター集めと、米、砂糖、石油等大量に消費するものの買付けに二日かかり、三月十九日、三人のシェルパと三十七名のポーターとともに、キャラバンに出発した。

キャラバンについては、とくに書くほどのこともない。ポーターは相変らずダラダラと歩くし、奥地へ行く程サボタージュ的なことや賃上げを要求しだす。われわれの場合も最奥のグルジャカーニのポーターにはてこずった。彼らはポカラからきたポーターに、この先は水も木もなく、おまけに雪が深くて死んでしまうとおどかして行かせまいとする。こちらも腹にすえかねて、とうとうBC一日手前の所でもっとも質の悪い連中を、

十人程解雇した位である。

その他変ったことと言えば、ちょっとした部落には大てい学校ができている事、主な街道にはあちこちに茶店があり、十円ほどでミルクティーを飲ませてくれること、かなり奥地まで物資が豊富に出まわっていることなどである。キャラバン七日目のダルバンという所でもかなり大きな店が数軒あって、豊富な布地、傘、運動靴、中国製練乳、石油等が並べられてあった。

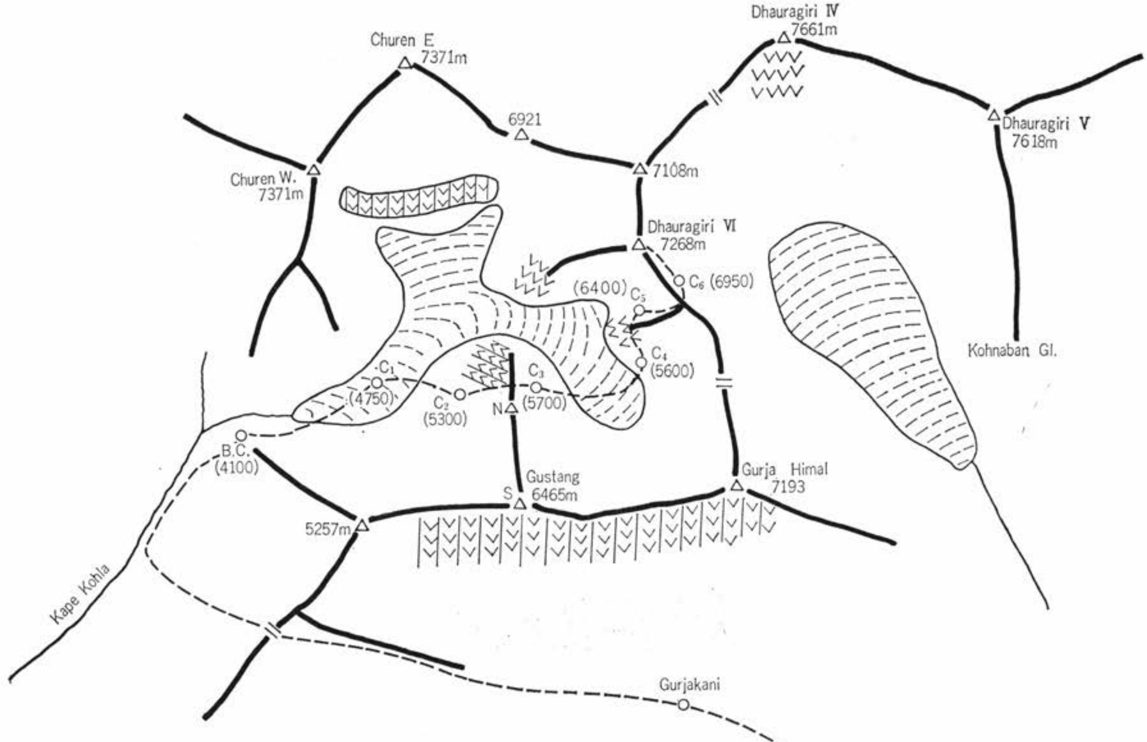
かくして十四日間の比較的のんびりしたキャラバンの後、四月一日、カペ・コーラのモレーン台地（高度四一〇〇メートル）にベース・キャンプを設営した。

登山日誌

四月二日。晴。ベース・キャンプでの第一夜があけた。目の前にチューレン・ヒマールの南西壁が圧倒的な迫力でせまっている。その足下に小さなテントが三つ、お世辞にも快適とはいえないが、ここがこれからの根城である。九時過ぎ、隊員五名とシェルパ、ローカル・ポーター等十名でC１への荷上げを行なう。ベース到着の翌日からすぐ行動というのは少しきついが、皆高度障害がほとんどなく、元気なので、高度の影響があらわれ始めたら休養をとることにして行動を開始した。ルートは、カペ氷河左岸のサイドモレーンの外縁を約二キロ上り、そこから高さ七、八十メートルの巨大なモレーンの堤を越して氷河に入るのだが、氷河への下降路はすごいガレ場で危険極まりない。Ⅵ峰はここで初めてその全容を現わすが、カペ氷河の源頭にそそり立つその姿は中々立派なものである。C１予定地（四七五〇メートル）はここから砂礫混じりの氷河を約三キロ登った最初のアイス・フォール帯の下である。初めての高さでもあり、息がきれてシェルパのペースになかなか合わない。二時頃やっとキャンプサイトに着く。総計約二百キロの荷を置き帰途についたが、さすがに少し頭が痛く、下りだというのに余り足が進まない。

四月三日。晴後雪、夕方より晴。今日は中村、木村、水谷の三隊員とシェルパ二名がC１へ入り、引き続き上部のセラック帯のルート工作を行なう。技術的に難しいところはないが、クレバスが迷路のように走っており、ルート・ファインディングに苦労する。標識の旗竿を約三十本使って左岸にある岩場に出る。約五十キロの荷をデポしてC１に戻る。なおボッカ隊はこの日新たに百五十キロの荷をBCからC１へあげた。ほぼ半分は荷上げできた勘定である。

四月四日。晴一時小雪。昨日のデポ地点から真上の岩場を登るとC１の上にあったアイス・フォールの上に出ることになる。岩場を登り、今にも崩れそうなガレ場を更に百メートル、かなり広い氷河の台地に出てやっと一息。しかし目の前にグストゥン北峰からの支氷河が非常な傾斜で垂れ下っており、時々



A Sketch Map of Dhauragiri VI and its Vicinity.

ブロックが崩壊しては轟音と共にナダれ落ち、とてもゆっくり休めたものではない。グストゥン北西尾根の途中から派生している岩稜の基部めがけて走るようにデブリ帯を通過する。この岩稜がわれわれのルートであるが、かなり急斜面で、おまけに風化してボロボロである。そこへ新雪が積り何とも始末の悪い状態であるが、そこはよくしたもの、このボロボロの岩に意外とアイゼンがよくきく。二時頃岩稜途中の小さな岩棚につく。ここがC２である。高度約五三〇〇メートル。テント一つ張るのがやっとという所で余り快適ではないが、ここ以外にテントサイトはない。

四月五日。晴一時小雪。C１からC２への荷上げが本格化する。ルートがついたとはいえ、セラック帯は日毎に変って行き、朝は完全に氷結した所も午後になると大きなパドルとなって渡れない。おまけに雪崩は昼夜時を分たずという有様で、気の休まる時がない。ただ、天気の周期が大体つかめたので行動の目安が立てやすい。大体朝のうち快晴、午後から曇り出して二時か三時頃から雪、そして夕方六時にはまた晴れるといった形のくり返しである。従って二時頃までに大体の予定を終え、あとはブラブラ帰るか、危険な箇所はその時までに通過するようにすればよい。今日もその調子で二時前C２（四九五〇メートル）を建設、中村、木村、ヌルブ、リンジンが入る。

四月六日。晴。午前八時、木村、ヌルブはC３へのルート工作に出発。中村、リンジンは少し遅れて荷物を上げデポする。この支稜は高度差約六〇〇メートル。斜度は上部で六十度、下部で四十度位である。ルートはC２より岩まじりの稜を約四百メートル登り、その上にある急な雪壁を直登、左にトラバースして更に約二〇〇メートルの急峻な岩壁を登る。ほとんど全部フィックスが必要である。最初C１から見た時は全体が壁のように見え相当手ごわそうだったが、昨秋のフィックスト・ロープが残っている所もあり、思ったより早くルートが開け、十二時半グストゥン北西尾根に抜け出る。稜線に顔を出した途端、グルジャ・ヒマールとダウラⅥ峰が目の前に開け素晴しい眺めだ。

四月七日。晴一時雪。C３（五七五〇メートル）へのルートが開けたので、全力を挙げて荷上げを開始する。ここが前進基地となるところだけに、相当な装備と食糧を集積しなければならない。幸い隊員一同非常に元気で、高度の影響もまだほとんど現われない。むしろハイピッチすぎて疲労が心配なくらいだ。ここらで順次下部キャンプに下りて休養と高度順化をさせる必要がありそうだ。その第一号として木村をC１に下げる。

四月八日。晴後雪。C３からⅣ峰へのルートは二つ考えられる。一つはⅥ峰とグルジャ・ヒマールを結ぶ稜線の中程から派生する支尾根を辿り、Ⅵ峰経由でⅣ峰に至るもの、支尾根は下部に大きな三角状の岩壁帯があって、それから上はナイフリッジ、そして稜線に近づくにつれ急傾斜の氷壁となっている。

もう一つはⅥ峰の西肩より下る雪と氷の斜面をトラバース気味にⅣ峰―Ⅵ峰―チューレン・ヒマールのジャンクションをなす小ピークへ至るもの。中間にある氷まじりのクレバス帯が非常に悪く、かなり雪崩の危険がある。前者は安全率が高いが遠まわり。後者は距離的には近いが危険性が多い。いろいろ考えた末、前者のルートをとることにし、とりあえず中村、リンジンが偵察に出る。他のメンバーは相変らずボッカが続くが、C3への荷もほとんど上ってしまい、余りハイペースのために途中でつぶれてはいけないと思い、四月十二日以前にC5を出さないようにという変な指令を出す。岩壁下にC4（五六〇〇メートル）を建設。

四月九日。曇後雪、風強し。中村、木村、リンジン等は休養。水谷、山村でC4の上の岩壁帯にルート工作をする。この日はやや天気が悪く思うようにはかどらない。それに疲労と高度の影響。自然に半ドンのような形になってしまった。

四月十日。晴。水谷、山村の二名で岩壁のフィックス工作を行なうが、なかなかロープがのびない。C3から手にとるように見えるだけに余計にもどかしく思われる。ルート工作隊がバテてはいけないので、休養十分の山根と木村が加わることになり、午後C4へ向かう。なお隊長はじめこれまでC2でボッカをしていた岩佐、河津もC3へ入り、これで隊員全部がC3及びC4に集結したことになる。そして、それと入れかわりにリンジンとザンブーの二人をBCに下ろすことにした。やはり五年の空白で技術面に不安があり、上部キャンプでは危険と思われたからである。

四月十一日。晴一時雪。今日もC5へのルート工作が続けられる。ボッカの方も上部キャンプへの荷がほとんどC4へ上げられたが、連絡の不十分で部分的に不足したものがある。やれタバコが切れた、ローソクが残り少ないとやかましいことだ。最後には消化剤がないとくる。食い過ぎる程食うなとトランシーバーでどなりあっている。

四月十二日。晴時々曇。いくらなんでも今日中にはC5へのルートが開かれなくては、隊の中に変な焦燥感が出る恐れがある。この上はシェルパもいないことだし、多少は技術でカバーすることにしてステップなども余り大きいのを切らず、ともかく台地まで出てしまえと命ずる。山根からは今日は早くから工作にかかっているから、心配しなくても台地へ出られるという返事だったが、後少しの所でまたストップしてしまった。

四月十三日。晴。八時、ルート工作再開。今日は大丈夫C5を建設できるとのことで、工作隊のあとをボッカ隊がつづく。少し不手際もあって約七〇〇メートルのロープを、この壁に費した。四時過ぎ、岩壁上の台地（六四〇〇メートル）に達し、テントを張り中村、木村、水谷、ヌルブが泊る。

四月十四日。晴一時曇。晴天の中を早朝より中村、木村はC

6へのルート工作に、水谷、ヌルブはC5とC4の中間にデポした荷を逆ボッカに下る。上に向かう二人は高度のためか足が進まない。おまけに膝の下位までのラッセルがある。稜線に取り付くまでの約一〇〇メートル歩いただけでダウン。一時間ほど休憩する。しかし天気はよし、時間もたっぷりある。帰るわけにもゆかずまたノロノロと歩き出す。しかしこの後はラッセルもほとんどなく助かった。雪稜は次第に傾斜がきつくなり、堅さを増してくる。中央部で五十度はあろうか。そしてその上は氷の壁となっている。高度を稼ぐためここまでコンティニュアスで登って来たが、どうやら限界に近い。スクリューハーケンを取り出して、ロープを固定することにする。風は相当にきつく、下からあおられる感じで作業がしにくい。やっと四時過ぎ稜線近くの岩棚にたどりつくが、もうこれ以上登る体力も気力もない。しかしこれで核心部はすぎた。この岩のバンドに五十メートル程フィックスするだけで、あとは広い氷の斜面をトラバース気味に登れば主稜線に出られる。

四月十五日。晴一時曇、風強し。強風のためC5の四名は停滞。C4にいた元気な山村、河津がC6へのサポートとしてC5へ上がる。いよいよ本格的なアタック態勢をひかえて、休養と点検といった一日だった。

四月十六日。晴一時雪。七時過ぎ、木村、中村が先発。他の四名は荷を背負って後に続く。荷はC6、C7用のテント、食糧と登攀具等約六十キロである。一昨日のルート工作の時と較べてかなり楽でピッチも上る。十一時前、フィックス地点に登りついた。ボッカ隊も皆元気であり、技術も信頼できるのでこの後のトラバースはフィックスを張らずコンティニュアスで進む。斜度は三十度位。割合歩きやすい。約五〇〇メートル、二時間程で予定の台地（六九五〇メートル）につく。しかしこのトラバースの頃から雪が降り出し、ボッカ隊のC5への下降が心配になって来た。稜線付近のトラバースはよいとして、下の氷まじりの急斜面を雪の降る中で下ることは危険が多い。やむを得ず狭いテントに六人泊ることにした。

五時過ぎ雪がやみ、初めてⅣ峰がその姿をあらわす。地図やオーストリア隊の写真でみたよりはるかに遠く、峻しくそそり立っている。とくに頂上直下二、三百メートルの岩壁は相当なクライムを強いられるであろう。それに途中のテントも予定よりいりそうである。われわれはC7まで出す用意はしてきたが、それではⅥ峰とⅣ峰のコルへも達しない。どうしてもC3に集結してある予備の登攀具、食糧等をC6へあげなければならないだろう。何れにせよ隊長に見たまま報告し、その判断を待たねばならない。

寝袋のない二人には高所服を着せ、ツェルトを引被らせるなどして狭いテントに体をくっつけあって寝る。明日の好天を祈るばかりだ。

四月十七日。晴。昨夜、水谷は夕食に食べたものをみな吐いてしまった。やはり高度のせいだろう。中村も胃の調子がおかしい。さすがに七〇〇〇メートルという高さはこたえる。しかし大したことはなく、他の四人はいずれも元気なので今日の行動には差支えなさそうである。程なくトランシーバーで隊長よりの指示が伝わる。六名全員が登頂したいという希望は退けられ、調子の悪い水谷はテントに残り、ヌルブはそれに付添うこと、残る四人で頂上へ向かい、さらにコル側へ下ってⅣ峰へのルートを偵察するようにとのことである。

中村―河津、木村―山村のパーティを組み、午前九時C6を出発、雪はよくしまり、ところどころ氷のある感じで割合楽に登れる。しかし短期間に七〇〇〇メートルまで登ってきたせいか、非常に苦しく足の運びはおそい。おまけに尾根だというのに、かなりクレバスがあって気をゆるめられない。ただ天気のよいのと、素晴らしい峰々を一望にできるのがわれわれを元気づけてくれる。ルートは何段かある稜線上のコブを忠実にたどればいいのだが、これが最後だと思って越したコブの向こうにまたコブがあるといった調子で、その度にがっかりさせられ、苦しさが一層身にこたえる。意外に長い稜線にいささか閉口し、何でもいいから早く着いてほしいと、そのことのみ考えて黙々と足を運ぶ。

午前十一時三十分。あえぎあえぎ越したコブの向こうにもう高い所はなかった。ここが頂上である。東にはダウラギリ主峰が、その足もとから頂上まで約四千メートルの切り立った山容を惜しげなく見せてくれる。そして遠くにはアンナプルナが。

Ⅳ峰は依然として遠い。いやむしろここから見る方が遠くて厳しい。コルまでの長い稜線、コルから急峻なナイフリッジ、そして最後の岩壁。短期決戦では落せぬ山だ。やはり今回は断念せざるを得ないだろう。Ⅵ峰の頂を踏んだ喜びよりも、後にひかれる心の方が大きい。複雑な気持を抱きつつ故梶本徳次郎はじめ山仲間の遺品を埋め頂を去った。午後二時C6帰着、直ちに撤収してC5へ下る。

四月十八日。晴。隊長よりの指令では今日はC3へ撤収。そして明日はBC集結である。ちょうどチューレン・ヒマールへ向かう韓国隊が入山し、そのポーターをわれわれの帰路に使うよう契約したので、二十日にはBCを撤収したいとのことである。何ともラッキーなことであるが、お蔭で余りゆっくりしてもおれない。登りにてこずったC5～C4間のフィックスを撤収するかしないかで迷ったが、立つ鳥跡を濁さず、全部撤収することにし、中村がその役を引き受ける。

しかし、山は最後まで何が起るかわからない。中村は疲労のためか気のゆるみか、撤去作業中スリップし、約二百メートル滑落、顔面にかなりひどい擦過傷を負った。止むなく撤去を中止。フィックスを伝って慎重に下る。C3帰着六時。

四月十九日。晴後雪。昨日負傷した中村は顔面がはれあがり目がふさがってとても一人では歩けない。このままではＣ３の荷は撤収しきれないし、一時は停滞かとも思ったが、荷は下から取りに行かせるということで、一人が附き添いアンザイレンして下りにかかる。幸いシェルパがＣ２の上までサポートに上ってきたし、Ｃ１へは帰途に使うポーター十二名が上って来た。やっとの思いで全員ＢＣに集結したのは夜の八時であった。

シェルパが負傷した中村の顔を見て泣き出すやら、全員ＢＣに帰れた安心感やら、久し振りに飲む酒やら、ごちゃごちゃの感情が渦巻き、なかなか興奮が収まらない。やっとテントが静かになったのは十二時過ぎであった。

あとがき―なぜⅣ峰を断念したか―

Ⅵ峰登頂までの行動が比較的スムーズに行きながら、そしてまたモンスーンまでの時間的余裕が十分ありながら、なぜⅣ峰へのアタックを断念したかについて、恐らく疑問に思われる方が多いであろう。

今回の計画がタクティクスの上から言って七〇〇〇メートル以上の稜線に長く滞在しなければならぬことや、アタックの後再びⅥ峰を登って帰って来なければならないという困難さは初めから予想していたし、装備、食糧の計画もそれを折り込んで立てられていた。しかし、やはり経験の不足というか、Ⅵ峰経由のⅣ峰アタックが、われわれの予想を越えた長くて峻しいルートであったと言うことが、断念の主要原因である。しかし、私がそれと同じ位に重視したのは隊員の気のゆるみであった。Ⅵ峰登頂の時点でさらにＣ７を出すための装備や食糧の余裕はたしかにあった。かなわぬまでも、もう一歩追いつめる事はできたし、いちかばちか、ビバークを含むアタックをかけることも考えられぬではなかった。しかし今回の場合、幸か不幸かⅣ峰への途中にⅥ峰という未踏峰があった。山容も立派で高さの点でもとくに不足しているとは思えない。とすればその頂を踏んだことによって何がしかの心の張りのゆるむ者がでてくることは当然予想される。四月十六日、天候の悪化でアタック隊とサポート隊の六名がＣ６に泊らなければならなくなったが、その夜の交信で翌日全員でⅥ峰へ行きたいという希望を聞いた時、私のⅣ峰断念の意志はほぼ固まった。皆の心の中に無意識にある未踏の山Ⅵ峰への執着を私は重視したのである。Ⅵ峰への執着が大きいということは、それを果たした時の気のゆるみも大きいということを意味する。このままの気持では先へ進むことは危険である。また、一たんベースへ集結して気をひきしめなおして向かうことも日数的には不可能ではない。しかしその場合にも、無意識の中にある気のゆるみが事故につながる恐れが多分にある。私はⅣ峰への態勢の立て直しをベース・キャンプではなく、日本へ帰ってからにしようと思った。

それには山への余情がまだ残っている間に早く日本へ帰ることである。往きに十四日かかったキャラバンを九日で終え、四月二十八日ポカラ着、そして四日後の五月二日、再来を期しつつカトマンズを離れた。

＜附記＞本登山隊の隊員は次のとおりである。

隊　長　野村哲也（43歳）

隊　員　山根孝明（32歳）、中村久住（26歳）、水谷護（26歳）、木村正一（23歳）、山村清次郎（22歳）、岩佐元春（22歳）、河津士朗（27歳）。

アンナプルナⅢ峰登頂（一九七〇年）

真仁田美智子

出発まで

私たちの登山隊は「アンナプルナ日本女子登山隊」と称した。この隊は他の登山隊のように、一つの大学山岳部からあるいは伝統ある社会人山岳会からというように、しっかりした足場をもって生まれた登山隊ではなく、出発の一年前までは隊員のほとんどが知りあってもいなかったという性格のものであった。

日本全国にたくさんの山岳会が存在する現在でも、一つの団体から女性のみの大きな規模の登山隊を出すことは、難しいことである。最近では佐藤京子を中心として女性登山の向上と女性による八〇〇〇メートル峰登頂をめざす、同人「ユングフラウ」によるイストル・オ・ナール隊（一九六八年）の例はあるが、ネパール・ヒマラヤの七、八〇〇〇メートル峰では、過去、日本においてその例をみない。しかし、ヒマラヤを夢みてチャンスをねらっている女性登山者が、数多くいることは確かである。一九六九年ネパールが五年ぶりに世界の岳人にヒマラヤへの門戸を開いたのをきっかけに、この計画の核となった宮崎英子、田部井淳子等が話を起し、ヒマラヤへの希望を持っている友人が友人を誘うという形で、女性のみによるヒマラヤを考えるグループができあがった。そして三月十九日（一九六九年）最初のミーティングが持たれた。出席者十六人（欠席三人）。これがアンナプルナⅢ峰への歩みの第一歩であった。それからはお互いを知るためと、計画をより具体化するために、集会が頻繁にもたれた。〝ヒマラヤへ行きたい〟という気持だけを一致点として出発しただけに、話は原点から始めねばならなかった。

一、時期はいつにするか。

二、どんな山を選ぶか。

• 八〇〇〇メートル峰を最初からめざすか。

・高さに拘泥せずに未登峰をねらうか。
三、費用は自己負担五十万円くらいで行けるか。

これらの点について全員の意見を聞き、討議し、決定してゆくという手順を踏んだ。時期は一九七〇年プレ・モンスーンということで一人の反対もなく決まった。次に山の選定を行なったが、初めてのヒマラヤであること、富士山以上の高度を経験したことのないものがほとんどであること等により、酸素の必要な八〇〇〇メートル峰はやめ、一歩一歩ステップを積み重ねるという意味で、七〇〇〇メートル峰のなかから目標を探そうということに決定した。残されている未登峰を調べてみると、技術的に難しいが、高さの点で満足できないことから、めざす山が定まらず、結局、キャラバン日数の短いことなどから浮かびあがったのが、解禁三十八座中のアンナプルナⅢ峰（七五五七メートル）であった。ルートは初登頂のインド隊が北方ルートをとったので、私たちは南面からアタックすることにする。途中までドイツ隊のガンガプルナ（一九六五年）の場合と同じルートをとることになる。

　早くも四月には計画書ができあがった。しかしここで困ったことに、私たちは都岳連に加盟している別々の山岳会に所属している者の集りであって、申請書を提出する団体を持たないため、せっかくつくった申請書も宙に浮いてしまう結果となった。そこでアンナプルナに行く人を中心に「女子登攀クラブ」を結成し、四月末都岳連へ加盟を申し出たが、人数の少ないこと、他の山岳会の所属者の集りであることなどが問題となり、加盟は難行した。すでにできあがった計画書をあたためて待つこと三ヶ月、七月二十九日都岳連への加盟が許され申請書は受理されたが、何とも心落ちつかぬ毎日であった。その後の手続きは順調に運ばれ、思いがけない早さで九月十六日には登山許可の知らせが外務省からもたらされた。そして一ヶ月後の十月六日にはネパール外務省より正式の登山許可証が届き、私たちの出発へ向けての動きは、いよいよ本格的になっていった。新しい年もあけて、一月二十六日すっかり準備された五トンの隊荷は、カルカッタへ向けて船で送り出された。しかしその後一隊員の病気をめぐって仲間割れが起り、出発直前に五人が不参加という事態になってしまった。この事が今度の遠征で一番心を痛め苦しめられたことであった。

　隊員は先発隊（二月二十七日）、本隊（三月二日）、後発隊（三月十六日）の三隊に分かれて空路カトマンズへたった。

　隊の構成は次の通りである。

隊　長　宮崎英子（36歳）
副隊長　田部井淳子（30歳）
隊　員　平野栄子（37歳）会計
　　　　漆原知栄子（31歳）写真
　　　　平川宏子（29歳）記録

佐藤礼子（28歳）装備
真仁田美智子（28歳）食糧
山崎茂利江（25歳）装備
医師　大野京子（31歳）

キャラバン

後発隊が到着し、全員がカトマンズに集結したのは三月十八日であった。翌十九日には隊員、シェルパあわせて二十三人と隊荷三・五トンが、双発DC3型の二台のチャーター機でポカラへ飛んだ。小さな窓に額をすり寄せて見るアンナプルナ連山に、誰もが喚声をあげた。ここに辿り着くまでの苦労が多かっただけに、初めて見るヒマラヤは大きな感激を私たちに与えた。

モディ・コーラ沿いに腸チフスが発生したということで、隊員、シェルパ、ポーターに腸チフスの予防注射をすませ、三月二十三日キャラバンを開始した。アンナプルナⅠ峰の英国隊とキャラバン開始日が重なってしまい、ポーターが集まるかどうかという心配はあったが、女性五人を含む一四四人がどうにか集まり、予定通りの出発となった。ヤンジャ、ノーダラ、ルムレイ……と上り下りの多いカンカン照りの道を、ポーター達はよく歩いた。賃上げのストライキもなく、それぞれが素朴で快活な人々で毎日が楽しく過せた。とりわけ帰りに雇ったチョムロンのポーターは誠実そのものの人柄で、私たちと彼等の間に友情さえかよい合うようになり、安心して荷を預けることができた。女性サーブに少々途惑っていたシェルパとも、早くも三日目にはリエゾン・オフィサーの音頭で、ファイヤーを囲んでシェルパダンスに興じるまでになった。

二十七日には女人禁制の村チョムロンの通過となる。かつては、一九六四年の千葉岳連隊や一九六五年のドイツ隊が宗教上の理由から女性ポーターの通過を阻止されている。私たちの心配をよそに、この最奥の村は静まりかえり何事もなく入村できた。帰りには民家に泊めてもらい、大歓迎を受けるというハプニングまであり、チョムロンはヒマラヤ入山禁止四年間に大きくその姿を変えていた。

ラリ・グラスのトンネルをぬってのキャラバンも、八日目には雪上の行進となった。はだしのポーターも多いので、十五ルピーの日給を靴代を含めて二十一ルピーに値上げしたものの、ポーターは九十七人に減り、翌日はさらに減って二十二人にまでなってしまった。隊員とシェルパも荷上げをし、三六〇〇メートル地点（アンナプルナ南氷河入口）に、三十一日一応荷を集結することができた。豪壮なマチャプチャレの下部岩壁の下、西に白く輝くガネッシュが眺められるところであった。

行動記録

四月一日、田部井、平野、シェルパ二人で上部偵察。ゴルジ

ュを抜けドイツ隊のBC跡まで約二時間。左側のグレーシャー・ドームが真っ白である。さらに急斜面を登りモディ・コーラの河原におりると、真正面にアンナプルナⅢ峰とガンガプルナの偉容があった。荷上げに時間がかかっても、BCはゴルジュの上にすべきだと判断する。

二日、南氷河入口よりBCへのルート工作を行なう。南氷河入口右手斜面裏、傾斜約五十度、二〇〇メートルの下降に固定ザイルを張ったが、落石が多く苦労する所である。午前中晴、午後雪の天気が続く。

三日、三七五〇メートル地点にBC設営。ドイツ隊のBC跡より十分登った西氷河入口のモレーンの上。雪はまだかなりある。同時に南氷河入口(仮BC)よりBCへの荷上げが始まる。

八日、BCへの荷上げと同時に、上部のルート工作を行なう。四三五〇メートル地点にC1設営。BCよりモディ・コーラ沿いに右岸斜面を行き、モディの源頭で左岸に移り堆石帯を行ったところである。青空を背にアンナプルナⅢ峰が正面に堂堂とその全容を見せている。

十日、平川、田部井でC2偵察、アンナプルナⅢ峰より続く前衛峰の末端の斜面をトラバースの後、東氷河に入り巨大なバットレスの左下にC2設営地点を発見する。

十一日、モディ・コーラの内院が一望のもとに見わたせる東氷河の末端、四八〇〇メートル地点にC2設営。

十四日、平野、真仁田、シェルパ二人でC3偵察、ドイツ隊のとったルートであるバットレスの右側より東氷河に入ってみたが、クレバスが多く五時間偵察しても見通しは立たなかった。

十五日、仮BCが撤収され、全員がBCに集合した。

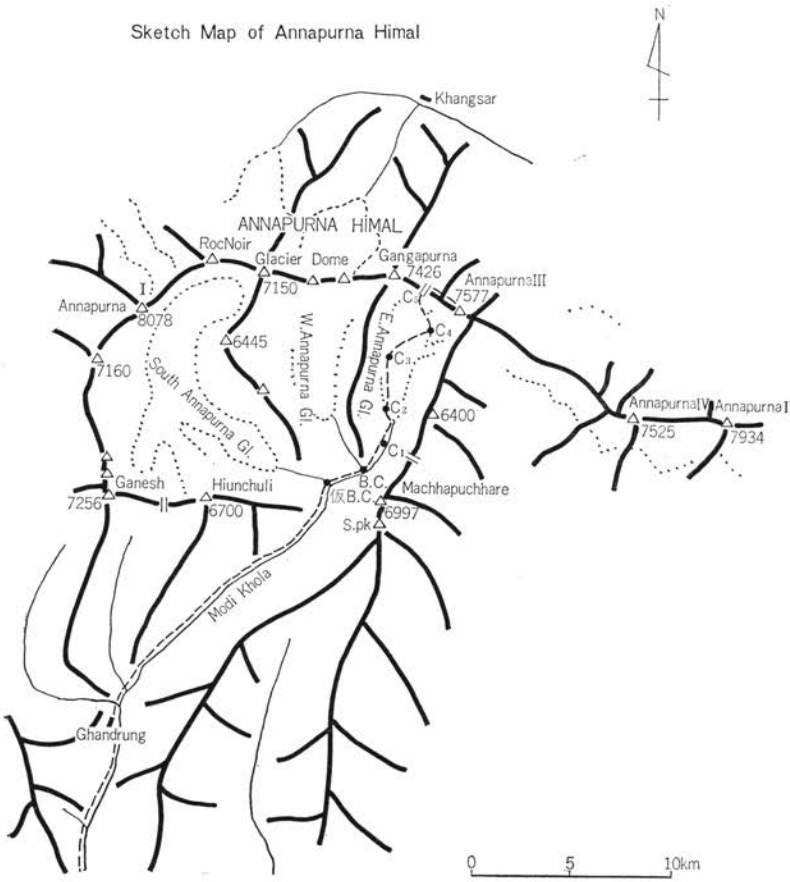
十六日、ゴルジュよりの荷上げが終了し、完全なBCが建設された。何と四トン近い荷を半月かけて、隊員とシェルパで荷上げしたことになる。われらがBCは汗の結晶であった。

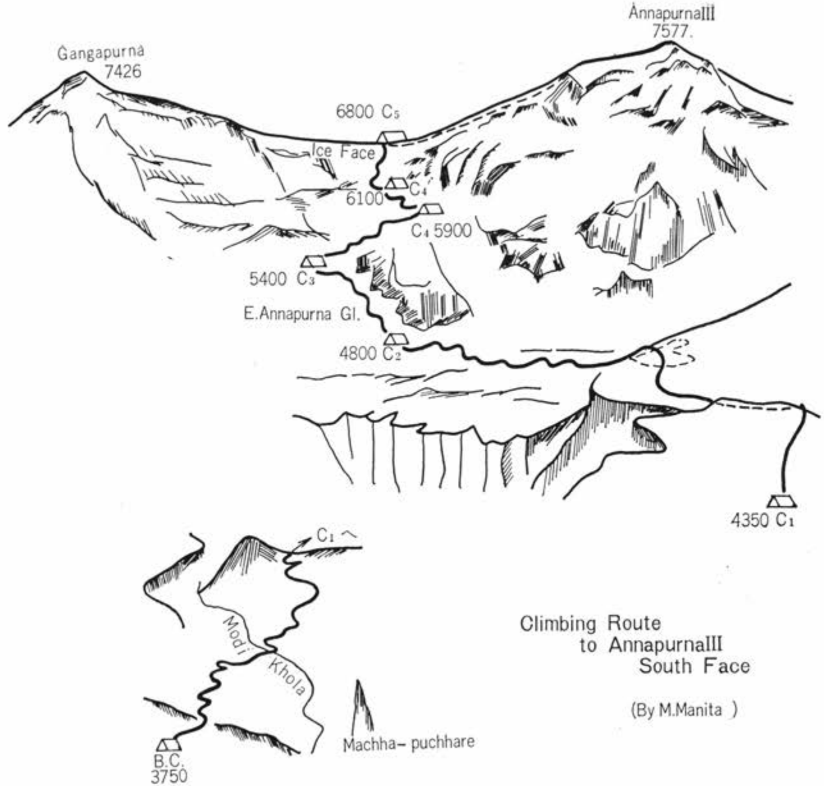
十七日、隊員六人、シェルパ三人が高所キャンプ入りする。山崎腸チフス発病。

二十日、シェルパ一人カトマンズよりBC入り。別送品を受けとって来ることになっていたが、十六日まで届かず空身で来た。

二十四日、C3設営(五四〇〇メートル)。十四日の結果から判断してバットレスの左側にルートをとってみたが、バットレスに寄りすぎたためか落石が多く中止した。バットレス右手ルートを再度偵察したが、大きなクレバスに行手を阻まれあきらめる。もう一度左手ルートを偵察し、東氷河の中央にルートを見つけた。青氷のアイス・フォールはまったくの迷路である。三ヶ所固定ザイルを張り、五三〇〇メートル付近までルートを伸ばすことができたが、アイス・フォールをぬけ出たこの辺はクレバスが多く、適当なテント設営場所がみつからず、設営地

アンナプルナⅢ峰登頂（1970 年）





Climbing Route
to Annapurna III
South Face

(By M.Manita)

点さがしに三日を要した。東氷河の真ん中だけに眺めはすばらしい。アンナプルナⅠ峰、ガンガプルナ、マチャプチャレ……とヒマラヤならではの豪華な顔ぶれである。

二十六日、C4偵察開始。

二十八日、C4設営。C3よりセラック帯を通りぬけ雪原に出てスノー・ブリッジを二ヶ所渡り、五六〇〇メートルのバットレス頭上部にテントがはられた。風が強く感じられる。コルに続く氷壁と、雪煙を上げるアンナプルナⅢ峰の頂上が目の前である。

五月一日、C4を五九〇〇メートル地点へ移す。さらに風あたりが強くなるが、付近にクレバスもなく安全地点である。ガンガプルナの南壁がすさまじいばかりだ。

二日、佐藤、真仁田、シェルパ三人でC5偵察。コルの下まで長い雪面のトラバースが続く。高さ二メートルもある大き亀裂を越え、コルへ達する氷壁へ出る。下部で傾斜四十五度以上、氷は非常にかたい。C4へ帰幕途中スリップ事故を起し、真仁田左肋骨強打、サーダー右肩右鎖骨強打。

九日、C4′（六一〇〇メートル）設営。C4から氷壁取りつきまで三時間を要するため、氷壁下にテントを設営しルート工作員の交代をスムーズに行なえるようにした。

十六日、C5へのルートが開かれた。夜C4にてアタックメンバーが隊長より発表された。

十七日、アタック隊（田部井・平川・宮崎）はC4′へ。モンスーンが近づいたらしく、朝は晴れているものの天気の崩れるのが早くなった。

十八日、アタック隊はシェルパとともにコルへ達し、六八〇〇メートルにC5設営。この登山のキーポイントであったアンナプルナⅢ峰とガンガプルナのコルへ達する氷壁は、傾斜五十五度、高度差七〇〇メートルの青氷の壁である。テントからテントへ約九〇〇メートルの固定ザイルを張りめぐらせ、実働日数十一日の苦戦の結果突破することができた。

C4′からすぐ前の氷の亀裂を越えたところから固定ザイルは始まる。氷の上に二十センチメートルくらい新雪ののっている不安定な雪面を、ガンガプルナ南壁の下部岩壁へとトラバースぎみに登り、そこから岩壁に沿ってまっすぐ登る。上からのチリ雪崩の多いところだ。岩壁の切れるところからトラバースして、氷壁の中央にある非常にもろい岩場にうつる。ハーケンを重ねうちしても不安なくらいだ。この岩場が終ると、非常にかたい青氷の壁の中央をコルへとステップをきって直登する。気温が低いためスノー・バーは昼間でも抜けることなくよくきいてくれた。高度感が十分あり、足下には東氷河が大きく流れ落ちているのが見える。コルに出ると雪のべっとりついたガンガプルナの稜線、ガスに煙ったアンナプルナⅢ峰への稜線があった。

十九日、田部井、平川、シェルパ二人は午前八時十分、C5出発、最初稜線の北側を行ったが、雪庇を乗り越えてからは南側へ出て稜線をたどり頂上に立つ。午後二時四十五分。気温マイナス十六度。ガスが濃く何も見えなかったという。午後三時二十五分下山開始。アイスバーンになった急斜面を風に吹かれながら下り午後五時二十分、C5に帰幕。

二十日、終日快晴。天候が悪化してきたこと、食糧が少なくなってしまったことにより、第二次アタックを中止し、C5を後にする。

二十一日、C5、C4′、C4を撤収し、隊員、シェルパ全員C3へ集結。私たちの登頂を待っていたかのように天気が崩れ、朝から風雪となった。

二十五日、全員BCへ下る。雪の消えたBCは緑が増し、モレーンの間からは小さな紫の高山植物の花が顔を出している。ヒマラヤの春がいっぱいだった。

ふりかえって

当初の目的通り、女性として初のネパール・ヒマラヤにおける七〇〇〇メートル峰への登頂に一応成功はしたものの、いささか気持の上ですっきりしないものがあった。

キャラバンから登頂への全登山期間において、登攀そのものにはさして問題となることもなく、比較的順調に高度順化が行なわれ、ルートをのばし、キャンプを確保することができた。シェルパについても、登頂後の態度に多少の問題はあったが、私たちの良き仲間となってくれた。天気も私たちに味方してくれた。初めにしては〝ラッキーであった〟と言わなければならないであろう。

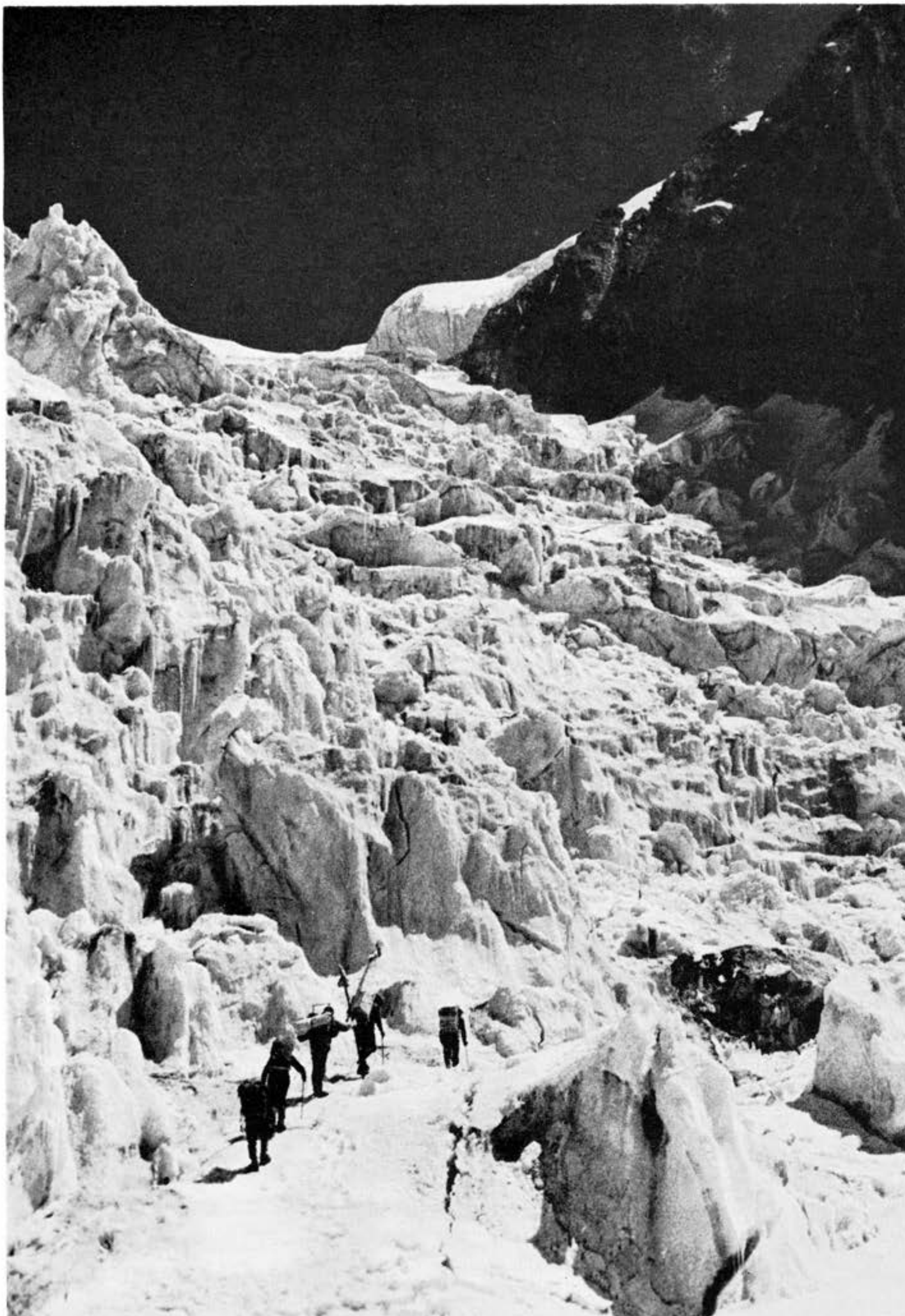
しかし今度の登山の計画が始まってから、現在に至る間に、精神的なトラブルがいくつかあり、登頂したということにおいてすらそのトラブルが尾を引き、お互いの心が成功感でしっくりとむすびつかなかった。その原因はと考え直してみると、やはり隊の性格にあると思われる。隊員がいわゆる〝寄せ集り〟であるということが、良きにつけ悪しきにつけ表われたことはどうにも否定できない。

ヒマラヤでの登頂はチーム・ワークの勝利といわれる。個人プレーではとうてい登れないのである。しかしそれを承知で、登頂と自分が頂上へ立つということを混同し、そのような考え方を行動に表わしてくる隊員がいると、チーム・ワークは根底から崩れる。私たちのように長年かかって積み上げたもののないチームだけに、そのような場合崩れるのも早い。その上、社会的訓練の不足から来る協調性のなさが加わると、もう山以前の問題となり、山にいて下界で味わうような人間関係のわずらわしさに苦しめられる結果になってしまう。大きな登山隊ともなれば、また大きな山をめざせばめざすほど、複雑な要素が入

モディ・コーラ源流から見たアンナプルナⅢ峰（右）とガンガプルナ（左）

Annapurna Ⅲ (right) and Gangapurna (left) seen from the basin of Modi Khola.

(by C. Urushibara)



C 2 ～C 3 間のアイス・フォール帯
Members climbing up the Ice-fall between Camp 2 and Camp 3.
(by C. Urushibara)

り込んでくる。それらの要素を的確につかみ、処理してゆく判断力と、人を動かし統率してゆく組織力、そして人の和を保てる協調性をそなえていることが、隊員にとって小手先の登山技術などより必要になってくると思う。

八〇〇〇メートル峰への挑戦の例（一九五九年、コーガン夫人のチョー・オユー）はあっても、世界でまだ八〇〇〇メートル峰の頂に立った女性はいない。私たちは今度の経験からして、技術と持久力では女性だけでも解決がつくから、登り方を工夫すれば女性のみによる八〇〇〇メートル峰も夢でないと思うようになった。このアンナプルナⅢ峰を、当初の話合いどおり、私たちは八〇〇〇メートル峰への礎石とするつもりである。

ともかく、反省することも多々あるが、何ら組織的背景も持たない、零から出発した隊としては学ぶことも多く、私たち九人のヒマラヤ一年生にとって満たされた遠征であった。

コー・イ・バンダコー登頂

（一九七〇年）

一瀬義典

計画から出発まで

われわれが最初目標に選んだ山はコーヨー・ゾムであった。モンスーンの影響がなく、七〇〇〇メートル前後の処女峰という虫の良い目標である。

これはオーストリヤ隊に先を越されてしまった（編者注・一九六八年八月十七日登頂）が、ヒンズー・ラジの最高峰という魅力は失われず、新たにツイII峰も目標に加えて計画を進めた。

六九年パンジャブ・ヒマラヤからの帰路、森本が偵察のためチトラルに入った。彼は現地で新潟大OB横山氏と長崎から直行した越智と合流、当時問題となっていたイストル・オ・ナールに試登した。そしてこれまで主峰とされていたのは最高点でないことを確認したと伝えて来た。そこで急遽目標をこのイストル・オ・ナールに変更してパキスタン政府に許可を申請した。ところが出発四ヶ月前に不許可の通知を受けとった。

すべてを七〇年の夏に合わせ、準備をして来たわれわれは一片の不許可通知で遠征を中止することはできず、許可の得やすいアフガニスタン領内に山を求め急遽計画を練り直し、最終的に目標をコー・イ・バンダコーに決めた。

隊員の構成は次のとおりである。

隊長　一瀬義典（36歳　教員）
副隊長　溝上春見（31歳　〃）
隊員　中尾勘悟（36歳　〃）
　　　松尾　司（29歳　〃）
　　　楢崎純雄（26歳　会社員）
　　　森本勲夫（35歳　医師）
　　　前波政昭（35歳　教員）
　　　猪俣敦子（24歳　薬剤師）
　　　大塚　大（日本山岳写真集団）

すでにバンダコーは十登をかぞえており、われわれの当初のねらいとはかけ離れたものであった。そこで第一に主峰を中心に縦走、次にバリエーション・ルートからの登頂、できれば全員登頂をひそかにねらった。

一九七〇年六月二十九日、先発隊二名、七月六日に本隊が福岡空港からカブールへ向けて出発した。七月八日、本隊がカブールに着いた時には、空路別送した荷はすべて先発隊の手でホ

テルに運び込まれており、諸手続も十二日には完了、七月十三日にキャラバン出発となった。

キャラバン

キャラバンのルートは中部ヒンズー・クシュの幹線パンシール谷をとることにした。車がフルに利用できるコクチ谷ルートをとることも考えたが、増水により車道が不通になることを心配したためである。

悪名高きダシテ・レワートの馬方に対する不安もあったが、途中、アンジュマン峠（四二二六メートル）を越す約二週間のキャラバンで、出発前のトレーニング不足を補い、高度順化をはかれるメリットがあった。

ダシテ・レワートに二泊。馬の交渉は聞かされていた通り、高賃金を約束せざるをえなかった。十五日の出発は村人の乱闘で始まった。しかし、歩き始めると十八名の馬方はもめることもなく、五日目の十九日、雪のすくないアンジュマン峠を越えた。ダシテ・レワートの馬方とは、五日間でアンジュマン村まで行くという約束であった。いずれアンジュマン村では馬を代えさせられると予想していたからである。しかしアンジュマン村に着いてみるととくに問題も起らず、ひきつづいてそのままケロンまで進み、ここで解雇した。

七月二十二日ケロン着。二泊後サキ谷へ向かった。今度はおとなしいケロンの馬方である。イブラル谷出合からすこし登った地点で一泊し、七月二十五日正午前、ベース・キャンプに着いた。

登山開始

ベース・キャンプはサキ谷の左岸、四二〇〇メートル地点に建設された。南西氷河から押し出したモレーン末端の美しい草地である。

西はコー・エ・イブラーの垂壁が立ちふさがり、南には遠くシャー・イ・アンジュマンからヤジュン付近までの山なみが望める所である。サキ氷河からの融水は豊富で、エーデルワイスが足の踏み場もないくらい咲いていた。

七月二十六日、二組の偵察隊を出した。松尾、栂崎はサキ氷河を、溝上、森本は南西氷河を登った。サキ氷河隊は五二〇〇メートル、南西氷河隊は五五七五メートルまで登り九時間後に帰ってきたが、彼らの報告は次のようなものであった。

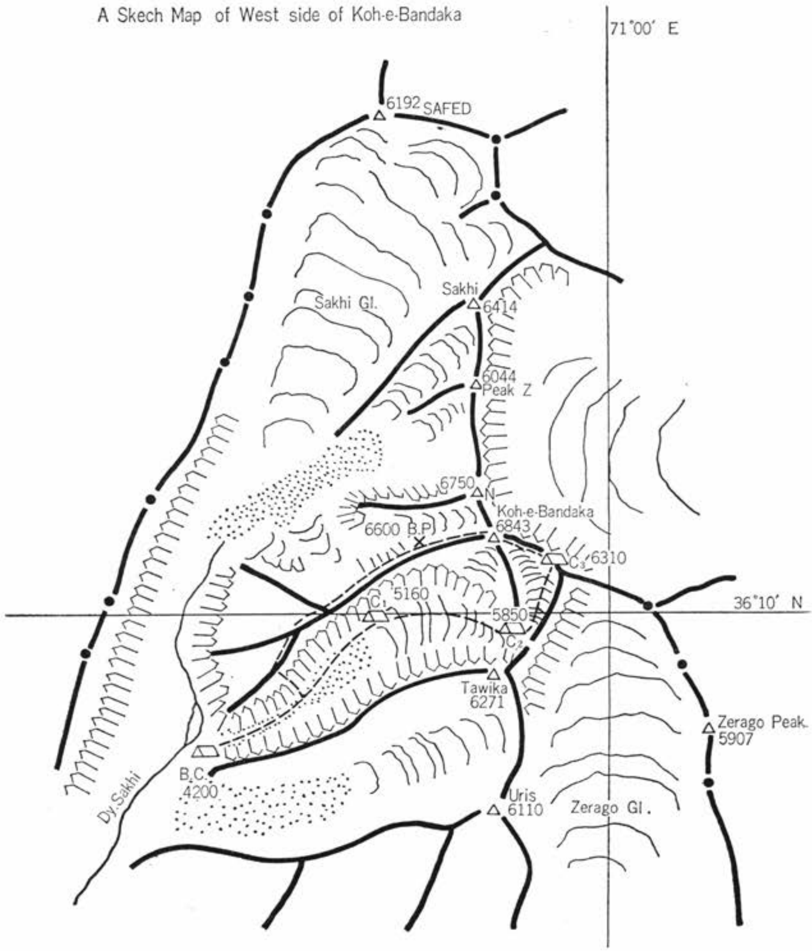
サキ氷河—南西稜へ北側から取りつくルートは入口が長いルンゼ状となっている。しかしここは雪がなく、急峻なガラ場となっている。その上部は広い雪壁で傾斜も急である。ルンゼが雪でうまっている早い時期は別として、今このルートをとることは危険がある。むしろZ峰と北峰の間のコルまで登り、北峰から主峰へ向かうのが安全に見えた。しかしBCから幾重にも

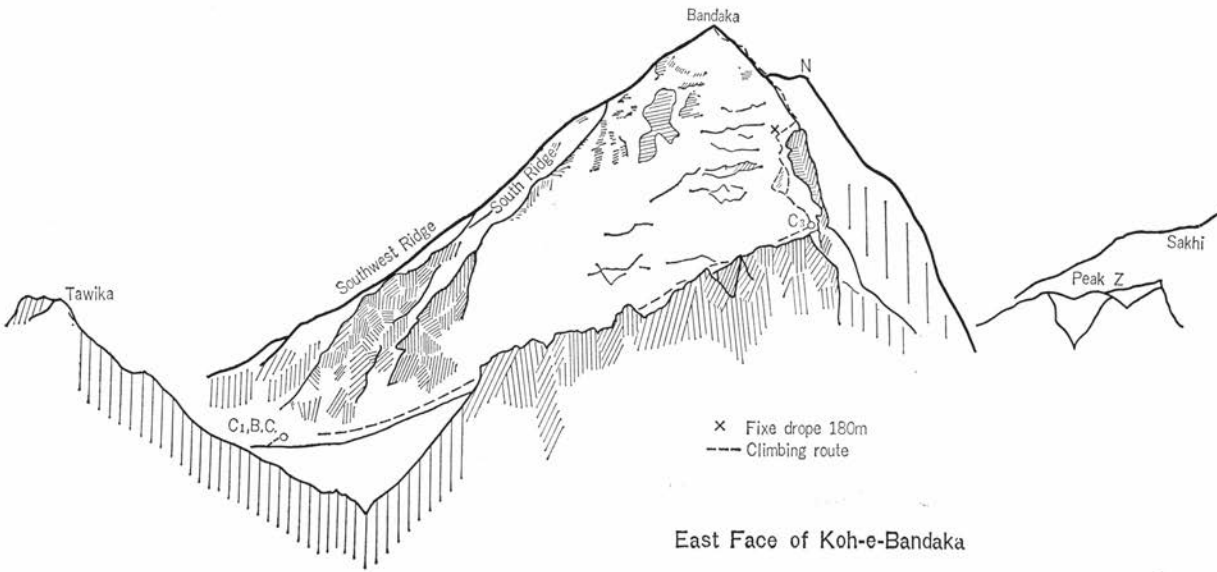
重なるモレーンを越すのはいやな荷上げになりそうだ。こちらから見る限り、縦走の可能性はほとんどない。サキ、サフェードだけなら簡単に登れそうである。五八〇〇メートル峰、ピークZは単なる氷のコブで登高欲はわかない。これに登るくらいならサキかサフェードに登った方がましである。

南西氷河—五〇〇〇メートルまではモレーンである。四八〇〇メートル付近に愛知学院大隊のルートと思われるルンゼがあり、切れたフィックスト・ロープも残っている。ここは浮石がかなりあるが、南西稜に取りつくのはやさしい。五一〇〇メートル付近に良いキャンプサイトがあり、近くは五メートル以上のセラックスが林立している。その上部は氷河がタウイカとバンダコーのコルへ続いている。コルまでは登れなかったが、氷河上は大きなクレバスも無く、コルまでは問題なく行けそうである。南稜は基部から観察できたが、その東側の様子は見ることができなかった。固定ザイルが残っていたルンゼから登るなら、明日でも荷上げを開始できる。しかし南西氷河をコルまで登り、南面または東面からアタックできれば未知のルートでもあり、大いに意義がある。コルまでは全員登れるので、東部ヒンズー・クシュの展望も期待できる。もし東面がだめとしても、南西稜への転進はやさしい。とにかく南西氷河側から荷上げを開始し、これと並行して南氷河の偵察を進めてはどうか。

以上の報告に基づき、全員で協議した結果、目標は問題なく南西氷河にしぼられた。どうせむずかしいなら未登の南面または東面にぶつかってみる。もし手に負えないなら南西稜へ取りつこうということで、南西氷河への荷上げを開始した。

七月二十七日から始まった荷上げは高度との闘いであった。アンジュマン峠越えで一応の高度順化はできていても、久しぶりに重い荷を担いで五〇〇〇メートまで登ると調子を崩す者が多かった。しかし、中一日の休養ですぐに回復した。BC入りして五日目の七月二十九日、五一六〇メートルにC１、続いて八月一日にC２を建設した。C２は南稜の末端五八五〇メートルの所で、六五年英国隊のものと思われるキャンプの跡があった。C２から東へ広いゆるやかな氷河を十分程登るとタウイカとのコルに達する。東側はゼラゴ氷河へ切れ落ち、下は見ることができない。ここからはキシミカーンからティリチ・ミールまでの東部ヒンズー・クシュ、クレベックからモンディまでの中部ヒンズー・クシュの山なみ、すぐ目の前にはゼラゴ・ピーク、ムンジャン山群が手にとるように望めた。南西氷河はここで大きく北に曲り、主峰南面の懸垂氷河へと続いている。この懸垂氷河をはさんで左に南稜、右に東稜がある。南稜は不安定な岩が重なっている感じの急峻な岩尾根である。途中にテントを張る場所が確保できるなら、南稜も登ることができると考えたが、確率の高いと思われる東稜をルートに選んだ。南氷河から東稜へ出る最後の登りは四五度ぐらいの氷壁で、苦しい荷上


A Skech Map of West side of Koh-e-Bandaka
71°00′ E
6192 SAFED
Sakhi Gl.
Sakhi
6414
6044
Peak Z
6750
N
Koh-e-Bandaka
6843
6600 B.P.
C₃
6310
C₁
5160
5850
C₂
36°10′ N
Tawika
6271
Zerago Peak.
5907
B.C.
4200
Dy.Sakhi
Uris
6110
Zerago Gl.



East Face of Koh-e-Bandaka

げのために幻覚症状を呈する者もあり、C1、BCまで下って体力の回復をはかった。
六三一〇メートルにC3が完成したのは八月五日である。ここからはパミール、ワハンの山々が手に取るように見える。C3は稜線の南側、急斜面のピッケルのピックも受けつけない氷壁を、やっと削って三人用のテントを張った。北側は二五〇〇メートル下の氷河までナイフでそぎ落したような所である。

アタック失敗

八月七日、溝上、森本の二人は六時半C3を出発、アタックに向かった。サポート隊はC3でトランシーバーを受信状態にしてアタックの様子を見守る。
「蒼氷の上に新雪が深く積っており、胸までの雪をラッセル、一時間で三〇メートルしか進まない所もある」「新雪がない急斜面はアイスハーケンも受けつけない固さ」と、十二時までの連絡はかばかしくなかった。その後四時間アタック隊との交信が絶え、C3とBCでは気をもんだ。
十六時C2にアタック隊の声がやっと入った。それによると「六五〇〇メートル付近のルートは極度に困難である。トランシーバーもデポしてルート工作に没頭していた。六五八〇メートル地点まで固定ロープをセットしたが、それ以上は進めなかった。しかし東稜完登の見通しはついた」ということで、BCでもほっとする。
十七時半、二人はC3にもどり、その後の行動についてトランシーバーで協議した。
C3の意見では、アタック隊は三名ほしいという。そこで次のように翌日からの行動をきめた。即ち、八日早朝C2の三名がC3まで登り、その中の一名はアタック要員としてC3にとどまる。二名はルート工作（主としてラッセル）をしてC2にもどる。溝上、森本は休養して九日の第二次アタックにそなえることにした。
明けて八月八日は入山以来最大の風で、BCではフライが飛ばされたりした。五時、定時交信が始まってもC3は応答なく、七時になってC2からは風が強く行動できそうもないといってきた。しかし、十時近くになりやっと風もおさまり、C2の松尾、楢崎、前波がC3に向かった。
一四時C3に着いた三人からの連絡によれば「溝上、森本の疲労は限界に達している。明日の第二次アタックは無理だからひとまず全員BCに下る」とのことであった。この日全員がBCに帰ったのは日没後一時間以上たってからであった。
八月九日と十日は休養日にあて、思い思いに体力の回復をはかった。この日ドイツ人三人、続いてフランス人三人のパーティが相次いで入山、いずれもバンダコー主峰が目的であった。

東稜新登頂

八月十日、ドイツ隊、続いてフランス隊が南西稜へ取りつくのを見送って、今後の行動計画を練り直すことにした。すでに目標は東稜の完登一本にしぼられ、サキ谷の未登峰を試登する計画を放棄することに誰も異議はなかった。

第二次アタックは溝上、森本に楢崎を加えて三名とする。松尾、前波の二名は一日先行し、C3から六五〇〇メートルまでのルート工作をサポートする。一瀬、猪俣はC2まで上ることにした。アタックを三名にすると登攀時間を長くすることにもなるが、一人での確保は不可能な所が多い。また東稜を下降する場合二名で確保して安全度を高めたかったからである。

八月十一日、行動を再開した。サポートの四人がC1へ上り、アタックの三名はこの日まで休養した。十二日、サポート二名はC3へ、アタックの三名はC2まで登った。天候はくずれる心配もなく、十三日、五名がC3に集結した。C3は狭くサポートの二人はツェルトをかぶり、やっと横になることができた。

八月十四日、三時半に交信を始める。サポートの二人は頭痛のために苦しそうであるが、せき立てられるように四時出発。一時間後には三名のアタック隊がC3を出発した。ルート工作のおかげで前回とは比較にならぬ早さで高度をかせぎ、七時、六五〇〇メートル地点でサポート隊は引き返す。

「いよいよ登攀開始。まず森本、楢崎、溝上のオーダーで進む。取りつき点の足場はくずされてしまい、ラストはバイルを持ってとびあがり、ハーケンにひっかけてやっとのことではいあがるありさま。一〇〇メートルぐらいはフィックスにほとんどぶらさがるようにして時間と高度をかせぐ。フィックスがきれたあたりから氷壁となる。二ピッチだがなかなか手強い。アイスハーケンもU型は曲がってしまって入らない。スクリューハーケンを打ち込んでも大してきいているとは思えない。失敗は許されない。お互いの力を信じるよりほかにない。氷壁が終るとルートを稜線ぞいにとる。アイゼンが快適にきくところはわずかしかない。急斜面での深雪との闘いがほとんどだ。やむなく危険を承知で、歩きやすい雪庇の上にルートを取ることが多くなる。二、三度ふみ抜き、三〇〇〇メートル下の氷河がのぞけたが、しっかりした確保で大事にいたらずにすむ。

午後二時過ぎ、安全地帯へ抜ける。高度六七五〇メートル、紅茶、チョコレート、おかきの昼食、ほんのわずかしかのどを通らない。C3からの偵察で最後の難関と思っていた頂上へ続く雪庇もあっけなく越してピークへ近づいた。」（溝上登攀隊長記）

三名が頂上に立ったのは十五時十分であった。感動に震える声がつぎつぎにトランシーバーから流れた。ほとんど無風快

コー・イ・バンダコー主峰と南西稜、後は北峰
Koh-i-Bandakâ seen from Sakhi Gl. (by T. Matsuo)

コー・イ・バンダコー東稜（C3より）
Koh-i-Bandakâ and its East Ridge seen from Camp 3.

(by M. Maeba)

晴、三六〇度のパノラマをほしいままに味わうことができた。「頂上はかなり広い雪の広場、どこが最高点かまよいそうである。北から、パミール、東部ヒンズー・クシュ、中でもイストル・オ・ナールをはさんでノシャックとティリチ・ミール、南にはクレベックからモンディまでの山なみが美しい。西にはK・M山群（クワジャ・ムハマッド）、そのうしろにピークX、Y、すぐ近くに見える北峰は登高欲はおこらない。」三人は一時間以上頂上から楽しい報告を送ってくれた。

無事登り切った東稜ではあるが、下降は登り以上に困難が予想される。下降路は南西稜にとり、六六〇〇メートルまで下ったところでビバークする。

八月十五日、三名は一気にBCまで下山した。途中、登頂はしたものの疲労がはげしく動けなくなっているドイツ隊、登頂をあきらめたフランス隊に会い、五五五〇メートル地点では六八年愛知学院大隊が行方不明の黒宮隊員のために残したテントに冥福を祈った。

やがてC3からサポート隊も下山、全員がBCにそろって新登頂の喜びをわかちあった。

コー・イ・バンダコー東稜のアタックに予定以上の日数を費やしたわれわれは、次の目標に向かう余裕を失ってしまった。しかし未登の東稜を完登しただけで満足していた。

八月十六日、ベースキャンプを撤収する日、山には秋の気配が感じられ、帰路の荷は六頭の馬に背負わせ、隊員もハザラドセイドまで馬の旅を楽しんだ。ジュルムでやっとトラックを見つけ、ファイザバードを経、クンドゥズでバスに乗りかえ、八月二十九日カブールに帰り着いた。

（編者附記） 本峰については、ユー・イ・バンダコール (Koh-i-Bandakor)、コー・イ（エ）バンダコー（カー） (Koh-e-Bandakā) などさまざまな呼称がなされていて定説がない。しかし、ヒンズー・クシュの研究家である吉沢一郎氏に糺したところ、今日では現地での発音に基づいてコー・イ・バンダコーという呼称が大勢を占めつつあるということなので、それに従った。

コー・イ・パガール登頂（一九七〇年）

中瀬　司

出発まで

一九六九年、われわれ蒲郡山の会の夏山定着合宿は涸沢で行なわれた。集中豪雨で三日間におよぶ停滞を余儀なくされ、沈滞ムードの漂うなか、誰となしにヒンズー・クシュが話題を集めていた。三、四年前からそれぞれに研究はしていたものの、社会人としての制約のために自然に立消えとなってしまっていた。そうした時に、「七〇〇〇メートル級の処女峰を女の子が登ったとさ」と云う一言は、各人各様の夢を持っていたわれわれにとっては刺激材料であった。「とにかく行こう、五〇〇〇〜六〇〇〇メートルの処女峰をねらい、合宿形式で互いに練成しよう。そこで習得出来た技術は将来海外での困難な登山や国内での積雪期の登攀に大いに役立つだろう」。憧れでしかなかった海外の山へ登る計画が、ほんの思いつきで進行しようとしていた。合宿の後半は快晴がつづき、滝谷での楽しい登攀の毎日はたえずヒンズー・クシュ計画が話題になった。九月に入ると海外登山の経験のないわれわれは碧稜山岳会の石川富康氏を訪ねて、六八年、六九年と中部ヒンズー・クシュへ出かけた愛知学院大学山岳部監督の湯浅道男氏を紹介していただいた。九月二十二日に初めてお伺いした後、われわれのもたもたした準備のテンポに合わせて、ひとつひとつ具体的にアドバイスしてくれる日は十数回に及んだ。計画の進行と共に、憧れの山は一歩一歩現実のものとなりつつあった。最終的な目的地の選定には大垣山岳協会の『シャー・イ・アンジュマン登頂』が非常に参考になり、資金、休暇、技術的な問題をにつめて、登山期間は七〜八月、目標はアフガニスタン王国の中部ヒンズー・クシュ、パガール谷左岸の最高峰、コー・イ・パガールとその周辺の山々、日数が許せば、日本隊のまだ入っていないK・M山群（クワジャ・ムハマッド）の踏査を行なう、という方針を決定した。

明けて七〇年、九分どうり国内準備もととのった五月七日の午後、外務省文化事業部担当官牧内氏より、遠征の成否にかかわる重大なニュースを告げてきた。五月二日付でアフガニスタン政府は十二ヶ条からなる登山規制を通告したとのことであった。その第五条に、「登山隊は五名以上で、ドクターを同行のこと」とある。隊員四名でドクターを加えない予定のわれわれにとってこの条項は致命的であった。しかし〝いくたの困難を

乗り越えてこそ……〃地方の小登山隊の内外での弱さをしみじみ味わいながらも、一週間後、労苦のかいあって、名古屋大学付属病院第二外科久崎真行医師に隊付ドクターを引き受けていただき、追加隊員一名も決まってようやく登山規則に基づく陣容を整えた。

隊員の構成は次のとおり。

隊長　中瀬　司（28歳）会計、記録
副隊長　石川紘一（28歳）食糧、輸送
隊員　長坂　優（28歳）渉外
　　　鈴木重太郎（22歳）装備
　　　三輪茂晴（28歳）食糧
　　　久崎真行（34歳）隊付ドクター

五月二十日付で登山許可を受領、六月二十二日、小雨降るなかを、名古屋空港より一路アフガニスタンへ飛び立った。

遠征日誌

宿舎アリアナ・ホテルに落ちつく。抜けるような青い空、カラリとしたさわやかな空気。この西アジアの国アフガニスタンの第一印象はすこぶる良好、カブール到着と同時に登山手続に走り廻った。

七月二日、すべての準備を終え、八〇〇キロに及ぶ装備、食糧の積み込みを終り、ジープとタクシーに分乗し七時三十分、カブールを出発した。カラボ、チャリカルを過ぎると、じきにパンシール谷に入った。とうとうと流れる河は、いかにも雪解けの増水を思わせる。ジャブラサジ、エノマを過ぎてバザラックに到着、ここにはジープ運転手の家があり昼食に招待される。彼の家は柳の枝がたわわに垂れ下ったパンシール谷の河岸にあった。柳の下にジュウタンが敷かれ、手製のクッションにもたれての昼寝。河岸を吹き抜ける風は、ひからびたわれわれの肌に心地よかった。長い昼食をおえ、さらにパンシール谷を遡る。上高地を広くしたような景色が旦々と続く。谷間の流れにそって、桑や柳の木々が生い茂り、緑のオアシスを作っている。ジープはその間を砂塵を上げて走った。グンジュを過ぎて峠を下り、ダシテ・レワートに着くと、たちまち周囲は黒山の人だかり、ランランと光る眼、悪名高き馬方の出現である。馬方チーフの家に案内され、キャラバン第一日の宿とする。しかし夜中にダニの大群におそわれ、眠れぬ一夜を過ごした。

七月四日、馬によるキャラバン出発。八時頃より馬方が集まり、荷物の奪い合いが始まる。馬方チーフが大見幕で演説をぶったら荷積みも軌道に乗り出した。九時十五分出発、待ちに待ったキャラバンの開始である。先程の騒動はどこへやら、馬方たちも陽気な歌声とともに歩きだした。パンシール谷の水量は意外に多く、枝谷を馬に乗っての渡渉は壮観であった。十七時十五分、牧草のある河州にて夜を迎える。各隊員とも食欲旺盛。

七月五日、久し振りに日本食を味わう。めしと味噌汁、懐しい味だ。十時出発、アフガン・ペースである。十六時、パリオン・クスール村着。

七月六日、雨の音で目が覚める。アフガンに来て初めての雨であった。しかし朝食の仕度をする頃には、何時の間にかアフガン特有の美しい青空に変っていた。七時四十五分、何のトラブルもなく、出発、シャハレーブランド村を経由しザルダーゴにて幕営。

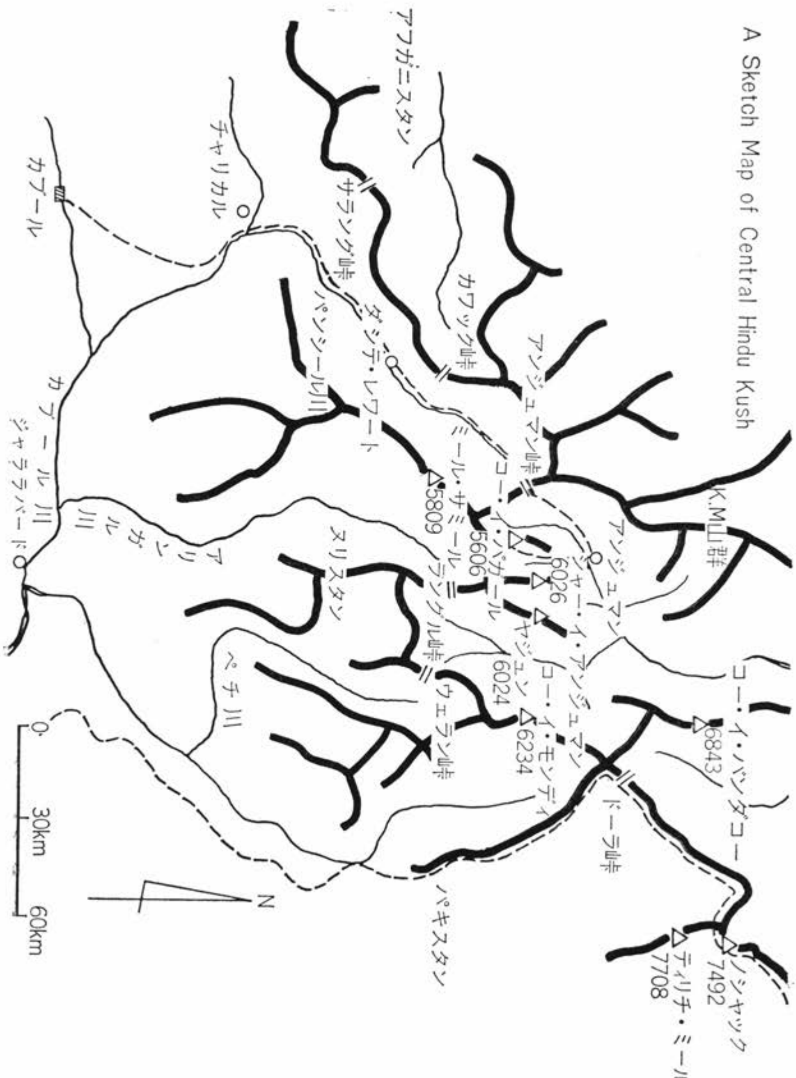
七月七日、激しい雨で目が覚めた。昨日に続いて朝の雨、馬方たちもフライ等で雨をしのぐ。それもテントの中で朝食をとる頃にはあがった。正面のベルグザールの岩峰がうっすら雪化粧して美しい。八時三十分出発。十五時三十分、三八〇〇メートル地点にて幕営。雨が激しく降り出し、早々にテントに入る。三輪、久崎ドクターは高度の影響を受け始め、頭が痛いと云ってシュラフにもぐる。食後、馬方にねだられて、明日のアンジュマン峠越えのスタミナ源にと羊一匹買わされる。夜通し泣いていた羊が気になって眠れなかった。

七月八日、過去の登山隊の記録によれば、アンジュマン峠越えは、午前二時頃起床して峠を越すと云うのに、馬方達、ようやく重い腰を上げて十時出発となる。三輪、ドクターは昨日より風邪気味と高度の影響で元気がない。峠へ登り出す。当然雪があって良いはずなのに、いっこうに雪らしきものはなく、なんだかんだいっているうちに、二〇メートル程雪渓をトラバースしたら峠に出てしまった。道理で彼等がのん気にしているはずだ。ちゃんと計算に入れての行動であったに違いない。昨夜買わされたスタミナ源は彼らにしてやられた感じである。石川、鈴木は峠より先発してルイスウィク谷BC予定地まで偵察に出るが、馬が入らないだろうと考えてルイスウィク谷出合で待っていた。予定よりかなり低い地点になったが、ここにBCを設営することにする。

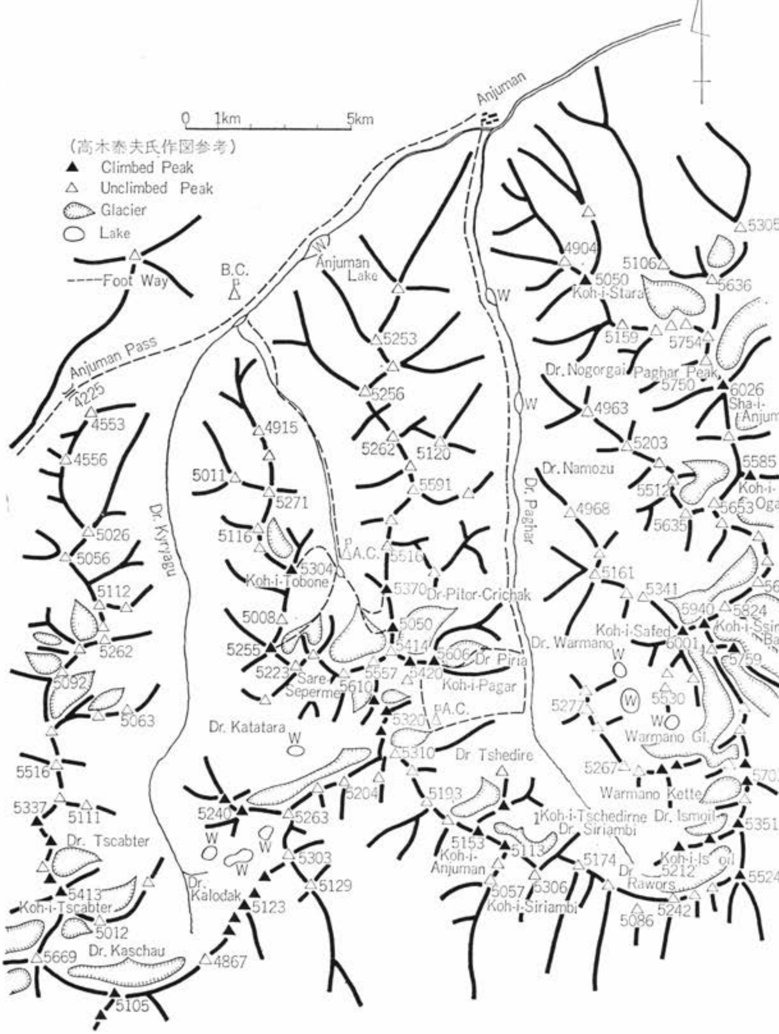
七月九日、今日も雨、日本の山のように毎日雨が降る。アンジュマン峠と周辺の山々に新雪が積り美しい。今日から、われわれとマッハブ（通訳、カブール大学四年生、二十二歳、アーリアン系、父は官吏）、グロムジョン（護衛の馬方）との生活が始まった。午前中は自由時間とし、午後中瀬、長坂とでルイスウィク谷四〇〇〇メートル地点まで偵察、装備係は、明日から始まる荷上げのパッキング。

七月十日、中瀬、長坂、ドクター、アンジュマン村長宅を訪問。三輪、体調悪く休養。石川、鈴木は第一次荷上げ、四〇〇〇メートル地点にデポ、さらにルイスウィク谷左氷河上の四五〇〇メートル付近まで偵察する。

七月十一日、全員で第二次荷上げ。平均三〇キロを背負い、四四〇〇メートルのAC予定地まで。高度差九〇〇メートル、かなりしごかれた。


A Sketch Map of Central Hindu Kush
アフガニスタン
チャリカル
カブール
サラング峠
カワック峠
パンシール川
ダシテ・レワート
アンジュマン峠
ミール・サミール
5809
コー・イ・パガール
5606
アンジュマン
K.M.山群
6026
シャー・イ・アンジュマン
ヤジュン
6024
スリスタン
ウェラン峠
コー・イ・モンディ
6234
コー・イ・バンダコー
6843
ドーラ峠
パキスタン
ノシャック
7492
ティリチ・ミール
7708
ペチ川
アリンガル川
カブール川
ジャララバード
0
30km
60km
N

Central Hindu-Kush Dr.Pager and Dr. Kyryagu



七月十二日、第三次荷上げ。連日の行動で皆バテ気味だが、全員で荷上げを行なう。ルイスウィク谷は、アンジュマン谷とパガール谷との間にある長さ十一キロの小さな谷で、入口は狭いが、奥は広々とした氷河谷である。アンジュマン川を渡渉し、入口の急な登りのあと、放牧用のしっかりした踏跡がガラ場やモレーンを縫って続いている。途中三ヵ所ほど草原があり、咲きみだれる高山植物は荷上げに疲れたわれわれの心を慰めてくれた。周りの山から転げ落ちた巨岩が点在し、清流がせせらぎ、まるで楽園である。現地人のエーロックもあった。エーロックに着くと、アンジュマン村長が出てきてニコニコと召使いにノンとチャイを命じた。村長にルイスウィク谷をとり囲む山々の名を絵に書いて尋ねると、ルイスウィク谷の左岸の山山は皆コー・イ・ルイスウィクと呼び、目標のコー・イ・パガールについては、このコー・イ・ルイスウィクがパガール谷からはコー・イ・パガールと呼ばれているとのことであった。草を追って谷に生活をしている彼らにとって、谷の名前一つ一つはその放牧権とともに重要なものであるが、生活に関係のない山々の名前はどうでもいいらしい。今日で荷上げ終了。ACも設営できたので明日は休日とする。

七月十三日、休日。アンジュマン湖へ鱒釣りに行く。塩焼きが美味であった。

七月十四日、九時BCをたつが、高度の影響で足どりは重い。BCも冷いアンジュマン川の渡渉もしばしの別れだ。谷の入口の登りはいつもきつい。北穂高岳南稜のような登りで、滝谷での登攀を懐しく思い出した。十六時AC着。

七月十五日、第一次偵察。ルイスウィク氷河は、サレ・セペルメの西のピークから派生した五〇一二メートル峰によって左右に分けられている。左俣氷河はサレ・セペルメ、五五五七メートル峰、五四一四メートル峰と続く稜線の高度差七～八〇〇メートルに及ぶ岩壁帯の下に幅三キロ、長さ四キロのスケールで横たわり、ルイスウィク氷河の主流をなしている。全体におだやかな氷河で、サレ・セペルメの岩壁の下以外はクレバス帯もなく、ヒドンクレバスにさえ注意すれば危険はない。右俣氷河は五二二三メートル峰と五二五五メートル峰との間にある小さな氷河で幅二キロ、長さ二キロほどである。サレ・セペルメから五四一四メートル峰へ続く岩壁帯は見ているだけで素晴らしい。それだけに突破口を見つけるのは容易な業ではあるまい。

七月十六日、五〇五〇メートル峰の登頂。五四一四メートル峰と五〇五〇メートル峰を結ぶコルに出て、岩屑とナイフリッジの交錯したもろい岩稜を慎重にたどり、十三時、一人がやっと立てるせまい頂上に立つた。五四一四メートル峰の北面は、頂上から五〇〇メートル下のコルまでまっすぐに岩稜が落ちていた。ことにその下部は積木のように岩を積み重ねた逆層の岩場で、落石が絶えなかった。しかし、眺めは素晴らしい。コー・

イ・パガールはパガール谷左岸の山群の盟主にふさわしく、広々としたパガール谷をへだててひときわ高く、また、シャー・イ・アンジュマン、その南にはワルマノ谷の奥にコー・イ・サフェドがその名の如く白い雪をかぶってそびえていた。偵察の結果、北面ルートはほぼ絶望と判断し、続いてサレ・セペルメの西面ルートに一縷の望みを託して、偵察隊を出すことにした。

七月十七日、サレ・セペルメ偵察の石川、長坂、三輪の三名は七時にACを出発、十五時まで行動するが、西稜は岩壁の連続でこの方面もほぼ絶望的と判断せざるをえなかった。

七月十八日、左氷河をつめて、五四一四メートル峰北稜直下のコル目指して雪壁と岩場の交錯したルンゼを一〇〇〇メートルほど登ってコルへ出た。コルから北稜に取付いてみたが、もろい逆層のフェースにルートをはばまれて退却、ついにルイスウィク谷からの登頂を断念した。そして残された可能性、パガール谷よりの登頂ルートの偵察に、中瀬、長坂があたり、他の三名は二十五日までとどまり、五〇〇〇メートル級の未登峰を狙うことにした。

七月十九日、中瀬、長坂はBCに下山。石川、三輪、鈴木はデポ地点の荷物の撤収。

七月二十日、ACパーティは悪天のため停滞、中瀬、長坂はアンジュマン湖付近に幕営していた長崎大隊を訪問する。

七月二十一日、八時、パガール谷偵察に出発、十六時、アンジュマン村経由ダーシュ着。ツェルトを張り、幕営。

七月二十二日、ピリア谷出合に幕営。

七月二十三日、ピリア谷の四七〇〇メートル地点にACを設営。

七月二十四日、五時二十分AC発。ここから見るとコー・イ・パガールの頂上は思ったより近くに見える。アイゼンのよくきく斜面を登ると、広いカール状の雪原に出る。氷河をつめ、東尾根の側壁に取付く。十六ピッチ、七時間に及ぶ雪壁の登攀に体力を使い果たしたが、依然として頂上は遠い。やむなく、五四〇〇メートル地点の稜線上でツェルトなしのビバークを決める。

七月二十五日、寒気との戦いに眠れぬ一夜を過ごす。今日は雪稜から岩稜へ、岩稜から雪稜へ、途中二ヵ所、下降用の固定ザイルをセット、十三時十五分、五五五〇メートルの岩峰に立つ。コー・イ・パガールの頂は目前にありながらも、もろい岩と体力の限界にはばまれ、引返さなければならなかった。最後の食糧のチョコレート半分、一口羊かん一個を腹の中へおさめ、未知の谷、アブドール谷へ下降を開始、岩壁帯下部の雪稜上に戻り小休止。「今日もまたビバークだな。もう食べる物は何にもないぞ。」と会話も淋しい。十八時、安全地帯に出てホッと一息入れる。パガール谷出合まではかなり遠い。幾重にも重なりあったモレーンを乗越しまた乗越しての下降は辛かった。二十

ピリア谷から見たコー・イ・パガール東面
East face of Koh-i-Paghar seen from Piria dale.

コー・イ・パガール北面
North face of Koh-i-Paghar.

ルイスウィク谷から見た5414m峰（右）とコー・イ・パガール（左）
5414m peak (right) and Koh-i-Paghar (left) seen from Ruysowuk dale.

5304m峰から見たコー・イ・パガール
Koh-i-Paghar seen from the summit of 5304m peak (Koh-i-Tobone).

時、ゴルジュらしき所をぬけた川原でビバーク。

七月二十日、ビバーク地点は思ったよりパガール谷に近かった。七時三十分、ワルマノ谷出合のエーロックにつく。即座にノンとチャイを要求、冷えきった身体と空腹感は、暖かいチャイと砂入りノンで満たされた。八時十五分、彼らの家を後にする。ピリア谷のテントサイトは気の遠くなるような高さであった。十二時四十五分着。なにも云わず手あたり次第パクパクほおばる。ようやく満腹感を感じた所でシュラフへもぐり込む。

ルイスウィク谷パーティの石川、鈴木、三輪は、涸沢から滝谷、奥又白谷、屏風岩への登攀を楽しむがごとく、七月二十一日、五三〇四メートル峰登頂、二十二日、五三七〇メートル峰登頂、二十四日、五二五五メートル峰登頂と、心ゆくまでルイスウィク谷での登攀を楽しんだ。

七月二十七日、油の切れた機械のように足腰がギシギシする。ピリア谷のAC撤収、ワルマノ谷出合上部にツェルト設営。

七月二十八日、ルイスウィク谷で登攀を終えた三名と合流、明日は最後の登頂ルートを求めてアブドール谷へ向かうことにする。

七月二十九日、アブドール谷の入口は狭く、ゴルジュとなっていた。四五〇〇メートル地点の氷河湖のほとりにAC設営、パガール南面五四二〇メートル峰との間のY字状ルンゼを偵察、登頂の可能性は十分あると判断、氷河上のモレーンに装備をデポ、明日の幸運を祈りACへ下る。

七月三十日、アタック隊の中瀬、長坂、三輪の三名はビバークの準備をして、五時三十五分AC発、Y状ルンゼに取付く。背丈程もあるペニテント・スノーの乗越しには苦労する。サポート隊と合流後、Y状ルンゼの右ルンゼにルートを取る。心配していた大滝は案外簡単に高捲きできたので、ルート工作の必要がなくなり、サポート隊は左ルンゼにルートを取り五四一四メートル峰に向かう。右ルンゼの状態は氷と雪のミックス、落石の巣のような感じである。三輪、長坂、中瀬のオーダーでアンザイレンして取付く。十二ピッチ目、稜線直下のガラ場に出た。コンティニュアスで稜線にでる。アブドール谷の山々はすべて眼下にあった。雪稜を一歩一歩たどり、十四時十分、とうとう登った。この凝固した一瞬にたどり着くまで、長かった、実に長かった。ルイスウィク谷から仰ぎ見た非情の北壁、ジャンダルムにさえぎられたピリア谷の敗退、高さにおいて他の山山に劣るとも、われわれにとってコー・イ・パガールは何物にも優る頂上であった。登頂の感激にしばしひたった。石川、鈴木のサポート隊も五四二〇メートル峰に同時登頂、共に感激をわかち合った。

七月三十一日、休日。八月一日、アブドール谷AC撤収。八月三日、BC着。

八月七日、BC撤収、帰路は入山と同じコースをとって、八

月十一日、カブール帰着。

附記

ケンムテンとミュンヘンの学生、ライネル・ノイガ(Reinel Neugar)のパーティの云っているコー・イ・バガールは五五九一メートル峰を指すものであり、また、大垣隊のパノラマ写真においても、同様に五五九一メートル峰をコー・イ・バガールとしている。しかし、その点については、われわれが現地で調査した結果、五六〇六メートル峰がコー・イ・バガールであることが判明した。なお、五三〇四メートル峰は、帰国後、コー・イ・トボネ(遠望峰)と命名した。

ピナウイ谷登山記

木内義忠
松下征文

はじめに

われわれは滋賀県岳連初の海外登山隊として中部ヒンズー・クシュに入った。医師を除く全員が大津山岳会々員であり、海外登山は会創立以来の念願であった。

中部ヒンズー・クシュに目標をおいたのは、会員にその方面の経験者（舟橋明男広大OB・ヤジュン峰登頂）がおり、ヒマラヤ山系では、もっとも入りやすいと判断したためである。

出発までの一年間、われわれは毎日研究を行ない、万全の準備をした。しかしビザはなかなかおりず、出発間際になって、突然の登山規制通達を聞き、実施が危ぶまれた。

われわれが直面したのは隊のなかに医師が含まれていない問題であり、そのことは初めから考えていなかったため、当惑した。しかし、八方手を尽し、京都大宮病院に勤める佐藤ドクターに快く同行を願えたのは、救いの神であった。

隊員の構成は次のとおりである。

一九七〇年滋賀県山岳連盟ヒマラヤ登山隊

隊長　木内義忠（28歳）
隊員　松下征文（26歳）食糧担当
〃　中西俊三（23歳）装備担当
〃　辻井良夫（23歳）会計担当
〃　松島謙二（23歳）記録担当
医師　佐藤道明（32歳）

アプローチ

五月二十八日、別送便にて二八〇キロの荷物を送り、六月九日、隊長以下五名がソ連船オルジョニキーゼ号で大阪港を出発、ソ連廻りでカブールに向かう。六月十五日、夕刻、カブール空港に着く、空港の無料バスにて悪名高きアリアナ・ホテルに入る。翌日より、挨拶まわりや別送便引取りとともにキャラバン準備を行なう。

六月二十日、空路カブールに着いたドクターを迎え、大使館で紹介していただいた通訳を二十一日面接の上決定した（通訳アジズ・アンサリー）。

二十二日、ランドローバー二台でカブールをたち、夕刻ダシテ・レワートに着く。さっそく馬の交渉を行ない、二十三日馬八頭馬方八人でキャラバンを始める。二十七日夕刻、アンジュマン村に入り、ここで馬方をチェンジし、ピナウイ谷BC予定地まで二日間として契約を行ない、翌日より再びキャラバンを続ける。二十九日ピナウイ谷に入り、二九八〇メートル地点でストップする。BC予定地まで入りたかったのであるが、キャラバン出発以来、馬方たちにストばかりやられており、この地点でまたもやストをやられ、お前達を殺して帰ると脅迫してきたので、やむなくピストルを発砲してその場を静め、金を払い、翌三十日早朝にかえした。

BCまで隊長以下五名が、おのおの四十キロをかついでピストン輸送することにし、まず第一池まで荷上げをする。一回目の荷上げをして帰ると、スカザーの猟師四人がドンキー六頭にわれわれの装備を積んで登って来た。通訳が無料だと言うのでそのままBCへ向かう。第一池でキャンプし、木内、中西はBC予定地に向かい、七月一日、ドンキーと三人のボッカで第四池の池畔（三五〇〇メートル）にBCを設置した。やれやれと思った途端、猟師が金品を出せと騒ぎ出す。通訳は当初は無料だといっておきながら、今度は五〇アフガニ位が相場といっているが、彼らは二五〇アフガニ出せと騒ぐ。夜おそくまでねばったが、うるさいので二五〇アフガニ払いその場を静めた。翌朝も騒いでいたが、われわれはかまわず登山活動を始める。

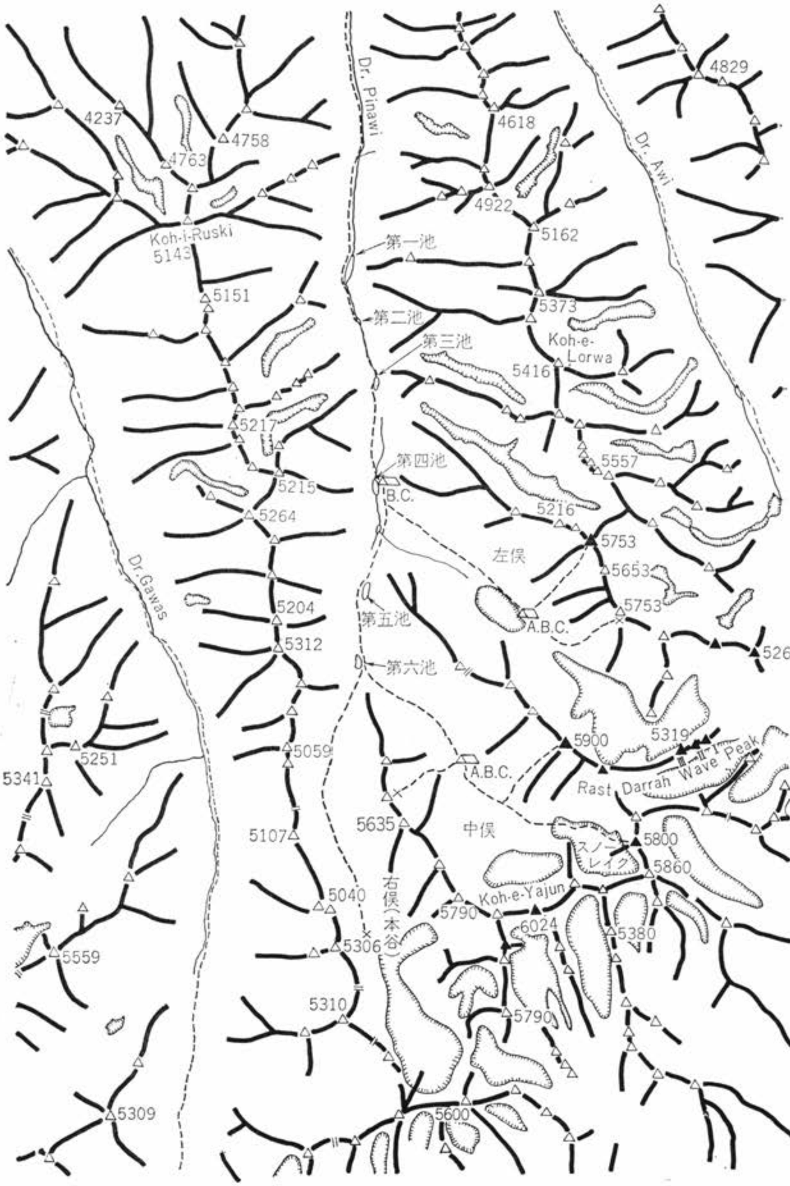
登山活動開始

BC付近はラストダラーという地名で、第四池をスカザーの村人はシュキーと呼んでいた。この池は周囲約八〇〇メートル位で、美しい水を満々とたたえている。枯木が多くあり、BCでの燃料はほとんど枯木を使った。

BCより上流は、三つの谷に分れており、向かって左から、左俣、中俣、右俣と呼ぶことにし、木内、中西が左俣、松下、辻井、松島が中俣へと偵察に行く。久し振りに仲間だけの行動ですがすがしい。初めて見る氷河、深く澄みきった空、その上登高欲をそそる山が無数に聳えている。サクラ草や各種の高山植物が、その美しさを競い合うかのごとく咲き誇り、天国でもかくあるまいと思う。夕刻BCに帰り作戦を立てる。その結果、左俣よりアタックすることにし、ABC設営のため、二日間荷上げを行ない、四三〇〇メートルのモレーン盆地にABCを設営することとする。

五日、六時四十分、松下、中西がABCより、ラストダラー氷河右岸の五七五三メートル峰のアタックに向かう。昨日は雪が降ったが、今日はアタック日和だ。中西の日記を引用すると次のとおり。「ガラガラのモレーンをつめ、ピーク目指して直上する。まもなく雪の詰ったルンゼ押出しに着く。アイゼンを着け

A Sketch Map of Dr.Pinawi and its surroundings



て出発するが、ペニテント・スノーのために歩きにくい。四ピッチ目で凍結した十メートルの滝に出くわすが、左岸よりアイゼンの出歯をきかして乗越す。あとはただ登るのみ。つるべで確実に登る。ルンゼが右折している地点（五〇〇〇メートル）からは胸のつかえるような氷壁となり、時々ステップを切り、アイスハーケンをねじ込んで登る。十五時頃には頂上に立てるだろうという予想が、どうしたことか、氷壁がまだまだ続く。ピークは目の前なのに、高度の影響で五歩位登ると息をつかねばならない。二十二ピッチ目、ついに十六時となる。今日はここまでと思い、ビバーク地を捜す。しかし、こんな氷壁のどこにもビバークできる場所などみつからない。ところが二十四ピッチ目、私が稜線にとび出したとたん、反対側に鷲の巣のようなテラスを見つけた。十七時ビバークに入りホットする。しかし五六〇〇メートルでのビバークは猛烈な頭痛におそわれ、うんざりする。薬を忘れたため苦しいビバークが始まった。ひと眠りして目をさますと、西の空から雲が広がり稲妻が光りだす。そのあと翌朝まで吹雪となり、切り立った稜線のわずか一メートル四方のテラスでのビバークは、極度に苦しかった。」

六日、相変らず雪が降り、ガスが出ているので、登頂を諦め六時四十分下降を始める。出合に迎えに来た仲間とともに昼前ＡＢＣに帰る。このピークは放棄して次の目標へ移ることにする。

七日、松下、中西はＢＣへ下り、荷上げをして再度ＡＢＣに帰る。木内、辻井、松島は、十一時にＡＢＣを出て、ＡＢＣのすぐ右岸にある五七五三メートル峰のアタックに向かう（四五〇〇メートルまでドクターが同行）。その後、木内隊は、降雪のため十五時四十分五〇〇〇メートル地点でビバークする。八日、降雪のため、今回のアタックも失敗、ビバーク地よりＡＢＣへ帰る。悪天続きで苛立つ日々だ。

十一日、雪が止んだので、五名で七日にアタックした五七五三メートル峰に再び向かう。そのときの模様を中西の日記から引用する。「ルンゼ下部のモレーンにルートを捜しつつ登行する。先日木内パーティがビバークしたすぐ下のルンゼに取付く。十メートルの雪壁を登ると岩壁に移り、岩登りを続ける。五二〇〇メートル地点の凍った池のある広い台地につき、ビバークする。十二日、ガスが出ているが雪は降っていない。ツェルトの外が明るくなったので目を醒ます。アタックだ。四時三十分、全員を起こす。六時三十五分出発、ルンゼ末端の一ピッチ目は、何故か松下が遅れ気味、気分がすぐれず下山することになった。中西、松島および木内、辻井のオーダーで、コルへ続く雪のルンゼに取付く。ルンゼは先日来の降雪で足首までもぐり、歩きにくい。軟雪の下には氷が隠されており、前途多難を思わせる。昨日偵察したルンゼに入って行く。安全を考慮してスタカットで登る。先行する中西パーティの落とす氷片に肝を

冷やしながら十二ピッチ目稜線にとび出す。疲労のせいか苦しい登攀であった。稜線はABCから眺めたときは岩稜と予想していたが、雪稜になっていた。コルから右へ二ピッチで頂上に立つ。十二時だ。一時間頂上にいて、ABCとの交信および撮影と三六〇度の展望を楽しむ。トランシーバーを通して聞こえてくる松下の声もはずんでいる。全員がピークに立てればもっと素晴らしかっただろう。同じオーダーで下降し、十八時にABCへ着く。」

十三日、天気は良いが、日数的にこれ以上左俣で登山をする余裕はないので、ABCを撤収しBCに下る。

十四日、晴。木内、中西は右俣を偵察に行く。他の三名は、BCより中俣と右俣出合の第六池まで二回ボッカを行なう。しかし、偵察の結果、長々と続く右股はアプローチに時間がかかるので中止し、残されたすべてを中俣に集中することに決定した。今日は村人が羊を放牧に来ていたので、一頭を三〇〇アフガニで買った。これで一週間肉を食べられる。

十五日、晴。ドクターと通訳の下山を見送り、十時四十分全員BCを出発し、中俣のヤジュン湖畔にABCを設営する（四〇八〇メートル）。松下は皮をはいだ羊をかつぎ、全員四十五キロのボッカにあえいで、十七時二十五分ABC設営地点に着いた。ヤジュン北壁下にある、周囲一〇〇〇メートルのヤジュン湖は、表面は油を浮かせたように澱んでおり、湖水は生では飲めそうもない。しかし、正面に見えるヤジュン峰とこの池に映るヤジュンの姿は、限りなく美しい。

十六日、晴。全員出合のデポからABCへボッカ。

十七日、晴。木内、松島は上部偵察、松下、中西、辻井はABC左岸の五六三五メートル峰へアタックに向かう。その模様を中西の日記から引用しよう。「中俣で初めてのアタック、ABCより取付の四二〇〇メートルまで一時間、ピークの左肩より流れる氷河のモレーンをつめる。そこでアイゼンをつけ、最初の二ピッチは落石との戦いだった。松下は取付でこぶし大の落石を右肩にうけたが、腕がしびれているだけだということでアタックを開始する。ABCから見ると傾斜はゆるいと思っていたが、案外急な氷河である。氷河の両側は、落石と落氷がブン〳〵飛んでくる。したがって真中を登らざるをえない。ピッケル、アイスハンマー、出歯アイゼンのコンビネーションでぐんぐん登る。氷河の中間地点まで登ると、傾斜のゆるい所があり、そこで休憩し、さらに一ピッチ登るとクレバスの中に入ってしまった。そこから左へトラバースすると、三人が腰かけられる岩場に出る。天候が気になるのでそこで早々とビバークする。五〇〇〇メートル地点である。二十二ピッチ登ってまだこの高さだ。うんざりするほど長い。

十八日、夜明け前雪が降ったが、まあまあの天気である。せまいテラスでのビバークであったが、三人とも身体の調子はよ

い。八時十五分出発。ピッチが思うようにあがらないので少しあせる。七ピッチ登って上を見げると、頂上まであと二十五ピッチはあると思われる。今夜ビバークする事は不可能だ。考えが甘すぎたようだ。やむなくここで登行を打ち切り、氷河の動く音を聞き、落石の雨をぬって大急ぎで下降する。ＡＢＣに四時十分着。仲間に合わせる顔がなかった。」

十九日、雨と雪の悪天であるが行動する。木内、松島がラストダラーの西側に聳える五九〇〇メートル峰に向かう。しかし雪が降り止まぬため、昼過ぎＡＢＣへ戻る。松下、辻井は、下山するドクターに頼んでおいたノンを受けとるため、ＢＣに下る。しかし村人は来なかった。十五時にＢＣを出る予定であったが、雨が激しく降りだしたため、二人ともＢＣに泊る。入山中最悪の天気だった。

二十日、晴。松下、辻井もＡＢＣに帰り、全員アタック準備のため休養。

二十一日、晴。木内、中西、松島および松下、辻井の二パーティに分れて出発する。木内パーティはラストダラー西肩のピラミッド状に聳える五九〇〇メートル峰を目指し、七時四十五分にＡＢＣを出る。池を右岸沿いに進み、南西尾根の西側にあるガラ〱したモレーンを登る。五〇〇〇メートル付近でアイゼンをつけ五三〇〇メートル付近まで登り、十六時頃ビバークに入った。

松下パーティは、九時三十分にＡＢＣを出発し、スノーレイクの東側にある五八〇〇メートル峰のアタックに向かう。三日間の装備、食糧を持ち万全を期す。スノーレイクの唯一の流出口となっている急な氷河を、重装備に喘ぎつつ登る。右側にはヤジュン北壁が美しく輝いている。高度約五一〇〇メートルにあるスノーレイクは周囲約五キロ、六〇〇〇メートル近い山々に囲まれて物音一つしない、静かな内院である。四時過ぎ、アタックルートに予定しているルンゼ手前の岩陰にツェルトを張り、ビバークする。

二十二日、晴のち曇。今朝はマイナス十二度を記録する、木内パーティは、ビバーク地を八時に出発し、十一時過ぎコルに立つ。そこから南東に向かい、五九〇〇メートル峰の頂上に立つ。雲が広がり展望はきかない。一時間頂上で過ごし、同じルートを下って、十九時五分にＡＢＣへ帰る。

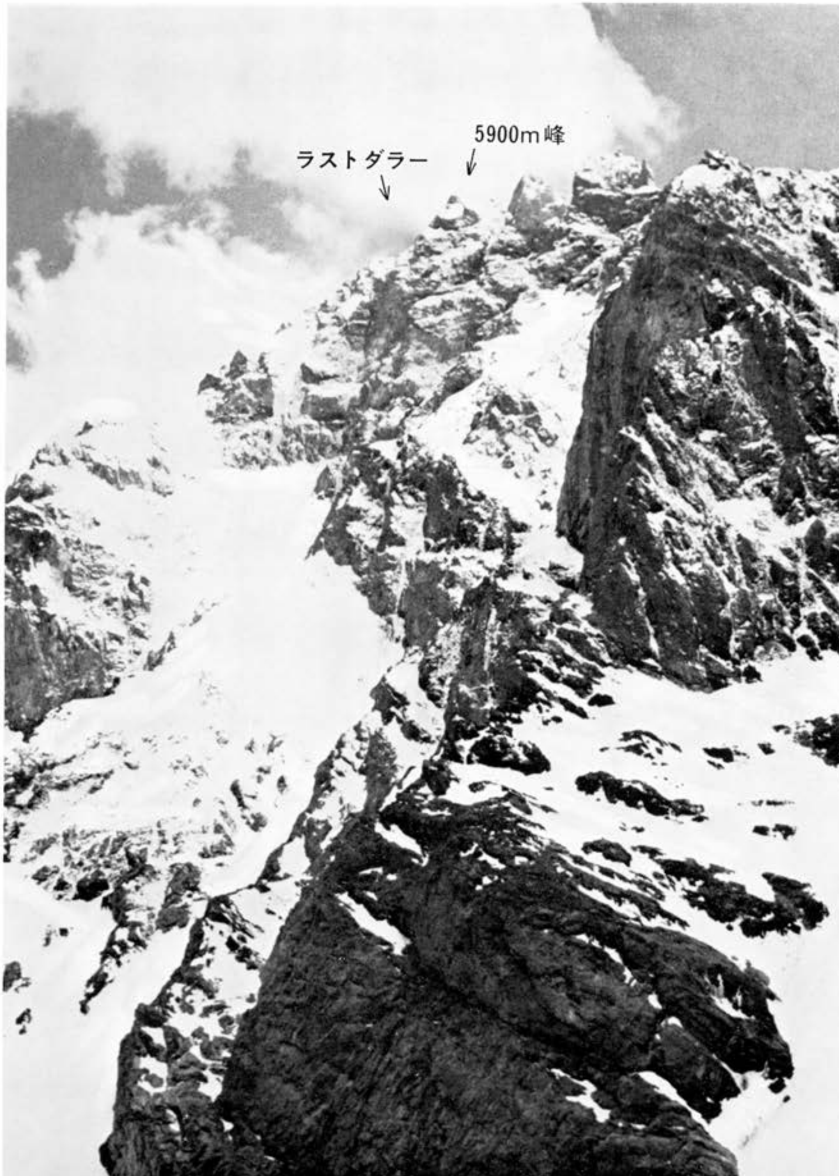
松下パーティは、六時四十分にビバーク地を出て、目指すピークの東へ直接突き上げる氷河状ルンゼを登る。ザイルは使わない。取付から三分の二位登ったところから右手の頂上氷壁帯に移る。しかし、岩まじりの氷壁帯の登攀は思ったより時間がかかる。五六〇〇メートル地点でアンザイレンし、四ピッチで稜線に出る。頂上まで右に十メートルだ。頂上に立ったのは、十四時三十分であった。

松下にとっては、四度目のアタックで踏みえた頂上である。

中俣スノー・レークから見たヤジュン北壁
Yajun North Face seen from the snow lake of Central dale.
(by M. Matsushita)

アイガー北壁に似ているヤジュン北壁とヤジュン西峰(6024m)、下は ヤジュン湖
Yajun North Face and Yajun West seen from the lake Yajun.
(by M. Matsushita)

中俣スノー・レーク東側の5800m峰
5800m peak. Climbing route is marked. (by M. Matsushita)



ラストダラー北西の5900m峰
5900m peak, which was climbed from the opposite side.
(by M. Matsushita)

悪化してきた天気に追われるように十五時に頂上を後にし、十九時にスノーレイクのビバーク地へ帰る。

昼過ぎから両パーティの間の交信が出来なかったため、お互いに心配な夜を過ごした。

二十三日、曇。松下パーティＡＢＣへ帰る。

二十四日、晴。昼まで休養し、午後ＡＢＣを撤収しＢＣへ下る。

二十六日、晴。七時五〇分、松下、中西は、右俣偵察のためにＢＣを出発、ヤジュン西側四五〇〇メートル地点まで登り、十九時にＢＣ帰着。右俣は奥まで入っても高度差はあまりなく、モレーンの丘を登ったり下ったりするだけで、植物もなく単調な谷間である。しかし地理的な関係からは右股というよりはピナウイ谷本谷とすべきで、谷の最奥に聳える五六〇〇メートル峰の堂々たる姿は目を楽しませてくれた。

ピナウイ谷周辺の山は、尾根の北東側が急で、南西側はゆるやかな傾斜という特徴をもっている。それにしても、ピナウイの周囲には未登の素晴らしい山々がまだまだ残っている。本谷最奥の山や第二登にはなるがヤジュン北壁などは、バリエーション・ルートとして注目に価するといえよう。

ピナウイ谷を去る

二十九日、晴。十時、馬方二人とドンキー四頭でＢＣを撤収し下山する。

ノンが思うように現地調達出来ず（現地調達の考えが甘かった）、食糧不足で下山することになったのは残念であるが、素晴らしいチームワークの下で楽しく活動し、三峰の初登頂をかちえた充実感は何ものにもかえがたいものであった。二〇時十五分、月夜の中をスカザーに着く。村人はイスカズールと呼んでいる。

三十日、スカザーをドンキー四頭、馬方四人で九時に出発する。松下、辻井はノンの焼けるのを待って十分後出発。

われわれは、当初コクチャ谷からアズラテサイドに行く予定であったが、何故か村人はコクチャは通れないという。やむなく彼らの意見にしたがってコクチャ谷より一つ西側のラホーイ谷を通ることにする。ラホーイ谷の途中からふりかえると、われわれの登ったピナウイ谷の山々が美しい山容を見せていた。スカザーの馬方は休まずに黙々と前進する。十八時十分、三七〇〇メートルのラホーイ湖に着く。この湖の西側はロックフィルダムのようになっており、左側に一ヶ所湖水がゴーゴーと吹出す流出口がある。周囲六キロ位だ。

三十一日、六時出発。ラホーイ谷は西へ大きく曲り、二俣出合を北へ登って行き、九時三〇分四七〇〇メートルのオシュナゴン・パスを越える。苦しい登りだったが、峠を越えた所は一面のお花畑で、われわれの疲れをなぐさめてくれる。群生する

エーデルワイスがとくに印象的だった。オシュナゴンへ下りて、初めての村ニシに十五時着。村の東はずれにキャンプする。

八月一日、六時三十分出発。オシュナゴンの各村落を通過し、十四時頃コクチャ谷出合を過ぎる。十七時十分、アズラテサイドへ腹を空かして到着した。建築中で屋根のない日乾し煉瓦の家で寝る。

二日、車を捜していると、運よくドイツ人登山隊が大型ジープで村に入って来た。さっそく運転手と交渉し、十時四十分そのジープに乗りこんで村を離れた。キャラバンが終り、砂漠の中の久し振りのドライブに、腸がグニャ〱になるのも忘れてジープに揺られていた。ジュルム、ファイザバード、クンズーツを過ぎ、四日の十五時三十分、なつかしいカブールに帰り着いた。

カンジロバ・ヒマール主峰初登頂（一九七〇年秋）

常慶和久

一、まえがき

私たち大阪市立大学山岳会は、過去、一九六一年と一九六四年の二度にわたって、ネパール・ヒマラヤのランタン・リルンに遠征隊を送った。[註1] しかし、いずれも不成功に終った。そのため、ランタル・リルンは当会にとって、いよいよ悲願の山、宿命の山と化していった。

ネパール政府の登山禁止により、リルンの実現性は一歩後退した感がし、望みはただ解禁を待つばかりだった。一九六九年、待望の解禁が実現されたものの、三十八座の中にリルンは含まれておらず、ネパール政府の登山許可もとれずに今日に至っている。

第一次の遠征以来十年、海外遠征も年ごとに盛んになり、ランタン・リルンを「宿命の山」として胎教されてきた若い山仲間の中にも、無為に打ち過ごす現状を危惧して、ランタン・リルン以外の山を目指すムードが醸成されてきた。そして、若手OBと現役三〜四名が集まり、三十八座の中で私たちの技量にあった処女峰という方針でチェックして、最後に残った山がカンジロバ・ヒマールだった。当会にあって、第二次ランタン・リルン遠征後計画がもちあがりかけたが、登山禁止のため立消えになってしまったこと、ちょうど一九六九年の岩友会隊（カンジロバ踏査隊）に当会会員の沢田が参加するという経緯もあって、カンジロバ計画に拍車がかかった。

二、カンジロバ・ヒマールの概念とその魅力

カンジロバ・ヒマールはダウラギリ連峰の西にあって、アピ、サイパルに次ぐ西ネパールの高峰である。その主峰（六八八二メートル）は、高度、位置、地形等が不明確のため、いつとなく「幻の山」と呼ばれ、長い間、謎に包まれていた。これは登山家の情熱を駆りたてるほどの巨大な山でなかったことと、西ネパールの辺境にあるが故に、ポーター、食糧等の確保が難しく、かつ複雑な地形をしているため、アプローチが非常に困難である、という要因も関係していたと思われる。

過去、登山を目的としてカンジロバ・ヒマールの山域に接近あるいは踏査した遠征隊は、一九五二年のティッヒー隊（オーストリア）、一九五八年の川喜田隊、一九六二年のイギリス女

性隊、一九六三年と一九六七年の東海大学隊、一九六三年の同志社大学隊、一九六七年のノルディック隊（オランダ）、一九六九年の岩友会隊、同年の神戸商科大学隊、そして一九六一年、一九六四年、一九六九年のタイソン隊（イギリス）が挙げられる。各隊はそれなりの成果を収め、カンジロバ山域の解明に少なからず貢献してきた。しかしながら、これだけの遠征隊が出かけたにもかかわらず、決定的な地理的解明はなされず、依然として主峰は人を寄せつけず、未知の山域の盟主として残されていた。

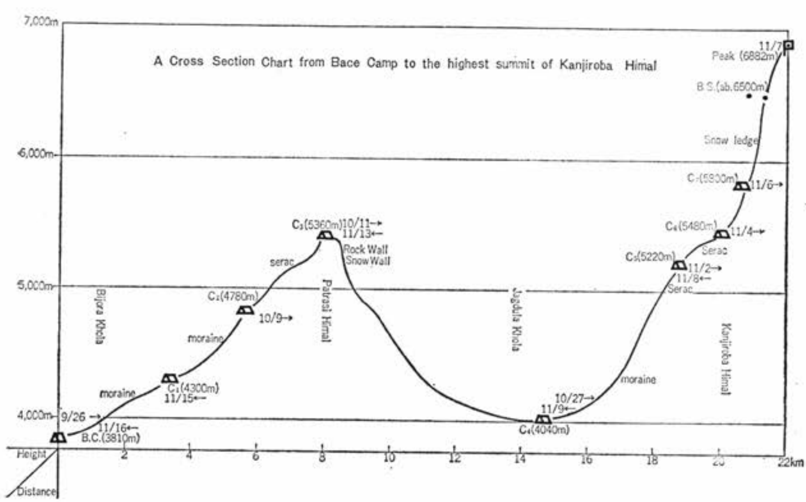
主峰に接近する方法、可能性はほとんど見当たらなかった。一九六一年、タイソンは主峰の南麓を流れているジャグドゥラ・コーラからの接近を試みたが、深いゴルジュに行手を阻まれて退却。翌年のイギリス女性隊もラ・シャンマ登頂後、その肩からメイダンへ下り、深いゴルジュ帯の迂回を試みたがこれも失敗している。私たちはこの谷よりアプローチすることは一〇〇パーセント不可能と断定した。一方、北からのアプローチは、一九六四年、再びタイソンが試みたが主峰へ通じる沢に入ることができず引き返した。三度、タイソンは北から攻めたが、時間切れで、主峰を陥落させることはできなかった。[註2] 荒廃したラングー・コーラ、深い谷、長いアプローチを考慮すると、スムーズに主峰の麓に達する可能性はほとんど期待薄だった。残るは東か西からのルートしかなかった。東からのルートは「地図の空白部」[註3] といわれるだけあって次の疑問点があった。第一に〃第二の高峰〃[註4] がどの位置に存在するのか。第二に六六六〇メートル峰（カン・ジェラルワ）[註5] の山群は独立したものなのか、あるいはカンジロバの主脈かウェッジ・ピークにつながるのか。第三に、ハンギング・グレイシャー・ピークス、ウェッジ・ピークとカンジロバ主脈との関係はどうなのか。仮にこれらの疑問を解くことができ、主峰に接近できるにしても、この奥深い氷河の中までポーターを連れて行くことができるのか、また彼らの食糧の確保はどうするのか、考えれば考えるほど悲観的な結論しか出なかった。最後の西ルートはどうか。タイソンの地図[註6]には、パトラシ・ヒマールの西は等高線が明示されているものの、実際に荷上げは可能なのか、また全くの空白であるジャグドゥラ谷側への下降は可能なのか。研究するにも資料はなく、カンデ・ヒウンチュリに行った神戸商大隊の成果を待つしかなかった。

こうして「いかにして主峰に接近するか」という大きな難問をかかえながらも、他の山にない、この探検的要素の豊富なカンジロバ山域の魅力は各隊員の心にしっかりと根をおろし、当初、ヒマラヤの処女峰であればよかったものが、準備の過程を通じて、もはやカンジロバ・ヒマールでなければならないものとなっていった。

三、合同遠征隊の実現

カンジロバ主峰登頂を目的とする一方、日本とネパール両国の親善を一層緊密にするため、日本で初の日・ネ合同遠征を試みようというプランが生まれた。丁度万国博のネパール・ナショナルデーに出席のため来日されたマヘンドラ国王に、その件を渡瀬学長より申し入れ、快諾を得た。これを実現させるため、先発隊として、奥田、沢田両隊員が七月にネパール入りし、現地にて交渉した結果、トリブヴァン大学から、登山技術はともかく、非常にすぐれた資質と安定したパーソナリティを持った二人の先生の参加を得ることができた。二人の参加により単なる登山だけで終ることなく、学術調査を含めた一段と充実した実り多い遠征隊となり、これが今回の遠征が成功した隠れた要因であった。

最後の問題点として残されていた西面からのアプローチは、東海大隊、神戸商大隊の写真にある最低コルがタイソンの地図と一致したことにより、パトラシ・ヒマールを越えるという全くユニークなプランによって解決された。それは「解決」というより、むしろ「賭け」だった。コルに到達する見込みはついたものの、ジャグドゥラ谷側がどうなっているのかは推測するしかなかった。それもどちらかといえば悲観的なものだった。しかし、カンジロバにひきつけられた私たちにとっては、もは



やこの方法しかありえなかった。そして登頂の成否を、このコルからの下降に賭けたのである。

今回の遠征の特徴は、日・ネ合同遠征と、パトラシ・ヒマールの下降という、かって例を見ないアプローチ方法をとったことのふたつにある。

メンバーおよびシェルパは次の通り。

隊長 常慶和久 (29歳) 積水化学工業(株)勤務、第二次ランタン・リルン遠征隊（一九六四年）隊員
副隊長 佐藤一良 (25歳) 蝶理(株)勤務
隊員 諏訪真一 (25歳) 医師、写真・測量、大阪市大附属病院勤務
奥田寛 (23歳) 渉外、日本ペイント(株)勤務
後藤昌行 (22歳) 食糧・輸送、経済学部四回生
沢井弘忠 (22歳) 装備、経済学部四回生
沢田宗博 (22歳) 記録・会計・気象、法学部四回生、岩友会カンジロバ・ヒマール踏査隊（一九六九年）隊員
S・L・アマチヤ (34歳) トリブヴァン大学講師(経済地理学専攻)
P・R・シャルマ (31歳) 同右（考古学専攻）
サーダー アン・バブ (35歳)
シェルパ プルキパ (45歳)
ツェリン・ナムギャル (28歳)
パサン・ニマ (25歳)

四、ベースキャンプへ

九月一日と三日の二隊に分かれ、チャーター機にて全員スルケット到着。六日、一一〇名のポーターとともにキャラバン開始。八日、ダイレクにてポーターの交替。山蛭に悩まされながらマブ峠を越し、十六日、ジュムラに到着。ここまではポーター雇傭も請負制度で安くあがり、全く順調だった。翌日、羽毛服の件でシェルパとトラブルが生じたが、金で解決した後、橋作りのため先発隊を送る。タルフィにて三たびポーターの交替を行ない、チョーダビシ・コーラに入る。ジュムラ地方のポーターは請負制が理解できない上、質がよくないし、しばしばストライキを起こし苦労させられた。チョーダビシ・コーラはモンスーン中のため増水しており、橋作りにかなりの日数と労力を費やす。結局九ヶ所に橋を新設し、二十四日、ビジョラ・コーラに入る。キャラバンを開始して丁度二十一日目の二十六日に、右股にベース・キャンプ（BC・三八一〇メートル）を建設した。U字谷の開けた、明るい、美しい草地だった。モンスーン中のため、パトラシ・ヒマールは雲におおわれ、私たちの目指すコルは支尾根に遮られて見ることはできなかった。

五、偵察と荷上げ

何よりもまず、パトラシの最低コル偵察が先決だった。しかし、その結果は三〇〇メートルほどの急峻な岩壁にはばまれ、他にルートを求めなければならなかった。最初の期待は裏切られたものの、パトラシ稜線上に到達することはできるという確信はあった。

全員でBCからの荷上げを行ない、十月三日、ビジョラ氷河のモレーンの外にC１（四三〇〇メートル）を建設。心要な物資すべてが荷上げされた。翌日より四日間、降雪に見舞われた。C２予定地への荷上げと並行して、別のコルへの偵察が進められた。しかし、悪天のため視界は悪く、成果は芳しくなかった。昼夜関係なく発生する雪崩が、一種の緊張感を与えてくれた。明けて八日、昨日までの悪天がまるで嘘のような、美しいブルースカイで迎えた。モンスーンは終ったのだ。

九日、ビジョラ氷河の氷舌の末端にC２（四七八〇メートル）を建設。BC建設より二週間過ぎたものの、コルへのルートはまだ確保されていなかった。

翌日、五七九一メートルの無名峰の南側につきあげている氷河を通過すればコルに到達できるという見通しのもとに、奥田、後藤、アンバブ、プルキパの四名は、三〇〜五〇センチメートルのラッセルを強いられながら、最後のセラック帯（約三〇〇メートル）にルートをとり、広いコールの手前に達した。しかし、四名とも疲労のあまりコル上に立つことはできず、カンジロバを確認できないまま引きかえした。

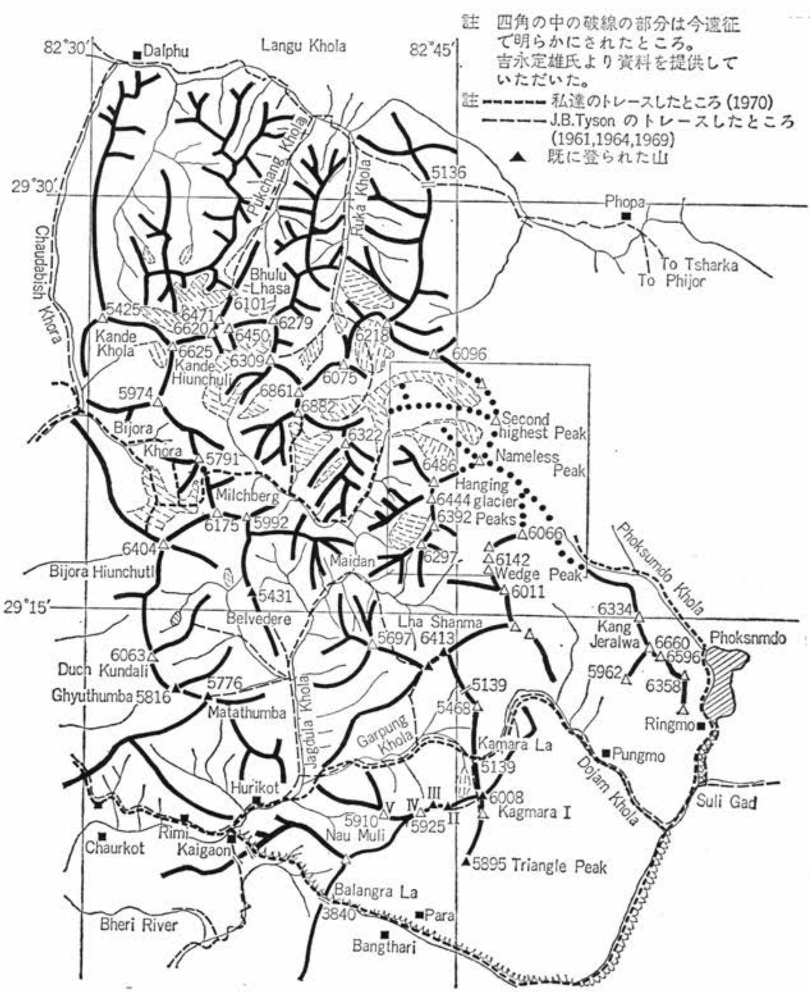
十一日、沢井、沢田、プルキパは、コルにC３（五三六〇メートル）の建設に出かけ、ようやく待望のカンジロバの主峰を望むことができた。写真だけでしか見たことのないこの処女峰は、ジャグドゥラ谷に悠然としてそびえていた。発達している雪庇に注意しながら足下を見下ろすと、予想をはるかに越える急な岩壁がジャグドゥラ谷に落ちこんでいた。二週間以上も費やしてコルに達した喜びは、この瞬間、ある種の不安に打ち消された。周囲を見回しても適当なルートは見あたらず、主峰接近への困難さをひしひしと痛感した。

六、ジャグドゥラ・コーラへの下降

この壁の突破が成功へのキーポイントとなった。そして全隊員の全エネルギーが注ぎこまれた。平均傾斜四〇〜四五度の下降ルートは、上部は雪のついたもろいガリー状の岩、下部は逆層スラブから成っていた。幸運にも北に面しているため、雪崩と落石からは免れたものの、雪庇の切り崩し、稜線からのスノーシャワーを浴びてのルート工作は、寒さも手伝って予想以上に手こずった。前半は佐藤、奥田、後半は、後藤、沢井、沢田が加わってルート工作にあたり、この四〇〇メートルの岩壁地

The Sketch Map of the Kanjiroba Himal

The Geographical Journal (1967)
Alpine Journal (1970)
by J.B.Tyson



Central Area of the Kanjiroba Himal (Originated from J.Tyson's Map. G. J. Sep. 1967)

帯の下降に、約八五〇メートルのフィックスト・ロープ、四五本のロックおよびアイスピトン、一台一〇メートルの縄ばしご九台、ボルト七本を使用した。

一トン近くの食糧、装備が集結されたC3から、二〇キロの荷物を背負っての下降は辛い行動だった。スリップして荷物を氷河に落としたり、氷結した滝状のルンゼでシェルパが落ちたこともあった。こうして人跡未踏のジャグドゥラ・コーラへの下降に十日間が費やされた。

七、残りあと十日間

十月二十七日、計画より約二週間遅れて、ジャグドゥラ・コーラとカンジロバ主峰の南に入りこむ氷河との合流点に、第二のベース・キャンプ、C4（四〇四〇メートル）を建設した。高度四四〇〇～四五〇〇メートルと考えていたが、実際にはC3からC4まで、実に一四〇〇メートルの下りとなった。

二十八日より四日間、常慶、佐藤、プルキパが偵察にあたり、他はデポ回収および荷上げにあたった。急な草付よりモレーンを経て、四八〇〇メートルから五四〇〇メートルまではズタズタに切れたアイス・フォール帯となり、その上は雪原がピラミッド状の主峰の麓に続いていることがわかった。アタック・ルートとなるリッジの中央部には氷壁と思われる個所があり、テントを設けられそうな場所は見当たらなかった。

十一月一日は、これからに備えて休養日とし、少なくとも一〇日分の食糧を確保するため、食糧の食いのばしを始める。カンジロバ登頂の道は、この十日間の行動にかかってきた。

二日、主峰が正面に見える五二二〇メートルの地点にC5を建設。最後の難関となったアイス・フォール帯（約二〇〇メートル）を攻略して、四日、雪原の奥にC6（五四八〇メートル）を建設。佐藤、沢井、沢田、プルキパが入る。

翌日、C6の四名はアタックに備えてリッジの核心部分のルート工作のため六〇〇〇メートル地点に達し、一二〇メートルのロープを固定して帰る。氷壁と思われていた個所は、雪壁とブレイカブルなナイフリッジだった。このリッジは、六二〇〇メートルあたりで東南稜に吸収されていた。

六日、C6よりピークまでの行程はあまりにも長く、一日での往復は困難と判断し、リッジ末端のコブ状の台地にC7（五八〇〇メートル）を設け、第一次アタック隊員、佐藤、奥田、沢井、沢田、第二次アタック隊員、常慶、諏訪、後藤、プルキパと決定。七、八両日にわたっての全員登頂のアタック態勢が整った。

八、登頂

以下は沢田の手記による。

十一月七日、四時起床。外はまだ真暗で星がさん然と輝いて

いた。第一次登頂隊の四人は意外に冷静だったが、やはり何か知らぬ緊張と興奮があった。

五時五十五分、テントを飛び出る。ほんのりと夜が明け、カンジロバの雪稜はしだいに赤味をおび、ヒマラヤの静かな美しい夜明けとともに登高が始まった。

荒々しい呼吸は白い吐息となり、頬をなでる冷たい朝風に消された。佐藤、沢田のパーティと奥田、沢井のパーティに分かれ、フィックスした部分を快調なペースで通過。最終キャンプを見下ろす隊員の顔には希望がみなぎっていた。このもろい氷と堅雪のミックスしたナイフリッジを過ぎると、四〇度位の気の遠くなるような雪壁の登高となった。右手には巨大な雪庇、左手には青氷を混じえた雪壁が切れ落ちていた。一歩一歩アイゼンを蹴りこみながら、「俺は今ピークを目指して登っているんだ。この単調な登りが終ればまだ誰れも立ったことのない、あの頂に必ず着くんだ。苦しくても我慢しろ」と自分に言い聞かせた。

昼頃よりガスと雲が発生し、時折りピークを包んだ。六四〇〇メートルあたりで高度障害のためか、眠気と頭痛を覚えた。ビレイしている時、夢のような、気持よい眠りに誘われ、ハッと気がつくこともあった。それはほんの数秒間だったが、長い時間のように感じられた。二時、東南稜唯一の平地（約六五〇〇メートル）で食事をとり、薬を服用する。考えてみれば、テントを出て以来何も口に入れていなかった。不必要なものをデポし、最後の登りにかかる。天気はしだいに悪化してきた。ピークはまだか。

トップを行く奥田さんの「オーイ、サクセッスだ！」との叫び声が耳に入った。すぐに、トランシーバーを出しながら登ってくる佐藤さんに合図を送る。半分ガスに包まれたピークへ無心に近づく。三時三〇分、私たちの視界を遮る高い山はなかった。急に涙が頬にたれた。この喜びを一人静かにかみしめるように坐っている佐藤さん、トランシーバーに向かって涙声をあげる沢井さん。成功とはこんなものだろうか。旗をピッケルにつなぎ、写真を撮った後、全員がサインした日の丸の旗を雪の中に埋める。ガスの切れ間から見えるカンデ・ヒウンチュリや北峰へのなだらかな稜線を見ながら、後髪を引かれる思いで、四時三〇分、ピークに別れを告げた。

帰り道は地吹雪のため、トレースが消えており、下降ルートを探すのに一苦労だった。日が暮れ、四人とも疲れてきていた。ただ早く安全な所で休みたいという気持でいっぱいだった。六時三〇分、やっとのことでデポ地点に達し、月光の下で四人が坐れる位の場所を作り、ツェルトをかぶってのビバークとなる。ブタンストーブを持って来ていなかったため、水を飲むことも、暖を取ることもできず、全く辛い夜となった。

六時、夜が明ける。長い長い夜のように思われた。空腹、睡

眠不足、疲労のため身体はかなり衰弱していた。阪大の渡部隊員のことが頭から離れない。気を引きしめて一歩一歩慎重に下る。隊長、プルキパのサポート隊と合流し、下山風景を撮影している諏訪、後藤両隊員に迎えられ、みんなで、成功を喜びあった。私たちがビバークしたため、第二次アタック隊は中止となり、全員登頂はならなかった。

カンジロバ・ヒマールにも厳しい冬の訪ずれが感じられた。私たちは彼女に最後の一瞥を与えて、懐しいベース・キャンプへと急いだ。

註 登山活動にある高度で、ピーク以外は、すべて私たちの高度計に示された高度である。高度の補正を行なえなかったが、実際の高度はもう少し高いと思う。

九、カンジロバ・ヒマール山域の地理的解明

この山域の特徴であり、魅力でもある地理的解明に、私たちのできる範囲内で全力を尽くした。その結果を、便宜上次の三つに分けて述べてみることにしたい。

(一) パトラシ・ヒマール

パトラシ・ヒマールは、北はカンデ・ヒウンチュリに端を発し、南はビジョラ・ヒウンチュリ[註7]までと考えられる。

一九六三年、東海大学隊は、日本人として初めてこの山域に入り、カンデ・ヒウンチュリ（約七〇〇〇メートル）を発見。同隊は一九六七年にもこの山域の探査を行ない、この山域の最高峰がカンデ・ヒウンチュリであると報告しているが、タイソンの精巧な測量により、その高度は六六二五メートルに訂正された。

ジュムラ郊外から立派な白銀の峰が見えるが、タルフィの村人は、この峰を「ヴァッキャ」と呼んでいた。ところがベースキャンプでは、この「ヴァッキャ」は「ビジョラ・ヒウンチュリ」と呼ばれていることを知った。この地域の住民は、同一の山を異なった別個の山と見なしているのか、あるいは眺める場所によって呼称が異なるのであろう。ところでティッヒーは、この白銀の峰をデュイ・タール・チュリ（二つの湖の間の山）と名づけた。一方、タイソンは、ジャグドゥラ・レクの最高峰に、ドゥド・クンダリ（デュイ・タール・チュリの現地民の呼称）と命名した。「白銀の峰」ビジョラ・ヒウンチュリとドゥド・クンダリとは、明らかに別個の山である。とすると、ティッヒーはどちらの山にその名称を与えたのだろうか。この白銀の峰の高度は、タイソンにより、六八六〇メートルから六四〇四メートルに訂正されている。

私たちは登山活動が終り、ベース・キャンプに帰ってから二日間にわたって近くの山に登ったり、ビジョラ・コーラ左俣を歩き、パトラシ・ヒマールの地形を明らかにすることができた。

六六六〇メートルを最高峰とするこの山群および地図の空白部を明らかにするため、登山終了後、奥田、後藤、沢田の三名はトレッキングに出かけた（沢田は岩友会隊についで二度目の踏査である）。

㈡　カン・ジェラルワ

私たちはフォクソンド・コーラの支沢を詰め、この沢が北へ屈曲する地点から少し奥まで入った。その結果、カン・ジェラルワの山群も沢にそって屈曲しながら北に伸び、第二高峰の主脈に続いていることが明らかになった。

㈢　地図の空白部

この山域でもっとも興味深い部分である。川喜田隊の写真にあった、また吉永定雄氏が提唱しておられた第二高峰は確かにあった。これは一九六九年に北から接近したタイソンおよび私たちの撮つた写真の中に写っている。そしてその南に低い無名峰が続き、一つはハンギング・グレイシャー・ピークスの最北峰につながり、他の一つは途中で二つに分かれ、一つはカン・ジェラルワ、もう一つはウェッジ・ピークからフリューテッド・ピークにつながっている。第二高峰からは西に大きな尾根が出ている。無名峰も同じく北西に尾根が伸びて、それぞれの間には小さな氷河がある。第二高峰の北には川喜田隊のカン・ニュン・トンが続いている。[註8]

私たちもこの第二高峰の周辺の地形を明らかにするため、ジャグドゥラ・コーラを下り、途中よりハンギング・グレイシャー・ピークスの左に入る沢を遡行したが、日数と食糧の制限のため、充分な調査ができないまま引きかえした。

十、むすび

今遠征を振りかえってみると、カンジロバ主峰の登頂により地理的解明に寄与することができたし、合同遠征の実現により他の遠征隊では体験できないことを教わった。すべてにわたって幸運だったといえる。ただ残念なことは、日数と食糧の関係上、地図の空白部を完全に探査できなかつたことだ。（一九七一年の大阪府山岳連盟隊により、この空白部もほぼ明らかにされたことを付記しておく。）

タイソンの三回にわたる遠征により、また他の遠征隊により、ネパール・ヒマラヤでもっとも未知の山域として知られていたカンジロバ・ヒマールもしだいに明らかにされてきた。しかし、第二高峰周辺の地形、ジャグドゥラ・コーラの遡行の可能性、各山群の名称の正当性など、探検的要素がまだ残されており、ヒマラヤの岩壁登攀が注目を浴びる風潮の中で、特異な登山ができる山域だといえる。

なお、このカンジロバ・ヒマールの登山史において、タイソ

ンの遠征がなかったら、私たちの成功はもとより、主峰は未だに「幻の山」として人を近づけなかっただろう。それだけに彼の業績は高く評価されるし、決して忘れられてはならない偉大な人物である。

(**註1**) 一九六一年、雪崩のため森本隊長、大島隊員、ギャルツェン(サーダー)を失う。

(**註2**) 私たちは、帰国後「アルパイン・ジャーナル」で、タイソンが三度目の試みでルカ・コーラよりせまったが、登頂はできなかったことを知った。

(**註3**) タイソンの二度にわたる遠征により、作成された精巧な地図。しかし、この山域の東方はまだ測量されていないため、地図が空白にされたままである。The Geographical Journal, September 1967, Published by the Royal Geographical Society.

(**註4**) 川喜田隊が撮った写真には、主峰とともにセカンド・ハイエスト・ピーク(六八六七メートル)と呼ばれる山が写っている(『山岳』五十四年、一九五九年)。この山は、一九七一年、大阪府山岳連盟隊により、十月二十五日に登頂され、ツォ・カルボ・カン(六五五六メートル)と命名された(『山と渓谷』四〇一号)。

(**註5**) 一九六七年、オランダのノルディック博士により、カン・ジェラルワ(Kang Jeralwa)と命名されている。

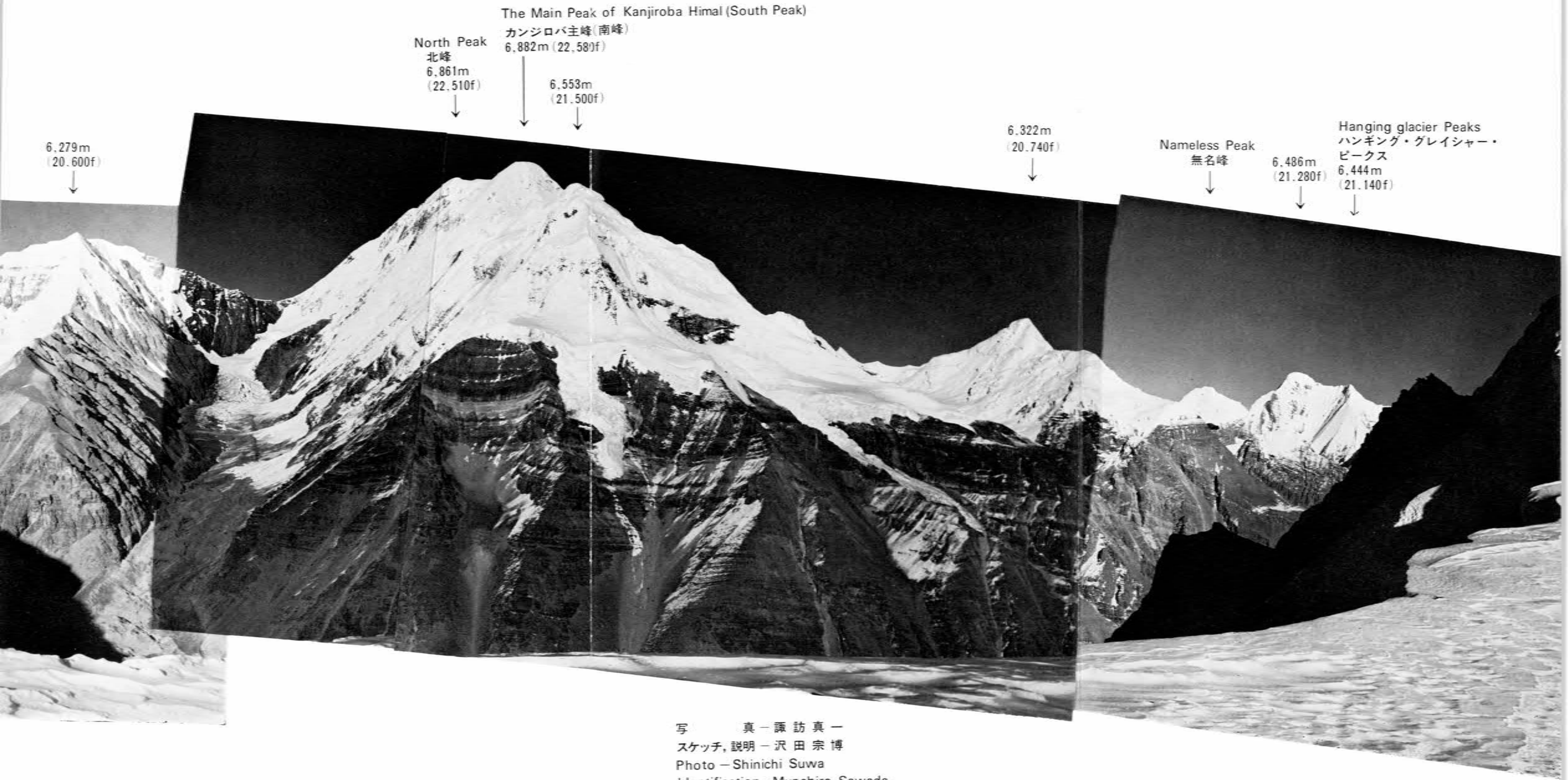
(**註6**) 註3と同じ。

(**註7**) これまでは、一九六三年の東海大隊によりビザラ・ヒウンチュリ(Bizara Hiunchuli)と報告されていたが、ネパール側隊員の通訳により、ビジョラ・ヒウンチュリ(Bijora Hiunchuli)の方が正しいことを確認した。

(**註8**) 註4の写真にカン・ニュン・トン(Khan-Nyung-Thon)と呼ばれる山が写っている。

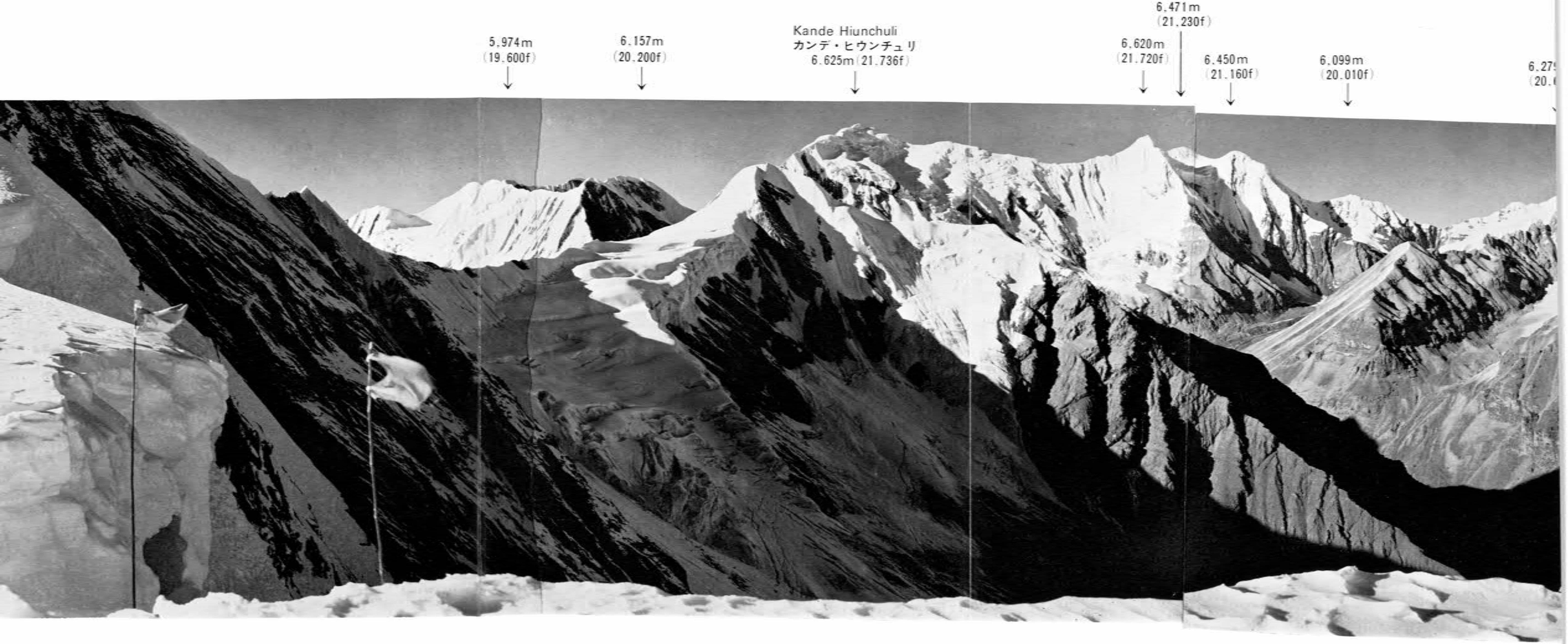
付記　登山活動中の天候(概要)

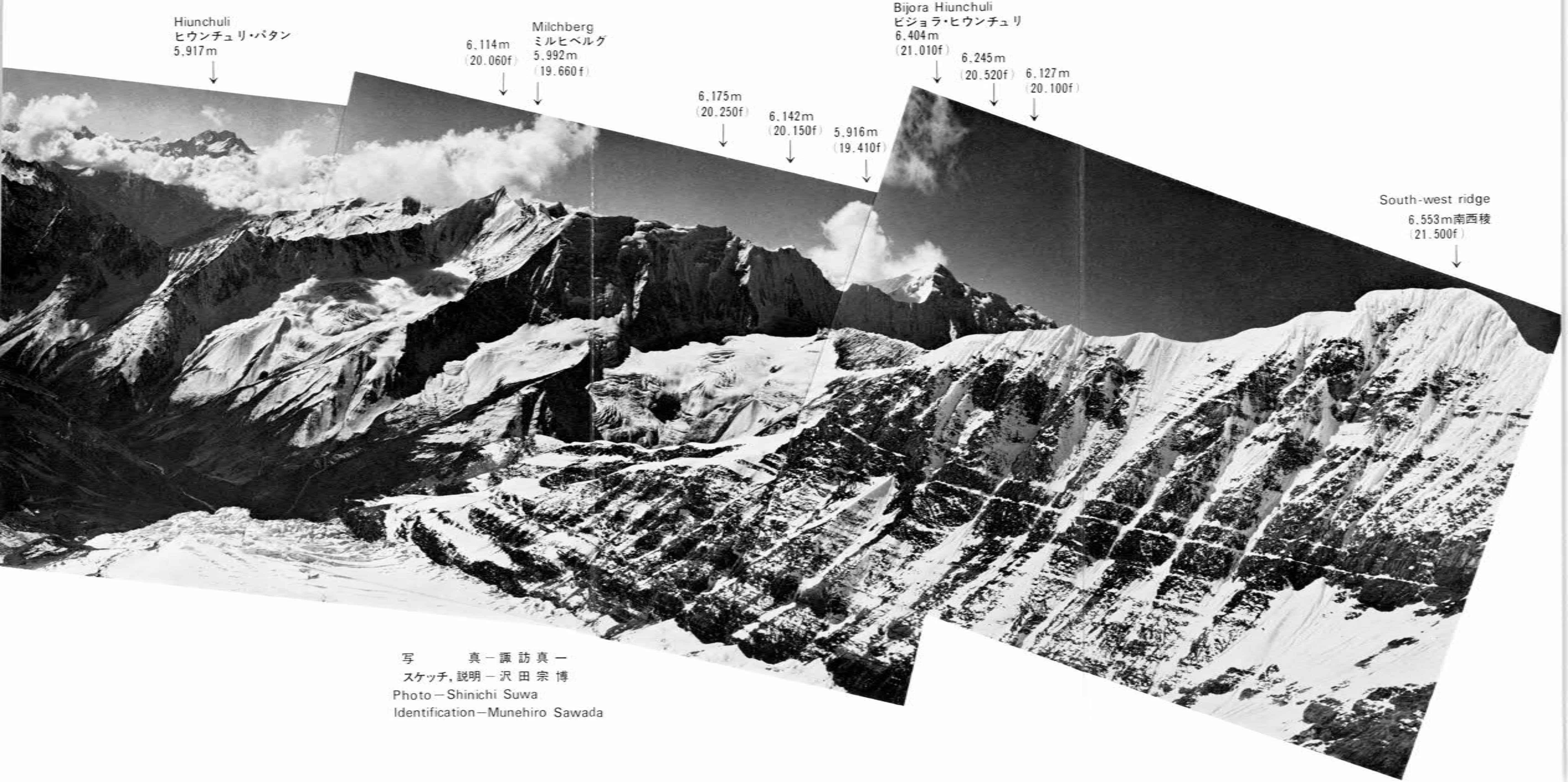
9/26	⦶→◎午●ッ	/12	○	/28	○一時⊛ョ
/27	⦶→◎夜●ョ	/13	○→◎	/29	○→◎→⊛
/28	⦶→◎	/14	○→◎一時⊛ョ	/30	○→◎
/29	⦶→◎	/15	○→◎午⊛	/31	○
/30	○→◎●ョ	/16	○	11/1	○
10/1	○→◎	/17	○一時◎	/2	○
/2	①→◎一時●ョ	/18	○	/3	○午一時⊛
/3	○→◎一時⊛ョ	/19	○一時◎	/4	○
/4	⊛ョ	/20	○	/5	○
/5	◎午⊛ョ	/21	○	/6	○午◎
/6	⊛	10/22	○	/7	○→◎
/7	⊛	/23	○	/8	○
/8	○→◎	/24	○	/9	○→◎一時⊛ョ
10/9	○一時⊛ョ	/25	○	10日以降ＢＣを去る21日まで快晴	
/10	○→◎→○	/26	○		
1/1	○	/27	○		



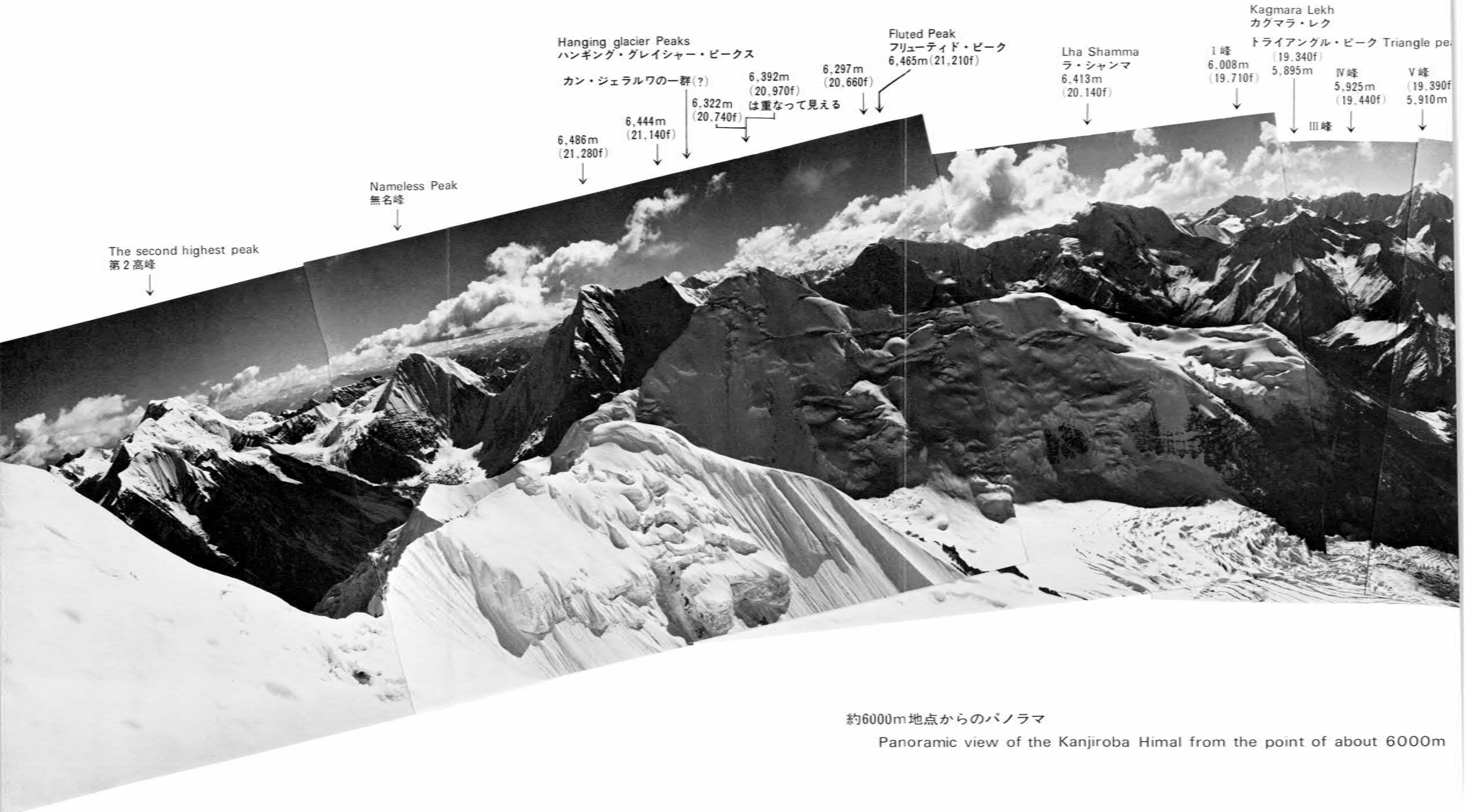
写　　　真－諏訪真一
スケッチ，説明－沢田宗博
Photo－Shinichi Suwa
Identification－Munehiro Sawada

C 3（5360m）からのカンジロバ・ヒマール
Panoramic view of the Kanjiroba Himal from C3(5360m)





写　　真－諏訪真一
スケッチ，説明－沢田宗博
Photo－Shinichi Suwa
Identification－Munehiro Sawada



約6000m地点からのパノラマ
Panoramic view of the Kanjiroba Himal from the point of about 6000m

随想

ヒマラヤのみえる散歩道

神原　達

うっすらと、春の霞がたなびく山波のかなたには、雲かと見間違うヒマラヤの山があった。ここ、カカニの丘の芝生の上に寝ころんで見るガネッシュ・ヒマールは、その前山をなす尾根すじが幾重にも折重なって横たわる上に、青空の中に雲とともにふわりと浮かんでいる。この光景を私は何回見たことだろう。おそらく数十回か。それにしても初めてカカニの丘に登ったのはたしか一九六〇年の春だったから、それからもう十年たったわけだ。

たかだか十年といっても、この十年間は私にとって貴重な歳月だった。ヒマラヤに憧れてネパールに行き、その地で五年間も暮したのだが、言わば私の青春はネパールと共にあった。そこで家庭も築き、そして子供も生まれた。ネパール人の多くの友人を得たし、また日本人でも多くの立派な先輩の知遇を得て、いまだ二十代の若輩であった私にとっては得るところ実に多かった。またその間ずい分ネパールの各地に旅行した。

一九六二年から六五年までは外務省の派遣で、ネパールの近代史や対外関係史を自由に勉強できたのだが、その研究生活の合間に何と多くの登山隊に会ったことだろうか。日本のヒマラヤ登山者をカトマンズから山々に送りだし、そしてある隊は初登頂の喜びをかみしめて帰ってきたし、またある隊は仲間を失い傷心して戻ってきた。そのような隊の法事をカトマンズの仏教の寺で開いたこともあった。登山隊だけではない。ダム建設のためタライ地方のジャングルに入った技師が、丸木舟が転ぷくして水死したこともあり、その時には私も小型機で現場に急行したのだった。喜怒哀楽様々であった。ある者には感謝され、またある登山隊には裏切られた。だがヒマラヤの山々はすぐ近くにあり、私が借りたカトマンズの家の二階からはゴザインクンドの岩山の上に、ランタン・リルンの真白な頂上が小さく飛び出していて、毎夕そのピークが夕焼けでバラ色に染まる様子を眺められた。ヒマラヤにはいつでも行けると思っているうちに年月がたち、外務省派遣の任期が終ったら気に入ったシェルパを数人連れて、六千メートルの山でもいいから初登頂をひとつしてきたいという夢も、帰国を前にしてビールス性肝炎にかかってしまい果たせなかった。

それはもう五年前のこととなった。いまカカニの丘には、私と共に三年間ネパールで暮した妻と、そしてネパールで生れた初めての日本人である娘、伸子の三人がいた。この旅行はネパールの皇太子殿下の御結婚式に参列するというのが目的だったが、私たちにとっては実のところ御結婚式はともかく、それ以上に昔の友人たちと逢い昔住んだ家をもう一度見たい、ということの方が大切だった。

今回の御結婚式には世界各国から大勢のお客を招かれていたが、日本からも常陸宮御夫妻など十数名の人々がカトマンズに行った。私たち家族は日本の探検・登山界の大先輩である西堀栄三郎先生御夫妻と行動を共にさせていただき、ネパール旅行のあとインドのデリーに行き、そこからカシミールまで往復してきたのだった。

カカニの丘のヒマラヤの見える散歩道には私たち総勢五名だった。カトマンズで宮原巍氏（会員・ホテル・エベレスト・ビューの建設者）から借用した日本製のコロナを私が運転してやってきた。マナスル隊の頃（一九五〇年代）にはまだカカニに至る自動車道路はなく、カトマンズからキャラバンを始めるとこの丘が宿泊の最初の場所であって、隊員はここで初めて遠くにマナスルを眺めて感激したという。だが私がネパールに初めて来たときには、すでにこの自動車道路はできていた。この道路は以前とほとんど変っていないのもうれしかった。トゥリスリ河方面にくだる坂道の手前から右に折れて、カカニの丘まででこぼこの坂道を登ると、そこには芝生が一面にうわった斜面があって、イギリス大使館の所有するバンガローがある。

昔ネパールが鎖国していたときは、カトマンズ在住の外国人は僅かにイギリスの駐在官（レジデント）だけで、歴代の駐在官はマハラジャとジャングルに虎狩りに行ったり、時たま訪れるネパールの仏教や歴史を研究しているイギリス人などの学者と、暖炉を囲み議論を交したりしていたが、彼らは週末になるとこのカカニの丘のバンガローに来て泊ったのだ。さる駐在官は、この芝生の丘をゴルフのティー・グラウンドとして、ヒマラヤの山を目指して豪快なショットをはなったという。いま、そのバンガローも赤がわらが古びてくすんだ色になり、ほとんど使われていない様子であったが、その代りひとつ手前の小丘の上に、ネパール政府の観光局が建てたコンクリートの建物があった。その屋上には日本の観光地によくある備えつけの大型の望遠鏡があって、私たちもそれでヒマラヤの山を眺めてみた。

芝生の上に坐ってテルモスに入れてきたインド紅茶を飲むと、昔ここにだれと来たかという追憶が、次々と脳裏をかすめる。おそらく西堀先生も御同様のことであろうか。先生は一九五二年に、第二次大戦後のネパールが鎖国を開いて初めてこの国を訪れた日本人であり、その折、マナスルの登山許可を日本のために入手されたことは、少しでもヒマラヤに関心のある人

At the dinner party in Hotel Royal (2). Left to right: Foreign Secretary (then). Maj. Gen. Padma Bahadur Khattri. Mrs. Kaiser. Vice President (then) of the J.A.C. Yukio Mita and the late Kaiser.

1963年５月12日、ホテル・ロイヤルで三田会長が催した夕食会でスピーチをするカイザー元帥
The late Field Marshal Kaiser Shamsher Jung Bahadur Rana, at the dinner party in Hotel Royal, Kathmandu, Nepal. (May 12, 1963)

なら何人でも知っている『山岳』第四六・四七年「ネパール紀行」参照)。その後も先生はネパールに何回か来られ、またネパール人のこれはと思う人物をよくお世話されている。学ぶべきことは、常に好奇心に富み、進取の精神に満ち〳〵ておられることで、おそらく昔はこうだったなどという追憶にひたる時間よりも、世の中に出てくる新しい事象をいかに早く吸収してしまうかで一杯なのだろう。

私にとっても現在のネパールを知る方が大切なのだが、このカカニの丘にいるとなんだか十年前と現在がずっと続いていて、以前からそのままネパールに居続けているような気がしてならないのだ。現在日本山岳会の会長をされている三田さんが副会長のとき、たしか一九六四年の春にカトマンズに来られたことがある。日本山岳会が一九六六年のプレ・モンスーンにエベレスト登山を実行することになり、当時の三田副会長が申請書を提出され、ネパール外務省から許可の内諾を得られたのだが、あのときも三田さんと御一緒にカカニに来たことなど昨日のように思いだす。

日本山岳会のエベレスト登山は、周知のようにネパール政府の登山禁止で延期され、一九七〇年、数年ぶりに実現した。

その間の歳月に私も石油屋になって、毎日世界の石油事情の調査ばかりしてきたのだが、やっと二週間の休暇をとって再びヒマラヤの山麓にやってきた。その状態がなんとも嘘のようで、五年前に日本に帰らずずっとネパールにいたような気がしてならない。このカカニの丘で飲む紅茶がそうさせるのかもしれない。あくの強いダージリン・ティーにたっぷりとミルクと砂糖を入れて飲むのに慣れてしまうと、それなしには物足りなくて、日本に帰ってからもインドにいる友人からダージリン・ティーを小包で送ってもらって飲んでいたのだが、やはりカカニの丘で肌にひやりとする涼風に吹かれながら飲む紅茶は格別である。

ビレンドラ皇太子の御結婚式は一週間も続き、毎日のようにパーティーとかレセプションなどが盛りだくさんあって、グルカ兵が先導するパレードが王宮からカトマンズの街の大通りを通る時、皇太子は金銀の飾り布をつけた象に乗って国民に手を振って挨拶された。私たちはホテル・シャンカールの旧知の支配人ラム・シャンカール氏のはからいで、特別に二間続きの部屋をとってもらい、そこでネパール人の多くの旧友たちに再会した。また毎日のように彼らの家に招かれた。

一時間きざみに友人たちに逢ったのだが、その間にネパールを再訪したらこうしたいと思っていたことはみなやってきた。まず昔私たちが住んでいたネパール式の家がどうなったか、庭に植えた小さなくちなしの木がどれ位大きくなったかを見とどけてきた。娘が誕生したキリスト教のミッション病院であるサンタ・バワンにも行き、そこの女医さんでお世話になったスコ

ットランド人のアンダーソン先生にも逢い、娘がこんなに大きくなりましたと報告してきた。タライ産の虎のいる動物園にも行って、野生そのものの虎にも再会してきた。日本山岳会のエベレスト登山隊はすでにキャラバンを開始してカトマンズにはいなかったが、エベレスト・スキー探検隊とはホテルでも一緒になった。

しかし私たちにとっては、西堀先生御夫妻から毎日ホテルの食事の時に有益な様々な話をうかがう機会を得たことが一番素晴らしかった。特にその後カシミールのスリナガールに御一緒した時、冬場で観光客もまったくないミドース・ホテルの食堂で、松の木をダルマストーブに燃してリンゴ酒を飲みながらのお話はよかった。「人生十年ごとに一区切りありで、何かひとつの仕事を十年やればものになり、それ以下だととかく惰性におち入り易い、だから常に十年ごとに新しいものを求めていかなければだめだ」という先生のお話は、私にとってこれからも大いに参考となるだろう。

ガネッシュ・ヒマールを背景に写真をとっていると、早起きのわれわれのあとに続いて観光客が次々と登ってきた。ヒマラヤにはもや雲がかかりはじめてきた。そろそろ下山としよう。この次カカニの丘に来るのはいつだろうか。それまでわが心のヒマラヤの山々よ、さようなら。

研究

サラグラール周辺の山座同定

＝地形の解明と新しいピークについて＝

宮森常雄

一、まえがき

Saraghrar は Hindu-Kush における第四の高峰である。Tirichi Mir 7708 m, Noshaq 7492 m, Istor-o-Nal 7403m は、それぞれ山座の解明もすみ、あとは微細な修正を待つばかりであるが、Saraghrar は、一九五九年イタリア隊（隊長、Fosco Maraini）による初登頂以来、既に三隊の遠征をかぞえるが、いまだ解明されるに至っていない。

本文は、多くの隊、あるいは個人の方々から写真その他の資料、御助言等の協力を得て、山座の解明に近づけようとするものであって、けっして各隊の測量、登山報告等に批判を加えるものではない。

インド測量局の公式高度認定以後、遠征隊の手によって種々の高度改訂がなされているものの、簡易測量あるいは高度計による概略の高度は、あくまでも参考にとどめ、主として、高度差による山の序列に重点をおいた。従って Saraghrar 主峰および Langar Zom S-E を除いて、公式高度が決定されるまでは概略の高度であることを付記しておく。

二、地形と高度の疑問について

Saraghrar の疑問点は、幸いに『ロシュ・ゴル氷河の山旅』の序文に吉沢一郎氏が簡潔に書いておられるから、それを引用させていただく。

「サラグラールの高度については、G・グルーバーの一九六五年の測量があったとしても、実際に照らしてみて、それをそのまま適用するには、まだ暫くの研究が必要のように思われる。従って、ここに一橋隊が用いている高度も、飽くまでも暫定的なものと考えなければなるまい。（中略）東部ヒンズー・クシュの地図については、ポーランドのJ・ワラが作ったものが、ヨーロッパで最も信頼され、拠りどころとなっているようであるが、それにしても仔細にこれを点検すれば、サラグラール南西面のような誤りもあり（改版で多少訂正）。」（後略）

これだけでも、すべての疑問を糺す必要があるが、更に細別してみると次のようになる。

第1表　Saraghrar および Langar Zom の標高の推移

Changes of the Altitudes of Saraghrar and Langar

Peak	山名	J. Wala	G. Gruber	A. Linsbauer	F. Maraini	日本各隊 Japan	Final, but indefinite
1	Saraghrar M 主峰	(195) 7349	3の誤認？ 7307	7349	7349	7350横山 7338一橋	7349
2	〃 C (×Peak) 中央峰	············→ —	(7350)誤認 7338	—	—	—	(C 7300～) C 7330～
3	〃 S 南峰	(196) 7307	?	7350	7304	一橋 7350	C 7307
4	〃 N-W 北西峰	—	—	—	—	—	C 7300～
5	S-W 南西峰 α 〃 β	—	—	—	静岡登ク 〃	7184 7134	C～7200 C～7250
6	〃 S-E 南東峰	(197) 7208	7220 or 7184	7307	—	一橋 7307	C 7208
7	〃 W 西峰	—	—	—	—	—	C 7000
8	〃 N 北峰	(194) 7040	7040	7040	7040	7040	C 6900 ～7040
9	(Niroghi Zom) 〃 Brink	198 —	—	7220 or 7209	—	—	C 6600
10	Langar M 主峰	(190) 7061	7060	7070	—	立花 7060	C 7070～
11	〃 S-E 南東峰	(192) 6950	7061	7061	7061	横山 7061	7061
12	〃 C 中央峰	—	—	? 6850	—	—	C 6850～
13	〃 S 南峰	(191) 6850	6850	7050	—	—	C～6850
14	〃 N 北峰	(189) 6750	—	7050	—	6750	C 6750
15	〃 S-S 南々峰	(193) —	—	—	—	C 6700	C 6700～
16	〃 W 西峰	—	—	—	—	—	C 6600～

arranged by T. Miyamori

① Peak 記号および山名は解説の便宜上、筆者なりの方位名をつけたものである。
② 数字前の～は数字より標高が低く、数字後のは数字より高いであろうことを示す。
③ G.G-P 2 に記載の ×Peak は fig-2 および四―⑨を参照。

二―一、頂上雪田の流出さき。

F. Maraini の地図によれば、頂上雪田は Northern-Cwm 側と南面に流出するように書かれているが、これは Survey of India, Quarter Inch Map を基礎にしていると思われる。

オーストリアの A. Linsbauer 図（三―一 Fig-1 参照）では、Northern-Cwm 側に、Jerzy Wala 図によれば、第二版（一九六七年）には既に、主峰と南峰の間に尾根が書き込まれて、雪田は Rosh Gol と Niroghi 氷河に分れ落ちている。同年 Saraghrar 南峰に登頂した一橋隊によれば、この雪田は次のように記録されている。

「東西に長い南峰の頂稜と全く相似型のもう一つの頂稜が、北側に同じ向きであい対していた。間には、幅一キロ近い雪田があり、ロシュ・ゴル氷河とニロギ氷河側におち込んでいる」

一九六九年版の J. Wala 図も、この部分は訂正されていない（三―二、fig-2, 3 参照）。

だが、Rosh Gol 側の雪崩によるデブリと Niroghi 氷河側のデブリとでは、比較にならぬ程 Niroghi 氷河側が多いことに着目したい。

二―二　高度の問題。

各遠征隊、および地図製作者、測量者の標高の記録を第1表に示したが、各ピークとも標高には差のある例が多い。なお、右端の高度は筆者の推定高度であって、前述した如く決定的なものではない。

〔参考〕Saraghrar 主峰―7349 m（24110 f）は、一八七九年、H.C. B. Tanner によって、Chitral-Gilgit 間の路上から測量され、当初は Sad Ishtragh-7367 m とよばれていたが、後、Saraghrar と訂正された。

更に、一九三一年にいたる C.G. Lewis の大測量事業により 7349 m に訂正、Langar Zom S-E 7061 m（23169 f 三―三参照）と共に、インド測量局の公式高度に認定されている。

三、新しいピークについて

既に発見されているピークのなかには、誤認やその存在性が疑問とされているものもある。ここでは、各種の文献、地図に述べられているものについてその点を分析してみる。

三―一　Saraghrar Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ峰。

Himalayan Journal Vol. XXIX にオーストリアの Dr. Adolf Diemberger（以下 Dr. A.D）も述べているように Saraghrar 主峰から Rosh Gol 側に派生する山稜上に 7200 m から 7300 m 級のピークを二峰認めて、Ⅱ、Ⅲ峰としている（fig-4 参照）。

これは、H.J, Vol. XXVIII『山岳』Vol. LXIII 第六三年の写真を参考にしたと云うが、この写真（五―⑦参照）から判断してのⅡ峰とは、第一表の P-4 北西峰と思われる。P-2 の中央峰は、P-4 の裏側にかくれて見えないから、Ⅲ峰はピーク状に見える岩を指すものであろう。

なる程この写真（H.J）では、光線の斜度の関係で、岩に投げる影から判断すればピークと誤認されやすいが、影は西側に派生する小岩稜のものであって、大きなピークのある証拠にはならない。それは南西稜上にあるピーク状の影から判断しても明らかである。

Dr. A.D. のいうⅢ峰とは、仰角による岩のコブであると思う。J. Wala 図（fig-3）にも、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと、ピークの○印を見るが、図上の位置から判断して、J. Wala のⅠは、Dr.A.D のⅡ峰であるとみてよく、従って、J. Wala のⅡ、Ⅲもまた、仰角のために岩壁の一部がピークに見えたものであると思われる。

三―二、fig-1 の図には、P-13 Langar 南峰と P-15 南々峰を結ぶ尾根と、P-11 南東峰から西に派生する尾根とが交わる地点にピークが記入され、？と共に六八五〇メートルとなっている。だが、fig-2, fig-3 の図にはなく、尾根の記号のみである。これは、存在性についての疑問峰である。

三―三、fig-1 によれば P-11 には七〇六一メートルと六九五〇メートル、ふた通りの高度が記入されている。J.Wala は、P-10 主峰を七〇六一メートルとし、P-11 を六九五〇メートルに、Dr. G. Gruber は、P-11 を七〇六一メートルにしている。

Survey of Pakistan Quarter Inch の二三六一九フィート（七〇六一メートル）の山は、どのピークを指すものであろうか。云えることは、P-10 についての高度測定は、まずなされていないか、なされたとしても不正確な数字しか求められていないものと思われる（五―⑤および六―二にて後述する）。

四、地図について

この一帯の登山において最も基本となる地図は、正式な登山許可を得た場合にのみパキスタン政府から貸与される Survey of India Quarter Inch 42 D Mastuj であるが、その後この地図は、一九三三年、一九四一年の二度にわたる測量の後、一九五〇年には、Survey of Pakistan の名で同版が発行されている。だが、山岳地帯は、国境問題にふれるため、訂正されていないと云われる。なお、この図は、For Official Use Only とされ、一般には入手することができないので、同定にあたっては、次のカム・カルテを利用した。

四―一 fig.-1
Hindu-Kūsh-I-Boland
Sheet Qazi Deh 1/100000
By A. Linsbauer

四―二 fig.-2
Hindu-Kūshe-Boland
Eastan Hindu-Kūsh 1/300000
By Jerzy Wala

四—三　fig-3
Hindū Kuse Beland
Rejon Noshaq-Kohe Téz　1/200000
By Jerzy Wala
四—四　fig-4
The Saraghrar Peaks
H.J Vol. XXIX p. 176
By Dr.A. Diemberger
四—五　省略
Saraghrar 概念図
By F. Maraini
四—六　省略
ロシュ・ゴル概念図
山本健一郎

一九七一年度の静岡登攀クラブの報告書は、現在発行されていないので、概念図は、まだ見ていない。

五、写真による山座、地形の観察

山姿を忠実に記録するのに、最も精密度のたかいのは写真である。しかし、これにも欠点があり、日光の斜度、またはガス等によって、重なった尾根やピークの識別を困難にする例は多い。資料とした写真のなかにも識別の難しい数例が見られ、これが思わぬミスにつながる例も見られた。

ここで紹介するものは、写真および写真を基礎としたスケッチをとり、尾根、ピーク等の識別困難なものは、他の角度、方位から撮られた明瞭な画面二点以上を参考資料として、スケッチに書き込むことにした。但し、約六五〇〇メートル台より低い部分は、尾根、沢の識別書き込みを省略している。

各位より御協力いただいた写真は、第二表に整理しておいたので、五—①以後の観察とあわせてご覧いただきたい。

五—①　スケッチ fig-5

北から P-8 北峰、P-1 主峰、P-3 南峰、P-6 南東峰（以下 P-1, P-2 と略す）と並ぶのが、新潟ゾム（Wala's No. 235、以下 W-235 と略す）西峰付近、約六三五〇メートルからの写真である。Saraghrar 山塊を、北東の位置から眺めている。注意すべき点は W-234 のピーク、六七九二メートルが見あたらぬことで、尾根はそのまま P-8 につきあげている（fig-1, fig-2 参照）。

また、頂上雪原は P-6 よりも低く、末端は Niroghi 氷河に切れおちている。

五—②　写真 fig-6

①の点線内を同位置から二〇〇ミリ望遠レンズで拡大したものである。

P-8 の背後に、P-2 中央峰が重なっているが、P-1 と同様立派な山姿をもつピークである。×印は五—⑨にて後述する。

五—③　スケッチ fig-7

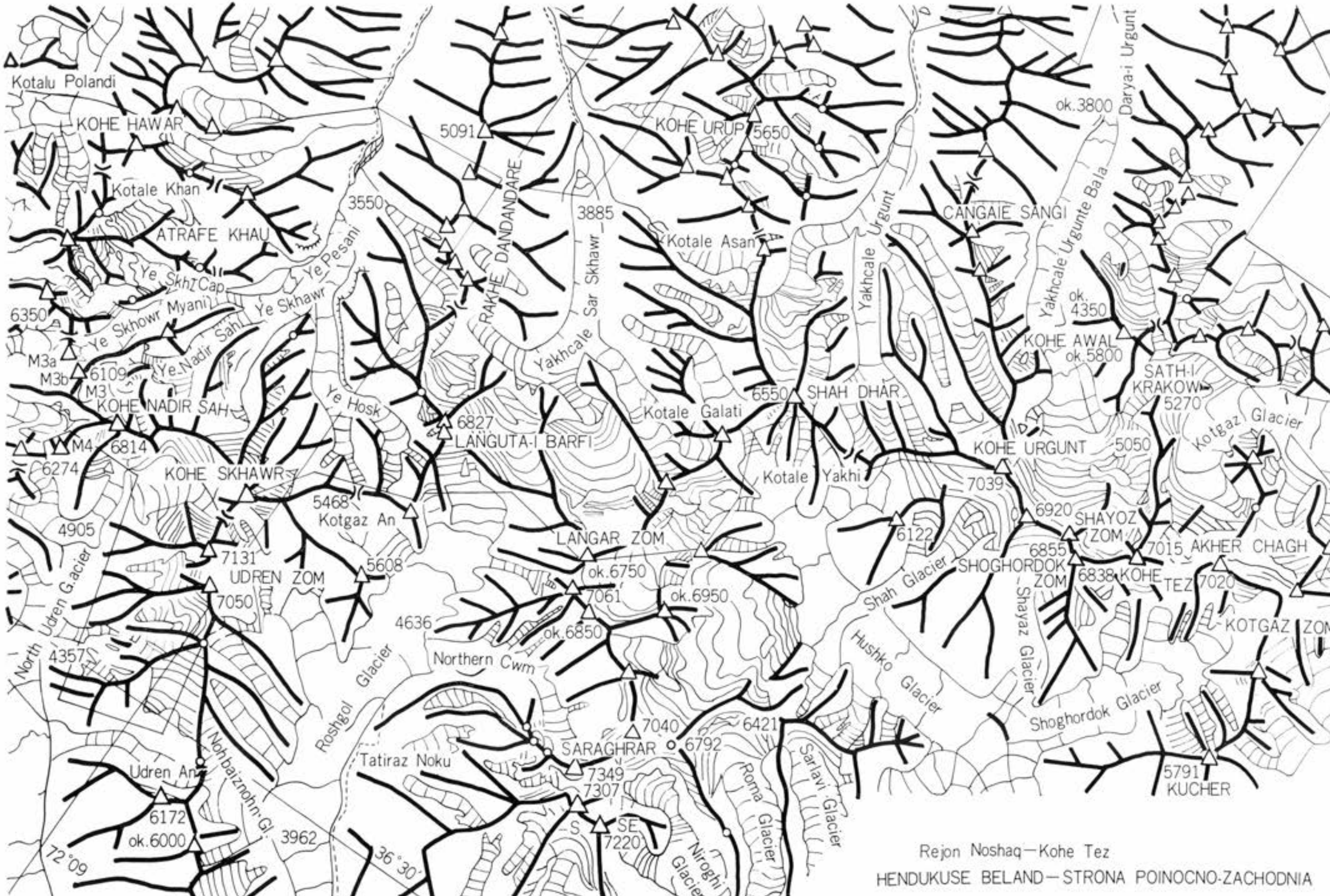
第2表　資料となった主な写真のリスト

写真番号	撮影者(隊)	年度	主なる内容（文献）		
①	横山史郎	1967	五—①　参照	カラー	fig-5
②	〃	〃	五—②　参照	モノクロ	fig-6
③	〃	〃	五—③　参照	カラー	fig-7
④	立花種則	1968	五—④　参照	モノクロ	fig-8
⑤	Marcus Schmuck	1963	五—⑤ The Mountain M. World 1964/65 p. 41	〃	fig-9
⑥	横山史郎	1967	五—⑥　参照	カラー	fig-10
⑦	一橋大学	1967	五—⑦　参照	〃	fig-11
⑧	Marcus Schmuck	1965	ロシュ・ゴル氷河の山旅（あかね書房） 五—⑧　〃 The Mountain World 1966/67 p. 33	〃	fig-12
⑨—1	G. Gruber	1965	五—⑨　参照	〃	fig-13
⑨—2	勝見幸雄	1971	五—⑨　参照	〃	fig-14
⑩	横山史郎	1967	五—⑩　参照	モノクロ	fig-15
⑪	〃	1967	五—⑪　参照	カラー	fig-16
⑫	〃	1967	五—⑫　参照	〃	fig-17
⑬	〃	1967	五—⑬　参照	〃	fig-18
⑭	〃	1967	五—⑭　参照	カラー	fig-19
⑮	新貝勲	1969	五—⑮　参照	モノクロ	fig-20
⑯	一瀬義典	1970	Koh-i-Bandakâ よりパノラマ⑧に似た写真を撮る	モノクロ	以下省略
⑰	雁部貞夫	1966	Buni Gol 上部より⑨に似た写真を撮る	カラー	〃
⑱	〃	1966	Jiwar Gol より⑪に似た写真を撮る	スライド	〃
⑲	一橋大学	1967	⑦と同位置より Langar Zom 主峰を撮る	カラー	〃
⑳	東京農大	1967	Ishpel Zom より⑨—1 に似た写真を撮る	モノクロ	〃

註　Fig.-2 は撮影地点よりの指示線を記入したものである。

fig-1 A.Linsbauer's Map $\left(\frac{1}{100,000}\right)$

fig-2 J.Wala's Map $\left(\frac{1}{300,000}, 1969\right)$



Rejon Noshaq—Kohe Tez

HENDUKUSE BELAND—STRONA POINOCNO-ZACHODNIA

$\left(\frac{1}{20,000}\right)$

fig-3

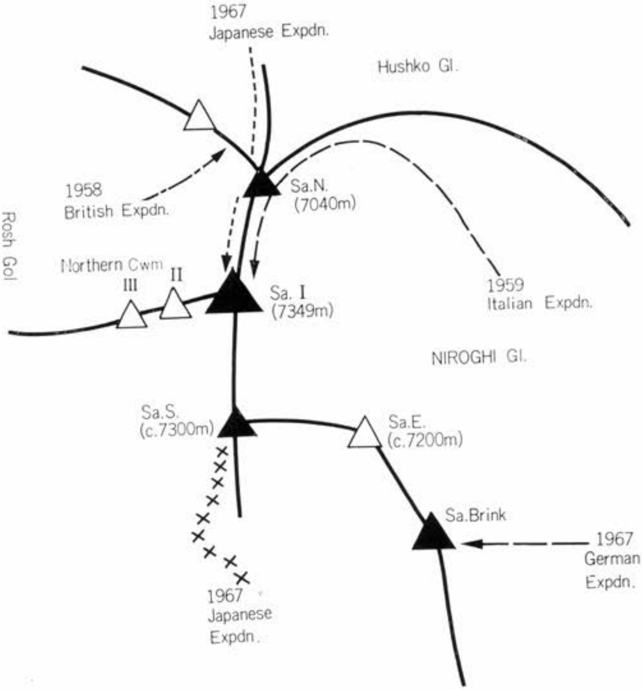


fig-4 Dr. A. Diemberger's Map (1969 H.J.)

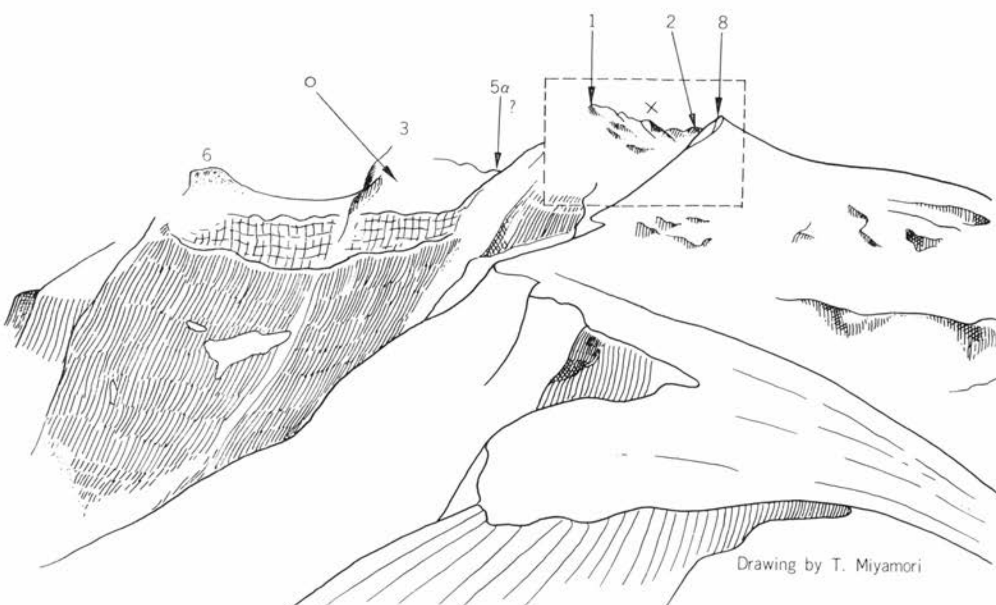


fig-5 Saraghrar, seen from the west peak (Ca 6350m)
of Niigata Zom (W 235) (By S. Yokoyama, 1967)

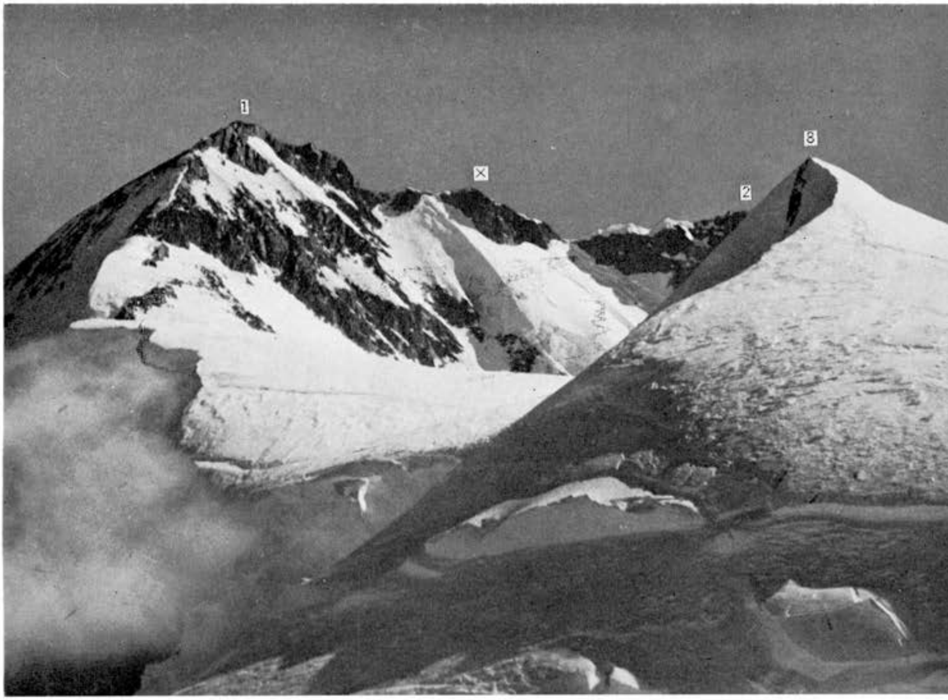
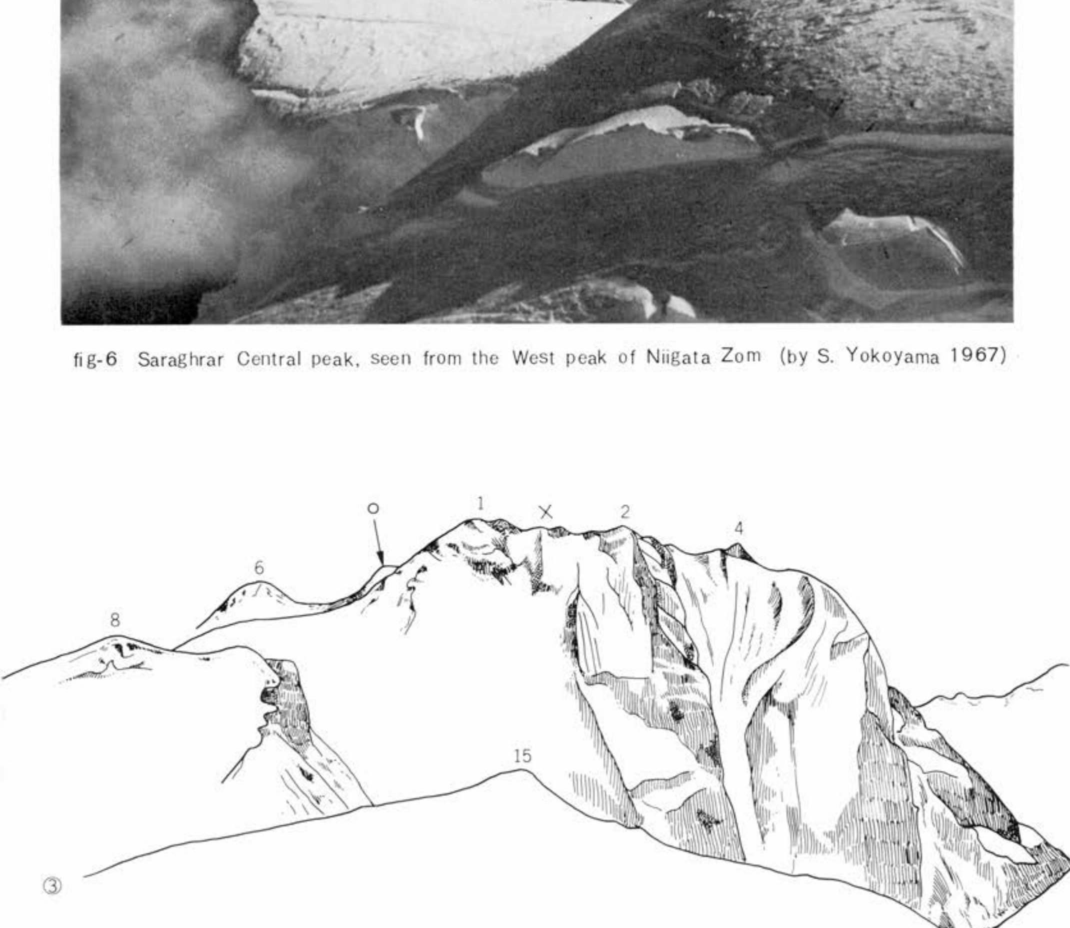


fig-6 Saraghrar Central peak, seen from the West peak of Niigata Zom (by S. Yokoyama 1967)



Drawing by T. Miyamori

fig-7 Saraghrar, seen from the Langar Zom S-E (7061m) (by S. Yokoyama 1967)

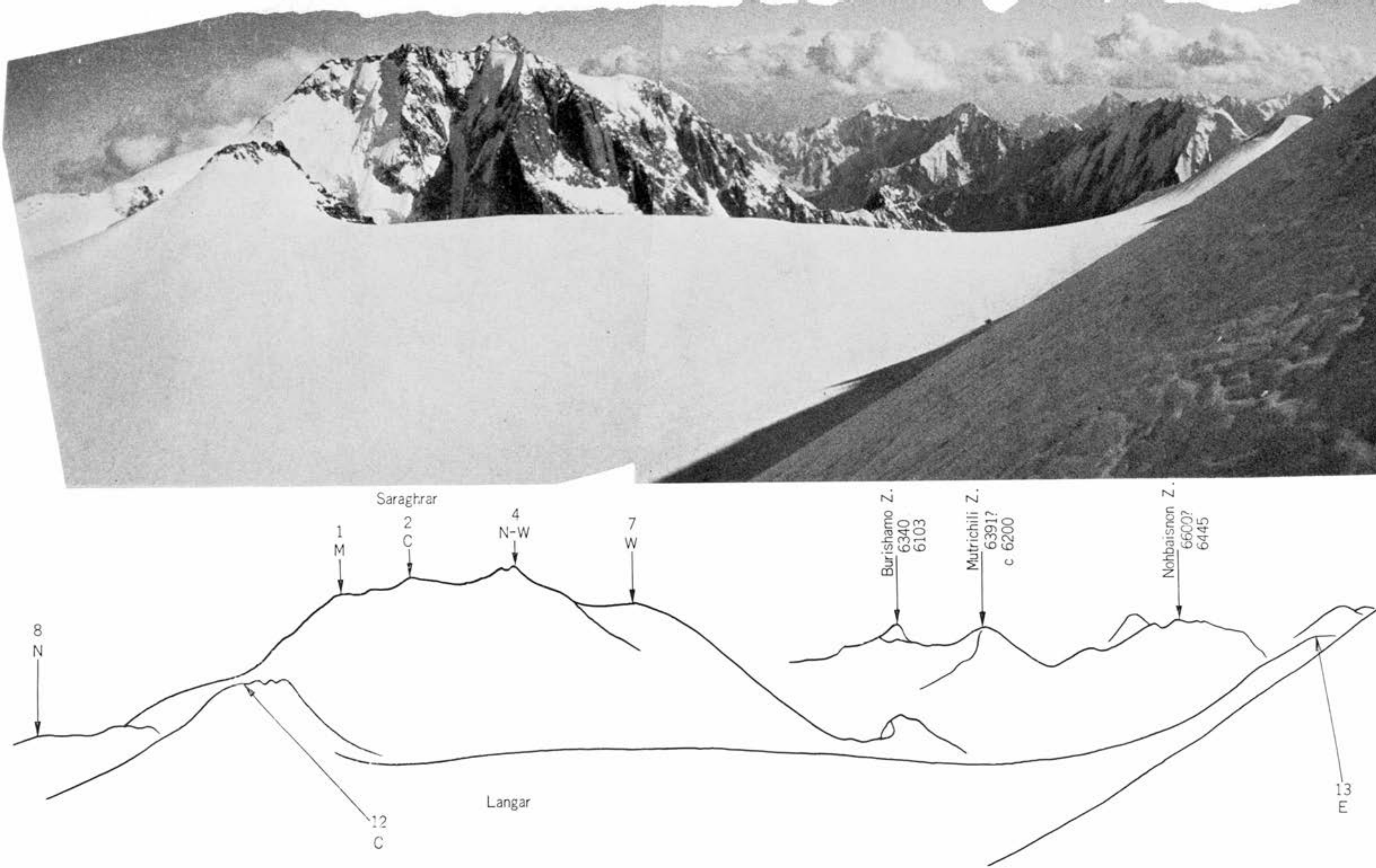


fig-8 Saraghrar seen from the East ridge of Langar Zom Main (Ca 7070 ~) (by T. Tachibana 1968)

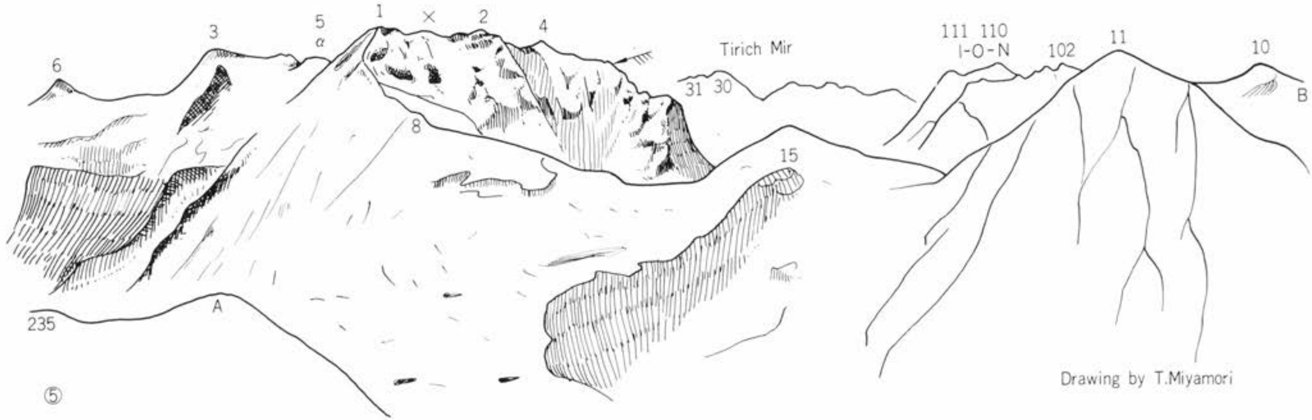


fig-9 Saraghrar and Langar Zom seen from the Shayoz (W-266) 6855m (by M. Schmuck 1963)

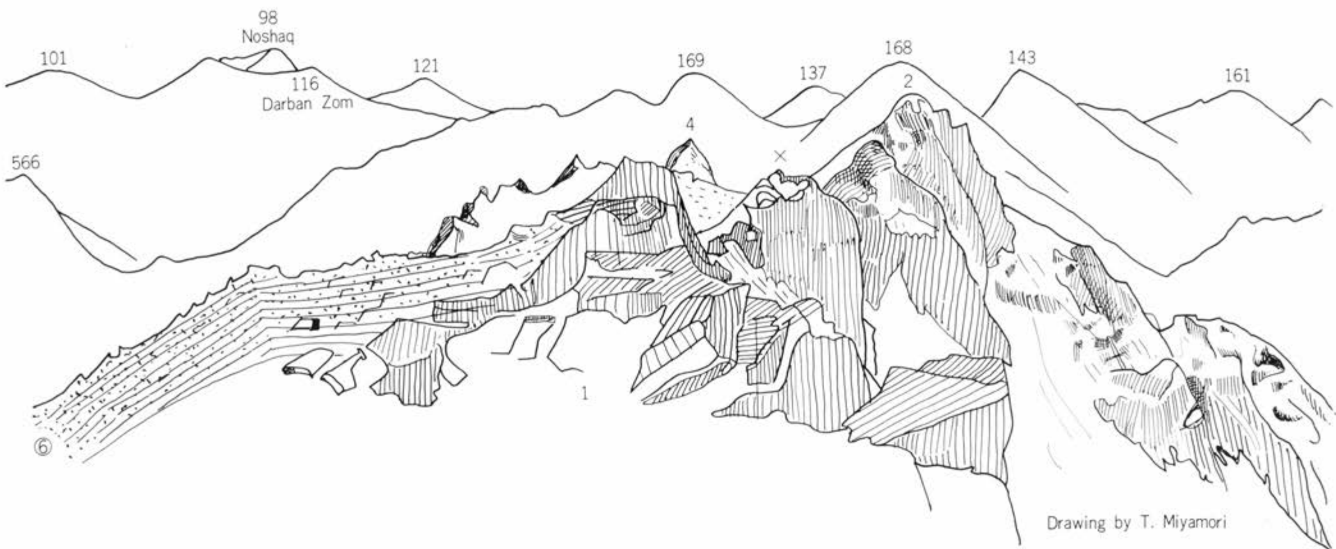


fig-10 Saraghrar Central (P2) and N-W (P4), seen from the Mainpeak (P1) (by S. Yokoyama 1967)

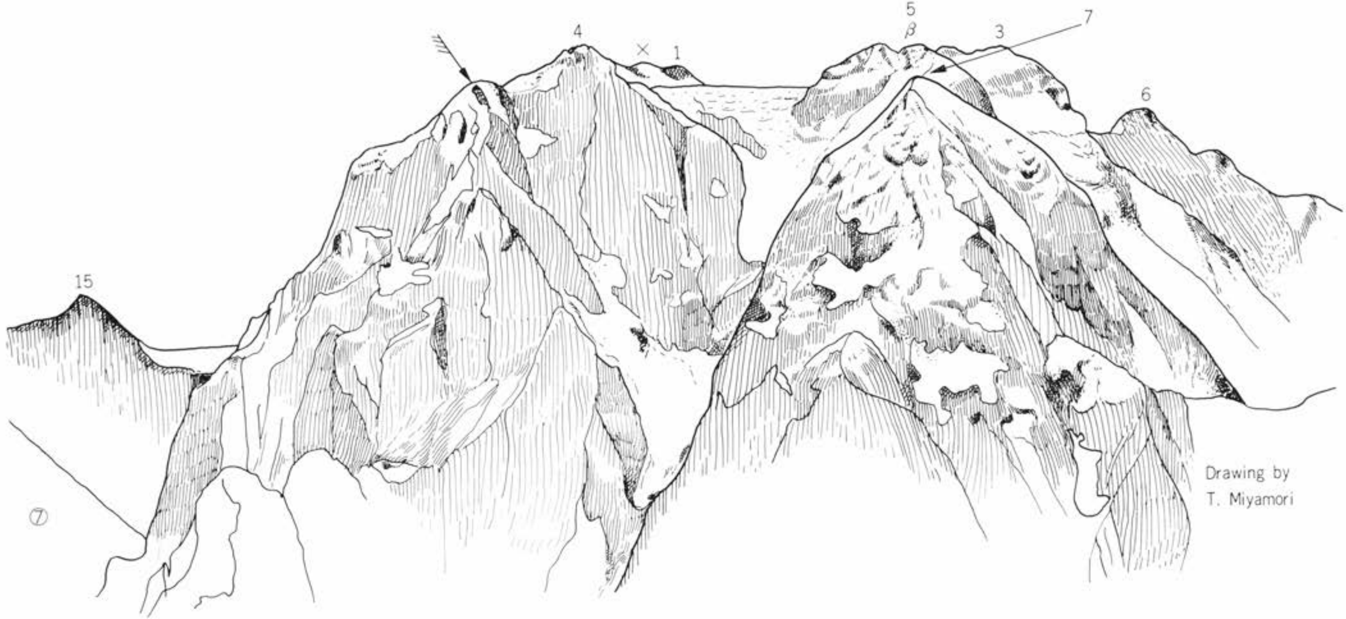


fig-11 Saraghrar West face, seen from the Udren An (by Hitotsubashi Univ. 1967)

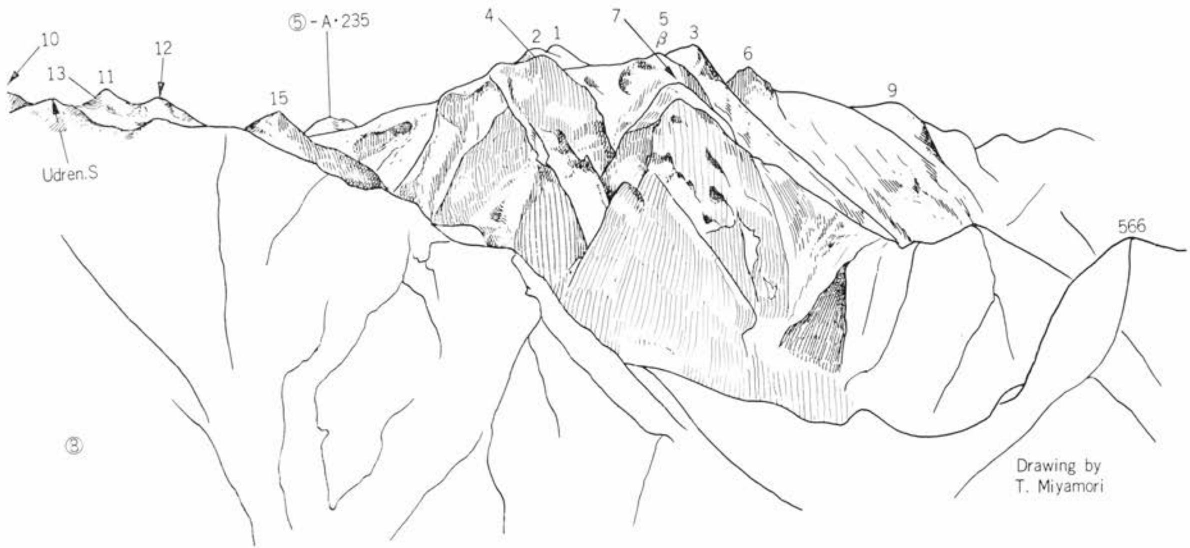


fig-12 Sarghrar and Langar Zom West face, seen from the Darban Zom (W-116) 7219m (by M. Schmck 1965)

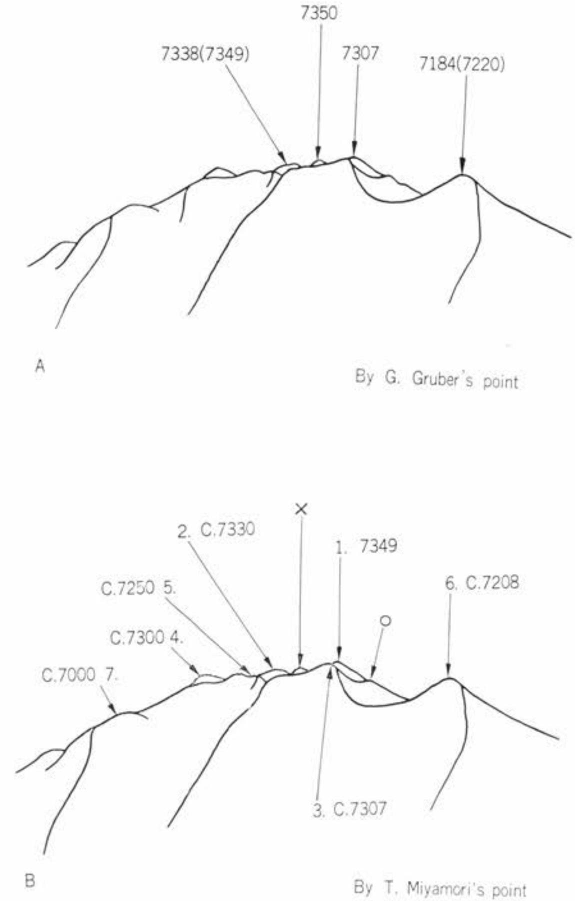


fig-13 Saraghrar South face, seen from the panorama peak of Buni Zom N West ridge
(by Courtesy of Dr. G. Grubei through I. Yoshizawa)

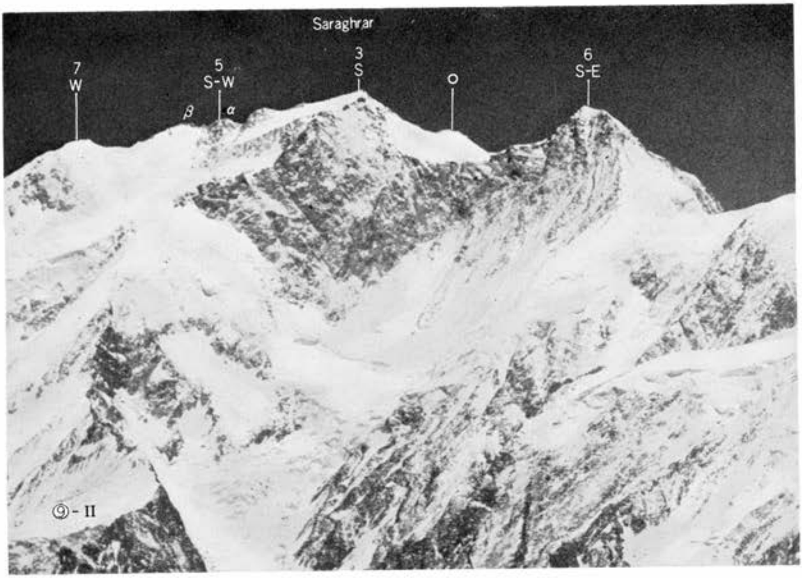


fig-14 Saraghrar South face, seen from the Sarth An (By Y. Katsumi 1971)

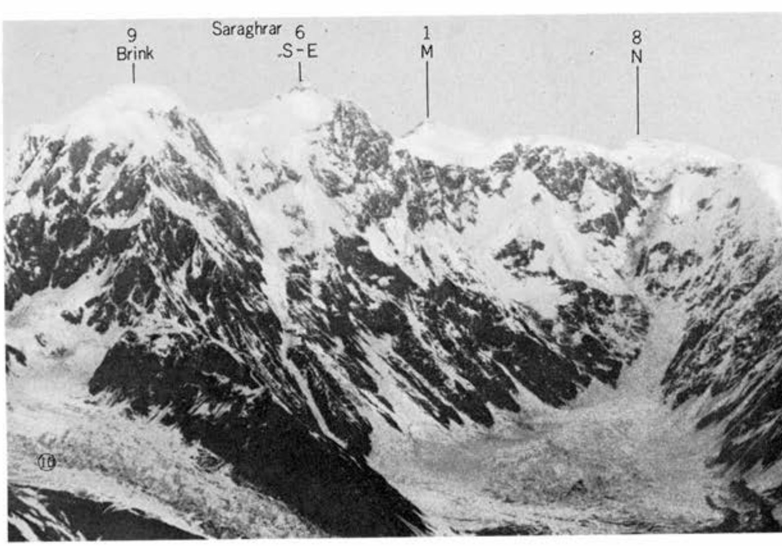


fig-15 Saraghrar S-E face, seen from the North face of Sucai Zom (W-201) 5972m (by S. Yokoyama 1967)

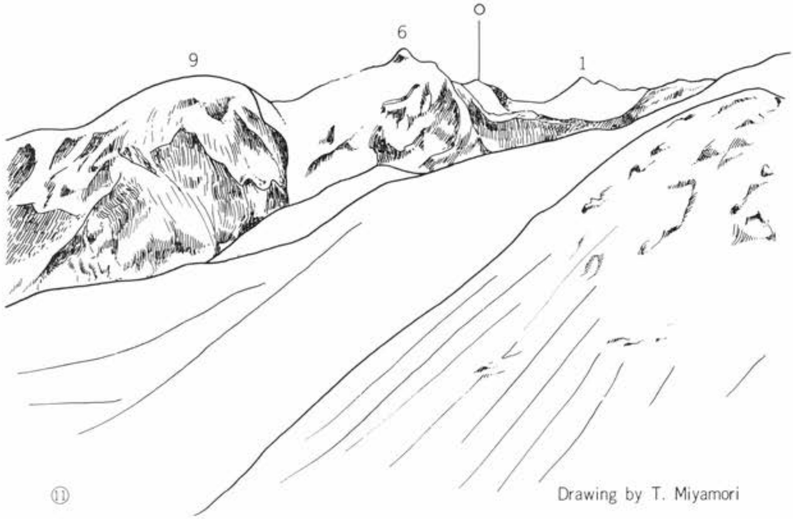


fig-16 Saraghrar East face, seen from the Niroghi Gl (by S. Yokoyama 1967)

fig-17 Saraghrar South peak, seen from the Main peak (7349m) (by S. Yokoyama 1967)

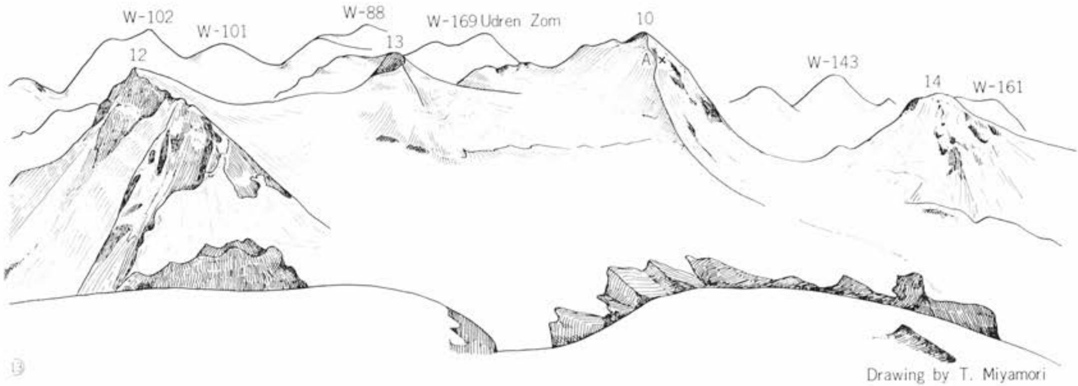


fig-18 Langar Zom East face, seen from the Langar Zom S-E peak (by S. Yokoyama 1967)

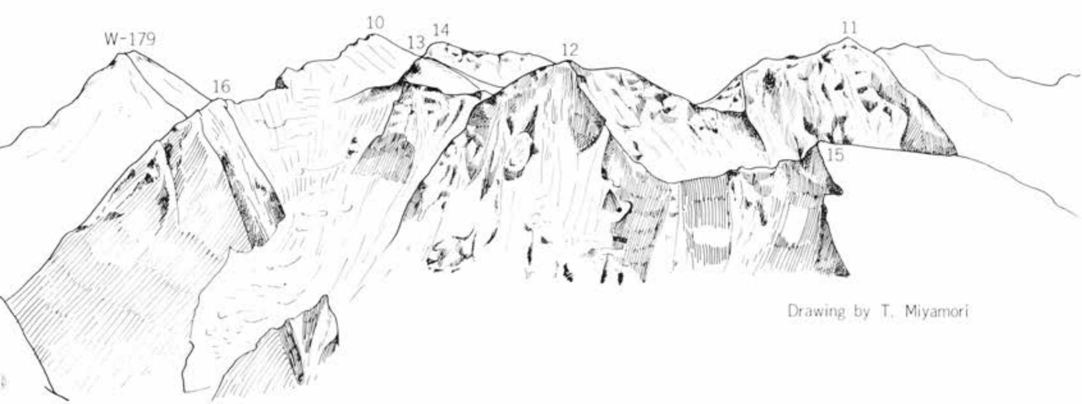


fig-19 Langar Zom South face, seen from the Saraghrar Main peak (by S. Yokoyama 1967)

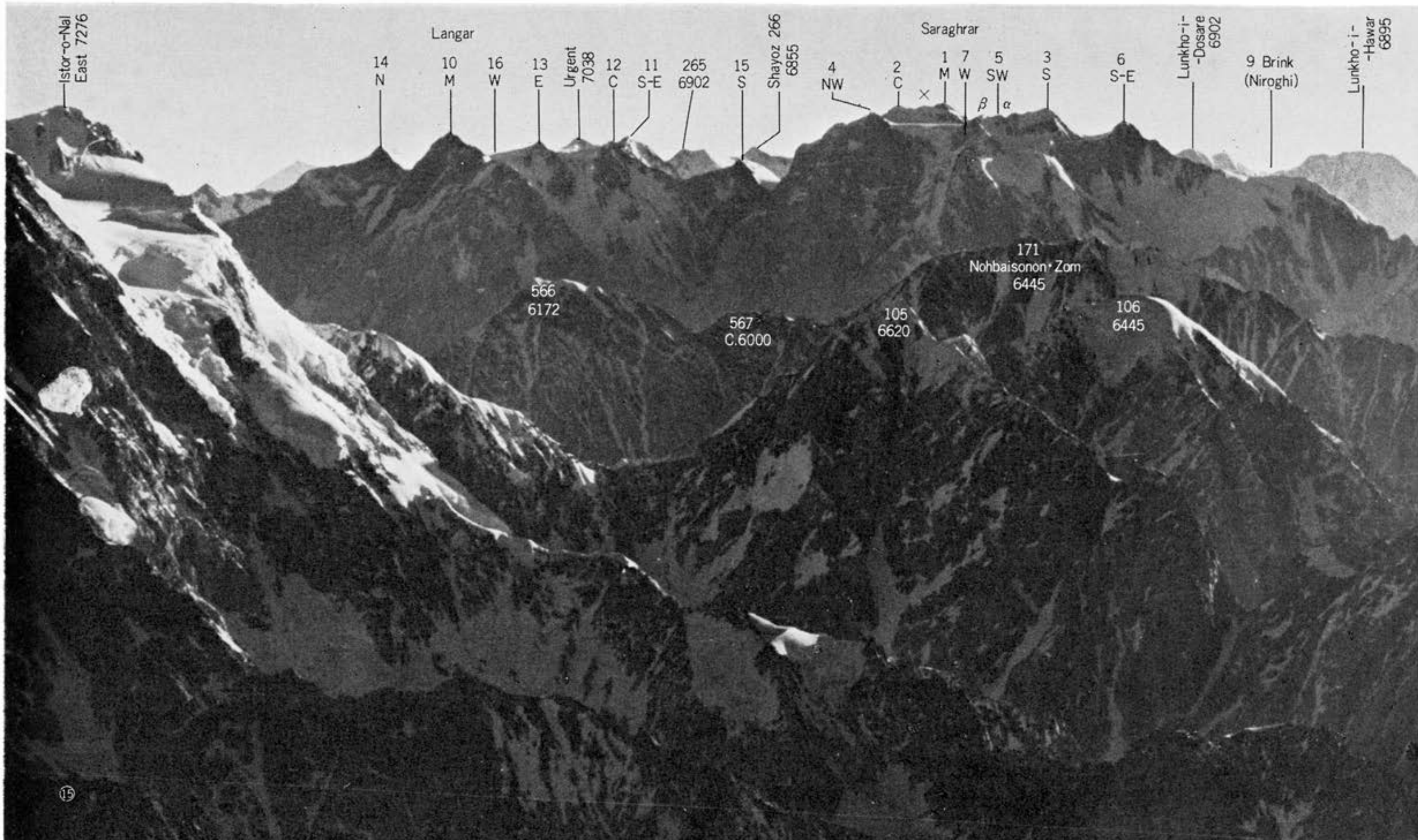


fig-20 Langar Zom & Saragar, seen from the West ridge of the Tirich Mir 7708m (by Fukuoka Exp. 1969)


Kohe Tez
7015
6995
Shayoz
6905
Shoghor Dok
6838
Urgent
7038
7016
6920
Shah Dhar
6550
Yakhcale-sar Gl.
Galati An
6122
Shah-Gl.
Shayoz-Gl.
Hushko-Gl.
6170
6827
Languta Barti
?
14
11
10
13
12
16
15
8
6421
Niigata Zom
Sorlavi-Gl.
Roma-Gl.
Kotogaz
An
Shakawr
7131
7108
Udren Zom
4636
2
1
4
5
3
6
7
9
Niroghi-Gl.
Rosh-Gol
Datti Zom
6247
Sucai Zom
5972
6020
6089
Ishpindar Sor
Udren An
3964
6172
C 6000
Warsing-Gol
Nohbaisnon Zom
(Atrak Zom)
6600?
6445
Doru
Shugam
3228
Mtrichili Zom
6391?
C 6300
5735
5636
6447
Burishamo Zom
6340
6103
20-Nov-1971
by
Tsuneo Miyamori

fig-21

P-1 を北から望む Langar Zom S-E 七〇六一メートル（W-192 6950m）P-11 からの写真である。P-2 から北西、Rosh Gol 側に派生する尾根の背後に P-4 北西峰の岩峰が頭をのぞかせている。P-8 は、②では想像できぬなだらかなピークであり、P-15 は Langar Zom 南々峰である。三―一で述べた Dr.A.D のⅢ峰はこの写真では確認できない。

五―④ 写真 fig-8

P-1 を北々西から望むもので、Langar Zom 主峰（W-190 7061 m）約七〇七〇メートルの東側稜線上、約六八八〇メートルから撮影したもので、水平には撮られていない。

南西稜上に P-7 が姿を見せ、P-4 は意外にも立派なピークであることがわかる。

この位置でも、Dr. A.D のⅢ峰および J. Wala 図 fig-3のⅡ、Ⅲ峰は不明である（三―一参照）。注意すべき点は Langar Zom 山塊の新峰 P-12 約六八五〇メートルが姿を見せ、P-13（W-191）南峰、六八五〇メートルは右端に見られる。

この P-12 は fig-19 五―⑭ でもわかるように、P-13 と P-15 を結ぶ稜線と、P-11 からの稜線の分岐点にあって、P-13よりも高い（五―⑧、五―⑬参照）。P-15 は P-12 の裏側にかくれて見えない。遠景は Nohbaisnon Zom 山塊である。

五―⑤ スケッチ fig-9

多少の方位は異なるが、fig-5 五―①より高い位置の Shayoz（W-266）六八五五メートルから撮影している。Aが①の撮影地点であり、新潟ゾム（W-235）は左端に切られて見ることができない。双耳峰である P-5 の東側ピーク、α（アルファ）が見られる。

P-8 は P-5 よりもピークは小さく、高度も低い。fig-7, fig-8 とあわせて推定すれば約六九〇〇メートル台が適当な高度と考えられる。

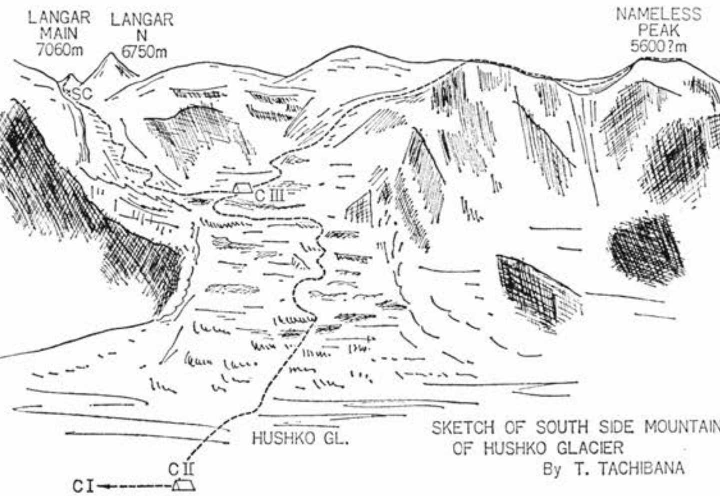
六七九二メートルピークは、この写真でもその片鱗すら確認できない。

頂上雪原については、fig-2, fig-3 に記入されている P-1 と P-3 間の尾根は見られない。Dr. A.D のⅢ峰とは、P-4 と P-2 の中間から Rosh Gol 側に派生する尾根の肩状岩塊と思われる（↙印）。

Langar Zom 山塊では、P-13 と P-12 は P-11 の背後にかくれる。fig-12 は、西面から見たものであるから参照願いたい。Bは五―④ fig-8 の撮影地点である。

注意すべきことは、右端の Langar Zom 主峰 P-10 であるが、Hushko 側から見ると、P-11 に比較して著しくピークは小さい。Hushko 氷河上からは上流の一部がわずかに眺められるだけで、そのほとんどは P-11 の裏側にかくれ、姿を見ることはできない。

参考として、ここで『山岳』第65年六五頁にある立花種則氏のスケッチを掲げておきたい。



註『山岳』64 年 p. 65 立花種則「ランガール登頂（1968 年）」から引用

いわば、Langar Zom 主峰 P-10 とは、Rosh Gol 右岸上部の一部を除き、東、西、南、北ともに、相当な高所以外には見えぬヒドン・ピーク的な存在である（三―三参照、更に後述する）。

五―⑥　スケッチ fig-10

P-1 から見た P-2, P-4 である。P-1 から見て、P-2 山頂の視準線上には、Shakhawr 七一一六メートル（W-168）(Dr. G.G-7084 m) の七〇〇〇メートル台壁面にぶつかるから、P-2 は P-1 よりも低く、P-4 は P-2 よりも低いことが理解できよう。なお、×印ピークについては fig-13 および五―⑨―I にて後述する。

五―⑦　スケッチ fig-11

H.J Vol. XXVIII の写真と同位置の Udren An より撮影した Saraghrar 西壁面である。

P-2 は P-4 の背後にかくれて見えず、P-4 の下部にはドーム状の岩峰が見られる。この岩峰こそは三―一にて先述した Dr. A.D のⅢ峰であり、fig-3 図のⅡ峰であろうと思われる（⊤印）。

これについては、五―③・④・⑤と比較検討を請う。

また、P-5 の西側ピークβ（ベータ）と P-7 が直線上にあって、尾根の識別は困難であったが、五―⑨―I・Ⅱと、fig-13・14・20、第二表の⑰雁部貞夫氏の写真によって、南西稜は双耳峰 P-5の

βピークより派生していることが判明した。[註1]

この写真ではαはβの背後にかくれて見えず、βの左に見えるピークは仰角によって尾根がピーク状に見られるもので、fig-12と比較検討されたい。

また、P-4とP-5の間に見られる雪原はこの線が最高地点ではない。しかし、fig-5・15・16と比較して、Niroghi側末端より高い位置にあることは確実であろう。

五—⑧　スケッチ fig-12

Darban Zom (W-116) 七二一九メートルから見た西壁面であるが、fig-11よりも高い位置から撮影している。

P-4の背後にP-2が姿を見せ、P-3はP-5より高く、P-2はP-3よりも高い。

頂上雪原はP-6より高く、ここから見た線が最高ラインと推定してよいだろう。

Langar山塊にはW-235 fig-9のAが頭を見せ、P-11・12・13・15も見られるが、P-10は頂上が切れて見ることができない。なお一瀬義典氏はKoh-i-Bandakâから似た写真を撮られているが、それではP-10も確認できる。

五—⑨—I　写真とスケッチA・B fig-13

これはBuni Zom北峰の西側にある一峰、五六九〇メートル峰から撮られたDr. G. Gruberのパノラマ写真の一部である。Dr. G. Gruber測量の結果はfig-13 A図になっている。[註2] 写真は鮮明でないから確実に指示しているとは断言できないが、これはSaraghrar主峰を誤認しているのではないかと思われる。[註3]

B図は筆者なりに修正してみたものである。

Chitral側の六〇〇〇メートル以下から撮られた写真のうちで、裏側のP-8を除いて、すべてのSaraghrar支峰が記録された唯一のものであり、P-1・2・3・4・5・6・7が確認できる。但し、Brink P-9は雲にかくれて見られない。またP-4には特徴のある岩峰も確認できる。識別困難なことでは代表的な写真であるが、⑨—IIと比較検討いただきたい。

五—⑨—II　fig-14

⑨—Iと同方位から撮られたものであるがP-1・×・P-2・P-4は全く見られない。撮影位置が⑨—Iより低い Sarth Anからである。○印のピークはP-3から北東に派生する小さな尾根の突起であって、P-1ではない (fig-16・17参照)。

再びfig-13に戻るが、Dr. G. Gruberが七三五〇メートルとしたピークは×印ピークであり、七三三八メートルとしたピークはP-2であり、七三〇七メートルとしたピークがP-1主峰で、P-3の南峰はP-1のわずかに西にズレた位置にあるピークではないかと思われる。×印ピークについてはfig-5・6・7・9・10・11・20を参照されたい。P-3の西稜線にも似た突起がある。

る。

五—⑩　写真 fig-15

P-1 を南東々の方位（W-201）Sucai Zom 五九七二メートルの北東側下部から撮ったもので、P-9・6・1・8 が見られる。頂上雪原の末端が望まれ、P-6 より低い。

五—⑪　スケッチ fig-11

P-1 を東より見たもので、P-6 と P-1 の間に○印ピークが認められる。頂上雪原の末端は、各種の写真から判断して約六七〇〇メートル台と思われる。

五—⑫　スケッチ fig-17

P-1 より南峰稜線を見たものである。P-3 を通る視準線は Buni Zom 山塊の六〇〇〇メートル台を指すから、P-3 は P-1 より低い。雪原は明らかに P-4 と P-5 の中間から東に傾斜している。

これによって頂上付近の概念図を書いてみると、下図のようになる（fig-22）。

五—⑬　スケッチ fig-18

P-11 の山頂から見た Langar Zom 山塊のパノラマである。三—二で疑問峰であった P-11 は明らかに存在する。

P-10 を Wala-169, Udren Zom 七一三一メートル（G.G-7103 m）と並べて見ると、P-11 と Udren Zom 山頂を結ぶ視準線は P-10 より低い左肩を通過するから、P-10 は P-11 よ

Saraghrar 山頂周辺概念図　By T. Miyamori

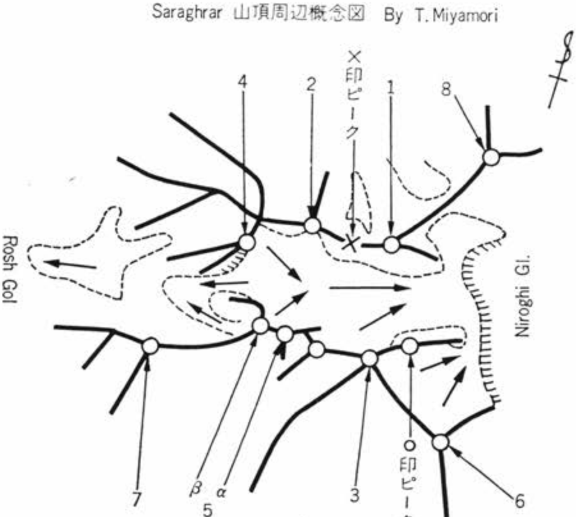


fig-22

りも高いことが理解されよう。P-15 は左端に切れて画面にはない。Aは fig-8 の撮影地点である。

五—⑭　スケッチ fig-19

P-1 の山頂から撮影した Langar Zom 山塊の全容である。P-12 は P-13 より高く、P-10 から P-13 にいたる尾根はとぎれている。尾根は P-10 から南西に高度を下げ、いったん P-16 で高くなり、次はいっきに Rosh Gol におち込む。

なお、P-15 は、一橋大の言う小プモリである。P-11 に登った横山史郎氏は P-15 山頂のわずかに東側を通過しているが、P-15 の頂上は踏まかったと言っている。

五—⑮　写真 fig-20

福岡岳連の手によって Tirich Mir の W1 付近より撮影された Saraghrar 周辺全域の写真である。五—①から⑭までをふりかえって、P-14 から P-6 までをそれぞれ記入してみた。

六、結　び

六—一　三—一、二については、もはや繰りかえすまでもないので、筆者なりのカムカルテを作製し、fig-21 としたので御検討いただければ幸いである。なお、新峰および未登峰については第3表に一括して述べておいた。

六—二　七〇六一メートル峰について

第3表　Saraghrar 周辺の新峰と未登峰

Peak	山	名	標高	摘要
1	Saraghrar	中央峰	C 7330	新　峰
4	〃	北西峰	C 7330	Diemberger のII峰
6	〃	南東峰	7208	Wala No. 197
12	Langar Zom	中央峰	C 6850～	A. Linsbauer の 6850 ？峰
15	〃	南々峰	C 6700	Wala No. 193
16	〃	西　峰	C 6600	新　峰

(P-4 は fig-4, P-12 は fig-1 参照)

写真観察によって求めた概念図上の位置は P-1 と Shah Dhar（W-242—6550 m）の左肩を結ぶ標定線上に P-11 があり fig-19 Tirich Mir Wl と Urgent（W-258—7038 m）・（W-265—6920 m）ピークの中間を通る標定線上に P-11 がある。fig-20 参照（厳密には標定線とは云えないが）。これは Survey of Pakistan's Map に標定点をおいた場合、確実に七〇六一メートル峰に一致する。Wala Map では Langar Zom S-E の南東数百メートルの位置で交叉するから、多少の修正が必要であろう。したがって、P-11 は Dr. G. Gruber のあげた七〇六一メートルが正しいと思われる。

〔**参考**〕 周辺の三角基準点は Rosh Gol 流域の Morich の北々西にある Kurangan Ach 一七一三三フィート、Yarkhūn 山脈の Shabang 一八二二〇フィート、Mastuj 南東々の Dobar gas—七六二五フィート、Sarth An 北々東の Chumarmal—一三九二七フィート、Tirich Gol 流域 Bandok Kosht の南東 Kosht Zom—一五六一三フィートであるが P-10 を望める三角基準点は Shāhbang—一八二二〇フィートで P-10 は P-11 の左肩に、小さく低く見えるはずである。また Rosh Gol の一三七二八フィート点からは、P-10, 11 ともに見えず、氷河周辺のポイントはすべて Approximate Point となっている。

山の高度を測定するには、山の見える地点で、基点の高さが確実にわかり、二個以上の標定点によって、測定する山との距離が確実に求められなければ、もっとも正確な方法と云われる仰角視準測量は、不可能であろう。

筆者は、この山を直接観察したわけではない。すべて、登山された方あるいは周辺の山を歩かれた方の御教示、その他の御協力を総合してまとめたに過ぎず、山座同定としては未完である。写真には収差もあり、そのほとんどが水平に撮影されているとは限らないから、所詮、科学的な要素には遠く、記述の不充分な点はなにとぞ御寛容願いたい。

最後に、多くの方々の御助言、御協力をいただいたことを感謝しているが、とくに御教示を賜わった吉沢一郎氏、田中栄蔵氏に、厚くお礼申し上げます。

（**註1**） 静岡登攀クラブは P-7 を通過後、P-5 の β・α ともに登頂し、β をスノー・ピークと命名している。

（**註2**） 『ティリチ・ミール登頂』アルネ・ネス著、吉沢一郎訳 あかね書房のグラビア、パノラマ写真参照。

（**註3**） 五—⑨—一の写真は雲がかかり、パノラマ写真撮影位置とは同位置ではなさそうに思われる。

参考文献

一、Kei Kurachi "The Three Ascents in Rosh Gol Valley" H.J. 1967～68 p. 85

二、Dr.A Diemberger "The Saraghrar Peaks" H.J. 1969 p. 175

三、Marcus Schmuck "The First Ascent of Darban Zom, Q 6 and M 9" M.W. 1966～67 p. 33

四、Marcus Schmuck "Climbing in the High Hindu Kush" M.W. 1966～67 p. 41

五、一橋大学山岳会「ロシュ・ゴル一九六七年」『山岳』第六十三年

三二頁
六、フォスコ・マライーニ「G・Ⅳ探検隊の写真とサラグラール峰の登頂」『山岳』第五十八年　一三三頁
七、立花種則「ランガール登頂（一九六八年）」『山岳』第六十四年　六〇頁
八、Rosh Gol, 1967 & Ushko Glacier, 1967 [ASIA : HINDU KUSH] A.J 1969 p. 195
九、『カラー・世界の山々』8　九四頁　サラグラール　山と渓谷社
一〇、『ティリチ・ミール登頂』ノルウェイ隊著吉沢一郎訳　あかね書房（一九六七年）
十一、山本健一郎編『ロシュ・ゴル氷河の山旅』あかね書房（一九六八年）
十二、『山』（日本山岳会会報）第二七七号（一九六八年七月号）、第二八五号（一九六九年三月号）

「ネパールの気候に関する覚え書き」
『山岳』第六五年（一九七〇）補足

著者は第十二次南極観測隊員として南極に向かう途中の船上で原稿を書き、寄港地より投稿したゝめ、校正ミスがあったり当然紹介すべき文献に触れなかったりしたので、ここに補足します。

一、第三図「ネパールにおける年降水量分布図」は一九六六年までの資料（**文献一**）によって独自に描いたものであるが、**文献二**には以前の資料から作成された年降水分布図が報告されている。

二、第四図「地形的に見たヒマラヤの降水地域」は**文献三**による。

三、第五図「ネパールにおける降水の型」の図の中で太い数字は観測地点番号、（　）内は年降水量（mm）を示す。ここに示した二極大型についてはすでに**文献四**に指摘されている。

四、参考文献

一、Climatological Records of Nepal 1966, Department of Hydrology & Meteorology, Ministry of Water & Power, H.M. Govt. of Nepal
二、Khumbu Himal Band 1. Liefg 5. S 353-448. Springer-Verlag, Berlin, 1966
三、Hagen, Toni 1961 Nepal. Kümmerly & Frey, Geographical Publishers, Berne
四、渡辺興亜・遠藤八十一・石田隆雄　一九六七、「ヒマラヤの氷河についてⅠ」低温科学、物理篇、二五、一九七～二一八
五、中島暢太郎　一九七〇、「ヒマラヤの気象、気象変化の水収支に及ぼす影響」No. 2, 八三～八九

〔山田知充〕

本稿に関し、校正ミスのため筆者にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

〔編者〕

追悼

藤木　九三氏（一八八七―一九七〇）

「高い声で誰かを呼びながら、編集室のデスクを縫って急ぐ少々猫背のオジサマが、有名な藤木さんでした」と朝日新聞学芸部の婦人記者で、エーデルワイスクラブの会員でもあったSさんが、追悼会で思い出を話されたが、この背を丸くした独得の歩き方は、街でもどこでも山を歩く時の姿そのままで、新聞社内でも有名であり、私等にも忘れられないものであった。藤木さんの生涯は山男であったとともに、新聞人としての生活であった。その山は足で歩いた山であったとともに、ペンによって文となり印刷せられて、多くの山仲間に呼びかけ、語りかけた山であった。

多数の著作は紀行、随筆、評論、研究、詩、翻訳等広い範囲にわたり、自らよく書いたとともに、また外国の文献を実によく読み、訳して紹介した。まことに山靴とペンが、ザイルにつながっていた藤木さんというのが、ふさわしいかもしれない。

岩登りや冬期登山の方向に入っていった阪神の山仲間で、R・C・Cというクラブをつくったのと、日本山岳会に入会したのが大正一三年で、翌一四年にはこの仲間のテクストとして『岩登り術』を書き出版した。この夏滝谷初登、一五年ヨーロッパ留学、アルプス等登山、翌年帰国。山岳会関西支部ができたのが昭和七年だと思うが、翌八年これに関連して、当時段々広い地域に会員数も増していたR・C・Cを解散した。この解散は、藤木さんにとって感慨深いものがあったにちがいないが、大正中頃から戦争まで二十数年の永い登山界での活動は、よく登り、よく書くとともに、いつも山仲間での先達的な力強いものであった。

若いものが好きで、また若いものにもしたわれた藤木さんの書斎には、近くからは勿論また遠くからも、訪れる山の人達が絶えなかった。何年頃か忘れたが、山岳会の角田吉夫君が東京から見えて、その午後一緒に六甲の堡塁岩へ岩登りに出かけた事がある。突然の思いつきだったので、藤木さんのスカルペティを借りて、普通の服装のまゝでザイルをつけたことを思いだす。また東京朝日の島田巽君が見えて、三人で生駒山の青少年道場へ足をのばし、丁度休日で誰もいない広い道場で、藤木さんみずから薪を割ってお茶をサービスして下さり、静かな半日の山小屋気分を味わったこともある。足立源一郎さんが、この書斎での藤木さんを画かれた素晴らしい肖像画があるが、それ

は山の本が一ぱいつまった書棚、マッターホルンの模型や山の絵や熱河の仏像や雷鳥の剝製などが飾られた、応接でもあり書斎でもあり仕事場でもあった。私はよく著書の装幀などのお手伝いをしたが、度々この室にカン詰となって一緒に仕事をして泊りこみ、奥様にも随分御面倒をかけた。深夜のデスクランプの下で、次々にペンの先から生れる詩や文は全く力強く華麗で、氷片のように澄んでかゞやくものであり――滝谷同行の詩人富田砕花さんによると「藤木君は詩人になると思ったが新聞記者になってしまった」――山によせるひたむきな心を、高々とうたい上げるものであった。中原繁之助さんがはじめた黒百合社から出された『屋上登攀者』は、今は古書店でも珍重される当時の豪華本であった。他にも凝り性の藤木さんらしい本が多く、朝日新聞社から出た写真集『山と闘ふ』、『氷雪に挑む』、『エヴェレストへの闘い』もこうした詩や文が多くおさめられ、私にとってはこの書斎につながる思い出の多い楽しい本である。

大正一五年秩父宮の欧洲アルプス御登山は槙、松方さん達がお伴されたが、その随行は藤木さんの多くの山の思い出の中でも大切なものであったようで、『雪　岩　アルプス』の中のマッターホルンの紀行も素晴らしい文である。また『岩登り術』について宮様からお話があった事なども、ずっと後に聞かされた。

同じく昭和二年の穂高・槍御登山では、宮内省や地元警察などが危険を心配して新聞社の随行を許さなかったが、上高地から上へは水野祥太郎、高柳源十郎君と三人組で少し後から適当に随行するといった形で、尾根に上ってからは「やあ藤木君は来ると思っていたよ」と言われる結果になったとのことであった。ジャンダルムでの雷雨、小槍登りなどの朝日の文と写真は、藤木さんならではの内容で断然他社を抜き、今スクラップブックを見ても楽しい。前穂北尾根には、忙しかったのかサボったのか随行しなかったところ、宮様から「藤木君は原稿の仕事があるから、休養する日ができて好いね」と一本ひやかされたと、その後苦笑しながら話された。

戦後の藤木さんが南極学術探検事務局で、かげの力として大きい役割をつとめられたことは知る人が少ない。その後日本からも海外の山に出かけることが段々多くなり、ヒマラヤ黄金時代となったが、その間豊富な知識と文献、海外ニュースをもとに、よくペンをとって活躍をつゞけられた。

芦屋ロックガーデンの入口高座の滝の横と、穂高滝谷出合に、藤木さんのレリーフが紀念として取付けられている。いずれも佐藤久一朗氏の制作になり、芦屋では昭和三十八年五月一二日除幕、多く集った山仲間の前で藤木さんは挨拶しながら涙あふれて声をのまれた。また滝谷では、昭和四十年六月四日除幕式に夫妻で参列された。この後高血圧で右手足が不自由となり、永年ペンをとった手と、山を歩いた足が思うように動かなくなったのは、さぞもどかしい心地だったろうといたましい。

それでも山岳会の集りには時々顔を見せられ、帰りをお宅まで送って行ったことも何度かあった。

山の集りでの藤木さんの姿が、私の思い出に浮き出る最後の一齣は、神戸王子公園の登山研修所の開所式の日、昭和四十五年四月、新しく出来た人工岩壁を登る若者達を、川向うの道路の車中から見られた時のこと。左右から腕をとらなければ歩けない足どりであったので、車にのってもらって岩壁の正面まで回った。「岩登りの歴史」といってもよい藤木さんの顔、その目には一瞬きびしいものが流れ、感慨深いかげが見えた。この時が最後の外出であった。藤木さん蔵書内外の千数百冊が、この研修所の図書室に贈られて「藤木文庫」となった。

三人の子息のうち三男の高嶺君は山岳会の会員であり、朝日新聞の記者であり、父君のあとに続く形となった。そしてエスキモーやアラビヤ人、ニューギニア原住民の中に入って生活した記録は、よく知られている通りである。「山岳部の学生時代には、親父は私の山行や準備についても口うるさく注意するようになった。いつまでも私は子供扱いで、たよりなくて心配だったにちがいない」と高嶺君自から話していたが、広い外地に、こうした未知の世界に出てゆく後継ぎを、藤木さんはたのもしく安らかな心地で、見守っていられるように思う。

前に関西支部報に書いものと一部重なることもあり、また書き足りないこともあると思うが、お許しを願う次第です。

略歴

明治二十年（一八八七年）九月三〇日　京都府福知山に生まれる。中学時代新体詩など文学に熱中、小島烏水氏の「槍ケ岳探険記」を読んで山に惹かれる。

明治三十八年　早大予科入学、ワラジ、ユカタ、着ゴザで富士登山。

明治四十二年　早大英文科在学のまま東京毎日新聞入社、その後やまと新聞に転社。

大正三—四年　青島に日独戦従軍記者として特派され、山岳戦、空中戦の特ダネ。

大正四年　朝日新聞（東京）に転社。

大正五年　東久邇宮槍ケ岳登山に随行。島々—上高地の徳本峠を一日に一往復半して「宮様登山記」をスクープ。これで日本アルプスに初めて入った。

大正七年　朝日新聞社大阪本社に転勤。

大正八年　神戸支局長。

この前後数年全国各地の山に登る。芦屋ロックガーデン等で岩登り練習。道場不動岩で練習中墜落、ザイル切れ肋骨を折る。

大正十二年—十三年　上ノ岳冬期登山。

大正十三年　日本山岳会入会（会員番号八九三番）、雪彦山不行岳初登。R・C・C発会。立山、薬師、乗鞍、穂高、氷ノ山等。積雪期にもスキーを用いて登る。

大正十四年八月　錫杖岳試登、穂高滝谷初登。

大正十五年　朝日新聞社留学生として渡欧、六—九月　ドーフィネ、ピレネー、モンブラン、ワイスホルン等に登り、ベルナーオーバーランドの山、マッターホルン等には秩父宮御登山に随行。

昭和二年　甲子園に転居、五月槍穂高、七月劔八ツ峰、八月秩父宮穂高槍御登山に随行。

昭和三年　初冬白馬岳。

昭和四年　九月槍穂高、岩登りの映画をとる。

昭和六年　樺太突岨山。

昭和八年　満蒙学術調査団熱河探検、R・C・C解散。

昭和九—十年　京大白頭山遠征隊に参加、この前後—シベリヤ出兵、済南事変に従軍記者として特派される。

アサヒスポーツ編集長、参事、運動部顧問。戦中—生駒山青少年鍛練道場長、また時に戸山学校で陸軍指導教官。

戦後—南極学術探検事務局。

昭和三十二年　日本山岳会評議員。

昭和三十四年　日本山岳会顧問。

昭和三十八年五月十二日　芦屋ロックガーデンにて藤木氏記念レリーフ除幕式に参列。

昭和四十年六月四日　穂高滝谷出合にて同前のレリーフ除幕式に夫妻にて参列。

昭和四十年十月　日本山岳会名誉会員。

昭和四十五年四月　神戸登山研修所開所式に参列、蔵書千数百冊の山岳図書を研修所に寄贈。

昭和四十五年（一九七〇年）十二月十一日　逝去、八十三歳。

主な著作

岩登り術	大正14	R・C・C事務所
屋上登攀者	昭和4	黒百合社
雪　岩　アルプス	昭和5	梓書房
槍　穂高　岩登り	昭和6	木星社
アルプス伝説集	昭和7	黒百合社
チロル伝説集	昭和7	黒百合社
雪線散歩	昭和8	三省堂
雲表縦走	昭和10	三省堂
熱河探険記	昭和9	朝日新聞社
登拝頌	昭和18	山と渓谷社
詩集　雲表	昭和6	黒百合社
詩集　岳神	昭和18	朋文堂

朝日新聞社発行の写真集

山と闘ふ	昭和14
氷雪に挑む	昭和15
エヴェレストへの闘い一九五一〜一九五三	昭和28

他に訳文集、また各種出版物の中に収められしもの多数、日本岳人全集「屋上登攀者」（昭和四十三年刊）に詳細な目録がある。

（中村　勝郎）

深田　久弥氏（一九〇三—一九七一）

「北には私の宿題である茅ヶ岳。」と一九六〇年一月の「笊ヶ岳」紀行の中にあるのからみれば（『わが愛する山々』一六〇頁）、深田君の心の中で、この山は長いあいだあたためられていたのであろう。その念願の山頂直下、頂上へ十五分と記るさ

れた小さな立札のある鞍部で、ゆっくり三十分も休んでから、「さあ、こんどは頂上の鍾ビール乾杯だ」と登り始めたのが十一時二十分、私は五番目だった。少し離れて深田君がつゞき、しんがりは若い山村君。三分か五分か、うしろのふたりの話声の中に、イワカガミというのが、私の耳に入ったので、今頃の季節に何だろうと、足許をみたのをおぼえている。その途端に「戻って下さーい」との呼び声、私は先行した仲間に声をかけて、バタバタとかけおりた。何秒というあいだである。ほかの仲間もすぐ下りてきた。

足を踏み出したままの姿勢で巨木のように倒れ、深田君は一瞬にして意識を失ってしまったのだ。つまずいたのか滑ったのかと駈け寄った山村君は、深田君が大きなイビキをかいたので、これは脳出血に違いないという。まったく思いもかけぬことが、なんの前兆も予感もなく、突如として起ったのだ。私達はただ茫然として立ちつくすばかりであった。

倒れたまま身じろぎもせず、だんだんかすかになってゆく脈膊がついに止って、三月二十一日午後一時、深田君は還らぬ人となった。前夜食事の際のアルコール摂取量は決して多いとはいえず、睡眠は充分であったし、二時間余の登りも精根つきはてるというようなものではなかった。登りついた鞍部は見晴しがよく、深田君は好きなアンパンをたべながら明るい表情で、いつものように仲間と雑談を交えていたのに、どうしてこんなことが起ったのか。睡眠中でも、座敷の中でも、読書中でも、玄関先でも、往来でも、電車の中でも、突如として起るという脳出血が、山を登っているときに起ったのは、不幸な偶然、不幸な運命という以外に解釈のしようがない。

深田君の著『きたぐに』(昭四五年八月・東京美術刊)をよむと、《私は医者がきらいだし、医者のいうことなどあまり信用しないから、健康診断や血圧など計ってもらったことがない。……生来オプティミストなのだ。これだけは如何ともしがたいことを、この年になってはっきりと認識した。だから長生きをするのだ。八十三? 八十五? 山で雪崩にでもやられない限り、水素爆弾でも落ちて来ない限り、私にはその自信がある。天に対する冒とくの言のようだが、私にはその確信がある。》(「医者嫌い」の項)とあり、また「無病息災」という文の中では《私の健康は親譲りらしい。……その血を受けた私は、やはり還暦をすぎた今日まで、薬餌に親しんだことがない。……家内が心配して、気の進まぬ私を連れて東大病院へ行き、心臓のお医者の検査を受けさせた。……私の肉体は完全無欠に近いことがわかった。……》とも書いている。

近年書いた紀行の中に《私はいよいよ辛い。一人だったらここまで来ないうちに引返してしまっただろう。……近年ことのほか急坂はイヤだ。その急坂が始まった。息が苦しい。……その日の登りは私にはひどく辛かった。一人だったら中止してい

ただろう。……あとは貨物列車の最後につながる一輛のように、ただ曳かれて行くほかなかった。》というような敍述がしばしば出てくるが、年齢のせいだぐらいに考えて、自分の健康については、いささかの疑念も抱いていなかったとおもわれる。山中の急逝はまったく不幸な偶然、不幸な運命と繰返えすのみである。

白山のみえる北陸の町（大聖寺）で育った深田君は、よい先輩があって中学生の頃から山が好きになり、白山をはじめ地元の山を登ったようである。大正十一年春、第一高等学校に入ってから山登りやスキーにだんだんと深入りするようになる。同時代に田辺和雄（『山とお花畑』三巻の著者、昭三六年アフリカ・ナイロビにて客死）という無類の山好きが在学し、深田君が尠なからずその影響を受けたことは、田辺君の憶い出の中で「私は今に至っても、広い意味での山の歩きかたは、田辺流を踏襲している。その登山態度を一言にして言えば、質実ということだった。丹念綿密で、浮華軽薄を嫌う。……」と書いているのからも察せられる。

ふるさとの山を離れて、秩父、北アルプス、南アルプス、東北の山と、学生時代にどこの山へどんな仲間と登ったか。深田君は晩年、私と同行した山のことでも、後日記録を電話できいてくるようなところもあったから、若い頃の山行記録などは恐らく保存されてはいまい。たゞ、この時代には前記の田辺君のほかにも、相当の猛者がその学校にいたから、彼が主役を勤めるような場合は、むしろ少なかったとおもう。大正十五年に東京帝大の文学部哲学科に進んだころから、彼の作家活動が始まるのであるが、文学の道に精進しながらも、山登りやスキーの方も決して怠ってはいなかった。たゞ、学校時代の仲間と行をともにする場合が多かったにちがいないので、日本山岳会の山仲間に入ってくるには至らなかった。

ＪＡＣへの入会は昭和十年六月、額田敏、石原巖両君の紹介、一五八六番、三十二歳であった。入会の翌年『会報』61号に、「故郷の山」なる短文を寄せているが、会合に顔を出したことは殆んどなかったようだ。その彼が突如として有志晩餐会（来会者十四名）の席に現われたときのことを、私はよく覚えている。昭和十三年十一月下旬であった。その会の世話人辻荘一氏の文には「何といっても事変下の会で、その上従軍文壇人の一人深田久弥氏が見えられたので暫くは戦地の話で持切り……」（『会報』84号所載）とある。つまり外からみれば、山登りの好きな作家というわけで、既に山の本を書いていても、登山者というよりも文壇の人という方に、重みがかゝっていたとおもう。この席上で次回の世話人を深田・藤島の両人で引受けたが、一年半もたって漸く次ぎの会合が開かれた。昭和十五年四月のことである。この会には当時在日したジョン・モリス（エ

ベレスターのひとり）が参会したことなども思い出される。
　このころ深田君は文学の方でも活躍しているし、山の本も自著編著を相次いで出しているが、われわれの仲間と顔を合わせる機会は稀れであった。そうして昭和十九年三月には大陸へ出征、二十一年帰国したが東京に留まることなく、越後湯沢、大聖寺、金沢と約十年の地方住い。「反骨の心—東京嫌い」（『きたぐに』所収）を読めば、その心境がよくわかる。この地方住いのあいだに彼はヒマラヤの文献を集め、ぼつ〳〵とヒマラヤ研究の成果を山岳雑誌に執筆しはじめたのである。第二次大戦後、ネパール王国の門戸開放に端を発した、ヒマラヤ登山熱の上昇期に当って、深田君の書くものが若い人達に与えた影響は私などの想像以上に大きいものであったとおもう。昭和三十年東京に居を移し、ヒマラヤ文献の蒐集はいよいよ速度を増し、書庫兼書斎の九山々房成るに及んで（一九六〇年）、深田君の住居は「ヒマラヤ登山相談所」の観を呈するに到ったという。若人の熱心にほだされてではあろうが、来たるもの拒まず、誰にでも相談にのってやったのは、彼の物事に拘泥しない性格によること勿論であるが、私は深田君が特定の大学山岳部の先輩というような、レッテルを貼っていなかっことが、相談に訪れる人達に或る気安さを、抱かせたにちがいないとおもう。
　≪私は東大の学生はあまり好きでない。ロマンチズムとアヴァンチュールの精神の欠けている点では、六大学野球と共に最下位である≫と『ヒマラヤへ志す学生諸君に』（『学鐙』五十五巻九号初出、『雲の上の道』再録）の中にあり、本人は東大に見切りをつけて中退しているのだし、大学山岳部などとは何の縁もなかっただけに、ヒマラヤに志ある人なら誰にでも、知恵をかそうという気持にもなったのであろう。これは日本の若いヒマラヤニストにとって、倖わせなことであったといっても過言ではあるまい。
　知恵を貸すだけでなく、自らも一九五八年にはジュガール・ヒマールへ、ヒモも背景もない小規模な隊で出かけ、一方「ヒマラヤ遠征五十万円説」（『山があるから』所収）を唱えて、大いに士気を鼓舞したとも言えよう。
　戦前二十五座まで書いて中絶したという「日本百名山」の稿にも再びペンをとり始め、山頂をふまない山は取り上げぬというのだから、苦労もあったろうが、また楽しい仕事であったにちがいない。そして、その成果は後世名著として残るべき『日本百名山』となった。
　ヒマラヤへの執心は、さらに西域、シルクロードへの夢にひろがり、六十三歳にしてあこがれの古道を辿って、半歳に亘る長い旅をしている。
「私は講演というものを好かない。自分でするのも聴くのも好かない。」と書いているが（『きたぐに』反骨の心・講演嫌い）、次ぎつぎと刊行された著書、訳書、編著、監修書と深田久弥の

名がひろく知られ、JACの役員、文部省だの厚生省の委員に引張り出されては、とても講演嫌いなどとすましてはいられない。近年はラジオ、テレビ、中央、地方の講演も億劫がらずに引受けていたようだ。執筆の方ものっぴきならぬ連載物の外に、依頼原稿に追駆けられていたのではないか。山旅の誘いをかけると、都合がつかないと断ってくる場合が一再ならずあって、「著述業は自由業に属する筈だが、案外不自由業だね」などと、私がひやかしたこともある。

金沢から上京した頃に比べると、最近はずいぶん肥満してきたし、脂っこいものを好んだし、平常は運動不足気味でもあったろう。それに「医者嫌い」とあっては……。

風もないおだやかな春分の日、好きな山で、親しい山仲間と一緒で、なんの苦しみもなく、さぞ本望だったろうという人が多い。深田君の歿後私の目にふれたたくさんの追悼記は、殆んど全部が本望論であったが、私は決してそうとは思わない。

遺著となった『山頂の憩い』の冒頭に「日本百名山その後」の一文がある。その中に≪……私としてはできるだけ多くの山へ登りたい。……同じ山へ二度行くよりも、まだ知らない山へ行ってみたい。……日本にはまだまだ私の知らない山がたくさんある。「日本百名山」を終っても私の登りたい山は尽きない。≫とあるのからみても、宿題の山はなお五年十年の歳月では登りつくせぬほどあったろう。国内だけでなく海外でも、出かけたいところがたくさんあったとおもう。現に亡くなった一ヵ月あとにはエベレスト山麓へ、その夏にはスイス・アルプスへの旅をひかえていたのだ。

九山々房の蔵書は年を逐うて豊かになり、例えばシュラギントワイトの大著、オーレル・シタインの『セリンディア』に『インナーモスト・エシア』などの大物から、エベレストとあるので注文したところ、届いたのは漫画本だったというようなものまで、山房のあるじが愛書家から書痴（ビブリオマニヤ）の域にまで達したことが窺われる。珍籍稀書を手に目を細めてひとり悦に入っているのも、或は同好の士と書談深更に及ぶのも、これから先き長い年月、大きなたのしみであったろう。

深田君の歿後上梓された著書の内、二冊は生前すでに纏められていたものだが、三冊目は未完のまゝに残されたのを、よき協力者を得て刊行されたものである。もちろん自らの手で書き上げ、立派な本になった喜びを味いたかったとおもう。それだけではない、彼の頭の中にはまだまだ書きたいこと書こうと思うことが、一杯つまっていたにちがいない。最近は「これまでの自分の文章を破るのだ」ともらしていたというから、健在ならばこれからも、たのしい山の好著や飜訳書をつぎつぎ上梓して、われわれをよろこばせてくれたであろう。また筆の人としての深田君が、近年は所謂文壇よりも登山界の方へ傾いていた

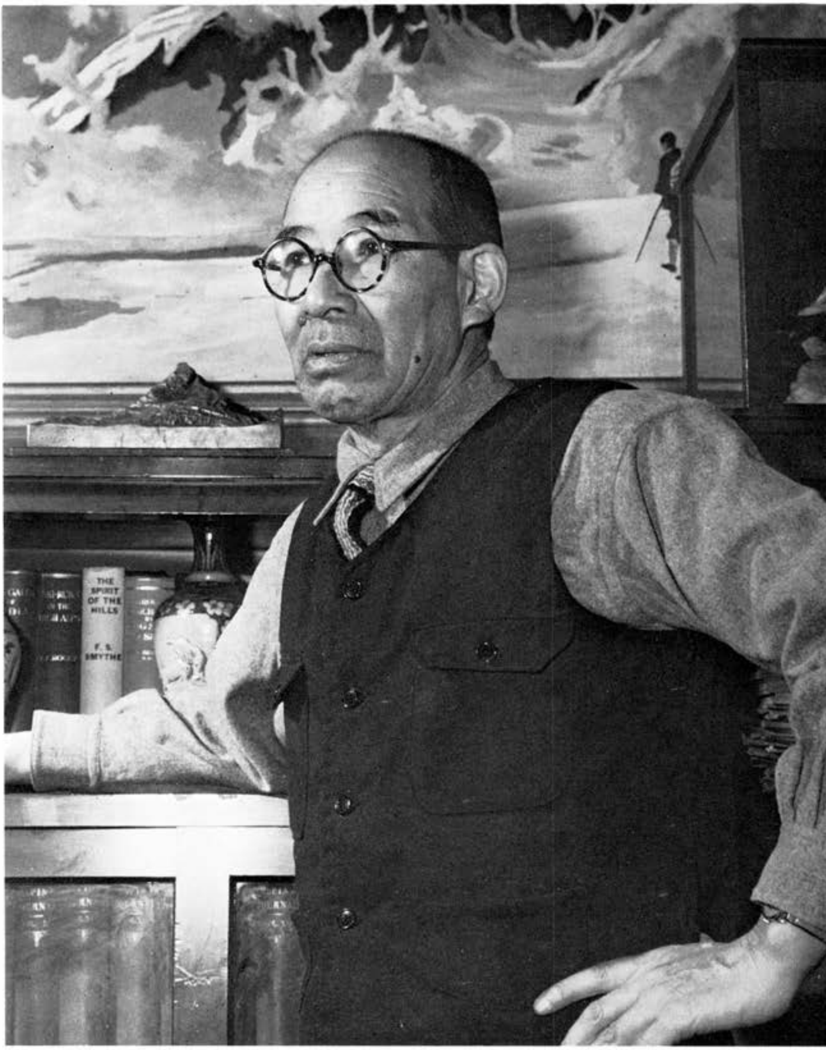
とはいうものの、或は彼の胸中に文学的作品にもペンを取ろうという意慾が、秘められていたかもしれないのだ。
「神様はやりかけの仕事のある人間は決して殺さないものだ」というのが彼の持論であった（『シルクロードの旅』あとがき）のだし、突然の死は本望どころか、まことに不本意な心残りのものであったとしか考えられない。≪浅薄な感傷主義から僕の死を本望だろうなどと、軽く片付けてくれては困るよ≫こんなふうに、あの世で深田君はつぶやいているかもしれぬ。

ＪＡＣとしては、在籍三十六年の古い有力な会員を失ったことは、取りかえしのつかない大きな損失である。深田君の発意に基づく年末の「この一本展」は、これからも毎年つゞけられてゆくだろうが、もうそこには彼の出品も姿も見られなくなってしまったことから、集る人達はまた深田君を想い起すであろう。私の個人的な思い出は、近年の彼の著書のどれを手にしても、行をともにした山旅のいくつかがきっと出てくるし、手許のアルバムをひらけば、必ず彼の姿が現われるといったあんばいなので、こまごまと綴るに忍びない。ただ私はあの屈託のないおおらかな、いつも春風駘蕩といった独特の風格の持主と、山谷を放浪する機会が永遠に失われたことを、淋しくおもうとだけ書いておく。（一九七二年二月記）

（**藤島　敏男**）

略歴

明治三十六年（一九〇三年）三月十一日　石川県大聖寺町（現加賀市）に生まれる。
大正五年四月　県立福井中学に入学、この頃から故郷の山へ登り始める。
大正十五年　第一高等学校文科卒業、東京帝国大学文学部哲学科入学。文学作品の発表が始まる。
昭和五年十月　大学を中退、創作活動に入る。
昭和六年二月　金沢歩兵第七聯隊に幹部候補生として入隊、暮に除隊。
昭和十年六月　日本山岳会入会、会員番号一五八六番、紹介者は額田敏、石原巌。
昭和十九年三月　応召、歩兵小隊長（陸軍少尉）として中国湖南方面に転戦。
昭和二十一年七月　中支から復員、越後湯沢に滞在およそ一年半。
昭和二十二年九月　故郷大聖寺町に転住、およそ三年半滞在。
昭和二十四年十一月　大聖寺町に錦城山岳会をおこす。
昭和二十六年三月　金沢市御歩町に転住。
昭和三十年八月　東京都世田谷区松原町に転住。
昭和三十三年三月～六月　ジュガール・ヒマール探査行。
昭和三十五年四月　日本山岳会評議員、三十七年三月まで。十月「九山々房」成る。
昭和三十八年四月　日本山岳会理事、四十年四月まで。
昭和四十年　『日本百名山』により第十六回読売文学賞受賞。四月ヒマラヤン・クラブ会員となる。
昭和四十一年一月～六月　シルクロード旅行。四月日本山岳会評議員、四十二年三月まで。



名誉会員　藤 木 九 三 氏
Kuzo Fujiki (Hon. Member)
(1887–1970)

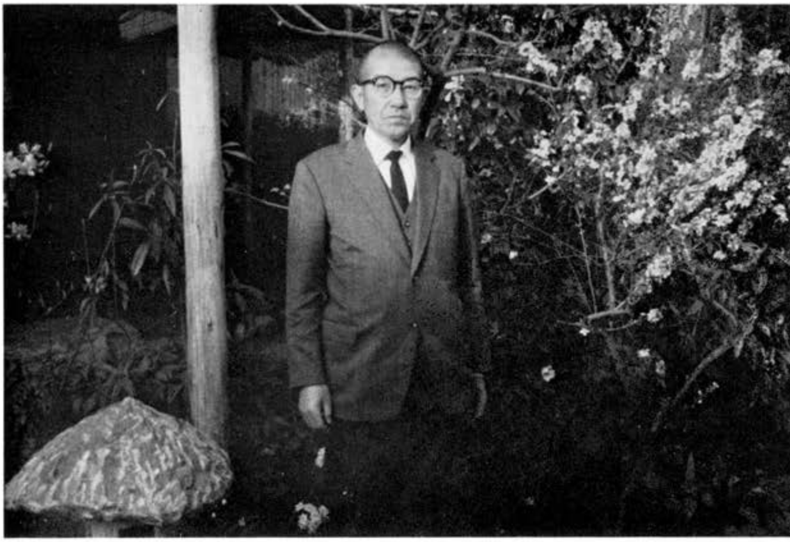
深 田 久 弥 氏
Kyuya Fukata
(1903 1971)

目 黒 四 郎 氏
Shiro Meguro
(1897 1970)

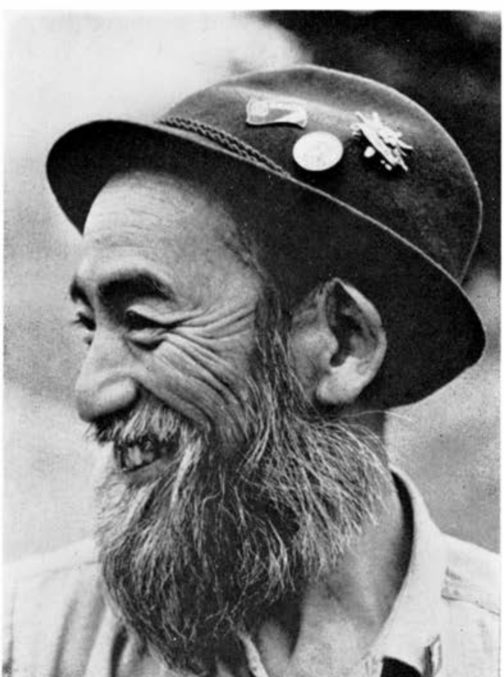
相 内 武千雄氏
Muchio Ainai
(1906－1970)

上　田　哲　農　氏
Tetsuno Ueda
(1911～1970)

品　川　大　海　氏
Daikai Shinagawa
(1897～1971)



広 田 憲 治 氏
Kenji Hirota
(1910–1970)



高 波 吾 策 氏
Gosaku Takanami
(1911–1971)

昭和四十二年四月　日本山岳会理事、四十三年三月まで。六月日本山岳協会海外登山審議委員。七月文部省登山研修所運営委員。
昭和四十三年四月　日本山岳会副会長、七月厚生省国立公園審議会委員。
昭和四十四年十二月　ニュージーランドの山に登る。
昭和四十五年十月　ソ連邦旅行。
昭和四十六年三月二十一日午後一時、山梨県茅ヶ岳の頂上近くで脳卒中のため急逝。享年六十八歳。三月二十三日、杉並区永福町本願寺別院で葬儀。法名「慧岳院釈誉宏」。四月、多年に亘る本邦山岳界への功績に対し、従五位、勲四等旭日小綬章が授与された。七月二日、加賀市大聖寺神明町本光寺に墓が建った。「読み歩き書いた」と刻まれている。
（昭和四十六年十一月刊行の『深田久弥の追憶』所載の略年譜に拠る。編者）

主要著書訳書

わが山山（昭和9・改造社）、山岳展望（昭和12・三省堂）、山の幸（昭和15・青木書店）、山頂山麓（昭和17・青木書店）、山岳紀行（昭和18・新潮文庫）、をちこちの山（昭和27・山と渓谷社）、ヒマラヤ—山と人—（昭和31・中央公論社）、山秀水清（昭和31・朋文堂）、ヒマラヤ登攀史—八千メートルの山々—（昭和32・岩波新書）、エヴェレストへの長い道（シプトンの訳）（昭和32・創元社）、氷河への旅（昭34・朋文堂）、雲の上の道（昭和34・新潮社）、山さまざま（昭和34・東西五月社）、わが愛する山々（昭和36・新潮社）、マチャプチャリ—ヒマラヤで一番美しく峻しい山—（ノイスの訳）（昭和37・文芸春秋新社）、シルクロード（昭和37・角川新書）、山があるから（昭和38・文芸春秋新社）、ヒマラヤの高峰全五巻別巻一（昭和39〜41・雪華社）、日本百名山（昭和39・新潮社）、想い出の山旅（昭和40・角川文庫）、山岳遍歴（昭和42・番町書房）、瀟洒なる自然（昭和42・新潮社）、ヒマラヤ登攀史・第二版（昭和44・岩波新書）、雪白き山（昭和44・二見書房）、シルクロードの旅（昭和46・朝日新聞社）、山頂の憩い（昭和46・新潮社）、ネパール・ヒマラヤ（ティルマンの訳）（昭和46・あかね書房）、中央アジア探検史（昭和46・白水社）
（昭和四十六年十二月の本会年次晩餐会の折り開催された深田久弥著作展の解説書—近藤信行氏作—に拠る。編者）

目黒　四郎氏（一八九七—一九七〇）

目黒四郎君は小学校では一級上で、中学校では同級だった。日本山岳会では相前後して永年会員に推されたから、やはり山を通じての竹馬の友といえる。

明治三十年八月二十五日生れ、東京高等師範学校附属小学校を経て同中学校を終え、早稲田大学商学部に学び、卒業の上、目黒書店主目黒甚七氏の養嗣として同店の経営者となる。戦前、店舗を日本橋から神田駿河台の新ビルに移し、経営の近代化に成功、教科書出版の域を脱し、屈指の出版会社とした。当然のことながら、戦中の出版統制に一役買わされたため、敗戦直後パージされ、社長の地位を長男に譲った。本業の上では不本意な晩年を過すこととなる。

しかしながら、山と洋画の趣味があり、また極めて世話好き

で、同窓会などの世話人となったりして知友に感謝され、若い世代との交際も厚く、情操豊かな私生活を持たれたものと見受ける。

昭和四十三年五月十三日高血圧症を発病、その後、眼底出血をする。昭和四十五年九月一日朝永眠。以上は君子未亡人に確かめて得た目黒君の一生の概要である。

いま第一番に思い出すのは、共に高校生となりたての大正五年夏、初めて長期のややぜいたくなキャンピングを日本アルプスに試みたときのことである。君のほかに、会員の故江木盛雄、三輪梅三郎、高木万五郎の諸君と私の五人連れ。大町から針ノ木峠を越えて五色ヶ原に遊び、立山の一の越に天幕を張り、芦峅寺に降った。一の越で悠々日本海を眺めて暮していると、越中側から登ってきた行者を交えた登山者たちが、物珍らしげに私たちを見守る中に「あんた方はいい身分じゃ、こうしていてお金になるだから」というのがいた。参謀本部の測量隊とまちがえられたのだ。いま思うと、みんなそろって生意気ざかりの大人びた風俗をしていたらしい。

下って室堂に立ち寄ったとき、目黒君は暗い室内の人いきれと悪臭にへきえきして「スメル・ウェル」と大声で二度繰り返して敷居をまたいだ。彼の後年の直情的な行動の兆しは、このような無遠慮なユーモアに表われていたのである。彼とは翌年、会員大島永明さん等と火打山、焼山の草分け的登山（『山岳』第十二年第一号）をしたり、そのほか日本アルプスのあちこちを歩きまわったが、一の越のキャンプは私がキャビネ判の硝子乾板に画像を収めて持っているせいか、最も印象が鮮やかだ。

君が一番盛んに山登りをしたのは早稲田大学在学時代だったと思う。正式に山岳部に属したか否か不明だが、当時、早大山岳部の名を高からしめていた船田三郎さんとの交友は、深かったらしく思える。

目黒君が堅い教科書の枠を出て、最初に企画したのが日本体育叢書（木下東作監修）十五巻であった。ランニング（佐々木等）、ジャンピング（同）、フットボール（同）、相撲（樋渡雋次郎）、スコーアリング（星野龍猪）、ヴァレーボール（川口英明）、バスケットボール（藤山快隆）、水泳（佐藤三郎）、スキーイング（笹川速雄）、テニス（太田芳郎）、登山（田中薫）、どん尻の私の処女作は大正十四年（三版）であった。体育叢書の構想、著者の発掘、特に体育書に山岳を組み入れたのは目黒君の達見と見ていいだろう。

彼の中野の屋敷には諸家の洋画がたくさんあった。彼は中学時代にはわれわれ仲間では少年画家の錚々たるものだったが、目黒書店社長としては洋画のコレクターであった。同郷（新潟県）の安宅安五郎さんと特に親しく、その傑作を何点か彼の家で見かけた。

彼には野尻湖時代があった。戦前のよき時代から戦後へと続

いた。彼の野尻湖の家は私も一度訪ねたことがあるが、舟で岬を廻ってやっと見出される、かくされたような場所にあった。安宅安五郎画伯の画室の隣りを選んで建てたのだという。そこで、子供さんやその友達の若者を大勢集めて、自然教室のような楽しい有意義な夏の生活が、繰りかえされた模様である。家庭料理研究家としての君子夫人の内助の功が、大きかったとも見受ける。

戦後、私人として創めた桐陰堂など一切の出版事業から離れて後は、年二回くらい全国行脚を楽しんで、それが十五年間も続いた。これは夫婦水入らずの旅で、私のうかがい知るところではないが、ときたま会うと「君子には随分せわになったから恩返しのつもりで連れ歩くんだよ」といっていた。

晩年のある時期に、私と仕事の上で意見が合わず、暫く交友がとぎれたことがある。これも要するに、彼があまりにも純真直情のいい人であったから、起きたことだと思っている。

病床を見舞ったとき、私は自分の好みからグレプフルーツを持参した。君子夫人が子供をたしなめるように制止するのもきかず、彼はいつまでも私を離さず、泣かれたのにはどうしていいか困ってしまった。これが別れとなってしまったのである。

（田中　　薫）

田辺　多聞氏（一八九八－一九七〇）

略　　歴

明治三十年（一八九七年）八月二十五日新潟県に生まる。
大正五年九月　日本山岳会入会（会員番号四九〇番）。
昭和四十一年　永年会員。
昭和四十五年（一九七〇年）九月一日逝去。

Cher pays, ne parle plus d'elle;
Nanny ne reviendra jamais!
Leconte de Lisle : "*Poemes Antiques*"

田辺多聞は一九二六年（大正十五年）から敗戦の年、一九四五年まで二十年間、朝鮮に居りましたので、その間に時々帰ることはあっても、山歩きをする暇も、また、山岳会の集りに出たり山友達と語り合うような機会も、ほとんど無かったのでした。『山岳』への追悼文も、どなたにお願いしたらよいか心当りも無く、兄に当る私が個人的な思い出を述べる次第です。弟の日本山岳会入会は一九一八年ですから、第三高等学校（京都）在学中の二十歳の時でした。紹介者は高野鷹蔵氏とその当時会員の父・田辺朔郎で、父は京都帝国大学理工科大学の教授でありました。私は二十五歳の頃、その頃の代表スキー場だった五

色へ弟に誘われて行き、初めてスキーを教えてもらい、続いて次の年にも関温泉に出かけ、先に行っていた弟に迎えられてスキーを楽しみました。これによって雪の山を歩く喜びを知り、その後の山歩きも大てい雪のある時でした。私にとっては正に山の先輩なのです。

朝鮮総督府の鉄道局では、重要な役に就いて居りましたが、日本の敗戦、降服により、総督府も廃止となり、南朝鮮にはアメリカ軍が進駐しました。けれども、弟はみずからその年の十二月末まで朝鮮に残り、鉄道関係の仕事についてアメリカ当局者が引継ぎ易いように十分な処置をとりましたので、アメリカの人たちもその労を多とし、引き揚げに当っても規定以上の便宜を計りたいと申し出たそうですが、弟はそれも辞退して、全く身のまわりの物だけを持って引揚げたのでした。一方、軍人や役人たちの中には、いち早く自分だけが巧みに日本へ逃げ帰って来た者のあった事を、当時の新聞などで読みました。

幸い京都に父の家が残されていましたので、少し先に帰った家族と共に住むことが出来ましたが、この戦争によって、それまでに築きあげた人生の前半は、全く破壊されてしまったのです。京都へ戻ってからも、しばらく職も失った苦しい生活の中でも、自分の事は第二にして、朝鮮で仕事を共にした人たちのために、いろいろ世話などをしたようでした。

京都の父の家では、終戦前年の九月に、戦中病床にあった父が亡くなり、その後、僅か半年の翌年三月始めには、母も風邪がもとで急に父のあとを追いましたので、父母なき淋しい家でした。どんなに淋しい思いをしたか、私にはよく判ります。私も、この父母と別れた時の悲しみと、当時軍部支配下で受けた数々の苦しみ、戦争というものに対する怒りの念は、今もなお心に消えないのです。弟は、この戦後の苦境の中を、明るい気持ちをもって、新しく第二の人生を築きあげようと努力し、いろいろの生き方を考えた後、京都の観光事業、西山ドライヴゥエイの嵐山高雄パークウェイ建設事業にかかりました。私は、父が行なった琵琶湖疎水工事や、北海道の鉄道敷設については「開拓者」事業という印象を受けていましたが、この弟の仕事も、時代も規模も異なってはいますが、何となく父の心が通っているように思われました。そして、このパークウェイも見事に完成しました。

弟は、朝鮮在任中の一九三六〜七年に、会議や視察のために、ヨーロッパへ派遣された時、スイスの山地やいろいろの所で、自然が文化によって損なわれないよう、よく護られていることを強く感じた、と言っておりましたから、それらのドライヴゥエイも自然を傷けず、自然の美しさに人々が近づき易いようにこしらえたのだと思います。この仕事の終った後にも、いろいろ自分でやりたい事があったようでした。父の伝記も、既に詳しいのが出ていましたが、それも自分なりに作りたいと言って

居りました。また、旅行を好み、行った先々の風物の美しかったことなどを語ってくれました。東京へは度々来て、私たちと共に暮すのを楽しみ、僅かなもてなしも心から喜こんで貰えたのです。一九六九年の山岳会の年次晩餐会の日は、丁度上京中でしたので誘って一緒に出席しましたが、永年会員としてメイン・テイブルに招かれ、既知の人たちに会い、また私も新しく幾人かの人を紹介しました。弟はその夜のことを大変喜こび、これからは毎年、年次晩餐会には京都から出て来るのを楽しみにしていたようでした。『山』（会報）二八四号に掲載の「私の山歴」の中にも、永年会員として表彰された喜びと共に、自分の山歴も乏しいけれども、「山というものに対する理解と感激を味わうことになり」、また、それによって「人生を享楽する一つの途」を知ったのも、日本山岳会に入会が出来たからだ、との感謝の言葉が述べてあります。そして、六十一の時、還暦記念のつもりで独り富士山へ登って行き、頂上のまわりを一周して、その「すばらしい天恵の展望」を眺めていた話も、そこに出ております。

昨年の三月や四月末の数日、こちらで共に暮した時にも、私の妻も共に談笑を楽しみ、この人生でまだいろいろの事を習得しようと、何の衰えも私には感じられなかったのです。けれども、その後しばらくして、肝臓の不調を自覚し、医者の勧めによって九月二十二日に京都の第二赤十字病院に入院しました。病院の居心地もよく、自分ではしばらくの間静養のつもりで居るが、年内には退院するだろう、という手紙を貰ったのでしたのに、一ヵ月程経った頃から急に病気も進み、重体との知らせで、妹と共に病院へ着いたのは十一月二十九日の昼でした。そのときは既に意識不明で、その夜の九時半に永遠の別れが来ました。そして、十二月一日に静かな真如堂前にある自宅で葬儀が行なわれました。

父母と別れた時もそうでしたが、自然はそれに接する人の心境によって、その姿も変ります。あの東山の静かな美しい風景も、カサカサに乾いた冷たい非情の姿となって、私の前に現われたのです。それからもう一年になりますが、このなつかしくも淋しい心持ちは、増すとも薄らいでは来ません。総て生あるものやがては滅する、と申します。確かにその通りです。ただ、私の心の中では決して滅しないのです。それは一体何によって慰められるのでしょうか。好意ある人々からの慰めの言葉、また古くからある美しい牧歌調哀歌などによっても、何となく私は心も潤されはします。あのルコント・ドゥ・リールの「古代詩集」の中の、ナニーの死を悲しむ詩の終りにある「四方の風物よ、ナニーのことを語る勿れ」という言葉を初めに掲げましたけれども、やがていつか、春、夏、秋、冬と美しく姿の変る自然の中を、岡や山を越えて遥か遠くへ行った亡き人を求めて、さまよい再会の喜びの与えられる日も来ることを想い、私

も慰められるのです。（一九七一年十一月）

略　歴

明治三十一年（一八九八年）二月十一日　父・朔郎、母・静子の三男として札幌に生まれる。

大正三年　長男・秀雄死去により父・朔郎の後継者となる（次男・主計は先に他家へ養子に行く）。

大正七年　日本山岳会入会（会員番号六二五）。その頃は主に北アルプスに登る。

大正十三年　東京帝国大学法学部卒業（先に工学部卒業）。

昭和元年　朝鮮総督府鉄道局赴任。

昭和二十年十二月末朝鮮を引き揚げ、以後京都に在住――京都に於いて西山ドライヴウェイの嵐山高雄パークウェイを完成。

昭和四十三年　日本山岳会永年会員となる。

昭和四十五年（一九七〇年）十一月二十九日　京都第二赤十字病院にて死去（享年七十二歳）。

（田辺　主計）

相内武千雄氏（一九〇六―一九七〇）

相内君は少年時代、あまり丈夫でなく神経質な少年だったようだが、小学二年生の夏休みごろから発電工事の技術者であった父君に連れられ、天龍川そのほかの調査の山旅にしばしば同行した。そうして丈夫になるとともに、山の美しさにとらえられ、やがて一人歩きをよろこぶようになった。

大正九年、彼が慶応普通部（中学）三年のとき、教えを受けた松本信広先生（後に慶応義塾文学部教授、山岳部長）の影響で氷川の奥、大嶽山とか小仏、扇山、武甲山、日光裏山、天城山などにさかんに一人歩きをし、同時に大学山岳部に出はいりするようになった。

相内君が山岳部で部員としてはじめて参加したのは、大正十三年の夏、南の農鳥、間、北岳から聖岳まで縦走して遠山川を下るという、当時としては記録的な山行であった。

私もこれに同行したが、細身の彼が三〇余キロのリュックをかつぎ、すこしも弱音をはかないのには驚かされた。

そのとき、二回も荒天に出あい、光岳から大井川へ下る予定を断念した埋め合せにと、昨夏、井川から上河内、茶臼を目指した。よっぽど彼を誘おうと思いながら、一人で出かけてしまい、横窪沢小舎に泊ったその夜、彼は東京で脳出血で倒れ、それが永の別れとなってしまった。

さきにも記したように、彼は若いころ単独行を愛し、ゲオルク・ウィンクラー（Georg Winkler）やウィリー・リハルド（Willy Richardet）に私淑した。

厳冬のひと気なき明神岳や西穂へ一人登り、あるときは明神

のギャップからステップを踏みはずして真逆様に転落、ピッケルのおかげで危うく一命を助かったこともある。

そのころ（昭和二、三年）、彼はよく秩父や尾瀬方面へも出かけているが、折りふし書き留めた手帳の一節には次のような記述が見られる。

十一月九日（雨）

小出より大湯に至り東栄館に止宿す。この辺秋色今最も盛なり。今は芋川まで自動車あり。小出、川善宿泊料一円五十銭、別に茶代五十銭。

宿にてちょうど尾瀬の長蔵君泊りいて、我が部屋に来りて談ず。

この度、尾瀬より平ヶ嶽、兎、中岳を経て大湯に通ずる道を拓くために、この宿の主人と相談に来れるなりと。長蔵君の曰く、尾瀬の風光のために一生を捧ぐるなりと。

＊　＊

昼　アンニンゴ、シソ、馬鈴薯の精進揚、大根と里芋の味噌汁、菊のおひたし、大根の漬物（アンニンゴは美味なり）

夜　大根と里芋の味噌汁、づっきの酸のもの及び茶碗むし。

＊　＊

沢木、板垣、山本、早川の四氏宛通信……

相内君は、昨年（昭和四十五年）八月、慶応義塾工学部教授として亡くなったのであるが、昭和二十一年から十余年間、敗戦直後の困難な時期に山岳部長として地味な努力をかさね、富士五合目天幕行、関、発哺のスキー合宿などにはほとんど毎回率先して参加し、持ち前の微笑を浮べながら若い世代を育成された。それらのなかからマナスル、ヒマルチュリ、バウダ、エベレストなどに、輝やかしい足跡を印したものが輩出したことを忘れてはならない。

君の遺骨は、昨年郷里青森県三戸郡南部町相内の清光寺に葬られたが、今年九月永年住いされた鵠沼からほど遠からぬ、緑濃い鎌倉（霊園）の丘に分骨埋葬された。

略　歴

明治三十九年（一九〇六年）二月十日　青森県三戸郡南部町相内に生まれる。

昭和三年三月　慶応義塾大学文学部卒業、同大学文学部助手。

昭和七年九月　同大学予科教員。

昭和十二年三月　日本山岳会入会（会員番号一七〇三）。

昭和二十一年四月　同大学体育会山岳部長。

昭和二十三年四月　同塾内対抗競技部長。

昭和二十四年四月　同大学工学部教授。

昭和三十六年十月　慶応義塾派遣海外留学生として専攻の美術史研究のためイタリー、ギリシャ、ドイツ等へ。

昭和四十五年（一九七〇年）八月二十五日　国立横浜病院で逝去、享年六十四歳。

（今岡　義夫）

上田　哲農氏（一九一一—一九七〇）

上田哲農（本名徹雄）君は、すぐれた山男だった。昭和三年十七歳で山登りをはじめ、昭和四十四年のパミール登山を最後として歿した。昭和五年末に佐藤野里路や故小野崎良三たちと共に日本登高会をつくり、私が昭和八年同会に入会した頃は、会の若手の中心人物の感があった。

明るい声と太い眉、大きな目が示すように、打てばひびく気性で誰からも愛され、彼の周囲には、いつも活気と和気があった。だから彼の愛称は、徹サンであり徹チャンであり徹ツァンであった。

昭和四十六年五月の水彩連盟会報『水脈』は彼の追悼号で、後掲の画歴略年譜がある。

昭和八年文化学院美術部卆業、画家としてのスタートを切った。年齢は私より下だが結婚は彼が先輩で、昭和十一年二月同じ日本登高会員の女性（現在の偲乃婦夫人）と結婚した。お二人の結びつきを、白水社社長草野貞之さんは或る山の雑誌に、

「その山男こそは、いわばスキーにきて稀れな良質のひすいをさがし当てた仕合わせ者とでも申すべきか」

と書いて祝福された。彼の画業の発展も、二度のソ連登山も、この夫人の蔭の力なくしては出来なかったであろう。彼が病院で亡くなった時、自宅には彼の母上（九十歳）が脳軟化症で臥床中で、夫人は彼の死を母上に隠すことに苦心され、更に母上の最後までよく看護された。この「良質のひすい」の入会紹介者が私であることは、偶然ながら私が為し得た彼への唯一の贈りものであった。

『日翳の山ひなたの山』は画もみごとで、詩情あふれた好著である。彼はその本に「君に助けられたことがある　ぼくの心を山で」と書いてよこした。実は私が逆に助けられた？　ことがあった。昭和十一年一月、桑田英次、山本忠誉、私の三菱パーティで八ヶ岳の赤岳に登ったとき、スキーデポの沢を間違えてスキーなし明りなしで行者小屋（無人）に下り、月の出を待って出かけると、赤岳鉱泉に同宿した彼のパーティが迎えにきてくれた。

彼は時間に拘束されないから行動が速かった。一月に東北朝日岳で仲間が遭難した時など、電報一本で北海道から現地へ転行した。そうかと思うと、パーティ全員が汽車で発ったのに、待合室で待ちぼけをして、次の汽車にビール一本抱えて乗りこんだこともある。

昭和十五年某日、私は山と渓谷社の川崎吉蔵君から「山渓の表紙に写真が続いたから、画に変えたいが適当な人はないか」との相談を受けた。私は即座に上田哲農、生沢朗の両君を紹介

した（その翌年の表紙に両君の画が登場している）。

このあと『山と高原』毎月号の表紙を描き、最近『岳人』毎月の扉への執筆と続いていた。その頃の彼の画を、私のようなしろうとが見ると、山の深さや量感を出そうとするあまり、筆に力が入り過ぎるように感じられた。ところが日展特選となった「街」を見たとき、従来の山の画にない明るく静かなタッチに一驚させられた。「これは今まで潜在していた才能が、爆発的に吹き上げたようなものであったが、結局は天質に加えて、不断の努力が実を結んだといえよう」（『水脈』荒谷直之介氏）。

彼の自筆による登山譜は戦前で終っているが、結婚後の殆んどが夫人同伴で、仲睦じさを見せている。その中に滝谷第二、第三尾根や北尾根、八海山水無川、利根水源、王滝川の各遡行などが目立つ。

著書『山とある日』に、昭和三十八年三月只見の笠倉山（九九七メートルの岩峰）へ登った紀行がある。登る前に彼は私に言った。「この山は俺が登るから、絶対に君が先に登るな」と。彼が五十歳を過ぎて、再び岩登りをやり出したのに私たちはびっくりしたが、その結果が五十六歳のカフカズ登山、五十八歳のパミール登山の各隊長であった。

この次彼がその方面へ出かける時は、逍遥の案内ぐらいはして貰う話を交わしたが、空しくなった。画の方は今や押しも押されもせぬ地位を占め、日展審査員になったのに実に惜しい。

彼は激しい山登りが好きな人に似ず、はにかみ屋でもあった。画にも文にも童心が滲じんでいる。ダンスが得意で、タンゴの何かタイトルを持っているというから、はにかみ屋は私の思いすごしで、文化学院美術部卆だから当然だったかも知れない。

略　年　譜（『水脈』より抽出）

明治四十四年（一九一一年）八月二十一日　天津に生まれる。
昭和二十一年（三五歳）　水彩連盟展受賞、会員。
昭和二十五年（三九歳）　一水会受賞。
昭和二十六年（四〇歳）　日展特選受賞、一水会員。
昭和二十七年（四一歳）　日展無鑑査、以後毎年委嘱出品、一水会々員優賞受賞。
昭和二十八年（四二歳）　巴里サロンドラールリーブル展出品。
昭和三　十　年（四四歳）　国立近代美術館「日本アメリカ水彩展」依頼出品。
昭和三十二年（四六歳）　国立近代美術館「アメリカ巡回水彩展」委嘱出品。
昭和三十三年（四七歳）　『日翳の山ひなたの山』出版。
昭和三十八年（五二歳）　日展審査員。
昭和三十九年（五三歳）　日展会員。
昭和四十二年（五六歳）　『山とある日』出版。
昭和四十三年（五七歳）　一水会委員、近代美術館「近代日本の水彩とデッサン展」依頼出品、『たのしい造形水彩画』出版。
昭和四十四年（五八歳）　改組第一回日展審査員、『上田哲農水彩教室』出版。
昭和四十五年（一九七〇年・五九歳）　十一月三十日死去。

登山譜

昭和三年（一七歳） 黒平—増富。大山。大岳山。白馬岳祖母谷。塔ケ岳。三ッ峠—本社ケ丸。野沢スキー。

昭和四年 馬頭刈尾根。大菩薩—黒岳。麻生山—権現山。大蔵高丸—滝子山—甘利山。生藤山—陣場山。黒部—立山—劔—針ノ木。焼岳—徳本越え。妙義縦走。大菩薩—佐野峠。

昭和五年 野沢妙高スキー。大岳山（二回）。石割山—鹿留山。麻生山—扇山。大峠—雁ケ腹摺山。山伏峠—御正体山。立山—槍縦走。ジャンダルム—槍北鎌尾根。一ノ倉沢。

昭和六年 沼尻スキー二回。西黒沢スキー二回。後立山縦走。三ッ峠岩登り。谷川岳本谷遡行。谷川岳縦走。常念岳。刈寄山。景信山—陣場山。八ケ岳縦走。宝川—朝日岳—清水峠。武尊山。馬頭刈高黒岩。鹿島槍。五色スキー。

昭和七年 沼尻合宿。谷川岳。岩原（三回）。白馬岳。川乗山。三ッ峠岩登り（四回）。柳沢峠—甲武信岳。高黒岩。オジカ沢。穂高生活。幽ノ沢。横尾岩小舎—穂高。富士山。細野生活。

昭和八年 鹿島生活。横尾岩小屋—前穂。棒立。徳本峠—西穂。一ノ倉岳。芝倉沢。横尾—南岳。三ッ峠岩登り（二回）。唐松岳—白馬岳。涸沢生活。甲斐駒—鋸岳。槍ケ岳。富士山。細野合宿。

昭和九年 谷川岳。山王峠—光徳。谷川岳。富士山。西穂高。川乗山。杓子岳東稜。白馬岳主稜。五竜岳—白岳。山清路—差切峡。一ノ倉沢。小谷温泉。三ッ峠。涸沢。中尾—槍。大峠—源次郎岳。大岳山。富士山。苗場神楽峰。乗鞍岳。

昭和十年 細野合宿。白馬岳。景鶴山。中ノ岳—荒沢岳—大水上山—兎岳。神津牧場。劔岳生活。田中—御岳—平湯—上高地。劔岳生活。田中—御岳—平湯—上高地。劔岳生活。大喰岳—殺生小屋。白馬岳。

昭和十一年 八ケ岳。土樽。志賀高原。菅平。芝倉沢—茂倉岳。川古温泉仏岩。鹿沢。赤城山。上高地。尾瀬—日光。美ケ原。湯ノ小屋。五色。蔵王。

昭和十二年 渋峠越え。赤城。鹿沢外廓尾根。小谷温泉。谷川温泉。八方尾根。鹿沢（二回）。滝谷尾根。飛騨尾根。馬頭刈。海沢。神楽峠。武能小屋。

昭和十三年 蔵王地蔵岳。乗鞍。鳥海。杓子岳東稜—白馬岳。八海山水無川。利根水源遡行。赤谷川遡行。蓼科山—大河原峠。西沢—国師岳。野辺山原。

昭和十四年 蔵王。野沢。菅平—須坂。熊ノ湯—竜王コース。細野合宿。マチガ沢天幕生活。涸沢生活。越沢—御岳。北海道生活。

昭和十五年 ニセコ—十勝—手稲。東北朝日岳捜索。志賀高原。細野—唐松岳。木曽御岳王滝川。外房。京都。

その後、戦災、令嬢美瑛さん死去等で山行数減る。一九五八年設立の第二次R・C・C代表となり、

昭和四十一年 カフカズの山、ディフタウ。コイ・セフェ。リアリウェルほか諸峰の隊長。ソ連辺境地区旅行。

昭和四十四年（一九六九年） パミール登山の隊長。中央アジア旅行。

日本山岳会入会 一九四三（昭和十八）年（復活一九六四年）、会員番号二一二二（紹介者は茨木猪之吉、長島重二郎の両氏）。

（川崎 精雄）

品川　大海氏（一八九七—一九七一）

ふまれなよ　石楠花　ここに　花もてり　大海

本名品川信晴の句碑が、今は外国になって、寒風と荒海に囲まれた北千島の孤島に残されているという。

品川氏の日本山岳会入会は、越後支部では早い一四七番、昭和二十三年のことである。そのころ私はよく札幌へ行ったが、函館から僅かに引込んだ七重浜まで訪ねるのが億劫で、そのうちと思いながらついに面接の機会もなく亡くなられた。氏との文通のうちに「越後支部は年々発展して全県下に会員がいるが、わが故郷刈羽郡には一人も居ないではないか」と指摘されたが、事実今でも穴になって残されている。このような次第で、氏の追悼を書くにしても、入会申込書の山歴と晩年の若干の私信だけしか頼るものがない。そこで、未亡人品川弥栄さんに夫を語っていただき、大正、昭和にかけて日本北端の未開の島や半島に資源を探し、島や半島の海抜二〇〇〇メートルを越す活火山に文字通り探検登山をしていった姿をしのびたいと思う。

夫は新潟県柏崎市下大新田産、明治三十年三月四日生、高小卆後上京、苦学して東京府立工業学校卆業。昭和二年小樽市で結婚。夫は若いころから山が好きで、郷里の米山を始め、全国の山々のほとんどを登ったような話をよく聞きました。日魯漁業に勤めてから、毎年春先よりカムチャッカへ、後には北千島へ行って、夏の間は在宅いたしません。日ごろ筆不精の方で、日誌も原稿も残してありませんが、樺太は石油資源調査、北千島・カムチャッカは鮭・鱒罐詰の製造のためであります。北千島では昭和十五年に初めて水力発電所を起工して、翌十六年に竣工させたのが自慢話のようでした。熊の出没する山中を歩き廻り、北千島水産会社の真藤社長を説きふせて施工したのであります。その近くでしょうか、柏原硫黄山頂の温泉湖の写真と共に残っております。

若い頃久原砿業に勤めていまして、北樺太の石油資源開発に行き、オハで有名な尼港事件のパルチザンに襲われて、命からがら小樽へ逃げ帰った話も聞きました。

昔から苦楽を共にされたお友達はみな亡くなられまして『奪われた北千島とその漁業史』の著者、今田正美さんが元会社の同僚としておられます。趣味の俳句は沢山作ったのですが、その内に「秋晴れや　はるかに見える　ソ連峰」「ゆく春や　職去れば訪う人もなし」があります。俳句のお仲間は白井直峰さん「春の雪　葬り道の足重し」、山田大雪槍さん「惜しまるる大樹倒れし余寒かな」と追悼句を霊前によんで下さいました。

三十八年頃から持病の慢性腰痛のため歩くに不自由となり、杖を曳くようになり、山峡の温泉に浴したり、登山は不可能なので交通利便の観光地めぐりでもすることと、机上登山が唯一の楽しみだと『山岳』、『会報』を丁寧に読んでおりました。

（品川弥栄さんの手紙から）

信念院釋覚圓　昭和四十六年二月十四日逝去。

主な山歴

明治四十年（一九〇七年）　米山。
大正　二　年　蓮華温泉―白馬岳―大町―松本。
大正　七　年　北樺太東海岸石油地質調査。
大正　九　年　北樺太オハで尼港事件の生存者。
大正十四年　大雪火山群。
大正十五年　カムチャッカ・チンスキー（三七〇〇メートル）登頂。
昭和　二　年　カムチャッカ西海岸北部地方。
昭和　六　年　カムチャッカ東海岸クリューチェフスカヤ（四八〇五メートル）七合目まで。
昭和　八　年　北千島占守島アライト山（一二三〇メートル）登頂。
昭和十八年　黒田夫妻と北千島北部連峰踏査。
昭和十九年　中千島海岸。
昭和二十年　北千島にて抑留さる。
昭和二十二年　十一月函館に帰る。
昭和二十三年十月　日本山岳会入会（会員番号二九六九）

（藤島　玄）

十亀　太郎氏（一九〇七―一九六九）

十亀太郎氏と山を語ることは愛媛山岳界を語ることであり、愛媛山岳界の黎明期が偲ばれる。

故人が愛情を傾けて、ひたすらに守って来た四国山脈は、森林資源と観光産業の開発によって、大きな傷跡を残されようとしている。共に語り、陳情して来た友は昭和四十四年十一月二十六日午後一時十五分、松山市の愛媛県立中央病院で逝去された。享年六十二歳であった。

告別式は故人の勤務しておられた西条市役所、山岳人、スキークラブの大勢の人達によって盛大に行なわれ、故人の熱愛した笹ヶ峰を望む丘の上に永遠に眠られた。そして遺言により石鎚山、瓶ヶ森、笹ヶ峰山頂から岳友の手によって分骨の風葬が行なわれた。

昭和二十五年以来、県岳連副会長として私の補佐役を努めて頂き、四十三年五月の愛媛スポーツ祭で、山うどをザックに沢山採って二人で歩いたのが、私との最後の山行であった。

故人の令息で愛媛のスキー界に活躍している茂樹君に、往年のアルバムを借用したので、私の『愛媛山岳史』の中から抜粋したものとにより、故人の山に対する情熱を偲びたい。

ていた。

十亀氏は昭和二年西条中学生の頃、瓶ヶ森、笹ヶ峰へ登山している。また、昭和三年八月西条中学のOBとして生徒四名とともに、松山高等学校に残したシラザ峠より土小屋に至る間の初縦走に成功している。昭和五年三月指導書を頼りに、鍛冶屋でピッケル、アイゼンを作らせて、岳友一名と積雪期の石鎚山登頂を試みたが、三の鎖下で荷物も重く登頂を断念している。けれども積雪期の石鎚山に挑んだのは、この二人が初めであろう。昭和六年一月には八名のパーティと人夫二名雇って、遂に石鎚山冬期初登頂に成功している。昭和六年一月二十四日、岳友三名と人夫二名を連れて、笹ヶ峰の冬期初登攀を行なっている。昭和八年四月、岳友二人と石鎚北面で最もおそくまで残雪のある雪瀑谷の初登攀に成功している。昭和十年十一月、高橋要と二人で天狗嶽北壁の初登攀に成功した。

その後石鎚山岳会を結成し、戦後昭和二十四年愛媛山の会が県体育協会に加盟し、翌二十五年県山岳連盟を結成、昭和二十八年十月開催された第八回国体登山では西条市にあって尽力して頂き、石鎚山系の大会を無事終了することが出来た。翌二十九年第九回国体北海道大会にはサブリーダーとして参加した。

昭和三十九年十月、県山岳界に尽した功績により、県体育協会長より体育功労者として表彰された。

故人の晩年は、石鎚山系や赤石山系の高山植物の写真撮影に興味を持ち、すばらしいカラー写真のアルバムを見せてもらった。当今、資源の開発と自然の調和の問題が論議されている折、十亀氏を失ったことは誠に残念である。故人への追悼は数限りなく、尽きるところがないが、こゝに業績の一端を記し、功績をたゝえ御冥福を祈る。

略　　歴

明治四十年（一九〇七年）十月十三日生まれ。
昭和二十四年十月　日本山岳会入会（会員番号三六九五番）。
昭和二十五年　愛媛県山岳連盟副会長になる。
昭和四十四年（一九六九年）十一月二十六日逝去。

（松長　晴利）

広田　憲治氏（一九一〇―一九七〇）

広田憲治君は明治四十三年（一九一〇年）富山県下新川郡に出生した。農家の出身で、地元の魚津中学を卒業すると上京して日本大学予科理科に入学した。

広田君の登行は中学在学中から始まっているけれども、それが旺盛をきわめたのは、予科入学の翌年である昭和五年の秋頃から六年ほどの期間であった。

彼が日大山岳部に入部当時のチーフ・リーダーは初見一雄君

で、当初は同君から穂高の冬期登山を十分に教え込まれており、後には土肥信義等の協力を得て、有能な、しかも立派な素質をもった、当時としては未だ何名もいなかった積雪期登山のリーダーとして成長していった。

今から思えば四十年前のことだが、当時すでに上高地は俗化し始め、積雪期の槍や穂高にさえその兆候が現われ始め、入山するパーティもとみに増加した。

俗化を嫌った学生登山者の一群は北上して、剱岳へとその根拠地を移動し始めたが、広田君もその一人であった。

昭和六・七年以降、劔岳方面に入山された古い登山者は多分、広田君とは直接に面識を持たないにしても、彼の名前を御存知の方が多いことと思う。

それは当時広田君が劔岳およびその周辺地区の地形ならびに諸々の事情に通暁し、その頑強な体力と脚力と馬力は、まさにガイド・ボッカ並みであり、さらに彼の性質が素朴であり、世話ずき、おひと好しで、風ぼうは田舎者、且つは富山出身の故もあって語る言葉に至っては越中弁まる出しで、彼ほど芦峅寺や劔のボッカ、山案内人、さらに小屋番達に親しまれ、畏敬された登山者はまことに尠ないであろう。

むしろ無口で内向的な広田君の存在が、当時、劔岳の土地で逆に顕著になって行ったのは、こうした山に働く人達の共感を得て、彼等の口伝えに依ったものと思われる。

当時の学生登山者を強いて二つに分類すると、アカデミックで恰好いいグループと、そうでない地味なものとになるが、広田君は勿論後者で、或るものは彼の登山をボッカ登山と呼んだことがある。

広田君にとって最も記憶に残った登行の一つは劔岳池の谷の初登行だと思う。

私はその前年―昭和八年八月、広田君に連れられて、白萩川の岩屋から池の谷へ行ったことがある。谷の中央にはスノー・ブリッジが大きく残り、その両側は垂直に近い壁面になっており、シュルンドは黒々として無気味に切れ込んでいた。絶えまなく落石し、その数個は私達をかすめてとんでいったが、切り立った頭上の岩壁には数百の岩燕が飛びかい、群がっていた。直登は不可能で、草つきを右にまいて登頂した。彼は翌年、再び鈴木克己（旧姓渡辺）君を連れて四月九日、雪崩の落ちついた一時期を選んで池の谷の直登に成功した。

彼のお人好しと律義な性格を示す挿話も付け加えなければならない。昭和十年二月、紀元節の横手山スキー行で、部員浅倉栄太郎君が遭難し行方不明になった時、広田君は丁度卆業試験の最中であったが、躊躇なく捜索に出発したため、土木学科の卆業を一年延期することになった。

昭和十一年三月卆業以後終戦まで、数年間の北支出征を含めて、彼の登行は低調であった。

戦後においても、三人の娘を持った父親として、生活第一義に徹せざるを得ず、家族に対する責任に押しひしがれてしまった。山への愛情を人一倍燃やしながらも、登行のない山岳部OBとして過ごした。

昭和四十五年七月十五日、多摩丘陵の林中で自ら生命を断ったけれど、おそらく彼は心安らかに自然に還ったことであろう。

――今日からは　山の中にある――

略　歴

明治四十三年（一九一〇年）五月十五日富山県下新川郡に生まれる。
昭和四年 四 月　日本大学予科入学、同時に山岳部入部。
昭和七年 四 月　日本大学工学部土木工学科入学。
昭和十一年三月　同学同学部同学科卆業。
昭和十一年四月　佐藤工業入社。
昭和十二年十月　召集、
昭和十五年九月　召集解除、復職。
昭和二十三年三月　丸石工業（株）入社。
昭和三十年　日本山岳会入会（会員番号四四一七番）。
昭和三十八年八月　同社土木部長就任。
昭和四十五年（一九七〇年）七月十五日死去。
（注）十年程前に賢治を憲治と改名。

（戸村　貞男）

高波　吾策氏（一九一一―一九七一）

空　高山院吾策良道居士位　昭和四十六年三月四日、午後八時四十五分、長岡市柏町神谷病院にて、肸臓壊死により忽然と逝去した〝鬚さん〟こと、高波吾策氏の戒名である。

高波氏は〝谷川岳の鬚さん〟として知られ、小柄な体躯と、ユーモラスな童顔をほころばせ、天衣無縫の鬚の親父として、多くの登山者に親しまれ、谷川岳越後側の開拓にその生涯をかけた山男である。氏は昭和十五年に志をたて、谷川岳越後側の土樽に居を構えてから三十年間、輝子夫人と共に谷川岳をこよなく愛しつづけ、谷川岳とともに生きた人である。著書『魔の山に生きる』、『谷川岳鬚の大将』がある。したがって彼の半生の詳細はそれによっていただくとして省略するが、安全な谷川岳登山の促進のために展開した足跡は大きく、自ら鉈をとり、私財をたたいて、蓬峠の改修を始め、茂倉新道・吾策新道・平標新道・谷川新道万太郎コースと、異常なまでの執念をもって次々と伐開していった。

さらに、指導標・釣橋・避難小屋など、登山施設の建設、整備をすすめ、相つづく遭難事故者の救出に私設遭難救助隊を創設し、パトロールの強化に努め、遭難事故があれば、自ら飛び出して救助に当り、助けられた岳人は数百人にも及んでいる。

安全登山の功労者として、総理大臣表彰を受領したのは昭和四十年である。生来の楽天家であって大の酒好き、行く先には必ずコップ酒があり、飲めば飲むほどに陽気になる。山男に似合わぬ唄の名人で、お光・吾作の佐渡情話は十八番であった。やがて拝啓かあちゃんと電話するおきまりコースの酒で、大恐妻家でもあって、そこにいろいろと逸話も多かった。

しかし、こと登山者の指導となると厳しかった。特に山の遭難事故の原因は登山者自身にあるときめつけ、「山を志す者は山に工夫せよ」と、常にその心構えを強調し、山のルールの違反者には、たとえ自分の経営する「国鉄山の家」の客であっても容赦なく叱る気丈な一面の持主であった。また、高波流の山で磨いた山岳スキーの達人で、土樽スキー場での名指導を受けた人は余りにも多い。その鬚さんが「今息を引きとりました」と輝子夫人から電話を受けたときは、全く信じられずに病院へ駆けつけ、眠るように大往生の鬚さんをみて、三十年の先輩に一気に投げ捨てられたようであった。

この誌上をかりて、当時の様子を記して冥福を祈りたい。

昭和四十六年三月七〜八日にかけて、新潟県山岳協会主催の第二回冬山遭難救助訓練講習会が越後湯沢町で開催され、宿舎、会場の準備一切を高波氏が担当した。役場をはじめ関係機関との交渉に、逝去の二日前まで飛び廻り、毎日のように電話連絡をくれた鬚さんが突然入院し、手術用の輸血の要請を受けたのが四日の夕方だった。輝子夫人の電話を受けたのは、輸血メンバーの選定をして、明朝見舞に出向く予定でいたやさきのことであった。会員に緊急連絡をとって、病院へ駆けつけた。聞けば、三日に水上温泉の知人宅で痛飲、夜半より腹痛で苦しんだ。四日、夫人が上京中のため次男の隆男氏に付添われて、汽車で長岡の病院へ入院した。医師は、この病態でよくも診察室へ歩いて入って来られた、と気丈な山男に感心したとのことである。東京から駆けつけた輝子夫人にみとられての大往生は、不幸中の幸であった。

病院長がスキー仲間で、何かと便宜を計り、向かいの東泉閣主人の心づくしの生花も飾られ、知らせで集まった長岡ハイキングクラブ員だけの悲しみのお通夜となった。この年の二月は、越後の冬には珍しく、全く雪のない春日和がつづいたが、この夜半から吹雪に変り、ことに雪深い魚沼地方へ向けて遺体を運ぶのは、相当な困難が予想される状態になった。長岡で密葬の話も出たが、三十年来、谷川岳と共に生きぬいた〝鬚さん〟を、われわれ山仲間の力で、なんとか一晩でも土樽の山の家に寝かせてやりたい、ということになった。

夜半より自動車、橇の手配を始め、人員その他の輸送体制を整え、五日、六時に出発した。折からの猛吹雪で国道十七号線は事故車続出である。時々方向を失い、道路の側壁に突込みながら、普通の三倍以上もかかって、十時すぎにようやく湯沢町に到着した。役場へ死亡届をしても、職員は一笑して全く信用しない。そのはず二日前まで役場へきて、元気に会場準備していた〝鬚さん〟である。死亡診断書を示すと、庁内は大騒ぎとなった。ともあれ〝鬚さん〟のこった、何んでもやりましょ

う、と役場から早速雪上車二台を借用、地元山岳会員の協力を得て、中里駅前から雪上車に乗換えて山の家へ急いだ。

自ら陣頭に立ち、何十回となく山の遭難者の遺体を運んだ〝鬚さん〟が、町で倒れて山へ山男に運ばれる。運命は皮肉である。吹雪で全く道形のない雪原を、急坂に乗り上げ、雪庇を乗っ越し、全員雪だるまになって悪戦苦闘のすえ、毛渡沢まできた。これより先は、この偉力絶大なる雪上車も通過不能となった。スノーボートに遺体を乗せ換え、胸までのラッセルで二時間。ほんの目と鼻の先にある土樽山の家にやっとのことで運びこんだ。急を聞き駆けつけた国鉄関係、親戚、山男で通夜が営まれ、慌しい葬式の手順が組みたてられた。

六日、吹雪は依然として吹き荒れ、山の家の屋根まで埋まった。再び山男の手で遺体は湯沢町へ運ばれ、密葬が行なわれた。

八日、折からの豪雪に上越線は寸断された。乗り継ぎ、乗り換えて集まった各界の参列者三百余名と、第二回冬山遭難救助訓練講習会の受講者二百名の参列の中で、湯沢町中央公民館での高波吾策氏告別式が行なわれた。壇上のチロル帽子ににこやかな〝鬚さん〟の写真に合掌して、その冥福を祈った。

〝鬚さん〟の逝去の夜半から吹き荒れた雪は、九日から嘘のように止んだ。人呼んで「鬚荒し」と。死してなお自然の厳しさを現実に教えてくれた天候であった。いつまでも、この吹雪の思い出と〝鬚さん〟の死は、皆んなの記憶に残る三月である。

その心雪山にあるか吾策荒れ　式場の屋根の雪崩ぞしきり

玄山人

略歴

明治四十四年（一九一一年）九月二十日　新潟県中魚沼郡津南町中郷寺石に生まれる。旧制高田中学校卆、東京外語夜間部貿易科中退。

昭和　九　年　中島飛行機入社、山岳部で活躍。

昭和　十五　年　谷川岳越後側登山口管理人。

昭和二十五年　国鉄山の家の管理人、自然公園指導員、全日本山岳連盟評議員

昭和二十六年（一九五一年）八月　日本山岳会入会、会員番号　三九〇四。

昭和二十七年　鉄道八十周年功労者国鉄総裁表彰。

昭和三十四年　新潟日報社文化賞受賞。

昭和三十九年　国立公園適正利用尽力、厚生大臣賞受賞。

昭和　四十　年　安全登山に尽力、総理大臣賞受賞。

昭和四十四年　谷川岳遭難救助協力感謝状（新潟県警本部長）受賞。

昭和四十六年（一九七一年）三月四日　長岡市にて逝去。勲六等単光旭日章授与。

（室賀　輝男）

エベレストで急逝した成田潔思氏の追悼文は、遺憾ながら本号の締切りに間に合わなかったので、次号に掲載の予定である―編者。

図書紹介

明治の山旅

武田久吉著　A5判函入　本文二七六ページ　写真別丁六ページほか多数　一九七一年六月創文社発行　定価一五〇〇円
別に百部限定特製本あり

「私が山の花とかかわりの出来たのは、前世紀の末葉、一八九五年八月、小学校の上級生の頃である。爾来今日まで、花の姿を尋ねて、大小の山峯を上下すること七十有余年。」

これは著者のはしがきの一節だが、高山植物の研究にその生涯をかけられた武田氏の、簡潔な自画像といっていいであろう。明治・大正・昭和の三代にわたって、日本の山々と自然にあたたかいまなざしをむけてこられた著者であってみれば、泰然として語り得た言葉なのである。『尾瀬と鬼怒沼』、『登山と植物』、『原色高山植物図鑑』などの多くの著作をはじめ、自然科学者として誠実な仕事をつづけてこられた、七十余年の歳月が凝縮されているのである。

武田久吉氏は、本会創立発起人の一人、会員番号五番。『明治の山旅』はその題名があらわすとおり、少年時代から明治四十五年までの山旅の記録であり、植物の研究に志し、登山にめざめた氏の青春の日々の回想である。日本山岳会の創設が、小島烏水の文章力、高頭式の財力、城数馬の社会的地位、それにくわえて武田久吉を頂点とする日本博物学同志会の若き一団の熱意が綜合されることによっておこなわれ、≪蓋し是れ実に国民的事業≫の自覚のもとに発足したのは、日本山岳会の歴史の語るところだが、その意味で、本書は武田氏の個人的記録にとどまらず、≪日本山岳会創立前史≫というべきものであり、博物学同志会や初期山岳会の側面を知らせてくれる、好個の資料なのである。

アーネスト・サトウを父とし、明治十六年に生まれた氏が、当時築地にあった東京府立尋常中学（日比谷高校の前身）に学んで、帰山信順の薫陶をうけたことは注目すべきことだ。ものごとはすべて厳密にして正確であれ、という教えをうけたことは、武田氏がしばしば語ってきたところだが、それは科学者としての氏の生涯を決定づける要因であった。理科教師としての帰山は、教室内の講義よりはむしろ実習や実験を重んじ、野外における動植物の採集と観察をとおして、≪自然≫を教えたのであった。

氏が山野にしたしんだのは、幼少のころの箱根や伊香保にはじまるが、≪花の姿を尋ねて≫未知の山々の探索に興味をいだきはじめたのは、明治二十八年の妙義山（兄および小山内薫と同行）であり、その翌年から足しげくかようことになる日光の

山々であった。そういう少年期の体験と植物学へのめざめは、後年の尾瀬水蘚湿原の発見へとつながっていく。本書ではその後の高尾山、筑波山、清澄山、八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、戸隠山、尾瀬、富士山、白馬岳、塔ノ岳、大菩薩峠、鳳凰山などへの山旅、さらに北海道への採集旅行などが克明に語られている。それも交通の未発達の時代の山旅であり、二十万分の一の輯製図（いわゆる暈滃（うんおう）式のケバケバ図、氏の表現によれば 捏造地図）をたよりとする山中探索であった。その上、普通の登山者とちがって、胴乱、鏝、圧搾紙、圧搾板、さらに空盒気圧計などをたずさえるという研究者の山旅であった。一山を上下すれば、すぐさま採集品の整理にかかり、夜おそくまで圧搾の仕事にかかるというものであった。「草木の名称を知るには、野外に出て、草木に接し、なるべくは、その特徴を覚え、出来ればそれを採集して、標本に調製して後来再び観察する場合の資料として貯えること」、「特殊の一地方の植物を調査する場合には、まずその地域の地理的条件を調べ、山地であるなれば、その土地の緯度と海抜高を調べ、……」と著者が書いているように、研究調査そのものが、つねに中心を占めていたのである。そのなかにあって、氏が日本の山々の美しさに感動し、あらたな発見と紹介をかさねていったことは言うまでもない。明治三十三年八月、キヨスミコケシノブを日光において発見して以来、牧野富太郎博士の知遇を得、氏の研究と山野跋渉はひろがっていく。みずからの足で、みずからの眼で、それを実行してきたのである。

そういう青春の日々にあって、とくに明治三十八年は記念すべき年であった。それは日本の登山史においても、小島烏水の『日本山水論』の刊行、山岳会設立の気運のわきおこってきた年として永く記憶さるべきものなのだが、武田氏は四月から十月にかけて十カ国の山々に足跡をしるしたのである。日露戦争のさなかにありながら、氏の言葉によれば「赤紙の来る危惧もなく、研究に邁進する」ことができたのであった。この年の重要な山旅としてつぎの二つをあげることができる。一つは「尾瀬採集ノ植物ヲ記ス」（『博物之友』三十号、明39・1）、「尾瀬紀行」（『山岳』一年一号、明39・4）の記述になってあらわれた日光から尾瀬ヶ原への探勝の旅（七月、同行・早川隆助）であり、もう一つは「白馬篭城記」（『山岳』一年二号・三号、39・6、11）に報告された十二日間の白馬岳生活（同行・河田黙）である。金精峠をこえて戸倉にくだり、鳩待峠をへて《珍草稀花の咲くと聞く》尾瀬ヶ原に、はじめて足をふみいれた武田氏は、「水蘚（みずごけ）のじくじくしたいわゆる水蘚湿原を飾るものは、天から降った星かと見紛うばかりのタテヤマリンドウの紫唇が、幾百となく、燦々と降り注ぐ陽光を浴びて、笑いかけるそれであった」と書いたほどに、尾瀬の自然に感動をあらたにし、また、白馬岳稜線の破れ小屋生活では、連日の悪天候にもかかわらず、周辺の山々に登り、多くの貴重な収穫をもたらしたのであった。ここにあらわれる綿密で周到な記述には、氏の科学者としての誠実な態度と、未知のものをもとめてやまぬ登高精神を読むことができる。

往時の状景描写に正確さと迫力があるのは、氏のおどろくべき記憶力によるものであろうが、『博物之友』や『山岳』に発表された数多くの論文や紀行を基礎に書かれたものであるからにちがいない。明治時代の交通事情、登山の径路、時間、金銭、あるいは山旅の風物について、こまやかな観察がなされているのは、なにごとも見おとすまいとする氏の記録への執心であろう。写真版で紹介されている克明な白馬岳篭城日記や、コゴメグサのスケッチをみてもわかるように、そこには氏の生涯をつらぬいた科学者精神が生きているのである。後年、梅沢親光、鳥山悌成、河田黙の諸氏とともに、甲斐駒・白崩山異同論の実地検証におもむいたのも、氏の正確さを旨とする生き方のあらわれであった。

『明治の山旅』は青春回想の記録だが、ときおり著者は昭和四十年代の現実によびもどされて、日本の自然美の失われてゆくありさまに、諧謔をまじえて怒りをあらわにする。いつの時代にも得失のあることをみとめながら《遊戯登山家の有象無象》のこころなき仕業をなげき、《観光公害の犠牲》となってゆく日本の現実を憂えているのである。自然の保護をさけびつづけてきた氏の心意気を、そこに読むことができるだろう。

この小文を書きおえたとき、武田久吉氏の訃報を知り、六月九日、氏のなきがらをカトリック神田教会にお送りした。日本山岳会の創立と発展に、また学術研究のために情熱をこめて尽力された八十九年の生涯をおもい、心から氏の御冥福を祈り上げます。(一九七二年六月九日記)

〔近藤　信行〕

日本アルプス山人伝

安川茂雄著　B6判　三四九ページ　写真　ページ　一九七一年五月　あかね書房発行　定価八五〇円

日本の登山の歴史はまことに古い。修験道における山伏、講中登山における先達、これらの人びとを中心にして江戸時代にはすでに日本の登山はかなりの発達を示していた。しかし明治の中ごろからヨーロッパにおける登山思潮の影響を受けて、江戸時代の宗教的なものとは、全く異なった登山が行なわれ始めた。一部の進取の気性にあふれた青年たちは、宗教的あるいは科学的な色彩を帯びない、未知、未踏の山や谷を求め、山登りそのものを楽しむための登山が発生、そしてその対象とされたのは、いうまでもなく日本アルプスを中心とする山々であった。

日本アルプスという名称もまだなく、地質学者原田豊吉によって、飛騨山脈、赤石山脈、木曽山脈の命名がなされたのは明治二十二年のことである。山の名称はもとより、その位置も標高もさだかではなかった。ここに〝山案内〟が新しい時代の脚光を浴びて登場してきたのである。宗教登山の先達とはまるで別のジャンルの杣、岩魚取り、猟師たちが、それぞれの山における豊富な経験と知識を買われて、日本アルプス黎明期の山案

内として活動を開始したのである。

こうした新しい流れの中の、いわば日本の登山史上における裏方さんたちについて、著者は丹念に文献を求めながら、それぞれの山人たちのプロフィールをつづっており、これまで日本の山の書物の中で類型を見ない、ユニークな一冊にまとめている。第一章「立山登拝から剣登山へ」に始まり、第七章「新しい時代の山人たち」までの各章で、ガイドの始祖といわれる上高地の上条嘉門次、剣・立山の名案内宇治長次郎、佐伯平蔵、黒部の主遠山品右衛門、飛騨の名ガイドとして鳴らした中畠政太郎、松井憲三、今田兄弟、赤石山脈に精通していた大村晃平、中村宗義など、古きよき時代のなつかしい山案内が続々と登場してくる。

こうした山人たちの陰の力によって、日本アルプスにおける近代登山は大きな発展を遂げていったのであり、すでに姿を消してしまったこれらの人たちの活躍のあとが、著者の努力によって後世にとどめられることになったのはまことに喜ばしい。巻頭にかかげられている写真も、いずれも貴重なものである。

大正四年夏中野善太郎を案内して奥穂、西穂の縦走をしたのは今田由勝（金次郎が正しい）となっているなど、若干の誤りを散見するが、これは後日の訂正を待ちたい。また、ただ文献だけに頼らず、関係者で現存されている人たちも多いことであり、それぞれの山人の親族、縁者、あるいはかつて彼らと山に行った人たちから、直接取材する方法などにより今後さらに本書を肉付けされることを期待したい。〔山崎　安治〕

続・心に山ありて

今井雄二・今井貴美子共著　A5変型判　二六二ページ　写真二〇葉　昭和四十五年十月同信社刊　価一、四〇〇円　他に家蔵版百部限定あり

本書は今井さんご夫妻の共著『心に山ありて』の続篇である。『高原風物誌』を昭和三十九年に雄二さんが単独で著されてから、六年間に三冊を数えるわけで、そのご努力ぶりには敬服のほかない。

内容は、第一章〃『遠野物語』の山と峠〃六篇と、第二章〃山の心象風景〃十五篇が夫君、第三章〃回想の中の山々〃十七篇が夫人の執筆である。

雄二さんが遠野へ出かけられたのは、六、七年このかたのようであるが、『遠野物語』を愛読されてのことだから、その気持は随分古いものに違いない。現在の遠野は、耕地整理の施された平野を急行列車が走る明るい土地だが、そんな近代性を抹殺すれば、まだまだ妖しさが浮かび出る地方である。著者は妖怪変化のおもかげを求めて、そこをとり巻く小さな山や峠を何回も訪れる。古いと言えば古いこの気持は、山男に共通のもので、この気持の判らない人は、流行を追っての登山に終ってしまうのである。

早池峯山は別として、六角牛山、白見山、物見山など「まんずあんな山さ、わざわざ行く人はないね」と呆れた顔をされる。「あたりいちめん深い草の茂みに道がわからなく」(六角牛山)とか、「ここで行きづまり」(境木峠)とか、「本尾根へ戻るはずだがツツジなどのさばり当てにならない」(笛吹峠)とか、遠野物語の読み過ぎで伝説と現実のけじめのぼやけた著者は、美しい女が現われて、えせほほ、と笑ったような気持にひたる。まことに愉しい。

第二章は、宮沢賢治を偲んでの五輪峠や、望月の駒で知られた御牧ヶ原、秋田宮城県境の虎毛山、ロッキー紀行、少年の日の山などがある。〝黒平峠〟では宿で「そこは峠ぢゃありませんな」と言われ、翌日歩きなおして峠に立ったのを気付かずに、峠を探したりする(著者は迷うのが好きと見える)。

著者の文は実に流麗である。何回も書きなおすとお聞きしたことがあるが、紀行文としての叙述の取捨に、無駄がない。それぞれの文の書き出しにも、読者を引き込むための苦心が払われている。

また二十葉の写真(色彩四葉)は、日本山岳写真協会々員だけあって、どれも素晴らしく、本書を飾っている。

夫人の部では〝頂上を知らない山〟と題して谷川岳のことが書いてある。いとも簡単に登れるはずの或る山が、種々の事情で取り残されている場合がある。「谷川岳はこれからも、いつも私に魅力をもち続けさせてくれるだろう」という末尾の言葉には同感で、こうした山のあること自体が山好きには嬉しくて、山登りがやめられないのだ。

これと同じ心情で書かれたのが〝山を下る日〟。山頂にばかり惹かれている頃は、うんざりするばかりだった上高地への下り道が、しだいに愉しいものの一つに変った、という山を愛する者としての成長過程が描かれている。

〝ハキの実〟〝山草味覚ノート〟は女性らしい小品で、信州で食べたハキという妙な草の実が結局草ぼうきの実だったという話。ほうきはもともと、ははき(箒、帚)の転化だが、ハキと縮めて発音されると、なるほど判るまい。

本書は今井さんご夫妻の円満な人柄が溢れた本、というべきであろう。

〔川崎　精雄〕

Rope Boy

by Dennis Gray,
Victor Gollancz, London, 1970

三十六歳の若い登攀家、デニス・グレーが、その新著の冒頭の序に、「謙譲こそは若い野心(家)の梯子(向上への手段)である。」というジュリアス・シーザーの言葉を引用している。私ははてなと一応は思った。

一寸考えると彼は今の日本にもウジャウジャといる、いわゆ

る現代っ子のような時代を、経過してきた人間のように思えるが、以前は多少そうした段階がなかった訳でもないようにみえる。

しかしその書いているところをみると、現在は仲間思いのおっとりした魅力を持つ人柄となっているらしい。彼はマンチェスターの北東にあるリーズで一九三五年に生まれている。

最近到着した『アルパイン・ジャーナル』(一九七一年)の図書紹介欄を開いたら、真先にこの本のことが出ていた。しかも、その紹介を人もあろうに八十一歳になるソマーヴェル老がやっているので、二度びっくりという訳である。

新しい編集長はエドワード・ピアット。私も彼の書いたガイド・ブックを書棚に並べているが、彼はこの方面で相当有名らしい。前編集長のアランから、最近また改訂された「登山」を送ってきたが、その参考文献の中にもチャンとピアットの案内書が二冊紹介されている。

彼が私のところへよこした自己紹介の手紙をみても、相当強引なところが感じられるが、だからこそソマーヴェルみたいな大元老に、若冠三十六歳のクライマーの書いたものの紹介をやらせることになったのであろう。

老人の文の中には多少皮肉っている点がないでもないが、若い者の登り方に対して、一応の理解をもっているのは嬉しい限りである。だからソ老の言っていることをここに紹介するのも面白くないこともあるまい。

〃これはまさにわれわれが待ち望んでいた本である(なかなかお世辞が旨い)。山登りにおいてばかりでなく、たとえその人生においても、まだそう長いものとは言えないまでも、幼ない頃から山、雪、岩に心ひかれてきた典型的なヨークシャーっ子の、最近までの山をテーマにした人生物語りである。

彼はイルクリーやアルムズ崖より、もっと遠いところへ出かける時にはヒッチハイクに頼らざるを得なかったが、あとではそれがとても上手になったという。

「岩と氷の会」の常連と一緒の行動をとっていたが、会に入って拘束されるのが嫌だったので、暫らくはその会員にはならなかった。

事実彼はその最後の章で、十三歳の時にネープス岩の頂上を吹き飛ばしてやろうと考えた悪童どもの計画に参加していることを書いている。というのは恐らくその岩山が「フェル・エンド・ロック山岳会」の商標みたいなものであったからであろう。しかし幸いにもこの計画は、ゼリグナイト(爆薬の一種)を持っていた子供が、ウォスデールで酒に酔ってしまって来なかったので、遂に実行には移されなかったのである。

後に彼はこうした偏狭性から抜け出し、昔流の登山家でも決して阿呆ではなく、その伝統というものが健全であることを悟るに至った。

ここでわれわれ老人は一息入れることが出来たし、その先を楽しむことが出来たという次第なのである。

彼も岩の呼ぶ声には抗し得ず、可能な限りの経験を積み重ねながらこの世界に入っていった。われわれと同じように、彼の

登山の出発点はやはり岩登りであった。それから間もなくシャモニーの針峰やドロミテへと近寄ることになる。

しかし、彼の山行は自分の計画とエベレスト基金によって行なわれたもので、十五年ばかりの間に、ヒマラヤのクルー、ガウリサンカール、ペルーのブランカ、ヨセミティ、タトラ、そしてヒマラヤのムカール・ベーへと戻っている。

彼はその最終章で、登山家のための地方山岳会と全国的なクラブとを比較し、現存のクラブがその優越性を放棄しない限り、本当の仕事は出来ない、と言っているが、私（ソマーヴェル）はそれについてどうこういうことは出来ない。

しかし、そうした両種のクラブにしろ、そう堅苦しいものではない。ACにいるわれわれの多くの者は、一つ以上の地方山岳会の会員になっている。この立場には他のことと同様に、忠誠心の分裂はない。〝設立物〟にはそれ相応の有用性があるが、地方的な、そしてもっと特殊化された集団とか、組織もまた必要なのである。

この本は、岩登り能力の優れた人間としての立場から主として書かれているが、彼もまた、MEF（エベレスト基金）という形の団体によって沢山の支援をうけている。

彼は実に写実的に、われわれが彼の総ての冒険について行けるばかりか、一緒に行くことも出来るように書いている。

個人的に言えば、私は、私の知っている登攀、しばしば行きたいと思っていた登攀、そして私がやれなかった、あるいはやろうと思っても出来なかった登攀について、とても楽しく読んだ。しかし最大の喜びは、このように愉快な、そして魅惑的な人たちに会ってその仲間に加わり、その経験を共にし得たことである。〟

英国山岳会の大元老の一人であるこのお爺さんも、大分調和的、妥協的な態度を見せているが、前にも書いたように、この本の紹介をソマーヴェルに頼んだ編集者も、相当臍曲りで意地が悪い。

最終章には私にもうなずけることが幾つも書いてある。一九六二年の英ソ合同パミール登山隊の失敗は、山を楽しむことを中心におかず、国際親善を目的にしたからだ、という結論も面白い。

また、現代は目標に達した手段に注意せず、結果だけに血道をあげているとか、光栄ある失敗の方が無意味な勝利よりずっと立派である、とも言っている。

登山指導員の資格も彼の水準では非常に厳しい。少なくとも名誉職でないことだけは誰もが知っておいてよいであろう。

また彼はアンナプルナやダウラギリの全山縦走とか、少人数によるローツェ・シャールの南壁登攀などは、将来ヒマラヤにおける大きな課題になろうとも言っている。

尚、『A・J　一九七一』にグレーが〝「ヒマラヤの倫理」――再考の時〟という小論を書いているが、これもなかなか面白い。私は「山と渓谷」の七二年二、三月号でその一部を紹介した。興味のある人は読んで頂きたい。　〔吉沢　一郎〕

Don Whillans
—Portrait of a Mountaineer—

by Don Whillans and Alick Ormerod, Heinemann, London, 1971

一九七一年、国際エベレスト隊の登攀隊長を勤めたドン・ウィランスの一代記が上梓された。題名は「ドン・ウィランス——一登山家の横顔」で、アリック・オーマロッドとの共著という形になっている。

もうそろそろ下火にはなったが、少し前までは、「ヘルヴェルリンからヒマラヤ」とか、「アルプスからヒマラヤ」などという題名が流行していたことがあったが、それにならうとすると、この本の題名はさしずめ、「ノラ街からアンナプルナ南壁へ」としてもおかしくはないことになる。

ノラ街というのは、彼が一九三三年に生まれたランカシャーはソルファードにある、砂岩で出来た前階段や敷居のある古い家の並んでいた通りの名で、彼、Donald Desbrow Whillansがヨチヨチと冒険的な歩みを始めたところである。

本の内容をみると、彼も他の現代英国の先鋭的登山家の辿った険阻な道を、同じように歩いているのがわかる。即ち英国での岩登りからアルプス、ドロミテ、カラコルム、パタゴニア、ヨセミティ、そしてアンナからエベレスト。こうした道は、ジョー・ブラウンも、クリス・ボニントンも、イアン・クローも、そしてデニス・グレーも殆んど同じように歩いているのであるが、アンナの南壁下で忽焉として死んだイアンの他は、皆一冊の自分の本をものしている。

ここに彼の今度の著がどういうものか、『マウンテン』十五号にブライアン・フッラーが書いたものを紹介してみよう。身近かにいるものの批評の方が遥かに的を射ているし、迫力もあるというものである。

× × ×

〃それから私は総てのことが、あらたに明らかになる瞬間の一つにぶつかった。その時から私は私の人生を世界中で一番近寄り難い山へぶちこむことになると思った。ダービーシャー、湖水地方、スノードニア、そしてスコットランド、それが突然本当の将来の見透しをつけさせてくれた。それから私はグランド・ジョラスに眼をやり、次にヒマラヤとアンデスを見た。〃

ドン・ウィランスは一九五二年の夏が最初のアルプスへの門出の年となったが、これが昔の仲間からきわだって名をあげる契機ともなった。

彼の目標およびその後の成功を、彼自身の理想に照らしてみた時、はじめて彼の未来の予想が可能となる。ドンは〃巨岳〃の男となろうと決意したのだ。

彼の物語りは面白く、直接的で、冒険に満ちている。彼の業績はいろんな本や記事の中に既に記録されており、それらを再

述することは、何かを失うための焼直し物語りだろうと思われるかも知れない。

しかしそんなことはなかった。人生に対するドンの信頼すべき北からの接近は、この書の中ではっきりと示されている。

今までに書かれている沢山のにせ物語りは、彼の気持ちのいい即実的な筆によって完膚なくたたきのめされている。彼の興奮的な物語りは、殆んど狂的な歩調で動いていく。

私はとめどもない幾つもの遠行の合間に一息入れることを要求したが、ウィランスはそうではなかった。人生というものは、後退のない、恒常的な前進の、こうした精力的な歩調で動くべきものなのだという彼の理想、それが彼の言葉のうちに躍動している。

ジョー・ブラウン（注・〃酷しい年々〃の著者）からウェールズでやらないかという誘いを受けた時、彼はきっぱりと断わった。そしてそのあとで、〃ジョージが前にやったところ、そんなところへ行ける道理がない〃と言っている。

物語りは全部ドンのものだが、書いたのはそうではない。アリック・オーマロッドが、自分の控え目な文章で、ウィランスの物語りを上手に助けている。アリックがウィランス自身よりも、山男としてのウィランスをずっとよく知っていることは明らかである。

たとえウィランスが、どこの馬の骨かなどということや、幽霊文士のイメージとするような、世界の最先端に立つ登山家の一人でもないということであっても、そんなことは小さなことで問題にはならない。

著者は、〃さもなければ一人の人間の人生の、純粋に主観的な記述になり終ったであろうものに、ある客観性を与えようとする試み〃に成功した。

この本には写真もあるが、これらは貧弱この上もない。本文を補足出来るようなものは一つもなく、内容に関連しているものは多いが、これらには雰囲気というものが全然感じられない。

出来れば〃これからという新しい偉大なもの〃には、ウィランスのような情熱と没頭も必要だが、カメラもまた忘れてはならないものであると思う。

とは言え、ドン・ウィランスがこの十年間における大登山家の一人であることには疑いがない。彼の物語りは、その登攀にも比肩し得るばかりではなく、この本は、ブールやジェルバスッティのものと並べて本棚においても、決して見劣りのするものではない。

× × ×

この本のカバーにも、見過すことの出来ないことが書いてある。即ち、ドン・ウィランスが一九七〇年の五月二十七日に、南壁経由アンナプルナの頂上に立った時、これは二つの意味において、ドンの素晴らしい登山歴の中での極点であった。

過去二十年の間に小男ウィランスの業績の周辺には、山に限らず無数の伝説が出来上っていた。その彼が到々、自分のもっとも特異な登攀を率直に記録の上にまとめたのである。

ドンは一九五〇年代のはじめに現われ出た、一群の新しい登攀家の尖兵として、英国の岩登りの水準を夢想もしなかった段階にまで引き上げた。

ウィランスは一九五一年以来克明に日記をつけていたが、それを基にして彼は有名な登攀を生き生きと、そのままに再現している。彼自身の精力的な個性、無情なまでの誠実な判断、そして彼の逞ましい北国的な諧謔が、この本を登山文献中での特異な存在としているのである。実際それは、登攀と登攀家の特殊な香りを把えている。

現在彼は、〝岩と氷の会〟、英国山岳会、ヒマラヤン・クラブ、英国地理学協会などの会員で、妻と共にランカシャーのロッセンデールに住んでいる。

尚、この物語りの構成は他のものと違うので多少の説明を必要としよう。著者達の言うところによれば（注・実際読んでもそうで、時々戸迷う時がある）、ウィランスの叙述とアリックの説明が繋ぎ合わされている。これは一人の人間の人生の、純粋に主観的な話しに、多少でも客観性を持たせようとする一つの試みであるという。

二人は個々の事件を出来るだけ事実に即して構成しようとした。また、ドンの思想と感情を、現時点ではどうなっているか、ではなく、個々の事件の発生時において記録しようともしている。ドンは前述の通り一九五一年以来、かなり詳細な日記をつけているので、時日、場所、仲間については正確なものと考えてよい。

因みに共著者のアリック・オーマロッドは三十三歳になる英文学者で、現在はロッセンデール大学で講師をやっているという。

〔吉沢　一郎〕

会務報告

一九七〇年七月〜一九七一年六月

◇七月理事・評議員会　七月一日（水）ルーム

出席者　三田、吉沢、深田、藤井、山崎、丹部、大森、中屋、野上、小倉、宮下、牧野内、神原、松永、折井、渡辺（兵）、村山、高山、小原、他に松方、松田

▽議事、報告

一、成田隊員弔慰金の件
二、第二次ＲＣＣ入会の件
三、日米合同遠征計画後援の件
四、エベレスト隊装備処理の件
五、エベレスト国際登山隊の件
六、新旧役員懇談会の件
七、エベレスト隊シェルパ同行帰国の件
八、イタリア山岳会会報日本特集号の件
九、神河内山荘の件
十、公式文書保有の件
十一、その他報告事項

（詳細は「山」三〇二号参照）

◇九月理事・評議員会　九月二日（水）ルーム

出席者　三田、吉沢、深田、中屋、藤井、山崎、丹部、野上、中島、神原、大森、松永、芳野、牧野内

▽議事、報告

一、エベレスト隊収支報告の件
二、財務委員会の件
三、年次晩餐会の件
四、山日記会員配布の件
五、その他報告事項

（詳細は「山」三〇四号参照）

◇十月理事・評議員会　十月七日（水）ルーム

出席者　吉沢、藤井、丹部、中屋、山崎、大森、神原、川上、中島、宮下、野上、牧野内、小倉、渡辺（公）、渡辺（兵）、織内、折井、田口、村山、金坂、他に飯野

▽議事、報告

一、神河内山荘の件
二、エベレスト国際登山隊の件
三、エベレスト登山会計報告の件
四、一般会計収支の件
五、文書規定の件
六、自然保護の件
七、事務処理懇談会の件
八、登山技術講習会の件
九、その他報告事項

（詳細は「山」三〇五号参照）

◇十一月理事・評議員会　十一月四日（水）ルーム

出席者　三田、吉沢、藤井、中屋、大森、丹部、山崎、松永、宮下、神原、野上、金坂、渡辺（公）、今井

▽議事、報告

一、会費納入促進の件

二、新入会員紹介者の件
三、支部長会議の件
四、年次晩餐会の件
五、文書規定の件
六、賛助会員規定活用の件
七、エベレスト国際登山隊の件
八、自然保護の件
九、ガルワール地図の件
十、K2模型通関の件
十一、文部省登山研修所井上前所長慰労金の件
十二、全日本学生山岳連盟の件
十三、その他報告事項
（詳細は「山」三〇六号参照）

◇十二月理事・評議員会　十二月二日（水）ルーム
出席者　三田、吉沢、深田、藤井、丹部、山崎、大森、中島、神原、川上、小倉、芳野、牧野内、加藤、折井、田口、金坂、小原、今井、他に大塚
▽議事、報告
一、エベレスト国際登山隊の件
二、名誉会員推薦の件
三、エベレスト隊装備寄贈等処分の件
四、エベレスト記録映画の件
五、ヒマラヤン・ソサエテイ事務局長パラジュリ氏歓迎会の件
六、その他報告事項
（詳細は「山」三〇七号参照）

◇支部長会議　十二月十二日（土）ルーム
出席者　三田、深田、吉沢、藤井、山崎、丹部、中島、今西（関西）、中田（富山）、柴田（秋田）、熊沢（東海）、野口（東九州）、伊達（宮城）、小林（石川）、山本（静岡）、後藤（山形）、藤島（越後）、他に高山、蒲生
▽議事、報告
一、各支部の現状報告および討議
（「山」三〇七号参照）

◇一月理事・評議員会　一月十三日（水）ルーム
出席者　吉沢、深田、藤井、山崎、丹部、野上、神原、松永、宮下、大森、小倉、中屋、中田、折井、織内、金坂、村山、今井、小原
▽議事、報告
一、エベレスト国際登山隊の件
二、エベレスト募金委員会解散の件
三、エベレスト残務処理の件
四、四十六年度会員総会の件
五、在ネパール日本大使館山岳担当者推薦の件
六、その他報告事項
（詳細は「山」三〇八号参照）

◇二月理事・評議員会　二月三日（水）ルーム
出席者　吉沢、中屋、藤井、丹部、山崎、野上、神原、松永、大森、小倉、中島、川上、熊谷、宮下、渡辺（公）、中田、渡辺（兵）、織内、小原、今井
▽議事、報告
一、エベレスト国際登山隊の件
二、四十六年度役員の件
三、四十五年度財務の件

四、その他報告事項
（詳細は「山」三〇九号参照）

◇三月理事・評議員会　三月三日（水）ルーム
出席者　吉沢、深田、藤井、山崎、大森、小倉、宮下、松永、中島、
野上、熊谷、高山、織内、中田、金坂、堀田、渡辺（公）、小原
▽議事、報告
一、エベレスト国際登山隊の件
二、四十六年度役員の件
三、四十六年度事業計画の件
四、四十五年度事業報告の件
五、その他報告事項
（詳細は「山」三一〇号参照）

◇三月臨時理事・評議員会　三月二十五日（木）ルーム
出席者　三田、吉沢、藤井、山崎、丹部、野上、宮下、熊谷、牧野
内、加藤、村山、島田、織内、金坂、今井、小原
▽議事、報告
一、四十六年度予算案の件
二、四十六年度役員の件
三、会員総会の件
四、神河内山荘の件
五、深田副会長逝去に関する件
六、その他報告事項
（詳細は「山」三一一号参照）

◇四月臨時理事会　四月三日（土）ルーム
出席者　三田、吉沢、藤井、丹部、山崎、野上、大森
▽議事、報告
一、次期副会長候補の件
二、深田氏叙勲申請の件
三、都岳連常任評議員推薦の件
四、その他
（詳細は「山」三一一号参照）

◇四月理事・評議員会　四月七日（水）ルーム
出席者　三田、吉沢、藤井、丹部、山崎、野上、神原、宮下、織内、
渡辺（公）、望月、金坂、小原、今井
▽議事、報告
一、四十六年度役員の件
二、深田氏追悼会の件
三、台湾からの招待の件
四、四十五年度収支決算の件
五、その他報告事項
（詳細は「山」三一一号参照）

◇昭和四十六年度通常会員総会　四月二十四日（土）赤坂ＯＡＧ会館
出席者　三田会長以下七十九名
▽総会次第
一、会長挨拶　三田　幸夫
二、昭和四十五年度事業報告　藤井　運平
三、支部報告
越後（藤島玄）、富山（石坂）、信濃（塚本）、宮城（伊達）、山梨
（山村）、東海（伊藤）、山形（後藤）、静岡（山本）、秋田（柴田）
四、昭和四十五年度決算報告　藤井　運平
五、昭和四十五年度財産目録報告　藤井　運平
六、監査報告　今井　雄二

（以上承認）

七、昭和四十六年度役員選任の件

四十六年度役員として次の各氏を選任した。

＜理事＞ 三田幸夫、吉沢一郎、中屋健弌、山崎安治、藤井運平、神原　達、松永敏郎、熊谷義信、大森薫雄、宮下秀樹、中島　寛、野上成勇、丹部節雄（以上再任）、成瀬岩雄、坂下心一、神崎忠男、板倉勝正、村井　葵、渡部節子、鹿野勝彦（以上新任）。退任された小倉董子、山上　隆、芳野赳夫、倉知　敬、浜野吉生、牧野内昭武の六氏の労を謝した。

＜監事＞ 小原勝郎氏の任期満了に伴う後任として山下一夫氏を新任。

＜評議員＞ 渡辺公平、三井松男の二氏が退任され、新たに小原勝郎、佐藤テル両氏を選任、退任された二氏の労を謝した。

八、会長、副会長選任の件

会長に三田幸夫氏を再任、副会長に吉沢一郎氏を再任、成瀬岩雄氏を新任した。

九、昭和四十六年度事業計画案の件　山崎　安治

（原案どおり承認）

十、昭和四十六年度収支予算案の件　山崎　安治

（原案どおり承認）

（詳細は「山」三一二号参照）

◇支部長会議　四月二十五日（日）ルーム

出席者　三田、藤井、山崎、山本（静岡）、柴田（秋田）、伊達（宮城）、山村（山梨）、石坂（富山）、後藤（山形）、伊藤（福島）、藤島（越後）、塚本（信濃）

▽議事、報告

とくに議題を定めず、懇談的に話を進めた。

（詳細は「山」三一二号参照）

◇五月理事・評議員会　五月十三日（木）ルーム

出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、山崎、藤井、丹部、神原、松永、神崎、渡部、熊谷、坂下、板倉、野上、大森、金坂、織内、渡辺（兵）、望月、田口、今井

▽議事、報告

一、常務理事互選の件

中屋、藤井、山崎、宮下、中島の五氏を互選。

二、常任評議員互選の件

前年度どおりとし、更に小原勝郎氏を加える（加藤、折井、中田、村山、渡辺（兵）、金坂、小原の七氏）。

三、役員任務分担の件

中屋（総務、財務、山荘、会員）、山崎（庶務、会計、支部）、藤井（総務）、中島（山岳）、宮下（日山協、学生部）、丹部（日山協）、渡部（婦人懇談会）、神崎（集会、学生部）、神原（海外連絡）、松永（指導）、坂下（遭難対策）、熊谷（学生部）、大森（医療）、板倉（自然保護）、村井（日山協、学生部）、野上（図書）、鹿野（山日記）

四、深田家よりの寄付金の件

五、支部長会議の件

六、ウェストン祭の件

七、神河内山荘の件

八、エベレスト記念メダルの件

九、その他報告事項

（詳細は「山」三一二号参照）

◇六月理事・評議員会　六月三日（木）ルーム

出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、藤井、山崎、丹部、宮下、松永、村井、坂下、板倉、野上、渡部、神原、神崎、中島、熊谷、金坂、村山、山下

▽議事、報告

一、エベレスト記念メダルの件
二、神河内山荘改装の件
三、学生部の件
四、新旧役員懇談会の件
五、現地支部長会議の件
六、その他報告事項
（詳細は「山」三一三号参照）

× × ×

◇小集会

▽第二六一回　昭和四十五年七月十五日（水）於・ルーム
モンゴル・ハルヒラー連峰について　小沢重男氏

▽第二六二回　昭和四十五年九月九日（水）於・ルーム（出席者八〇名）
マカルー東南稜登頂報告　市川章弘氏

▽第二六三回　昭和四十五年九月三十日（水）於・岸体育館（出席者百一名）
エベレスト登山報告会

▽第二六四回　昭和四十五年十月三日（土）～四日（日）富士西湖パラマウントパーク
（詳細は「山」三〇五号参照）

▽第二六五回　昭和四十五年十月二十八日（水）於・ルーム（出席者五十五名）
アンナプルナⅢ峰登頂、ダウラギリⅥ峰登頂　宮崎英子・野村哲也氏

▽第二六六回　昭和四十五年十二月二十六日（水）於・ルーム（出席者二十七名）
中南米十七ケ国踏査とペルーの登山　佐々木徹氏

▽第二六七回　昭和四十五年十二月二十三日（水）於・ルーム（出席者二十七名）
忘年会

▽第二六八回　昭和四十六年二月二十四日（水）於・ルーム（出席者五十八名）
ダウラギリⅠ峰登頂　今成征二、川田哲二、和田豊司氏

▽第二六九回　昭和四十六年三月十日（水）於・ルーム（出席者六〇名）
P29登頂　住吉仙也氏

▽第二七〇回　昭和四十六年六月二日（水）於・ルーム
チューレン・ヒマール登頂　山本良三氏

▽第二七一回　昭和四十六年六月十五日（火）、六月二十九日（火）於・ルーム
スケッチ教室　山里寿男氏

◇主なる行事および集会

▽エベレスト登山隊帰国歓迎会
昭和四十五年六月二十六日（金）於・ホテル・ニューオータニ（出席者約五百名）
（詳細は「山」三〇二号参照）

▽大エベレスト展
昭和四十五年八月一日（土）～十二日（水）於・池袋西武百貨店ＳＳＳホール
（詳細は「山」三〇三号参照）

▽第十一回登山技術講習会

昭和四十五年十一月二十二日(日)~二十四日(火)於・富士山御庭小屋。参加者三〇名(詳細は「山」三〇七号参照)

▽昭和四十五年度年次晩餐会

昭和四十五年十二月十二日(土)於・マツヤサロン。出席者二二二名(詳細は「山」三〇七号参照)

▽第九回「この一本展」

昭和四十五年十二月十二日(土)於・マツヤサロン(詳細は「山」三〇七号、三〇九号、三一一号、三一二号)

▽故深田久弥氏追悼会

昭和四十六年四月二十四日、OAG会館において開催(出席者一二八名)

▽第二回現地支部長会議

昭和四十六年五月二十二日(土)~二十四日(月)於・栗駒山および駒ノ湯温泉(詳細は「山」三一〇号、三一三号参照)

▽第二十五回ウェストン祭

昭和四十六年六月五日(土)~六日(日)於・上高地(詳細は「山」三一三号、三一四号参照)

▽第十四回有志閑談会

昭和四十六年六月十二日(土)於・六義園(出席者四十五名)(詳細は「山」三一三号参照)

× × ×

◇海外登山界との交流

▽本年度は30ケ国、70団体と機関誌の交換を行なった。

▽一九七〇年七月十日(金)ルームにおいて、ソウル大学校文理科大学OB山岳会訪日登山隊歓迎会を開催(詳細は「山」三〇三号参照)。

▽七月二十二日~八月三日、ヒラリー卿訪日(日本万博協会の招待による)、七月二十八日(火)如水会館において歓迎パーティーを開催した(ヒラリー卿関係の詳細は「山」三〇三号、三〇四号参照)。

▽八月十八日(火)、ルームにてカナダ山岳会バンクーバー支部長スミス女史の歓迎会を開催。

▽八月五日 ルームにてルイス・クラーク氏の歓迎会を開催。

▽八月十六日 ルームにてビナヤ氏歓迎会を開催。

▽十一月十日 ルームにてアンドレ・コンタミーヌ氏歓迎会を開催。

▽十二月三日 ルームにてヒマラヤン・ソサエティ事務局長パラジュリ氏並びにカルマ氏の歓迎会を開催。

▽駐ネパール日本大使吉良秀通氏が任期を終えて帰国され、後任に根本博大使が着任されたのを期に、一九七一年一月十二日、日ネ協会との共催で、国際文化会館において両大使歓送迎会を開催した(詳細は「山」三〇九号参照)。

▽エベレスト国際登山隊(一九七一年二月~六月)隊員として植村直巳、伊藤礼造の両氏を派遣した(詳細は「山」三一〇号、三一一号参照)。

▽槇有恒、松方三郎両氏がアルパイン・クラブの名誉会員に推薦された(詳細は「山」三一四号参照)。

× × ×

◇その他のトピック

▽ネパール洪水義援金(四十五年十月)

日ネ協会と協力、四六万八〇〇〇円並びに薬品類を在ネパール日本大使館を通じてネパール政府に送った(詳細は「山」三〇五号参照)。

▽第九回海外登山技術研究会

昭和四十六年一月二十三日(土)~二十四日(日)、日本山岳協会主催、於・八王子大学セミナーハウス、参加者一四〇名(「山」三〇九号参

照）。

一九七一年度役員

会　　長　三田幸夫
副 会 長　成瀬岩雄、吉沢一郎
常務理事　中尾健弌、山崎安治、藤井運平、宮下秀樹、中島　寛
理　　事　神原　達、松永敏郎、熊谷義信、大森　薫雄、坂下心一、野上成勇、丹部節雄、神崎忠男、板倉勝正、村井　葵、渡部節子、鹿野勝彦

監　　事　山下一夫、今井雄二
常任評議員　加藤泰安、小原勝郎、折井健一、中田勇吉、村山雅美、渡辺兵力、金坂一郎
評　議　員　島田　巽、堀田弥一、田口二郎、佐藤テル、望月達夫、織内信彦、辰沼広吉、藤島　玄、津田周二、中野征紀、今西寿雄、高山忠四朗、伊達篤郎
支　部　長　中野征紀（北海道）、柴田均二（秋田）、後藤幹次（山形）、伊達篤郎（宮城）、伊藤弥十郎（福島）、藤島　玄（越後）、塚本茂樹（信濃）、三井松男（山梨）、山本朋三郎（静岡）、熊沢正夫（東海）、中田勇吉（富山）、小林雄次郎（石川）、今西寿雄（関西）、織田　収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、三谷孝一（熊本）
書　　記　岩佐義宗

広告掲載一覧

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXVI 1971 **Issued in April, 1972**

Contents

Editor : Tatsuo Mochizuki

Associate Editor : Hiroshi Nakajima

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Mukai Bldg. No. 23, Kanda Nishiki-cho, 3-chome, Chiyoda-ku, Tokyo

....

(April 1971～April 1972)

Presisent : Yukio Mita
Vice Presidents : Ichiro Yoshizawa, Iwao Naruse
Honorary Secretaries : Kenichi Nakaya, Unpei Fujii,
Honorary Editor : Tatsuo Mochizuki
Honorary Librarian : Yoshimasa Kobayashi
Honorary Treasurer : Kenichi Nakaya
Auditors : Yuji Imai, Kazuo Yamashita

....

Committee

Kenichi Nakaya
Hideki Miyashita
Toshiro Matsunaga
Shinichi Sakashita
Tadao Kanzaki
Setsuko Watanabe
Yasuji Yamazaki
Hiroshi Nakajima
Yoshinobu Kumagai
Seiyu Nogami
Katsumasa Itakura
Unpei Fujii
Toru Kanbara
Shigeo Ohmori
Sadao Tanbe
Aoi Murai

....

Council

Taian Kato
Yukichi Nakata
Ichiro Kanesaka
Jiro Taguchi
Nobuhiko Oriuchi
Shuji Tsuda
Chushiro Takayama
Katsuro Obara
Masami Murayama
Tatsumi Shimada
Teru Satoh
Hirokichi Tatsunuma
Masanori Nakano
Tokuro Date
Kenichi Orii
Hyoriki Watanabe
Yaichi Hotta
Tatsuo Mochizuki
Gen Fujishima
Toshio Imanishi

....

Chairmans of Local Sections

Hokkaido : Masanori Nakano
Yamagata : Kanji Gotoh
Fukushima : Yajuro Itoh
Shinano : Shigeki Tsukamoto
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Toyama : Yukichi Nakata
Kwansai : Toshio Imanishi
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Kumamoto : Koichi Mitani
Akita : Kinji Shibata
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Gen Fujishima
Yamanashi : Matsuo Mitsui
Tokai : Masao Kumazawa
Ishikawa : Yujiro Kobayashi
Sanin : Osamu Oda
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

The Japanese Mount Everest Expedition 1969–1970

By Hiromi Ohtsuka

Preface

It was in 1963 that the Everest Project was originally planned by the Japanese Alpine Club, based on the results and experiences of Manaslu (8,125 m) which was in 1953, 1954 and 1956 and Himal Chuli (7864 m) which was in 1959.

In May 1963 we were granted the mountaineering permit to Mt. Everest during the pre-monsoon season of 1966, and started out our preparation, but soon this project had to be postponed because in 1965 the Nepalese Government banned the mountaineering to all the Himalayan ranges.

After a long closed period, the Nepalese Government lifted the ban and 38 peaks including Mt. Everest were opened for the foreign climbers from March 1969. We, the Japanese Alpine Club, resumed our plan immediately after we caught the news in August 1968.

In April of the following year, we obtained once again the mountaineering permission for the pre-monsoon season of 1970, and began our busy preparation in full scale.

Our object was to aim at the summit of Mt. Everest not only from the original route (South-east Ridge) but also from one of the virgin routes (the South-west Face). To complete this aim, it was decided to send two reconnaissance parties, first in the 1969 pre-monsoon season and second in the post-monsoon season of the same year.

We also planned to carry out some scientific researches besides our mountaineering activities such as studies of human bodies at high altitude, meteorological observations and geophysical research.

The expedition was officially named "The Japanese Mount Everest Expedition 1970" (JMEE '70) and came into being under the auspices of the Ministry of Education, the Mainichi Newspapers and the Japanese Broadcasting Corporation (NHK). The total amount of budget amounted to 100 million Yen, including expenses of two reconnaissance parties.

The 1st Reconnaissance Party (April-June, 1969)

This party consisted of the following four members;

Y. Fujita (leader, age 36), N. Uemura (27), T. Sugasawa (24), H. Aizawa (36, the Mainichi reporter).

They left Japan on April 23, 1969, and arrived at Kathmandu on April 25. They started Kathmandu for Lukla on May 5 by a chartered plane. Two days after, they started from Lukla with 50 porters, and on May 14, set up the Base Camp in the upper basin of Khumbu Glacier (5350 m). They began to make the route up in the Ice-fall from May 16, and after ten days of struggle, on May 25, two members (N. Uemura and H. Aizawa) reached the height of 6,500 m of the Western Cwm and closely observed the untrodden South-west Face.

Although a rough inspection, they assured of the probability to climb up on the South-west Face, and brought back many precious data.

The 2nd Reconnaissance Party (August-November, 1969)

This party consisted of the following 12 members;

H. Miyashita (leader, 38)	H. Tanabe (deputy leader, 38)
H. Nakajima (31)	M. Konishi (31)
N. Uemura (28)	Y. Satoh (27)
J. Inoue (24)	S. Ohmori (medical doctor, 38)
S. Satoh (Mainichi reporter, 31)	K. Kimura (Mainichi cameraman, 39)
H. Shirai (N.H.K. TV. director, 36)	T. Noguchi (N.H.K. TV. cameraman, 38)

Their aim was to make clear the South-west Face in detail, and especially they had the two following objects;

(1) To climb up the face as high as possible.

(2) To make the members to have the acclimatization and experience at high altitude for 1970's attempt.

The summary of their activities was as follows;

Sept. 4 : All the members gathered at Lukla by chartered planes.

Sept. 16 : Established B.C..

Sept. 20 : Entered into the Ice-Fall.

Sept. 28 : Established C 2 (6,150 m) at the head of the Ice-Fall.

Oct. 15 : Established C 3 (6,600 m) just below the South-west Face.

Oct. 18 : Established C 4 (7,000 m) on the South-west Face.

Oct. 29 : Established C 5 (7,500 m) on the South-west Face.

Oct. 31 : M. Konishi and N. Uemura reached the point of 8,000 m just below the Rock Band.

Nov. 1 : H. Nakajima and Y. Satoh reached the same point and acquired another pitch further.

Nov. 3 : All the members returned to B.C..

Nov. 13 : Returned to Kathmandu.

During this expedtion, the party happened to find the corpse of John E. Breitenbach (AMEE '63) at the lower part of the Ice-fall on Sep. 24, which was later handed on to the family with the help of Mr. N. Dyhrenfurth and Mr. Barry C. Bishop.

Winter in Khumbu

Following two members of the 2nd Reconnaissance Party remained in Khumbu villages during the winter waiting for the main party.

N. Uemura stayed at Kumjung (3,800 m) and he made arrangements for the expedition.

J. Inoue stayed at Periche (4,243 m) to engage himself in the meteorological observation and he brought back the precious data on meteorological research in Himalaya by keeping observation for a year from September 1969 to August 1970.

The attempt in 1970

With the result brought by the 2nd Reconnaissance Party, we managed to complete the preparation for the 1970 pre-monsoon attempt in the remaining two months. Finally the expedition members left Japan on February 15.

Members and their past expedition careers were as follows:

Members; 39 (including 9 reporters)

Saburo Matsukata	(Age 70)	Expedition leader
Hiromi Ohtsuka	(〃 45)	Deputy leader, Manaslu '54, '56, Yeti Exp. '60
Senya Sumiyoshi, M.D.	(〃 43)	Himal Chuli '59, P-29 '61, '69
Yuichi Matsuda	(〃 39)	Manaslu '54, '56, Himal Chuli '59
Yoshihiro Fujita	(〃 37)	McKinley '60, Ngojumba Kang '65 Mt. Everest 1st Reconnaissance '69
Katsutoshi Hirabayashi	(Age 35)	Api. '60, Saipal '63
Teruo Matsuura	(〃 35)	Lhotse Shar '65
Hiroaki Tamura	(〃 32)	Langtang Himal '65
Hiroshi Nakajima	(〃 31)	Peru-Bolivia-Andes '61 Mt. Everest 2nd Reconnaissance '69

Shinichi Hirano	(Age 31)	Ngojumba Kang '65
Masatake Doi	(〃 31)	McKinley '60
Masatsugu Konishi	(〃 31)	Matterhorn North Face ('67 winter) Mt. Everest 2nd Reconnaissance '69
Setsuko Watanabe, Miss	(〃 31)	Istor-o-Nal '68
Takashi Kano	(〃 29)	Nupchu '62
Tadao Kanzaki	(〃 29)	Greenland '66
Hideo Nishigori	(〃 29)	Logan '64, Foraiker '66
Naomi Uemura	(〃 28)	Ngojumba Kang '65, Alps, Kilimanjaro, Aconcagua, Mt. Everest 1st and 2nd Reconnaissance '69
Kiyoshi Narita	(〃 28)	
Katsuhiko Kano	(〃 27)	Khinyang Chhish '65
Yoshiaki Kamiyama	(〃 27)	
Akira Yoshikawa	(〃 27)	Dolomite '66
Chitoshi Ando	(〃 26)	Patagonia '68
Hiroshi Sagano	(〃 25)	Greenland '68
Reizo Itoh	(〃 23)	
Michiro Nakashima, M.D.	(〃 39)	Expedition doctor, Chogolisa '58
Koichiro Hirotani, M.D.	(〃 36)	Expedition doctor, Langtang Lirung '61
Shigeo Ohmori, M.D.	(〃 36)	Expedition doctor, Mt. Everest 2nd Reconnaissance '69
Masaru Kono	(〃 30)	Geophysist, Baltoro Kangri '63
Masayuki Osada	(〃 28)	Meteorologist (Weatherman), Logan '65
Jiro Inoue	(〃 24)	Meteolologist, Patagonia '68 Mt. Everest 2nd Reconnaissance '69
Katsuhisa Kimura	(〃 39)	The Mainichi cameraman
Hirofumi Aizawa	(〃 37)	〃 reporter
Shigeru Satoh	(〃 32)	〃 reporter
Masao Harada	(〃 27)	〃 cameraman
Kenji Taira	(〃 34)	〃 cameraman
Toshio Naito	(〃 37)	N.H.K. Producer
Tokutaro Noguchi	(〃 37)	〃 TV. cameraman
Shozo Tateno	(〃 32)	〃 TV. cameraman
Hiroshi Nakagawa	(〃 28)	〃 reporter

Sherpas : 26

Local sherpas : 21, Ice-Fall Porters : 30
Liaison Officers : Govinda Krishna Shresta (Age 30)

1. Approach March (February 19—March 23)

On February 19, we left Kathmandu for the approach march. Cargoes of some 30 tons were divided into two; one for air transportation of 15 tons, and the other for porter-caravan. We arrived at Numche Bazar (3,440 m) on March 4, and then to Thyangboche (3,867 m) on March 6, where we settled the first base for the acclimatization of members. All the cargoes gathered there one after another by porters.

According to the schedule, we stayed there for two weeks and went on training tours for acclimatization. We divided the members into three groups; they were Imja Glacier group, Mingbo Glacier group and Khumbu Glacier group. Khumbu Glacier group had a special mission to decide the setting place of our Base Camp.

These tours took all the members as high as 5,500 m and at least every member spent a night at the height of 5,000 m.

2. First Stage (March 24—April 12)

—The breakthrough of the Ice-fall and the accidents of Sherpas.—

On March 23, the Base Camp was established amid the moraine fields just below the Ice-fall (5,350 m) and all the members gathered there. Among us, there were 5 members who had experienced to across the Ice-fall in the previous two reconnaissance parties, but they had a consistent opinion that the Ice-fall of Mt. Everest was particularly in a dangerous condition.

By the leadership of experienced members, the work of route making was immediately proceeded in the dangerous and complicated Ice-fall. It was on April 4, after about 10 days struggle that Camp I was set up at the head of the Ice-fall (6,150 m). The depot-camp was placed half way up the Ice-fall (5,800 m) and the long slog operation began from April 1 to carry up 12 tons of load. Expedition members also took part in this work carrying 20 kgs on their backs.

During this operation, however, on April 5, 6 Sherpas of the Japanese Skiing Expedition* were killed at 5,700 m by a huge glacier avalanche. Then, another accident followed in our party.

It was at 7:20 a.m. on April 9.

One of our Ice-fall porters, Kyak Tsering (36) was killed at 5,525 m by a fall of seracs. Even with the utmost care, it was impossible to overcome the force of nature which was overwhelming in the Ice-fall. On account of these accidents, we were not only given a bitter shock but also forced to change our schedule.

Some of the members suffered from some kind of a high-altitude sickness at this time, but the acclimatization to the height was going well generally.

Narita who was resting at Lobuche with a cold had recovered and joined the Base Camp on April 11, accompained by our leader S. Matsukata (70). The following day all the members gathered for dinner in the messtent for the first time.

3. Second Stage (April 13—April 30)

—The death of Narita, Arrival at the South Col and at 7,600 m on the South-west Face.—

The object of this stage was to open the route to the point of 8,000 m and to carry up the necessary loads by the end of April.

To make this possible, the members were divided into the South-west Face team and the South-east Ridge team. On April 16, C 2 was established at 6,450 m as the Advance Base Camp. For the South-west Face team, the Advance Base Camp (F.A.B.C.) was set up at 6,600 m on the 17 th. As mentioned before, the characteristic of our expedition was that we had two distinct teams taking different routes and different tactics as well. It would have been better if the grouping of the members was decided beforehand according to their own policies. But I was planning to do this by observing the condition, attitudes and intention of every member before making teams. Grouping of our members was finally announced on April 17 as follows.

South-west Face team ;

M. Konishi (leader), Y. Fujita, H. Tamura, H. Nakajima, T. Kano, H. Nishigori, R. Itoh and M. Dr. S. Ohmori.

South-east Ridge team ;

T. Matsuura (leader), K. Hirabayashi, S. Hirano, M. Doi, Miss S. Watanabe, T. Kanzaki, N. Uemura, K. Narita, Y. Kamiyam, K. Kano, C. Ando, M. Kano, M. Osada, J. Inoue, M. Dr. K. Hirotani, and M. Dr. M. Nakashima.

The headquarters :

H. Ohtsuka, S. Sumiyoshi and Y. Matsuda were assigned.

The two teams thence began to work independently. As the first assault to the summit was scheduled early in May, the priority of this stage for the latter team was given to the route exploring and load-carrying of Lhotse-Face.

On April 18, C3 was established below Lhotse-Face (6,980 m) and FC3 was established at 7,000 m on the South-west Face without any difficulty.

We had relatively fine weather and route-up progressed smoothly. But the load carrying operation was apt to be behind schedule because some of the members and Sherpas badly suffered from height sickness.

On April 20, Hirabayashi, who was descending, slipped down together with Kanzaki at 14:00 at the point of about 7,200 m of Lhotse-Face. Fortunately they were saved by the edge of a rock and also free from injury. But we found that it was only a foretaste of the trouble lying before us.

In the next evening (at 20:50 on April 21) an emergency call by M. Dr. S. Sumiyoshi staying at C1 came in through wireless that Kiyoshi Narita (28) had died of an unexpected heartattack while having his meal. It was so sudden that even Dr. Sumiyoshi and several other members sitting beside him couldn't do anything to help.

Every member hearing the news became in a state of great shock. Narita being one of the strongest and youngest member of the expedition, it was unbelievable why such a thing could have happened. We remembered him waving to us with a smile that afternoon therefore his death seemed to be a dream. Althrough he wasn't in a good condition since we were constructing the Base Camp, he recovered completely by going down to Lobuche to take some rest for a week. He resumed his work with other members at this stage. Was it because he wasn't acclimatized well? I was quite concerned over this question for the leader in substance. But our doctors judge this accident may have no relation with the high-altitude sickness, although it is not certified. The following day, all the members gathered at C1 and had a farewell ceremony.

The body was carefully carried down to the Base Camp on April 24. It was cremated according to the local religious custom in the presence of eleven members at Tukura, one day below the Base Camp, and later it was handed on to his father who was waiting in Kathmandu from our leader S. Matsukata.

Meanwhile, at higher altitudes, we had a hard time since the active members were reduced to half, as the result that twelve members were drafted to carry down the corpse of Narita. The South-west Face team with H. Tamura and four others completed fixing ropes C3 to 7,600 m on April 28. Seven members of South-east Ridge team led by T. Matsuura, established C4 (7,500 m) on April 26, and then cleared the route to the South Col (7,986 m) on April 28. But the load-carrying was lagging behind schedule.

During this period at A.B.C. the state affairs such as the lagging schedule due to accidents and the increasing number of sickness were discussed and it was decided that they put off the South-west Face assault and concentrate all efforts into making the ascent from the South-east ridge succesfully.

4. Third Stage (May4—May 12)

—Giving up the Attempt of the South-west Face and two ascents from the South-east Ridge.—

On May 1, having gone back to the Base Camp, I made a modification of the plan to make the completion of the original object within the remaining three weeks.

I concidered both projects still had their chances since our weatherman forecasted fine weather during 10 to 12 of May. So I set up a plan of the third stage with the "Summit Assault Day" fixed on those days.

The outline of the plan reads as follows;

1) Both the South-west Face and the South-east Ridge-projects will be carried out.
2) F. C 4 (8,000 m) will be established just below the Rock Band in the South-west Face by May 12.
3) The summit attack from the South-east Ridge will be carried out twice, on the 11th and 12th of May.
4) Matsuura and Uemura are assigned for the first summit attacking members. The second attacking team will be consisted of a member and one of Sheerpas.
5) 350 kgs weigh of equipment and food will be carried up by Doi, Kamiyama and 16 Sherpas to C 5 of South Col.

The South-east Ridge;

The first summit attacking team started out B.C. on May 5 after five days' rest and they entered C 5 of the South Col smoothly on May 9.

On May 10, they established C 6 (8,513 m), the same site as the final camp of the 1965 Indian Expedition, followed by the supporting team of 5 Sherpas led by Kano. The second attacking team of Hirabayashi and the sirdar Chotare held C 5 along with Ando and 3 Sherpas on that day.

May 11, fine weather and no wind, just as our weatherman Osada forecasted. Matsuura and Uemura slept sound at the previous night taking 1 liter of oxygen per minute. They got up at 4:40 a.m., and had a modest breakfast which consisted of 5 pieces of marshmallow and a cup of tea. Then they started out at 6:10

with two bottles of oxygen (A.M.P.) on each back. They roped together taking 3 liters of oxygen per minute and approached to the summit spiritedly.

Reaching the South Peak (8,763 m) at 8:30, they found oxygen bottles with the mark of Union Jack which might have been left by Hillary and Tenzing in 1953. Here they changed the oxygen bottles and deposited the half consumed ones for their descent. At 9:10 they finally stood up on the summit of Mt. Everest. They buried the latest portrait of Narita together with a piece of cigarette, and enjoyed the splendid panorama of many Giants. They descended to C 6 at 11:40, where they met with the next attacking team and gave them some infomation. It was 17:30 when they arrived at A.B.C. along with the supporting crew led by Kono.

On May 12, like the previous day, the second attacking team, Hirabayashi and Chotare were blessed with fine weather.

They started off the final camp of C 6 at 5:55 with two bottles of oxygen on their backs. Taking in 3.5 liters of oxygen per minute, they followed the track of the first attacking team and reached the top of the world at 9:55. The wind grew stronger above the South peak, but it was not so intolerable. On the summit, Hirabayashi took a picture of Chotare holding the portrait of the King and Queen of Nepal. After staying at the summit for an hour, they started to decend. But at around 8,200 m, their oxgyen ran out and the supporting crew went up to them with new oxygen bottles from the South Col. They reached C 4 at 18:10 and returned to A.B.C. safely on the following day.

The South-west Face attempt, on the other hand, also progressed favourably after a few days' blank caused by the confusion of leadership.

Camp 4 was established with the duralumin framed platform upon the rock surface of 7,500 m on May 6. On May 8, Konishi and Yoshikawa explored the route till 7,800 m and two days after, Kano and Sagano climbed as far as 8,050 m along with 2 Sherpas. They used the fixed ropes which the previous party set out till 7,800 m. Then they scaled 45° snow and ice slope taking 3 liters of oxygen per minute onward. They found that snow and ice disappeared and changed to the rough surfaced rock with steeper incline, so they climbed without crampons upper from there. Passing 7900, the rock surface changed into brittle state and arrived at the junction of the two couloirs. They were forced to choose either of the two, the right couloir or the left one. There stood a small rock tower which looked like a dorsal fin. They took a route enterining into the left couloir via rock tower, and they reached the 8,050 m point just below the Rock Band after three pitches of 50 m ropes fixing from the junction. But it was the heighest point they reached.

On closer inspection, they found that a narrow couloir like a chimney would lead them through the huge Rock Band and out on to the Yellow Band.

They were assured to explore the route to the summit via the South-west Face at any rate, if they had ten days more of good weather.

However there occured an unexpected accident on that day; Kano was hurt on the back with a falling stone at about 17:30 while they were descending on the ice slope from C 3 to F.A.B.C.. Nakajima also was hurt a little on his right knee with another stone-fall in front of C 4 in the same afternoon.

When I heard of their misfortune, I didn't want them to take any more risks. It seemed very difficult to pass over the Rock Band in the remaining 10 days, but this accident was the main reason for calling off the assault via the South-west Face. On May 12 with the news of the successful second attack, I decided to abandon the South-west Face project and to put all efforts into making the third and fourth attacks from the South-east Ridge a success.

5. Fourth Stage (May 13—May 20)

—Failure of the third and fourth attacks from the South-east Ridge.—

The original plan of this stage was as follows;

1) The reconnaisance of the South Face between South-east Ridge and South Ridge will be carried out.
2) A. Yoshikawa, H. Sagano and R. Ito will reach the South Col after climbing the ice couloir located left of the Geneva-Spur.
3) On May 19, Tamura and Ira Tsering, the third attacking team will make an ascent from C 6.
4) On the same dey, Konishi and Phenjo, the fourth attacking team will attemt a rush-attack from C 5.
5) K. Kano with 20 Sherpas will carry up the loads to the South Col.

The carry-up operation was completed by Kano and 20 Sherpas on May 16. On May 17, Yoshikawa and two other members reached South Col at 13:00, climbing up the ice couloir directly from C 3 of Lhotse-Face. Fujita and others entered C 5 on the South Col for coming attempts, among the supporing members of which, there was a lady member Miss Watanabe who marked the highest by women.

On May 18. the weather was turning bad, but the preparation for ascent was set up according to the forecast of better weather on the following day.

On May 19, the weather turned out cloudy with snow. On the South Col, snow lay 30 cm deep and strong wind was blowing together with snow. Every member stood by for better weather, but Y. Fujita, the front leader, came to a conclusion that there was no possibility of the weather getting better and therfore gave up the third and fourth ascents.

On May 21, all of the members returned to the Base Camp and the mountaineering program ended.

6. Looking back the Expedition

JMEE '70 was over with two successful attempts from the South-east Ridge and an abortive attempt from the South-west Face. Moreover, the death of Narita, and the death of a porter by accident, has made it far from a successful expedition.

As a deputy leader of the Expedition, I would like to state some of the characteristics and problems of our expedition and the possibility of the South-west Face.

(1) Our expedition was a large force consisting of 39 members, including 9 reporters and cameramen. At the Base Camp the members amounted close to 120, including the Sherpas and Local Sherpas. There were more than 60 members living together even at C 1 and higher. A 39 member expedition was too numerous a number to work as a cohesive unit. One leader should not have more than 12 to work with otherwise there will be a lack of common bond amog the members. Furhermore, the pleasure of mountaineering will be stifled.

(2) Our expedition consisted of two distinct groups which had the same objective to gain the summit of Mt. Everest, but with a different route and different tactics. This scheme has made the expedition into such a large size. The necessity of such a big expedition should be considered with restraint in the future. I want to pay a tribute to the American Expedition which scaled the summit both from the South-east Ridge and the West Ridge. I have come to know hard it is to keep close coordination between the two teams with different tactics. If there is a need to set up an expedition with a similar set-up as ours, it is necessary to set up two distinct ones beforehand, under the powerful committee organization of the expedition. And there are reasons to believe that even such an organizational set-up has its own setbacks.

(3) The weather was unusual since there was scarcely any snow during the previous winter. Going over the records of our meteorologist who passed the

winter at Periche (4,243 m), there was scarcely any snow during his stay. This unusual weather caused some influences on our expedition.

a) Ice, which we had expected, did not form on the surface of the South-west Face. The rock surface, compared to ice, took us more time to climb. Furthermore, this lack of ice caused frequent falling rocks from the Yellow Band. As a result two of our members were injured.

b) As compared with the previous fall, the South-west Face became harder to climb, although the South-east Ridge was easier than expected. Blessed with good weather, we were able to complete two ascents. For the first summit-trial, both the health-conditions and the weather were in their best, and they made an ascent in just three hours from C 6.

(4) Accidents at the Ice-fall and its dangerous places.

As long as we climb Mt. Everest from the Nepal side, the Ice-fall lies in the way to every clmber who wishes to go higher. Nobody knows where or when the glacier collapse occurs. Its danger is fate to every Everest climber.

But if we look into the records of the past expeditin, the places where the accidents took place can be pinned down. The head part of the Ice-fall where the glacier inclines around at 6,100 m and the caved in area around 5,700 m are two of the most dangerous places in the Ice-fall. The fact that the accidents took place with John E. Brectenback AMEE (March 23, 1963), Sirder Phudorje JESE (October 18, 1969) and six Sherpas JESE (April 5, 1971) in these areas are threatening lessons.

To carry up safely the big tonnage of loads to the higher camps is an important factor for success. Furthermore, I have to add the fact that the existence of the Ice-fall is a great obstacle to the acclimatization of the members. The heartattack of Narita, along with sickness of other members, were partly due to the Ice-fall which prevented our free transit and any safe camping.

The altitude of the Base Camp at 5350 m seemed to be too high. Considering the obstacle of Ice-fall and a lot of investigation, we shoud have made "second acclimatization".

(5) The South-west Face and its possibilities

During the pre-monsoon season of 1971, the international expedition led by Mr. Norman G. Dyrenfurth, and composing of 30 members from 12 different countries, challenged the South-west Face but could only go as far as 8,250 m.

N. Uemura and R. Itoh, both JMEE members, also took part in this expedition. After coming back to Japan they stated, "If we had taken the route leading to the Right Ice Couloir, we would have needed 2 more camps till the summit…… Anyway, it may be possible". They looked assured that someday they will gain the summit from the South-west Face. But what is the key to succeed in trying for the summit from the South-west Face?

Carefully selected members, who have experienced well planned intensive training course will be good team members only if the team membership doesn't exceed 20. Instead of a support crew from the South-east Ridge or West Ridge, the assault team should plan for a round trip between the final camp and the summit, followed by a supporting team. This can result in better tactics, fewer members, and less expense than the previous plan. The final question to consider is the weather, along with the oxygen strategy.

* In the pre-monsoon season of 1970, two big expeditions entered Khumbu Glacier and Western Cwm from Japan. One is ours, planned and executed by the Japanese Alpine Club. Another one is officially called "The Japanese Everest Skiing Expedition 1970" which has no relation with in its organization.

JESE '70 consisted of 34 members including 2 skiers and 10 film cameramen.

Their object was to perform the descent from the South Col by Y. Miura, a professional adventure skier and to take Cinema-Scope film to introduce the landscape of Nepal including the ski-descent of Miura.

On May 6, Miura accomplished his descent with parachute from the South Col, although he tumbled down on the slope.

Makalu 1970

——The First Ascent from the South-east ridge——

by Makoto Hara and Masao Asami

Forward

It was in 1965 that Makalu expedition was originally planned. The project, however, could not be realized by the prohibition of Himalayas mountaineering of Nepalese Government. The core members then turned the purpose to ascend Mt. Aconcagua from the South Buttress in South America in 1966. After succeeded this project, we waited for three years to climb Makalu.

In 1969 we sent reconnaissance party (organized by 5 members, the leader, M. Matsuura) and entered Kathmandu on Feb. 24. They spent 20 days to get permission from Nepalese Government. On March 13, they got it with the new mountaineering code. Staying until May 9, they settled B.C. at Barun Pokhari and examined various kinds of conditions for the main expedition.

In 1970 The Japanese Makalu Expedition 1970 was organized. Most members were from JAC-Tokai and backed by Nagoya financial group.

The party was consisted of two groups, the mountaineering group and the scientific expedition group. The former group began its activity from March. The members are;

Members

Masao Kumazawa	(Age : 65)	Commander General
Yohei Itoh	(〃 46)	Leader
Makoto Hara	(〃 33)	Mountaineering Leader (Acting Leader)
Yukihiro Ichikawa	(〃 33)	Summit Attack Leader
Hajime Tanaka	(〃 32)	
Yuichi Ozaki	(〃 30)	
Masaji Matsuura	(〃 29)	
Noboru Onoe	(〃 26)	
Yonosuke Kawaguchi	(〃 26)	
Toshihiro Goto	(〃 26)	
Masakatsu Yoshihara	(〃 26)	
Masaru Hasegawa	(〃 26)	
Atsutaka Hashimoto	(〃 25)	
Masao Koshiyama	(〃 24)	
Hiroshi Ikuta	(〃 24)	
Masao Asami	(〃 21)	
Naoko Nakaseko, Mrs.	(〃 32)	
Yoko Ashiya, Miss.	(〃 25)	
Shiro Shirahata	(〃 36)	Photographer
Hisamitsu Tani	(〃 36)	Asahi reporter

Sherpas

* Mingma Tshering	(Thame)	Sirdar
Ang Tshering	(Namche)	Chief cook

Pasang Nima	(Thame)	Assistant cook
* Karma	(Taktod)	High-altitude porter
* Dorje	(Wallungcheng)	〃
* Lhakpa Tenzing	(Namche)	〃
* Ang Nima	(Thame)	〃
* Dawa Tenzing	(Namche)	〃
* Lhakpa Tshering	(Namche)	〃
* Ang Norbu	(Namche)	〃
Pemba Norbu	(Lomjo)	〃
Dawa Thundup	(Namche)	〃
Lhakpa Gelbu	(Namche)	〃
Da Nu	(Chaurikharka)	〃
Finzo	(Thame)	〃
Pasang Dorje	(Namche)	〃
Phinjo	(Namche)	〃
Gyaltsen	(Thame)	〃
Furba Tenzing	(Thame)	〃
Dawa Norbu	(Phorte)	〃
Lhakpa Dorje	(Thame)	〃
Pemba Gyaltsen	(Chaurikharka)	〃
Ngati	(Taktod)	〃
Pasang Dawa	(Pangboche)	〃
Nawang Tenzing	(Namche)	〃
Pasang Illa	(Pangboche)	Mail runner
Dawa Norbu	(Thame)	〃
Dorje		Kitchen Boy
Sherki		〃
Ang Tshering		〃
Temba		〃
Dawa Norbo		〃

Liaison Officer

G.C. Thakur

Note : The high-altitude Porters marked* are all excellent sherpas who showed the best of their abilities at the upper part of the mountain. Lhakpa Tshering, however, fell to death at Peak 29 in the post-monsoon, 1970.

Ascent

15 members arrived at Kathmandu on Feb. 15, and on 20th, flew to Biratnagar and reached Dharan Bazar within that day. From 22nd, having organized two caravans hiring 380 and 60 porters, we began to carry 11.6 tons of cargo to Barun glacier. The two groups arrived at Sedoa, the last village, on March 4 and the next day.

We intended to cross the Shipton Pass, the most difficult point to Barun, in early March. By the American (1954) and French (1955) parties' experiences in late March were reported so hard to pass. We started from Sedoa on March 9, persuading porters (for instance supplied shoes), to still heavy snow covered Shipton Pass. It was March 17 that the main party finally crossed over the pass. But one-third of the loads were still left alongside of the trail. Finally, on May 24, the main party arrived at B.C. on Barun glacier. It took a month for this approaching march.

Without rest, we began ascending works. On March 27, we settled C 1, at 5,300 m in the ice-fall. On 30, set C 2 at 5,900 m at the end of ice-fall. On April 1 we set C 3 (A.B.C.) at 6,500 m right under the South Col. The works to make C 3 proceeded smoothly. However, the route exploration encountered sudden difficulty, that is, how to climb the steep slope running up to the ridge right above C 3. And also, many members began to afflict the height sickness.

Abandoned to climb straight up, we opened a route traversing to the left. On April 18, 6 members tried to climb from C 3. They divided into two teams and tried rock-wall, the latter team successfully got up on the ridge. On the next day, they discovered fairly spacious site for tents on the ridge. On April. 24, established C 4 on the dome at the height of 7,100 m. It was the 23rd day since setting C 3. We reorganized the supply system to carry up the loads efficiently at this stage.

The snow ridge upward from C 4 starts with an easy smooth slope first, and then run into a difficult knife-edged ridge, and further up stands against us the rock-wall of the Black Gendarme, the worst obstacle we had ever encountered. Although at first, the wall seemed not so hard to climb, we spent full 17 days of attack to climb in strong gusts of wind.

On May 11, Tanaka and Ozaki went over the Black Gendarme, and discovered a small rock cave on the ridge, where they set up C 5, 7,500 m of height.

On May 12, they climbed up to the saddle over a peak of 8,000 m. They decided to site C 6 there.

They also reported that they discovered easier route coming from the glacier on the north side up to the saddle. According to this report, Kawaguchi and Goto at C 4 investigated the northern glacier. They reported that the reported route seemed far easier than that of the Black Gendarme and also the East ridge seemed easier to climb than the South-east one. On May 13, we discussed over the change of the route through walkie-talkie among B.C., C 4, and C 5. Nobody had any assuarance of the new route, then acting leader Hara finally made a decision that to ascend from the South-east ridge and new route, only for carrying loads.

Fortunately from May 8 we had a windless fine weather but the monsoon was just behind us, we hastily worked.

On May 15, C 5 was placed on the glacier at 7,300 m. On May 18, Kawaguchi and Goto with two sherpas went up from C 5, to the saddle and set up C 6 about 100 m above the ridge (7,950 m).

Unexpected accident happened at the stage, their walkie-talkie became useless. Without communication, Kawaguchi and Goto explored a route on the rock-wall from C 6 toward the summit on 19th and 20th of May. They fixed ropes up to 8,100 m and went on trial climbing in the heavy snow. While another team went on to C 6, they returned by high altitude sickness. Food stock got short, and with heavy snow, Kawaguchi decided to attack the summit on 21st of May by his own judgement.

The pair left C 6 at 4:30 a.m. and headed up for the summit with a oxygen bottle on each back, which ran out at 8,300 m, but continued climbing. The weather got worse in the afternoon, strong wind with snow blowing up toward the summit. Untill 6:45 p.m. they actually got pretty close to the summit, but their accumulated fatigue came to the limit.

Kawaguchi looking at a summit-like peak about 300 m ahead of him, abandoned further go up, came back to 8,300 m and made a bivouac in a snow-cave dug out on the ridge.

On the other hand, from C 5, Tanaka and Ozaki reached C 6 in the evening of that day. They informed to B.C. that Kawaguchi team were missing. All the other members had the most deppressed night.

On May 22, Tanaka and Ozaki found Kawaguchi team and returned C 6 at 6:30 p.m. On the same day, Ichikawa and Asami from C 5 climbed to C 6 through the South-east ridge. They toiled up through the heavy snow fall, got into C 6 at that night.

They had two bottles of oxygen left at C 6. On May 23, Tanaka and Ozaki after a short nap, left C 6 at 2:30 a.m. Fortunately the weather turned out to be fine, they could see the summit in the star-spangled sky. At 5:00 p.m., 8,300 m, just near the end of the wall, their oxygen ran out completely. Still they kept on climbing and stood up on the summit of Makalu at 7:10 p.m. They came back to C 6 at 3:30 a.m. of 24th in the moon light.

Although Ichikawa and Koshiyama had been preparing for the third attack to the summit, little stock was left in the lower Camps and the weather began worse, the B.C. ordered all members to evacuate the mountain.

Conclusion

It took 69 days from the settlement of B.C. to the evacuation, delayed 23 days than our original plan.

It was a long toil-taking traverse of the Himalayan ridge running over 8,000 m peak, in addition to that, the South-east ridge had a distance over 10 kilometers. That became the major obstacle for supply operation. The crew of 25 sherpas was too small, at least 35 were needed. On the other hand, 16 members were too many, 10 or 12 might have been suitable.

Dhaulagiri (Autumn of 1970)

By Tetsuji Kawada

To the Giant of Himarayas

In June of 1965, after gaining the summit of Salcantay, the giant of Peru Andes, the party members were all drunk at the B.C. and cried "next, we will gain 8,000 m". After this expeditin, though the Himarayas climbing was prohibited, we, the volunteers of graduated from Doshisha University Alpine Club, waited the time to attack Himalayas. Gradually, our aim concentrated to Dhaulagiri, the Giant of Himalayas and said to be the hardest to approach.

According to the harvour strike of Calcutta, we were obliged to transport our loads to Chittagong of Pakistan, and via Dacca to Kathmandu by air. Although this route had never been used by mountaineering party and we had anxiety, the transportation proceeded very smoothly. We arrived at Pokhara via Kathmandu on Aug. 15.

The approach

Our caravan started on Aug. 20 in light rain, over 200 porters' long march started from Pokhara. On Sept. 1, we came to Gorge of Mayandi Khola. We had already been staying at 4,000 m of height and felt a little headache. Settled a camp on the highest grass area, named the resting camp (3,900 m).

Sept. 3 was the last day of the caravan, porters entered into glacier with bare feet. I felt something miserable rather than bravery.

Mountaineering Activities

Sept. 6; Under the clear sky we began our climbing activities from the rest camp, and went up to B.C. after acclimatization in high altitude. At first, we could see whole the scene of Dhaulagiri, impressed only extraordinary suppression. At the foot, "Aiger" rock peak surrounded, and the above, completely covered with ice and snow. The only entrance, was a piecefully teared ice-fall, seemed to me that Dhaulagiri shut all the doors and windows against us.

Sept. 12; after six days of labour, we passed the route through ice-fall to the upper part, settled C 1 at 5,000 m, all the members and Sherpas carried up loads there. On the 16th, A team entered in C 1. During the carrying up, the conditions of ice-fall frequently changed, very busy day for reconstruction team. A team's task was to settle C 2 (ABC) at the North-east Col above the second ice-fall in the center of Mayandi glacier. They were troubled with hidden clevases.

Sept. 20; B team, consisted of 4 members and 2 Sherpas entered into C 2 with the support of A team. C 2 located at 5,700 m of height, the saddle of wide snow field. From there, a wide ridge continued to the shoulder of Dhaulagiri. B team's task was to settle C 3 at the protruded North-east ridge.

At the first attempt when they lined to cross a wall, suddenly the snow under the feet moved and at once they were flown in the snow. Fortunately, stopped just by the crevas, they all were safe instead of the victims of their glasses or watches.

Sept. 27; Backed up by the B team's support, C team (4 members and 2 sherpas) reached C 3 (6,300 m). During this time some members fell in height-sick, 6,000 m seemed to be the second wall of acclimatization.

Above C 3 the slope was steeper than had expected, and had few places to rest. C team withdrew from 6,800 m on Oct. 2. Again, A team attacked, at last settled C 4 at 6,900 m and fixed ropes between C 3 and C 4. After 3 days of heavy snow, we eagerly took away the snow on the route. During this work once again we encountered snow slip just after we dag the fixed ropes, but again served by fortune. We came back to C 4 on 13th.

We originally planned to get to the summit before 15th, but were forced to change it, and very little time left behind us.

To the summit

We climbed up again from 14th. The end of the North-east ridge was so steep snow wall that we could hardly found the route.

Oct. 15; Again attacked the wall, and could stand on the shoulder and stretched the fixed rope. On the 16th, Kawai and Yasui entered in C 5, 7450 m, for constructing the route to set AC. Especially the youngest Yasui worked hard to make the route. On Oct. 19; Kawada and Lhakpa Tensing with a strong support climbed up and set AC at 7,800 m. Only one day left to attack the summit, and Kawada and Lhakpa Tensing was decided for the attacking members.

Oct. 20; Tensing got up at 3 a.m. I frequently woke up during the night, and ate rice powder knead with hot water, I repented that I had forgot to take "Raamen" (Chinese styled noodle soup for instant cooking). At 7 a.m. we left AC with two bottles of oxygen (both for my use). One ran out about 30 minutes' use near 8,000 m. In the meanwhile we met a wall climbed up by three pitches, at last went up to the ridge, there, I changed oxygen bottle and continued to climb the ridge. The Sirdar Lhakpa Tensing said the summit pointing out a big peak, I denied that it was the false summit on account of the memory of photographs, and continued the climbing on the slender ridge. After crossed over some little peak, we suddenly found the summit, without pause, hurried to step forward to that.

Conclusion

Two days later we could return to B.C. Our expedition can be said the perfectly harmonious ascent by all the members and also the Sherpas.

Members were :

Leader	Tokuhu Ota	(58)
Deputy leader	Seiji Imanari	(30)
Climbing leader	Tetsuji Kawada	(30)
Member	Tsukasa Kawano	(30)
	Masami Ogawa	(28)
	Yasuo Kawai	(30)
	Reiji Horie	(27)
	Naoto Shiizuka	(29)

Masao Nishimura	(28)
Kiyohiko Miyagawa	(27)
Toyoji Wada	(24)
Hiroshi Ishikawa	(23)
Tadashi Yasui	(21)
Hideya Yamatsuji	(33)

P-29, 1970

by Senya Sumiyoshi

We, the Osaka University Mountaineering Club, has sent four expeditions to P-29 (7,835 m, 25,705 ft) for the last ten years and finally succeeded to gain it in the post monsoon season of 1970.

P-29, sometimes called Manaslu II or Dakura Himal, is located between Manaslu (8,156 m) and Himalchuli (7,893 m). Yet it was nearly an unknown peak when we started our expeditions in 1961. P-29 is not visible from many distant points, hidden from a view most of the Marshandi Valley in the west and the Buri Gandaki in the east.

The first party, in 1961[1], to explore the western side by way of the Marshandi Valley found no possibilities to climb from this side, but discovered the "Dona Khola" and the "Thulagi Glacier" originating from the sanctuary between Manaslu and P-29. In 1963[2] we sent a small party to the east side of P-29. After exploring the Pungen Glacier, they ascended the east ridge and obtained the expecting prospect. The third attempt was made in 1969[3] by the expedition which was led by Dr. Sumiyoshi. The trial had to be abandoned at 7,400 m (22,275 ft).

In 1970[4] under the leadership of Professor S. Mizuno and Dr. Sumiyoshi, climbing route and each campsite were almost the same as the last year, but the climbing period was about ten days earlier than in 1969, the camps were settled as follows.

On the 18th Oct., fortunately a suitable campsite was found in a crevasse rund at 7,500 m (24,600 ft), where camp-5 was established by five members and two Sherpas, Hiroshi Watanabe and Lhakpa Tsering Sherpa remained there.

On the 19th (cf. photograph), blessed with clear sky and ceasing wind-blow

Comp No.	date	altitude	Comp No. and date in 1969
Base-camp	1970 Sept. 12	4,000 m	BC Sept. 22
Camp-1	Sept. 20	5,100 m	C① Sept. 27
Camp-2	Sept. 23	5,800 m	C③ Oct. 5
	*		*
Camp-3	Oct. 9	6,250 m	C⑤ Oct. 18
Camp-4	Oct. 11	6,900 m	C⑥ Oct. 24
Camp-5	Oct. 18	7,500 m	

* All members and Sherpas came down together to the base-camp for the purpose of an acclimatization.

since the previous night, the two left camp-5 at 6 : 00, leaving a message with wireless phone. Almost all the course they took could evidently be observed from camp-3. Through a high-power telescope, fixed on a tripod, Dr. Sumiyoshi was watching every exertions played by the two; Watanabe leading the way all through. It had been expected that the most difficult stretch would lie at the right of exposed "Frog Rock". It took about four hours to pass the difficult part, and at 11 : 00 when they rested on an icy ridge above the rock, observers felt easy, expecting their success. Leaving that place, their progress became much faster and they gained the snowy dome at 13 : 15, where they have nodded and embraced each other as if they got to the summit.

Their figures were lost behind the snowy dome until 15 : 00 when they were found steadily descending. The route was already in the shadow. They were found at the place where they had rest in the morning (11 : 00) about 16 : 40 At that time, all the members and the Sherpas were already excited expecting their success. At the next moment the Sirdar Illa Tsering, at camp-4, gave a cry, seeing their falling.

When the two were found lying on the icy slope only 15 minutes' distant on foot from camp-4, there was no way to save their lives.

They were still roped together in spite of the fall of nearly 700 m in vertical measurement. Watanabe's ice-axe was found aside, broken at the lower half, but still leaving remains of slender string, which was supposed to have tied the banners of Japan and Nepal at the summit. The rucksacks, cameras, and containers of the exposed films were found damaged. A piece of fist-sized stone was found aside, which had never be seen before.

The other members were in good physical conditions to carry out the further assault, so they were much disappointed when it was finally decided to give up the further attempts, taking in consideration of the villagers' strong feeling not to leave the two bodies on the sacred mountain of their religious respect; it was evident to take a considerable time and effort in order to bring down the two bodies from the high altitude of 7,000 m to the base-camp. Moreover, Illa Tsering, the Sirdar, excited by his brother's death happened in front of him. All the Sherpas standing at camp-4 or camp-3 were also in panic, owing not only to the so fresh memory of witnessing their fall, but also to the experience of their slippage on the route (camp-4~camp-5).

On the 23rd, two remains were cremated near the base-camp, after a funeral ceremony in presence of the highest Lama of Sama village.

Notes : ——

(1) Sangaku, J.J.A.C. vol. 57 (1962) pp. 72-92

(2) Sangaku, J.J.A.C. vol. 59 (1964) pp. 151-162

(3) Sangaku, J.J.A.C. vol. 65 (1970) pp. 114-120
Am. Alpine J. vol. 17-1 (1970) pp. 182-183

(4) Am. Alpine J. vol. 17-2 (1971) pp. 439-440

Members : ——

Prof. Shotaro Mizuno (leader, age 63)
Dr. Senya Sumiyoshi (deputy-leader, 43)
Hideo Tai (32)
Reiko Saigusa, Miss (37)
Akihiro Toyosaka (29)
Shuichi Ozawa (27)
Hiroshi Watanabe (26)
Yoshiteru Ohno (26)
Yoshiki Tanaka (23)
Toshio Ishihara (24)
Yoshio Kuroiwa (22)
G.S.K. Thapa (liaison officer)

Sherpas : ——

Illa Tsering (Sirdar, Namche, age 39)
Lhakpa Nurbu (Thame, 33)
Lhakpa Tsering (Namche, 34)
Ang Tsering (cook, Namche, 46)
Ang Namgyal (Thame, 35)
Karsang Thile (Namche, 36)

Tenzing (Namche, 32)
Passang Nurbu (Namche, 29)
Kami Nurbu (Namche, 27)
Ngati (Junbesi, 22)
Local Porter Sherpas : 6
Kitchen-boy : 2

The First Ascent of the Main Peak of Churen Himal in 1970

by Ryozo Yamamoto

We, Academic Alpine Club of Shizuoka, Japan, climbed the main peak (west peak) of Churen Himal (7,371 m) and the cental peak (about 7,371 m) on the 28th and the 24th of October in 1970 respectively. We planned for the first time in 1963 to climb Churen Himal but unfortunately could not be materialized until 1970.

The mountaineering history of Churen Himal dates back to 1954, when James Roberts first set foot inside this area from the north through Kaya Khola. In 1962, a Japanese party climbed up to the height of about 5,750 m as a trial climbing from the Kaya Khola, almost the same route as taken by James Roberts in 1954. On the other hand James Roberts pioneered the southern area of Churen Himal for the first time from the west through Kaphe Glacier in 1962 and the Royal Air Force Expedition to Dhaula Ⅳ passed through the same route in 1965.

After the release of the Nepalese Government prohibition, the first party to Churen Himal was the Italian expedition led by Paolo Consiglio in the post-monsoon of 1969. They tried to take a steep western ridge to the main peak, only reached the point of 6,500 m, because of the insufficient time they had.

During the premonsoon season of 1970, two parties established base camps at the foot of Kaphe Glacier. One was of a Japanese party to Dhaula Ⅵ, and another of a Korean party to Churen Himal. Later, a rumour was spread that the East Peak was ascended by the Korean party at the end of April.

Among the possible routes to the summit, we decided to take the south or southeast approach ascending from the west through the upper Kaphe Glacier.

On the 9th of September 1970, all of our six members arrived at Kathmandu. The team was consisted of, the leader : Takashi Serizawa (46 years old), Manufacturing Engineer, Climbing Leader : Ryozo Yamamoto (31) Industrial Engineer, Atsushi Oishi (32) University Researcher, Masayoshi Fukui (31) High School Teacher, Kozo Hasegawa (28) Chemist and Eiji Doma (23) College Student. Seven sherpas from Himalayan Society were Ang Nobru as a sirdar, Pemba Gyalzen, Zangbu from Namche, Dawa Sunder from Chaurikharka, Ang Thendi from Thame, Nima Norbu from Pangboche and Wangyal as a cook.

Two days after the arrival at Kathmandu, the party could fortunately fly to Pokhara by a chartered flight. We left Pokhara on the 12th of September, employed 43 porters with wages of 15 Rs. a day. After four days trekking, we reached Beni, and added further 3 porters to carry local provisions.

On the 19th of September, all porters were replaced in Muna, except 5 porters from Pokhara. As a result, a good progress was made in our trekking from Muna onward, and arrived at Gurjakhani on the 21st of September.

On the 24th of September, a wonderful view of Putha Hiunchuli and the west face of Churen Himal could be seen before us after 13 days' trekking. The base camp was set up at 4,100 m, the same place as the Italians' in 1969. There was also a base camp near us of Fukuoka party aiming at Dhaula IV. As our arrival at the base camp was slightly delayed, we had to carry loads hurriedly to the higher camps.

Camp 1 was established on the following day at the height of 4,750 m on Kaphe Glacier, where we found a safe route to climb the summit through the Kaphe Glacier.

So, we decided to select the small rock ridge to Gustung North so called "Toyama Route" up to the height of 5,700 m. Oishi and Doma left Camp 1 in the morning of 1st of October and established Camp 2 on the same day at the height of 5,300 m. C 2 was clearly looked up from C 1 through binocular. After the setting of C 1, they had to go down owing to the insufficient acclimatization. The route from C 1 to C 2 lies in the seracs area and on a rock ridge not so steep.

The heavy snow-fall made us more difficult to go on. The route from Camp 2 to Camp 3 lies on a steep rock ridge and a large snow field of the upper Kaphe Glacier.

On this route there was a snow face of about 100 m high just above Camp 2 and a steep and rocky rib went upward which could only be climbed with the help of about 300 m of ropes up to the height of 5,700 m. To establish C 3, a party consisted of Yamamoto, Fukui and two sherpas had to cross a large snow plateau. C 3 was set up at 5,650 m high, at the foot of west face of Dhaula VI, on the 5th of October.

Camp 4 at 6,200 m was built on the 11th of October by Fukui and two sherpas on the western side of Dhaula VI. We fixed the ropes of 200 m on the steep and snowy upper part of triangular rock ridge between the route from C 3 and C 4. In the same way, we succeeded on carrying loads up to C 5. On the 17th of October, Fukui and Hasegawa tried to establish C 5 on the upper plateau lying under the East Peak, but they could only reach as far as the point of 6,480 m high. C 5 was set on the following day at the height of 6600 m. There was only one way for the summit from the south-east side through the upper plateau. It was very unfortunate that Fukui got exhausted at C 5, becase he was one of the most powerful summiters in our team. He was immediately noticed to come down to C 4 to take a rest for a while. Instead of Fukui, however, Doma and two sherpas reached C 5 to arrange C 5 (Attack Camp).

Three days after, C 6 was established at the height of 6,800 m. The news from C 6 was very encouraging for all of the members. Between C 5 and C 6, the ropes of 400 m were arranged for descending from the upper plateau down to the bottom of the cirque of East Peak. Both the first summit party consisted of Fukui and Hasegawa, and the second party headed by Doma left C 4 in the morning of 22nd. Both parties reached C 5 in the evening of the same day. It seemed to us that everything proceeded well on schedule. On the 23rd of October, the first summit party supported by two sherpas progressed to the highest Camp. Fukui and Hasegawa left C 6 at 5 : 00 a.m. of the following day for the first summit party. The weather was excellent, and the summit attack was carried out in a fairly good condition. The party reached the top ridge at 10 : 40 a.m. After crossing it, the party climbed the snow ridge of about 50 m before they stepped on the summit of Central Peak (about 7,371 m) where they stayed for half an hour. They thought that the Central peak would be the main peak (West Peak). Observing that anoter peak (west peak) was of the same level as the Central, they returned back to Camp 6. On the 26th of October, the second party consisting of Doma, Sirdar Ang Norbu and Zangbu reached again the summit of Central Peak from the same route.

It was unlucky that we could not attack the main peak at a stretch. As a matter of fact, the climbing leader could not give adequate instructions to the summit party, due to the trouble caused by the lack of dry battery of the walkie-talkie. So, the climbing leader left C 4 for C 5 on the 24th after observing the second summit party's activity through his binocular in order to reorganize the attacking programme to the main peak. As a result of the reset, the third summit party consisting of Hasegawa and Ang Norbu left the highest camp at 6 : 00 a.m. on the 24th. Through the long traverse of the south face of main peak, they climbed directly to the summit and stepped on the very summit of Churen Himal at 11 : 13 a.m., on the 28th of October, 1970. The summit was like a spearhead. As the provisions in higher camps had been used up, we had to give up attacking the East Peak from C 5.

On the 31st of October, all members were at Base Camp. The party returned to Pokhara on the 13th of November, and came back to Kathmandu safely on the 17th of November.

Remarks :

The news reporting that the East Peak of Churen Himal was first ascended by Korean Party on the 29th of April, 1970 has still doubts in many respects, as a result of our careful study of the documents written by the Korean Party. The report regarding the aforesaid doubts has already been published in Japan. Our detailed report on the attack of the main peak of Churen Himal clearly reflects that there are still many of doubtful points in the Korean report.

The First Ascent of Dhaulagiri VI, 1970

by Tetsuya Nomura

Forward

We, Kansai Mountaineering Club, sent an expedition party to the west region of Dhaulagiri Himal in pre-monson season, 1970.

This region includes many of the unclimed high peaks and is one of the most attractive area in the Himalaya. In 1962 James Roberts made reconnaissance for Dhaulagiri IV from the west via Kaphe Kohla, and in 1965 he led the Royal Air Force Expedition to this peak. However, the party had to return from the upper basin of the Kaphe Glacier because of avalanche danger. Their contribution was that J. Roberts found Dhaulagiri Ⅳ located some five miles away from the peak they had attempted to climb to the northwest. (Hereafter we will call the latter peak Dhaulagiri Ⅵ.)

In 1970 we gained the summit of Dhaula Ⅵ (7,268 m), but failed to continue the assault to Dhaula Ⅳ; the long, sharp ridge to Dhaula Ⅳ would have demanded us more supply of food and climbing gears enough to establish another camp.

Ascent

On March 7, all the 8 members (T. Nomura—Leader, T. Yamane, H. Nakamura, M. Mizutani, M. Iwasa, S. Yamamura, S. Kimura, and S. Kawazu) arrived at Kathmandu with 500 kgs of mountineering gears.

After necessary arrangements—purchase of some provisions and employment of sherpas (Sirder Linsin, cook Nurbu and Jamboo)—we left Kathmandu for Pokhara on March 17.

On March 19, we started our march with 37 porters. It was very hot for several days, but a splendid landscape of Annapurna Mountains soothed us. On 23rd, we arrived at Beni, the junction of Mayandi Khola and Kali Gandaki, and on 25th arrived Baglung, the last shopping place on our way to the base camp. We found shoes, clothes, kelosine and even condensed milk here. On 29th, we arrived at Gurjakani, the last village on our march.

On April 1, we established base camp near the end of Kaphe Glacier at the height of 4,100 m. On April 2, we went into action. The weather during our mountaineering was generally good. Fine in the morning, some snowfalls in the afternoon and clear up again in the evening was the typical pattern.

On April 3, three members and two sherpas moved up to camp 1 (4,700 m). The ice falls above camp 1 were technically not so difficult to cross but numerous clevasses and seracs threatened us. On 4th, we set up camp 2 (5,500 m) on a small terrace which allowed of only one tent, at the middle point of crumbling rocky ridge diverged from Gustung Himal.

On 7th, we established camp 3(5,700 m) on the north ridge of Gustung Himal, which was our advance base camp.

On 9th, all the members gathered at camp 3, and we began to attack Dhaulagiri Ⅳ in a full scale. Between camp 3 and the foot of the side ridge of Dhaulagiri Ⅵ, there lay a vast ice basin with many hidden crevasses—it took about 3 hours to across the basin. From the foot of the side ridge, up to the south main ridge of Dhaulagiri Ⅵ, the lower part formed rock cliff and the upper part was steep ridge of ice, and was more formidable than had expected. We needed three days and spent 800 m of ropes to set fixing ropes over this cliff.

On 13th, we could establish camp 5 (6,300 m) on the plateau of rock cliff.

It was fine but windy on April 14. Kimura and Nakamura went up the main ridge to make a route. As the lower part of knife edged ridges was not so difficult, they could advance continuously. But gradually the slope became steeper and snow became harder, and finally it became ice wall near the main ridge at about 6,800 m. of height. Striking many ice pitons, fixing ropes fast, they continued to climb. After three hours struggle, they climbed the ice wall and reached the south main ridge. On April 15, it was fine but strong wind was blowing. We took rest all the day because most of the members seemed to get tired with incessant hard works since we began mountaineering. On April 16, 6 members climbed up with necessary gears for camp 6. At noon they established camp 6 at the terrace of the main ridge about 7,000 m of height. But after some while, it began to snow heavily and the route back to the camp 5 was dismissed. It seemed dangerous for support members to going back to C 5, so all the six members had to stay at C 6. Lucky for them, it was not so cold that night, even two support members who had no sleeping bags could sleep well only in their feather jackets.

On April 17, the weather was recovered and the sun shined on Dhaulagiri VI. At 9 o'clock, Nakamura, Kimura, Yamamura and Kawazu started from C 6. The tasks of attack party were, first, to get the summit of Dhaulagiri VI, the second, to find the route to Dhaulagiri IV. Above C 6, there was comparatively broad ridge where crampon caught well, so they took little difficulties in climbing. Difficulty was only in breathing. They climbed cautiously and slowly saving energy. At 11 : 30 they gained the summit of Dhaulagiri VI.

One of our aim was accomplished, but Dhaulagiri IV towered far away from there. On route to Dhaulagiri IV, there was a series of snow-eaves and steep ridge of ice near the col. And the last part near the top was craggy face which seemed to demand us difficult rock climbing. It was apparent that shortage of climbing gears was fatal for us. Moreover I was afraid of the psychological condition of the members—Relaxation after getting one unclimbed peak often leads accident. So I abandoned to attack Dhaulagiri IV this time, and decided to make another challenge someday in future.

On April 19, all the members came back to base camp, and left there next day.

Annapurna Ⅲ 1970

by Michiko Manita

Forward

Our expedition was named the Japanese Female Annapurna Expedition. As organized by only females from various mountaineering clubs, each member had scarce acquaintance each other before. In 1969, Miyazaki and Tabei centered to organize female party to Himarayas. Therefore the plan started from the very originating point, when and what mountain (whether to attack 8,000 m or the unclimbed) and the finance.

But we decided rather smoothly to climb Annapurna in the pre-monsoon season of 1970, for almost all the members had never experienced higher than Mt. Fuji (3,776 m). In April, the original plan was made up and the permission by Nepalese Government was gotten rather smoothly in October.

In the next year, after the loads were transported to Calcutta serious problem has occured causing a disease of a member. The trouble grew large and at last 5 members withdrew the expedition.

Nine members gathered Kathmandu on 18th of March.

They are :

Leader	Eiko Miyazaki	(36)
Deputy leader	Junko Tabei	(30)
Member	Eiko Hirano	(37)
	Chieko Urushibara	(31)
	Hiroko Hirakawa	(29)
	Reiko Sato	(29)
	Michiko Manita	(28)
	Morie Yamazaki	(25)
Doctor	Kyoko Ōno	(31)

Caravan

On March 19, all the members, Sherpas and 3.5 tons of loads flew to Pokara by chartered two DC 3 s. We smoothly employed 144 porters including 5 female and started our caravan on 23rd of March. Without any troubes with porters, the caravan went on rather intimately. On 27th we passed Chomron. It was well known that the village prohibited the entrance of female, though we could pass the village smoothly contrary to our anxiety. (On the way back we were welcomed and lodged in this village.)

From the 8th day of our march, we entered into snow. Then, the porters reduced in number, though we increased their wages. And on the 10th day only 22 remained. Carrying the loads by ourselves, on 31st of March, we at last reached the point 3,600 m, the entrance of the South glacier of Annapurna.

Documents of ascent

April 3 Set up B.C. at 3,750 m, on the morain of the entrance of the West glacier and began to carry up the loads.

8 Set up C 1 at 4,350 m, while continuing to carry up the loads to B.C. and searching a route.

10 Set up C 2, left below the huge buttress at the entrance of the East glacier.

24 Set up C 3 at 5,300 m after the 3 days research. It was located above the ice-fall of the center of the East glacier. There were many crevasses around there.

28 Set up C 4 at 5,600 m above the buttress.

May 1 Transfered C 4 to 5,900 m.

9 Set up C 4′ at 6100 m just below the ice-fall, for it took 3 hours to climb up there from C 4.

16 Opened the route to C 5. 3 attack members were chosen (Tabei, Hirakawa and Miyazaki).

18 Attack team reached the col with Sherpas from C 4′ and set up C 5 at 6,800 m, after 11 days of toil, climbed up 55 degrees of ice wall there, we made fixed rope from tent to tent.

19 Tabei and Hirakawa with two Sherpas started from C 5 at 8 : 10 a.m., first went on to the north side of the ridge and after climbed over the cornice, from the south of the ridge; got to the summit at 2 : 45 p.m. The temperature was minus 16 degree, could not see any scenes from there by deep gass. After an hour's stay, they returned to C 5 at 5 : 20 p.m. safely.

May 20 Abandoned second attack because of the bad weather and shortage of foods.

25 All the members returned to B.C.

Conclusion

Our original purpose, to gain the summit of 7,000 m mountain in Himalayas was successfully accomplished as the first attempt by female party. But in my mind something unclear still remains.

It is usually said that the gaining the summit is the successs of a team work. From the beginning of our expedition, we had experienced several troubles. Even after gaining the summit, the troubles still remained in our minds. It may be the characteristic of "mixed party". The higher the mountains we want to climb, the more the human relations become important.

By this expedition, even though we have many things to reflect, we have a confidence that to gain 8,000 m summit by female only, will not remain in "dream" anymore.

Kanjiroba Himal 1970

——The first ascent of the main peak (6,882 m)——

by Hiroshi Okuda

In the post-monsoon, 1970, the joint party, which organized by Osaka City University Alpine Club (seven members) and Tribhuvan University (two members) went to the Kanjiroba Himal in the western Nepal.

The party consisted of ;	Kazuhisa Jokei	(29)	leader
	Ichiro Sato	(25)	deputy leader
	Shinichi Suwa	(25)	doctor
	Hiroshi Okuda	(23)	
	Masayuki Goto	(22)	
	Hirotada Sawai	(22)	
	Munehiro Sawada	(22)	
	S.L. Amatya	(34)	
	P.R. Sharma	(31)	

The former aimed at gaining the summit of the main peak (6,882 m). The latter's purpose was the cultural investigations about inhabitants' life of that area.

Mountainneering of the highest peak was as follows; two routes had been tried to climb the highest peak. One was to the Pukshang Khola or Ruka Khola from the north. But we took a different route to the summit over the Patrasi Himal, judging from Tyson's map and photographs by Kobe College of Commerce's party in 1969. On September 1 and 3, we had a chance to fly to Surket from Kathmandu through sea of clouds (by Royal Army DC 3). But as we couldn't get 110 porters easily, our approch march started on Sept. 6. Changing the porters in Dailekh, Jumla and Talphi, at last we climbed the Chaudhabise khola.

It was on Sept. 25 that we reached B.C. in the Bijorakhola (a branch of the Chaudhabise Khola). We built B.C. at the height of 3,810 m. This place was full of grasses and shrubs for firewood near a ice-cold stream.

From Sept. 27, we started up mountaineering activities. At first, we had intended to climb up the lowest col on the Patrasi Himal. But by reconnaissance we found it impossible to climb with loads. The col was interrupted by a rockwall about 300 m high. We decided to make a route in a branch glacier, extending to the south col of a peak (5,791 m) on the Patrasi Himal.

On Oct. 3, we set up Camp 1 (4,300 m) on the moraine of the Bijora Glacier. From Oct. 4 to 7 we had the only bad weather in course of mountainnering activities. Consequently we couldn't reconnoitre enough.

On Oct. 9, we changed the depot spot for Camp 2 (4,780 m) which was situated near at the entrance of the branch glacier. Then, we decided to make the route up to the col at a stretch.

On Oct. 11, we set up Camp 3 (5,360 m) in the snow-field on the ice fall. It was on the Patrasi Himal's col. At last we came to the place where we could command a view of the main peak of the Kanjiroba Himal. We looked for the suitable route down to Jagdula Khola at once. But soon we found that we had no choice but to descend from the col to the Jagdula Khola directly. We had to descend rock wall with soft snow and steep gully. To climb down through rock wall (the height of 400 m) to the Jagdula Khola, the fixed rope of 850 m, 45 ice and rock pitons, 9 ladders (10 m each) and 7 expansion pitons were required. On Oct. 27, we set up Camp 4 (400 m) at the junction of the Jagdula Khola and the glacier extending to the main peak. There was plenty of water and shrub there and we called Camp 4 the second Base Camp. But we had no time to enjoy there. We had to ascend toward the summit as quickly as possible. Judging from the reconnaissance, we decided that we would go up the glacier near the South-West ridge, and that we would climb the ridge falling down to the glacier basin from the shoulder of the South-East ridge.

On Nov. 2, we set up Camp 5 (5,220 m) in the ice-fall and on Nov. 4, Camp 6 (5,480 m) at the edge of the glacier basin. On Nov. 6, we removed the tent of Camp 6 to the end of the ridge for attacking route 300 m high, and set up Attack Camp (5,800 m).

On Nov. 7, Sato, Okuda, Sawai and Sawada left Attack Camp at 5 : 55 a.m. After a monotonous climb, along the ridge, they reached the summit at 3 : 30 p.m. The weather changed worse in the afternoon and mist prevented a full view from the top. But they could see the north peak (6,861 m), Kande Hiunchuli (6,625 m), Patrasi Himal, and Saipal (7,034 m) through the mist. After an hour's rest, they began to descend in snow storm.

As they couldn't come back to their tent within that day, they bivouaced at a little terrace which was the only flat place on the South-West ridge. Next morning they came back to Attack Camp safely. We gave up climbing to the summit by another members bacause of a shortage of foods.

It was on Nov. 16 that we came back to our Base Camp in Bijora Khola.

Koh-e-Bandakâ 1970

by Kango Nakao

In 1970 Nagasaki Univ. Academic Alpine Club sent the expedition to the Central Hindu-Kush. When we began to plan several years ago, we aimed to ascend Koyo-Zom in the Hindu-Raji. In 1969 we got the information from our reconnaissance members in Pakistan that Istol-o-Nal had never been ascended So hurriedly we changed our plan and requested permission for the Government of Pakistan to ascend Istol-o-Nal. Unfortunately, however, the permission was not given to us. We were obliged to change our plan again, from Istol-o-Nal to Koh-e-Bandakâ.

As Koh-e-Bandakâ having already been made ten more ascents, it did not attract us so much. But we had learned there were some untouched walls and ridge on the east side of it. We decided to ascend Bandakâ through a new route when leaving for Afghanistan.

On July 6, 1970, we left Nagasaki, Japan and on 8th landed Kabul via India. As soon as we got the permission of our mountaineering trip through

Panjishir and Badhakshan, we left Kabul on July 13 with the baggages of about 1,500 kg by a chartered bus. In that afternoon we reached Dascht-i-Rewat in the Panjishir Valley where was the starting village of the caravan to the mountains.

We departed upriver on July 15th with 18 horses and horsemen hired at the village for transportation. On July 19 we went over the Anjuman Pass in the sleet. On July 20, we passed Anjuman Village without any troubles, being watched by some villagers with pistols, rifles or spades.

On July 22 we reached Keron, a main village in Munjan Valley, where we stayed for two days to make change of horsemen. There was the governer's office which equipped a telephone.

On July 25 we reached the place where we had originally intended to build our base camp, 4,200 m of high, located at the end of the morain which was washed down from the south west glacier of Bandakâ.

At first we made investigations for the southwest ridge from the south and the northwest sides. We found it very dangerous to climb from the northwest because unstable rocks laid bare. It seemed to be rather easy to go up to the end of the southwest ridge through a small gully facing to the southwest glacier. However after having made a further investigation for the upper part of the southwest glacier, we came to a conclusion that we could ascend the summit through the east ridge.

We set up Camp 1 on the southwest glacier, about 5,200 m, Camp 2 about 6,000 m, and Camp 3 on the east ridge, about 6,300 m.

Close to our camp 2, we found canned juice and some foods left by L.G.A.E.. Above 6,100 m the condition of the route became such a solid ice covered with thick snow that our attack members were much troubled with snowplowing. Upper part of the ridge seemed too steep and dangerous to find out any routes to the summit.

On early morning of August 7 H. Mizokami and I. Morimoto began to climb along the east ridge. On account of hard ice and deep snow they took 8 hours to get to the point, 6,500 m, where they had to turn back being tired out. But they could fix 180 meters of rope, to the most dangerous part of the route. As they were too worn out to go up again the next day, they went down to Base Camp with other members in order to recover their strength.

On August 13, after five days rest, we sent up five members to ascend the main peak through the east ridge. They gathered together at Camp 3 over again. At the daybreak (5 a.m.) of August 14, three of them, H. Mizokami, S. Narazaki, and I. Morimoto left Camp 3 and began climbing. The others had started earlier to help them climb easily, going ahead of the attack members as far as the point where the rope had been fixed. As it cleared up and windless, they kept climbing higher and higher satisfactorily and finally finished their ascending through the new route up to the summit at 3 : 10 p.m.

It, however, seemed rather dangerous to retrace their steps back along the east ridge, they started on their way back to the Base Camp through the safer route, the southwest ridge. When it got dark, they were still on the upper part of the ridge, about 6,600 m, where they were forced to bivouac. The next day they continued to go down and showed themselves rather brightly at Base Camp about noon. They met two parties on their way down, one was three German climbers and the other, three French climbers. The former had succeeded in ascending but the latter had failed. On August 19, we took away our Base Camp and started on our caravan back to Kabul. We went from Keron to Hadzrate-said along the Kochucha Valley on horseback or on foot.

From Hadzrate-said to Kunduz we ran through the Badakushan district along the ancient Silk Road by a small chartered truck. At Kunduz we changed the truck for a chartered bus and arrived at Kabul on August 29.

Members; Yoshinori Ichinose (Leader)
Harumi Mizokami (Deputy leader)
Kango Nakao
Tsukasa Matsuo
Sumio Narazaki
Isao Morimoto
Masaaki Maeba
Atsuko Inomata
Dai Otsuka

Koh-i-Paghar 1970

by Tsukasa Nakase

In summer of 1970, we, the six members of Gamagōri Alpine Club climbed Mt. Koh-i-Paghar (5,610 m) and six nameless peaks (5,550 m; 5,420 m; 5,370 m; 5,304 m; 5,255 m; 5,050 m) in the Central Hindu Kush.

On June 24, we arrived at Kabul in Afghanistan and seven days later we began marching towards Anjuman pass.

On July 8, we set our base camp at the place where Ruysowuk dale meets the river Anjuman (not far from Lake Anjuman). We had much difficulty in reconnoitering and carrying our provisions and equipments.

On July 14, we pitched our advanced camp at the edge of Ruysowuk glacier (4,400 m). We ascended a 5,050 m-peak in order to reconnoiter a route to Mt. Koh-i-Paghar. Brittle rocks, however, seemed to block our further progress. So we gave up the route.

We divided our party into two, three members each; one party to stay at the advanced camp in Ruysowuk dale and to ascend unclimbed peaks around there, and the other to go a long way round to Paghar dale for the purpose of reconnoitering the way to Mt. Koh-i-Paghar. While the former party successfully climbed a 5,304 m-peak on July 21, a 5,370 m-peak on July 22, and a 5,255 m-peak on July 24, the latter party advanced to Piria dale and set an attack camp (4,500 m) on July 23. On July 25, they tried to climb Mt. Koh-i-Paghar from the east side of Piria dale, but they were forced back again from a 5,550 m-peak because of fragile rocks.

On July 29, we removed the advanced camp to Abdul dale (4,500 m) and all of us gathered together there.

On July 30, from the south side of Mt. Koh-i-Paghar we began our climbing. After ten hours of ascent, we, the three-member party succeeded in getting to the summit of Mt. Koh-i-Paghar. It was 2:10 p.m. At the same time the supporting party also successfully climbed the adjacent 5,420 m-peak.

On August 4, we returned to Kabul.

The Members; Tsukasa Nakase (Leader), Koichi Ishikawa, Masaru Nagasaka, Jyutaro Suzuki, Shigeharu Miwa, Mayuki Hisazaki (Medical Doctor)

Identification of the Mountains Around Saraghrar and Langar Groups in Hindu Kush

——Explanation of the Topography and Newly found peaks——

by Tsuneo Miyamori
Summary made by I. Yoshizawa

1) Introductory Note

Saraghrar is the 4th highest mountain in the Hindu Kush Range.

The peaks of Tirich Mir (7,708 m) group, Noshaq (7,492 m) group and Istor-o-Nal (7,403 m) group have been explained to much extent and now it remained some details to be amended.

Although we have already had 3 climbing expeditions to the Saraghrar group since the first ascent of its highest peak by the Italian party led by Mr. Fosco Maraini in 1959, this group has not been cleared yet completely as a whole.

This article was written tentatively to elucidate something which was yet unexplained, using a lot of photographs and other materials kindly offered by the Japanese expeditions and individuals, to say nothing of the overseas ones, who had been there to climb and explore.

Here I hope to be remembered that my aim is never to estimate of the surveys or climbing reports which were made and published by the past expeditions.

The altitudes of the peaks, except that of the main peak of Saraghrar and the S-E peak of Langar, are all approximate ones until the formal heights will be published.

2) About the questions relevant to the Topography and Altitudes.

Mr. Ichiro Yoshizawa, the Vice-President of the Japanese Alpine Club and the Chairman of the Japan Hindu Kush Conference, pointed out some questions concerning of the Saraghrars when he wrote the forword of "Mountain Travelling in the Rosh Gol Glacier" edited by Mr. Kenichiro Yamamoto, the leader of the Hitotsubashi University Expedition to Hindu Kush in 1967. Mr. Yoshizawa granted me to quote his words here to which I was very grateful.

"Although we have that splendid result of the survey of the Hindu Kush ranges by Dr. G. Gruber in 1965 and others, I think we must have further studies in individual details especially Saraghrar peaks.

Accordingly, the altitudes of each peaks used here are to be taken as the provisional to the last……. Jerzy Wala, the famous Polish mountaineer and cartographer, has made a series of mass of the High Hindu Kush Mountains, which had been relied upon as the best one by the European climbers. But when we studied it in some parts such as the S-W face of Saraghrar, we had to find out something insufficient even though it was so by unavoidable reasons……."

2)-1 To where flows down the highest snow field?

The report of the Hitotsubashi University Expedition says as follows:

"Summit ridge of the South Peak was a long stretched one from the west to east and we saw a parallel ridge was running in front of us laying in between a broad (width about 1 km) snow field. The right end of it was falling to Niroghi Glacier and the other to Rosh Gol."

But we must pay our special attention to the fact that the debris caused by avalanches of the Niroghi Glacier is uncomparably larger than that of the Rosh Gol side.

2)-2 The problem of Altitudes.

See the attached "Table-No. 1". The numerals of the last column are all final one calculated by me but never definite.

3) Newly found peaks.

There exist some misconceptions and questionable ones among the peaks already found.

3)-1 Saraghrar I, II, III Peaks.

See Fig.-4……DDr. Adolf Diemberger (H.J. Vol. XXIX).

Fig.-3……Jerzy Wala.

3)-2 P-12 (6850)?

3)-3 Was P-10 surveyed? Where is the peak (23 619 ft-7 061 m) of the Survey of Pakistan? Refer to 5)-5 and 6)-2.

4) About Maps

4)-1 Fig.-1, 4)-2 Fig.-2, 4)-3 Fig.-3, 4)-4 Fig.-4

4)-5 F. Maraini, 4)-6 Hitotsubashi

5) Study of Identification and Topography by Photographs.

For the correct recording of mountains, photographs are the most precious materials. But they also have some defects, such as difficulties of discrimination of ridges or peaks falling on one upon another caused by sun-rays or fog.

Here I made a series of sketches based upon photographs, and supplemented and corrected by other 2 or 3 pictures taken from the different angles and directions. But there are omissions of ridges and valleys lower than 6,500 m.

5)-1 Fig.-5

The altitude of the highest snow field is lower than P-6 and the end of it falls over Niroghi Glacier.

5)-2 Photograph (Fig.-6)

Although P-2 (Central Peak) falls upon behind P-8, it is a very conspicuous one as P-1.

5)-3 Fig.-7

We can find P-4 behind a ridge running N-W from P-2.

5)-4 Fig.-8

We see P-4 to be very distinctive and we notice a new peak (P-12, ca. 6,850 m) appears in the Langar group and P-13 (Wala-191) stands at the extreme right.

5)-5 Fig.-9

The height of P-8 may be ca, 6,900 m. Peak III of DDr. A. D. may be a shoulder-like rock mass on a ridge derived from the center between P-4 and P-2. See Fig.-12.

P-10, the main peak of the Langar group is a sort of "Hidden Peak", which can not be recognized from every direction except from a comparatively high points or a part of the upper right bank of Rosh Gol.

5)-6 Fig.-10

You will be able to understand that P-2 is lower than P-1, and P-4 lower than P-2.

5)-7 Fig.-11

A rock dome under P-4 may be the Peak III of DDr. A. D. I found the S-W ridge was derived from β-Peak of P-g (twins). See Fig.-12.

The snow field between P-4 and P-5 does not show its highest line.

5)-8 Fig.-12

We can see P-2 behind P-4. The line of the snow field, in this case, may be the highest.

5)-9-1 Photographs and sketches (A & B). Fig.-13

Where is the main peak of Saraghrar? I hope to study this with Dr. G.

Gruber. B is my supposition.

5)-10 Photograph, Fig.-15 5)-11 Sketch, Fig.-11 5)-12 Fig.-17

5)-13 Fig.-18 You can recognize P-11 finely.

5)-14 Fig.-19 P-15 is the "Little Pumori" called by Hitotsubashi.

5)-15 Photograph, Fig.-20

6) Conclusion

6)-1 See the ridge map.

6)-2 Peak 7,061 m : It seems to be right that Dr. G. G. gave 7,061 m to P-11.

....

I have not seen the mountains (Saraghrar and Langar) yet, by my own eyes. All my suppositions and conclusions were based on the materials offered by my generous friends who had climbed them or wandered the surrounding mountains in the past. So I don't dare say that the identification of the mountains in this article is the highly completed one.

For instance, about the pictures, the major material of my judgement, there are someimes aberrations in photographs and also not always taken horizontally. So I recognize well that this article does not completely satisfy scientific rigirity.

Lastly I must express my thanks for the kind suggestions and helps of Mr. Ichiro Yoshizawa and Mr. Eizo Tanaka who are the members of the Japanese Alpine Club and the Japan Hindu Kush Conference.

....

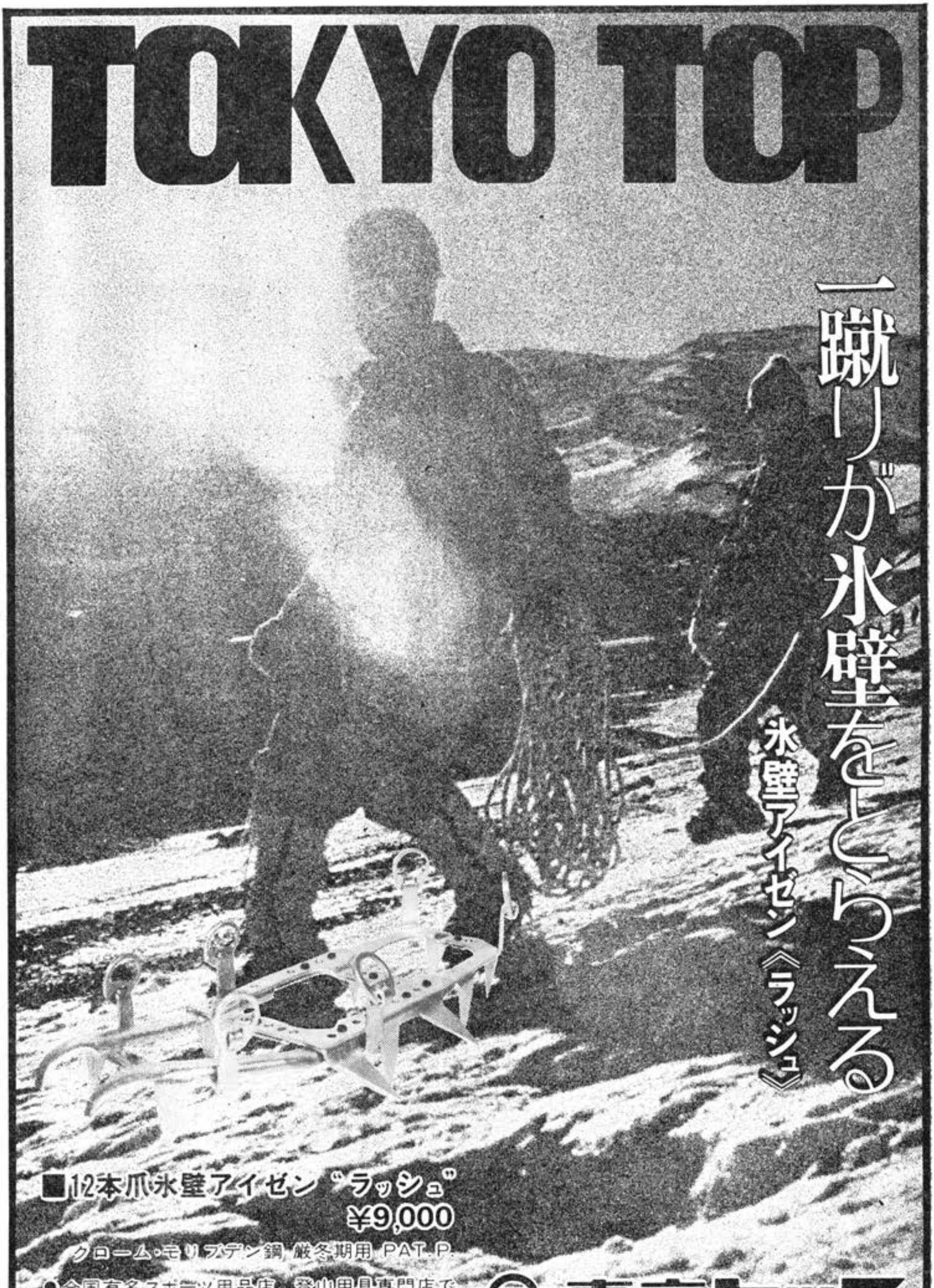
cf. Table-3 "New and Unclimbed Peaks around Saraghrar"

Peak	Mountain		Altitude	Note
2	Saraghrar C.		c. 7,330 m	New Peak
4	〃	N-W	c. 7,300	P-11 (DDr. A·D.)
6	〃	S-E	7,208	Wala-197
12	Langar	Z. C.	c. 6,850	A. Linsbauer ?
15	〃	S-S	c. 6,700	Wala-193
16	〃	W	c. 6,600	New Peak

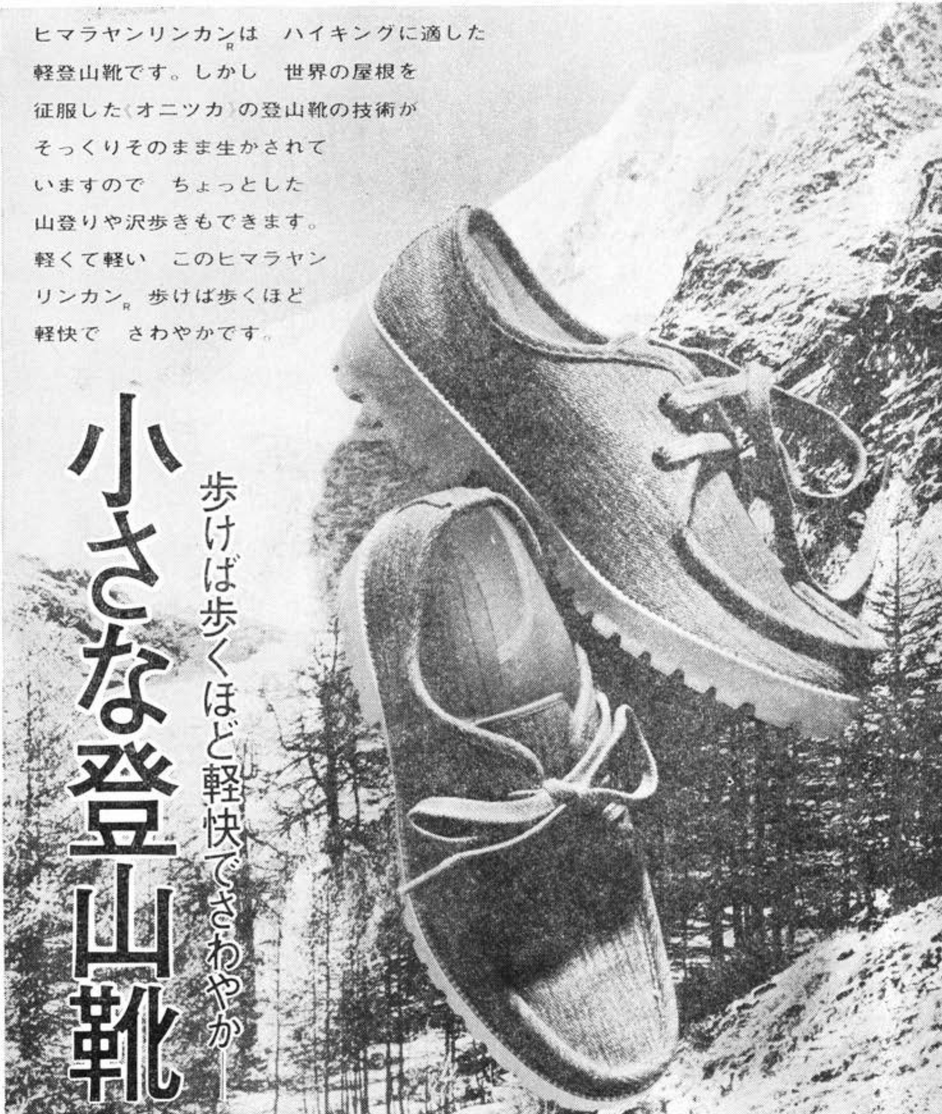
About P-4, refer to Fig.-4

About P-12, refer to Fig.-1

Editor's Note : Please refer the figures and tables attached to the article written in Japanese (pp. 183∼195)



TOKYO TOP
一蹴りが氷壁をとらえる
氷壁アイゼン《ラッシュ》
■12本爪氷壁アイゼン"ラッシュ"
¥9,000
クローム・モリブデン鋼 厳冬期用 PAT.P.
●全国有名スポーツ用品店、登山用具専門店でお求めください。
東京トップ
東京・大阪



Onitsuka Tiger®

コットンデニムのタイガー®ハイキングシューズ—

ヒマラヤンリンカン®

L　¥1,800 / S　¥1,600

競技専用シューズの総合メーカー　**オニツカ株式会社**　神戸・大阪・名古屋・東京・札幌

ベテランのための本格派、伝統と自信が息づきます。

ライケル……21,600円

ノルディカ……17,600円

ダハシュタイン…12,000円

ミナミオリジナル　ダウラギリ……12、000円

《本格派登山靴》

靴づくりのベテランが手がけた自慢の作。細心の技術と伝統が生きています。世界の山を知っています。

★靴づくりのミナミが選んだ舶来登山靴

オーストリー・ダハシュタイン……………12,000円

エベレスト登山隊愛用(ローバー)…………25,600円

その他、ドロミテ、ノルディカ、ライケル社など…

●岳人の専門店

ALL SPORTING GOODS

ミナミスポーツ

本　店＝東京神田小川町大通り角 TEL (294)3731〜7
銀座コア店＝東京銀座5-1-コア5F TEL (571) 6895
赤坂店＝赤坂東急プラーザ2F TEL (581)9054〜5
横浜店＝横浜市中区元町通り TEL 045(641)5271
札幌店＝札幌市四丁目プラーザ5F TEL 011(231)3736

山岳会の刊行物と服飾品

山　　　　岳	第64年	￥ 2,000
〃	第65年	￥ 2,000
1970年エベレスト 登山報告書		￥ 2,500
山岳総索引	第26年1号～第60年	￥ 1,000
山岳覆刻版	第1年2号	￥ 1,800
〃	第1年3号	￥ 1,800
クラブタイ		￥ 2,500
ネクタイ止		￥ 1,000

社団法人　日本山岳会　東京都千代田区
神田錦町3－23

●使いやすさ、速写性を追求した丸味ある触れ味。

●ニコン基準による最高精度・最高品質、耐久性は抜群。

●40余種の交換レンズ、250余種のアクセサリーによる
超マルチシステム。宇宙までも包む広い撮影領域。

●モーター ドライブをはじめカメラ操作の完全自動へ大きく前進。

Nikon F2 Photomic

ニコンF 2フォトミック
50mmF1.4付¥105,000/ボディのみ¥82,200　セミソフトケース¥3,500

Nikon 日本光学工業株式会社 100東京都千代田区丸の内3-2-3(富士ビル)
●カタログ送呈！誌名と品名をご明記　カメラはニコン　メガネもニコン

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都千代田区神田錦町三ノ二三（向井ビル内）
日本山岳会「山岳」編集部

一九七二年三月三十一日発行
山岳　第六十六年　定価　二三〇〇円
（通巻一二五号）

発行所　東京都千代田区神田錦町三ノ二三（向井ビル内）
社団法人　日本山岳会
電話東京二九三局七四四一
振替口座　東京　四八二九番

日本山岳会内
編集兼発行者　望月達夫
印刷　株式会社　技報堂
写真版　京橋原色版印刷所
製本　株式会社　鈴木製本

東京都千代田区神田駿河台二ノ一
発売所　株式会社　茗渓堂
電話東京二九一局九四四二番
振替東京二四七二三番

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXVI 1971